【創刊60周年特別記念号】

遊技通信でみるパチンコ業界の60年

60 years of the pachinko industry

since1951-2011

■パチンコ自動化の黎明期から
■デジタル先進技術の今日まで
■パーラービジネスをサポートして40年
シルバー電研株式会社
シチズングループ
本　社　〒167-0022 東京都杉並区下井草1-14-11
TEL.03-3310-2711 FAX.03-3310-6879
http://www.silver-denken.co.jp

YUKO REPRO

株式会社 ユーコーリプロ

●本社
〒810-0004 福岡市中央区渡辺通5丁目24-30 東カン福岡第1ビル2F
TEL:092-725-6045(代) FAX:092-725-6054

●西日本リサイクル工場

〒808-0021
北九州市若松区響町1丁目101-4
(北九州エコタウン内)
TEL:093-752-6052
FAX:093-751-3052

●東日本リサイクル工場

〒347-0111
埼玉県加須市鴻茎3207-3
(藤の台工業団地内)
TEL:0480-70-0077
FAX:0480-73-8887

ECO×Amuseへの潮流。

メーカーとユーザーの両者を見渡せるポジションにいる私たちは、
循環型社会への貢献を目指し、「遊技機リサイクルシステム」を確立。
“遊技機のリサイクル”や“リユースパーツ循環サイクル”という
新たな潮流を生み出してきた私たちは、
今後も多彩な娯楽産業へと拡大していく大きな可能性を秘めています。
リサイクルだけにとどまらない“高品質発想” をベースに
「“楽しいもの”を“環境に優しいもの”へ」
私たちは、ECO×Amuse（エコ・アミューズ）に挑戦していきます。

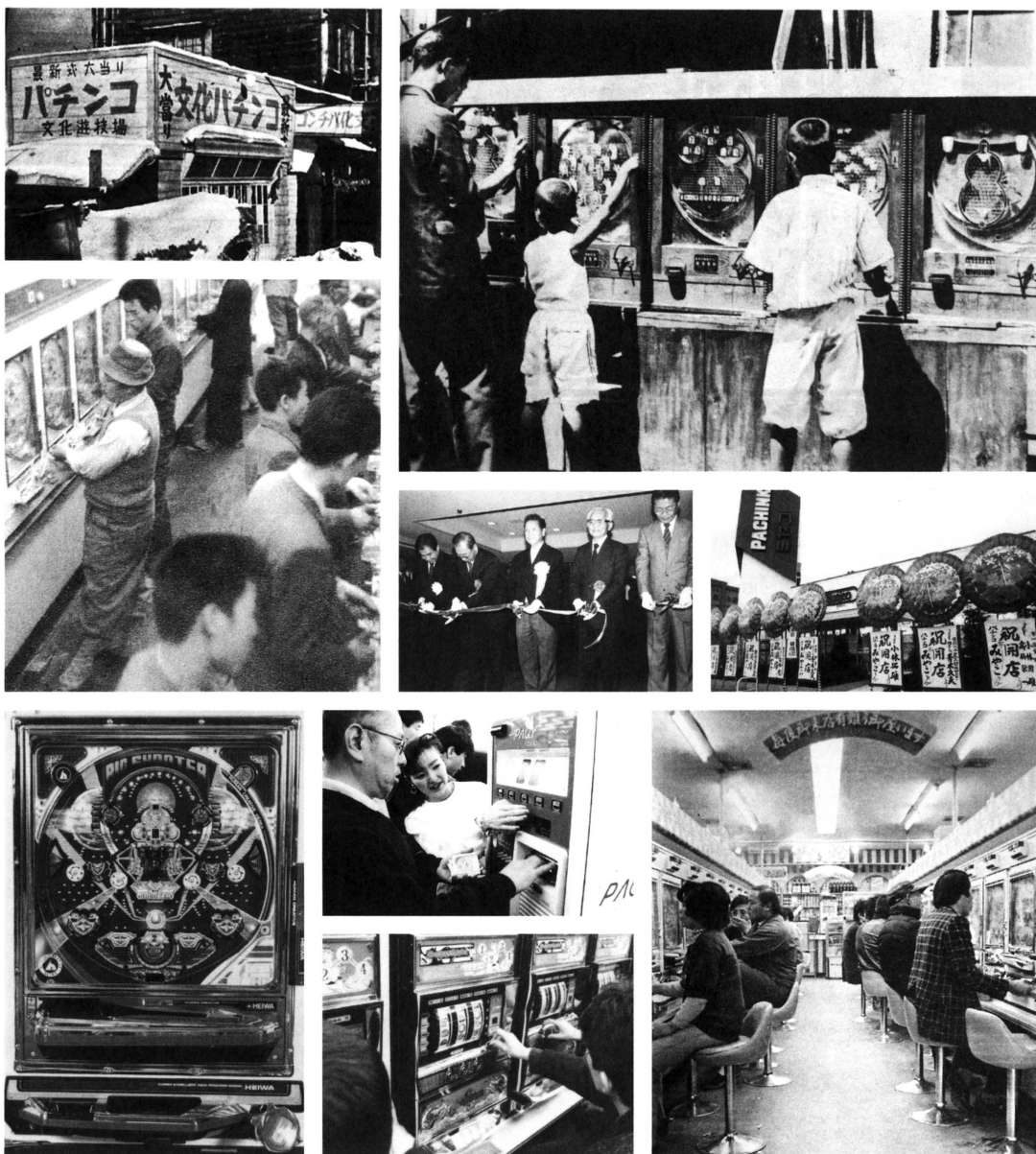
「ISO9001・ISO14001」認証取得

私たちは、「ISO9001」「ISO14001」を認証取得し、環境保全及び品質への取り組みを継続的に行っています。

QUALITY ASSURANCE
JIC
REGISTERED ORGANIZATION
No.3840－ISO 9001
No.E692－ISO 14001

TAKEYA
もっとしなやかに、
ますますパワフルに。
竹屋は未来に挑戦しています。
AKITA
秋田連絡所
TEL.018(829)1730(代)
SENDAI
仙台出張所
TEL.022(287)0171(代)
NIIGATA
新潟連絡所
TEL.025(240)5071(代)
TOKYO
東京支店
TEL.03(3387)8201(代)
NAGANO
長野連絡所
TEL.0263(28)9871(代)
KANAZAWA
金沢出張所
TEL.076(240)8611(代)
KASUGAI
本社営業
TEL.0568(34)3668(代)
御幸工場
TEL.0568(35)3350(代)
竹屋コールセンター
TEL.0120(31)6154(代)
OSAKA
大阪支店
TEL.06(6568)7774(代)
HIROSHIMA
広島支店
TEL.082(502)4737(代)
TAKAMATSU
高松出張所
TEL.087(885)9867(代)
FUKUOKA
福岡支店
TEL.092(481)2333(代)
MIYAZAKI
宮崎出張所
TEL.0985(23)1598(代)
トータルホールプロデュース
株式会社 竹屋
〒486-0917愛知県春日井市美濃町2-98
本社・工場 ☎0568(34)3333(代)
http://www.p-takeya.co.jp/

遊技通信でみる
パチンコ業界の60年

60 years of the pachinko industry

since1951-2011

● 「遊技通信」創刊60周年記念　特別号の発刊にあたって

お陰様をもちまして創刊60周年を迎えました これからも「正確、迅速、充実」を信念に邁進します

株式会社 遊技通信社　代表取締役　伊藤實啓

創刊六十周年。小社発行の「遊技通信」は昭和二十六年十月五日に遊技業界初の専門新聞として創刊され、本年で“還暦”を迎えることが出来ました。創刊以来、一号も欠かすことなく、こうして遊技業界の動向をお伝えすることができたのも、読者の皆様並びにお得意様各位の暖かく、長年変わらぬご支援があっての賜物であります。あらためて感謝し、厚くお礼申し上げます。

今回、創刊六十周年を記念した特別号を発行するにあたり、小社に保管してある創刊号以来の紙面を使い、遊技業界における六十年の歴史を検証できる資料としてまとめて掲載することといたしました。身近で手軽な大衆娯楽としての遊技業界の、貴重な歴史資料を保存する一助になればとの思いを込めて制作したものです。まだまだ不備な点も多いとは存じますが、小社の意をご斟酌賜り、読者の皆様のご参考になれば幸いです。

この大きな節目を迎えたとはいえ、小社並びに「遊技通信」の使命が終わったわけではなく、業界の皆様から最大のご支持をいただいている専門誌として研鑽を重ね、これまで以上に充実した誌面づくりに邁進することをお約束する次第です。小社としては、いま一度創刊の原点に立ち返り、信念である「正確」「迅速」「充実」した報道を貫き、遊技業界の更なる発展に微力ながら尽くす想いでおります。

末尾にあたりまして、六十年にわたって「遊技通信」をご愛読いただいたことへ感謝申し上げるとともに、様々にご支援を頂戴しました読者の皆様並びにお得意様各位の一層のご健勝と事業のご繁栄を祈念申し上げます。本来ならば拝眉のうえでご挨拶するところでございますが、略儀ながら誌面を通じてのご挨拶にて失礼いたします。今後とも、末永きご高配並びに叱咤激励を賜りますようお願い申し上げ、六十一年目に新たな一歩を踏み出すにあたってのご挨拶とさせていただきます。

パチンコ・麻雀 ビンゴ・射撃 スマートボール 等の案内遊技

遊技通信 全国版

業界の総意を結集！ 愛知縣遊技機製造工業組合結成さる 初代組合長大山商店就任

社説 敢て東京開業者に告ぐ

常に大衆とゝもに 愛知縣遊技機製造組合 組合長 大山 正雄

海を渡るパチンコ機

ビンゴ 賞品奉其他を注意 九月警視廳に於て

麻雀 競技券発行は不許可

遊技器の王！ 最新式 パチンコ器 スマートボール 當社の特長各器共三年間保證 中台工業株式會社

パチンコ業界に創業二十五年の輝く歴史 株式會社 鈴富総本店

最古の信用 最新の技術を誇る 大山式パチンコ機 株式會社 大山商店

昭和26年10月5日に発行された遊技通信創刊号

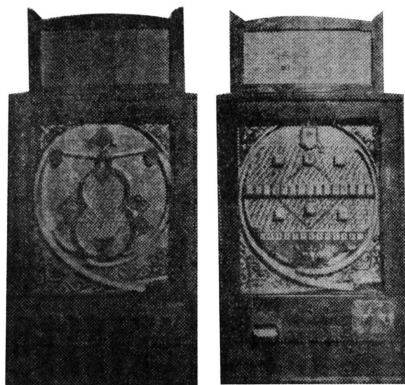
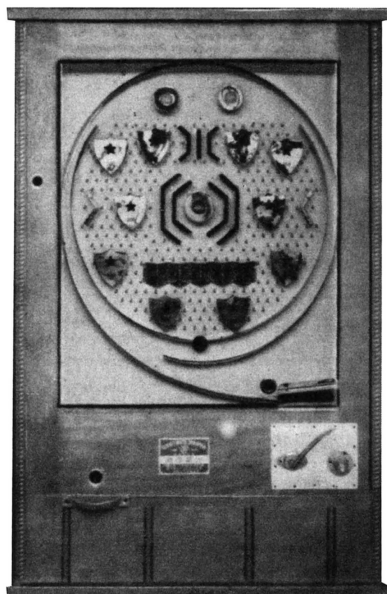
遊技通信

【創刊60周年記念別冊】

ANNIVERSARY 60th◇since 1951

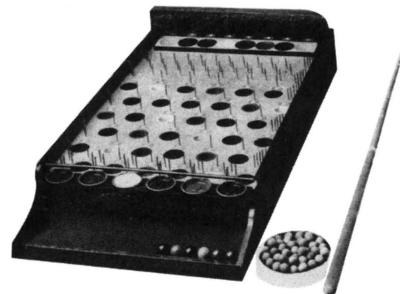
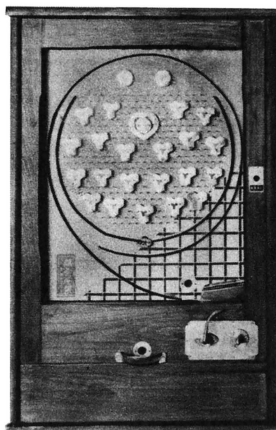
CONTENTS

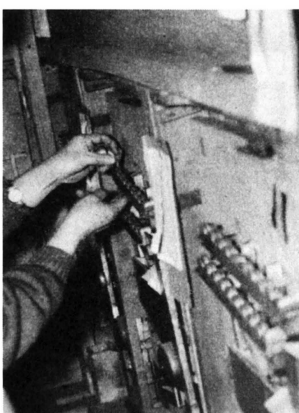
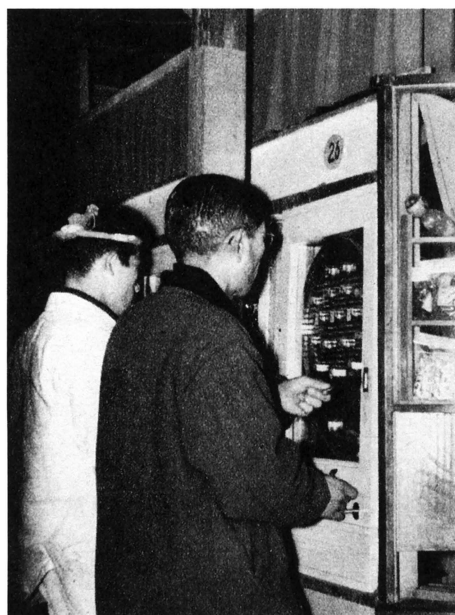
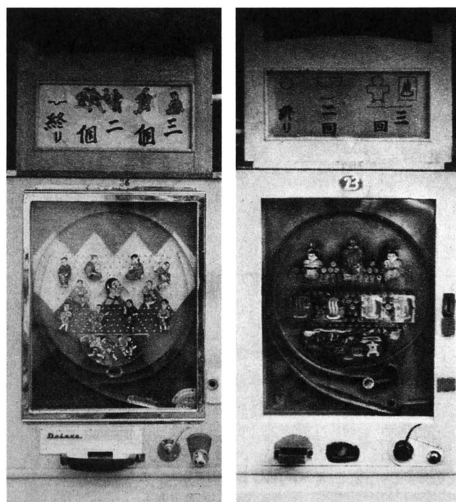
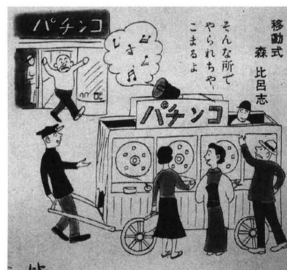
日本ABC協会加盟誌
（新聞雑誌部数公査機構）

◇ホームページアドレス：http://www.yugitsushin.co.jp/
◇電子メール：webmaster@yugitsushin.jp

●良く見えない写真で申し訳ないのだが、本誌が掲載したもっとも古い遊技機の写真が上の2点。日本最古のメーカーであるOMと、二番目に古いとされる陣内の機械である。これに富貴屋（下写真）が加わった3社が、パチンコ草創期の代表的メーカー。このうち、左の瓢箪ゲージは本特集の扉ページに大きく使った移動式パチンコの写真にも見えるもので、また、右下の鈴富のショールームにも展示してある遊技機である。このタイプは結構、普遍的なスタイルだったのだろう。下の比較的よくみえる遊技機が昭和初期の富貴屋の遊技機として本誌に掲載されたもの。が、玉を入れて玉を弾くタイプなので、初期といっても昭和12年頃と思われる。玉入れ口が左についているのが初期形態の特徴のひとつらしいが、現存する写真がこれしかないので何ともいえない。

●戦前の愛知県の総合遊技場。当時はこうした宣伝所を兼ねたホールが多かった。左にいるのは、鈴富の社長・上野鈴吉。

●鈴富のショールーム。写真は戦後のものだが、壁に掛けられている遊技機は戦前のものだ。

●上野鈴吉／戦前から戦後まで、ホール兼メーカーとして長くパチンコ業界を引っ張った鈴富の社長。大正12年、四日市で鬼泣かせや腕相撲機と一緒に露店のパチンコ営業を始めたという、業界屈指の古株。北海道のパチンコ営業などは、この人が開拓したといわれている。ちなみに「鈴富」という響きのいい屋号は、鈴吉・富吉兄弟で商売を始めたことから付けられた。鈴富は最近まで「ガラガラポン」を製造していたというが、現在は不明。

●梯正雄／元々は鈴富の番頭格だったが後に独立。双葉商会としてメーカーとホールを兼務した。業界の生き字引的存在で、戦前のパチンコ営業について記憶も良く、貴重な証言をたくさん残している。が、語ることが多かったらしく「あの頃の機械はタメ打ちといってね。後にスッテンコロリンという名になってこれが七・五・三の機械のゲージの元をなしたものだよ」という、理解するのに骨の折れる話が多い。右は戦後間もなくの同氏の機械。

●パチンコ以前の遊技機として別府の中土居岳州という人が持っていた「コリントの色ゲーム」。この人は「三神宝機」とか「紅白遊技機」とか、お神籤の自動販売機とか様々な遊技機械を作った。なかでも「三神宝機」は人形の神主が3個のサイコロを転がし、客が大小・赤白に賭けるという全くのギャンブル機で、パチンコが出る以前に相当儲けたらしい。こういう人にとってはパチンコは露店遊技場のひとつのジャンルに過ぎないのだろう。

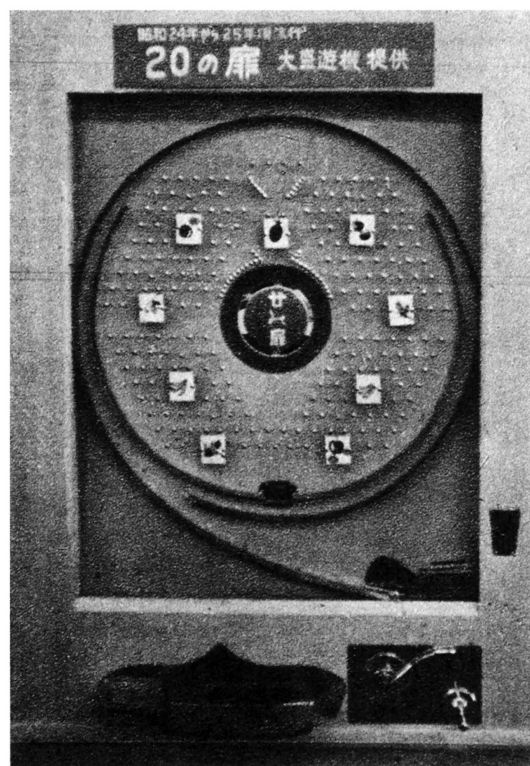
●これぞ戦前のパチンコ…といいたいところだが、実は昭和30年代の京都の祇園祭に出た移動式遊技場。むろん、許可営業である。お祭りだから子供たちも浴衣姿で、いかにも戦前っぽいので、その雰囲気だけでもとこの欄に掲載した。NHKはこれをスタジオに持ち込み、戦前の風景として使ったこともある。右はその遊技機。メダル式もボール式も混在していた。

●戦後も北関東はメダル式で復活。メダル式（当時は濁らず「メタル」と呼んだ）はオール物にも対応できたが、連発機だけはその構造上、ついていくことができず、メダルメーカーは次々と玉のメーカーに転身。生産打ち切りになったため遊技場は修理を重ねて大事に使い、群馬県には昭和30年代でもメダル営業が多数残った。玉の機械と同様、裏回りの従業員がいたが、メダルの補給は熟練度を要した。

●金沢の歳田精一／金沢で材木商を営んでいた昭和8年、世の不景気の煽りを受けての本業不振の折、香林坊でパチンコをみて、「これだ」と思って遊技機製造を始めたという。最初は富貴屋の機械を購入し、その改造で商売した。ハッタリ（チャッカーの上の絵）に九谷焼の職人を使うなどの工夫をみせたほか、材木商ならではのしっかりとした遊技機作りで、歳田式という戦前を代表するブランドを築く。

●名古屋の竹内竹次郎／昭和6年から遊技機製造を始めた古株。ただ、その証言は「パチンコは外国から来たものではない、日本人の発明だ」とか、「最初の釘の粗い機械を精工なものにしたのは、ウチの小川という職人で、それを歳田さんの二階でやったのが昭和6年だ」と、他の人の証言と大きく食い違い、古い話を丹念に集めていた伊藤重男を悩ませた。が、一概に否定できないリアルな証言も多い。

●仙台の田中和一／長く東北地区協議会の会長を務めていた東北業界の重鎮。その業界歴は非常に古く、「富貴屋さんは私よりも半年後ですよ」という大正12年から移動式のパチンコ営業で日本各地を転々と回っていた。仙台に来たのは昭和9年。パチンコのサイズは市販のガラスのサイズに合わせたモノ、4分玉では釘が折れるので3分5厘の玉を吉岡という人が作った、など貴重な証言を残した。

●福島の佐藤木吉／昭和10年4月、福島において鈴富の機械で開業。鈴富の「針金細工のような機械」や富貴屋の機械を直し直し営業をしていた昭和16年に「大東亜戦争」が勃発。鉄鋼製品の供出で多くの遊技場が営業を断念した後も、粘土を固めて使用。重さが違うので上手くいかなかったが、「飯坂の奥にある粘土」が重いと聞いてこれを取りに行き、ラッカーを塗って最後の最後まで営業を続けた。

●小倉の三浦清治郎／昭和10年1月1日に小倉でパチンコ店を開業、1月8日に許可を取り消されるという、散々のスタートを切った九州屈指の古株。戦争でパチンコは中断したとよく言われるが、この人は昭和19年でも2軒ほど経営し、さすがに営業できなかったのは毎月8日の興和奉公日と空襲警報下のみだったという。町内防空係をやってましたからねえ、と昭和41年時のインタビューで笑っている。

●戦後すぐに復活したパチンコのなかでも、昭和24年ごろ人気になった「二十の扉」。特定入賞口に入るとアウト玉になった玉が20個だけ還元されるというもの。人気ラジオ番組から取ったアイデアだが、製作者には複数の説がある。

記事再録

特集　業界むかしむかし　名古屋市　藤井正一氏にきく

戦時中に廃業決意、涙の中に解散式を挙行して機械を焼く

「遊技通信」全国版　旬刊209号通刊246号

名古屋市 藤井正一氏にきく

戦時中に廃業決意、涙 解散式を挙行して機械

私がこの業界に足を突っ込んだのは、確か三十五才の時と記憶しておりますから、もう二十四、五年になるわけです。

この業界での最初は、色んな娯楽機を備えた総合遊技場の形態でやったのですが、私自身が本腰を入れてやったのはパチンコ機の製造でした。

もっとも、私が作ったのはパチンコとはいわずに「スチールボール野球機」とよんでいました。

私がパチンコの元祖だと自ら言っているのは、それまではOMにしろ、富貴屋の機械にしろ、一銭

そして、名古屋の某財閥に事情を話して、盛り場に空地を見つけてもらったのですが、そこで玉突きを始めたのが非常にアタったのです。階下は他のことをと考えて一銭パチンコを入れました。

親戚一同からは大反対

ところが親戚からは、そんな商売はやめろと文句が出たんです。

当時は、パチンコはいやしい職業だというように思はれていましたし、私自身「能」をやってましたが舞台にも出られないからというんです。

その当時は、間口八間奥行十三

私がこの業界に足を突っ込んだのは、確か三十五才の時と記憶しておりますから、もう二十四、五年になるわけです。

この業界での最初は、色んな娯楽機を備えた総合遊技場の形態でやったのですが、私自身が本腰を入れてやったのはパチンコ機の製造でした。もっとも、私が作ったのはパチンコとはいわずに「スチールボール野球機」とよんでいました。

私がパチンコの元祖だと自ら言っているのは、それまでにはOMにしろ、富貴屋の機械にしろ、一銭パチンコといって一銭銅貨を入れて遊技をしていたのですが、私が「スチールボール野球機」を作ったのが現在のような鋼球を使用した初めてであったからです。

それもこれも、一銭玉からメタル投入に変わった後に、『当たり』として一銭銅貨を出すのが確か昭和十一、二年頃だったと思いますが三月一杯で全国的に禁止されたのが機会となったからです。

私が遊技業界に入る前は、生糸問屋に永らくおりましたが、二十才には生糸問屋の支配人をやっておりました。かなり永い間その方の仕事をやっていたわけですが、生糸も一つの相場仕事で、私自身が非常に勝負事が好きだったのですが、国際相場で生糸が押しまくられるのがかなわないところへもって来て、私は国枠主義者だもんですから、こんな状態にとても我慢が出来ず転向を考えたわけです。

そして、名古屋の某財閥に事情を話して、盛り場に空き地を見つけてもらったのですが、そこで玉突きを始めたのが非常にアタったのです。階下は他のことをと考えて一銭パチンコを入れました。

●親戚一同からは大反対

ところが親戚からは、そんな商売はやめろと文句が出たんです。

当時は、パチンコはいやしい職業だというように思われていましたし、私自身「能」をやっていましたが舞台にも出られないからというんです。

その当時は、間口八間奥行十三間という豪華なものでしたが、前にも申しました一銭パチンコが禁止されるというので、色々考えましたが、高い機械を入れるのも馬鹿らしいので、多分中古機だったと思いますが、一台二円位でコリントゲームを買い入れて始めました。当時外国では石の玉を使っていたのですが、私は木製の玉に色を塗ってやったのですが、仲々人気はよかったようです。

これを三カ月位続けましたが、なんと言っても横物は美人を大勢おいておかなければならないので人件費がとても掛かりますし、何とか他のものがなかろうかと色々考えた末、コリントが玉を入れて玉が出る式のものですから、パチンコも玉を入れて玉が出るようなものにすればよい…と種々研究の結果、二十八穴のゲージを作ってこれを七、五、三にしたのですが、仲々具合よく動くので、これで許可を取ることにしました。

●新型誕生の苦労　許可の取得

私はこれに「スチールボール野球機」と名付けて警察に持っていったのですが、これはパチンコだといってメタルと同様に許可して呉ないのです。私は、玉を入れて玉を出すのだからコリントと同様で今までのパチンコとは全然違うのだと主張しましたが、許可を取る迄には三カ月か四カ月の間、毎日保安課に通いました。

ある時は昼休みに店のものを一緒に連れて行って競技をしたりして、賭博ではなく遊技だということを認識させました。又、当時皇太后陛下が名古屋の日本陶器に行啓されることになり、保安課長が騎馬警官として先頭に立つというので練習に励んでいた時で、そこへ私が行って邪魔したわけですが、終いには腹を立てて勝手にしろと言はれたのです。私はすぐ帰って円頓寺に百三十台位で営業を始めたら押すな押すなの盛況なんです。二日位して、これを見た保安課長が飛んで来て、どうしたんだと言はれたので、勝手にしろといはれたので良いものだと思ってやったと返事をしました。（笑）

その後、バネをとればよいというような話もありましたが、そんなものではとても客は来ません。色々交渉の末やっと許可になったのですが、三重、岐阜でもすぐ許可がとれました。

これは一つには、私が防犯組合の役員をしており、防犯運動にも協力して街のチンピラと言はれるものを正道につけていたことも大いに与っていたと思います。家内は反対でしたが、街のチンピラを店に連れて来て真人間に仕上げることに努力し、警察からも感謝されました。これらの者は後に私の事業が全国的に伸びた時に大いに働いてくれました。

●業界で初めての組合を結成

私が許可を取ったことはいち早く同業者にも知れ渡り、鈴富、竹内（ツバメ商会）、富貴屋あたりが乗り込んで来て私のものを基礎にもっと立派なものを作りました。

それらの人々はホールとしては確かに先輩ではありますが、一銭銅貨が禁止されて以後、玉を出すものとして法律的に合法的にして再びパチンコを復活させたのは私だしその為には大変な苦労をして来た。良い機械を作るのは結構だけれども一言断るべきだといって皆さんに集ってもらって話したんです。しかも私が許可を取った地元へ来て無断でやる法はないと言ったんです。昭和十一、二年頃といえば私も若かったからですからね。

その結果何とかしてやりたいということから組合を作ろうということになり、一台に二円ずつ積金して、鈴富、斎田、日本娯楽機、竹内（ツバメ）私（京極）等で日本で初めての遊技機メーカーの組合が出来ました。

●大東亜戦で廃業　愛機を焼き捨てる

その後は大過なく続きましたが、大東亜戦争に突入してからは、こんな遊びはけしからんという投書が警察に山積しておりました。遊技場に弁当箱をぶら下げ

て入っているお客があったりすると警察官が入ってきて仕事を怠けているのではないかと尋問した時代です。

私は前に申しましたように、若い者がヤクザの道に踏み入るのを何とか救いたいと念願しておりましたし、この業で働かせて彼等を真人間にすることにひけ目はないと考えておりましたが、時あたかも近衛首相が辞職して大命は東条英機に降下するに及んで、これはいよいよダメになるなと思い、随分悩みましたが、いずれ早かれ遅かれパチンコが禁止の憂き目にあうのなら、ここらで潔ぎよくヤメようと決心するに至りました。

その当時この重大決心をするには大変な気持ちでした。皆んなが、明日から食べていく道を失ったらどうなるか…と思うと実に悲惨な気持ちになって…（感泣にむせぶ）

廃業と同時に、類を他に及ぼさないことを考えて、消防署に連絡の上、パチンコ機と玉台を一斉に焼いたのですが、その時は、吹き上がる火の粉の中に過去を冥想して男泣きに泣きました。

その頃他の店も続々廃業しましたが、大野君（カモメ商会）だけはよく頑張っていたようです。

当時の遊技機の原価は八円位で三倍の小売値は常識とされておりました。当時の機械は玉が横に走って早く落ちない。客は一つの打玉が落ちないと仲々次の玉を入れないものなので、私はその点を考えて随分ゲージを研究しました。玉はその当時から三分五厘の鉄球を使用しました。

その後、蒙古の徳王が日本へ来た時に招待されて拝謁致しましたが、愉快だったのは、当時国内で七十円程度だった横物でも百二十円で買はれたことです。これを機に蒙古を始め、新京、大同にも輸出をしました。

その他、南洋にも輸出しました。金箔、銀箔を張ったものに黒のイブシ釘を使用しました。これは目を痛めないようにという輸出商からの話によったものです。

セル板を使用するようになったのはその後で、これも赤は目を痛めるというので敬遠しました。

●忘れ得ぬ正村氏の義理堅さ

戦後私が再び遊技業界にカムバックしたのは、終戦直後円頓寺を歩いていたとき、正村竹一氏が機械を工作しているのに出会ったのですが、私に機械を製作してもよいかという話なので、私は再びパチンコをやらぬ心算にしていましたから大いにやりなさいと言ったんですが、私の方にも又、カムバックを推められたんです。

一銭銅貨と同じ大きさの真鍮メタル。一銭パチンコ禁止令では、玉式のパチンコのほか、同型のメタルを使って遊技機は改造しないで乗り切るというアイデアも生まれた。

戦前は正村氏にもガラスで儲けさせたので、今度は機械を売って儲けさせてもらっても五分と五分だという考えだったんですが、家に帰って家内に話すと、パチンコ業界の人は義理堅いですねと大いに感激しておりまして、私も元来勝負師なんですが、没落したら人は見向きもしてくれない程この世界は厳しいことを痛感していたので、この正村氏の助力には大いに感激致しました。今も家内は正村氏の名前を飾って朝夕拝んでいます。（感泣）こうして戦後再びこの業に手を染めてからというものは皆さんのご承知の通りです。

要はこの業は最後は調整の腕一つで、百台の機械を据えている人は百人の子供をもった心算りでその癖を良くのみ込むことです。

（昭和31年11月12日号　通刊246号より）

玉の機械の発案者 藤井正一は業界最大の功労者

昭和26年に遊技通信を創刊した伊藤重男は、パチンコの歴史、とりわけ草創期のパチンコのスタイルについて、ほとんど執念じみた調べ方をして、取材結果をその時々の本誌に掲載している。が、あらためてその記事を読むと、人によって言うことにバラツキがあり、伊藤自身、整合性をつけるのに苦慮している場面も少なくない。

この藤井正一の話は、一読して分かる通り、人名も豊富でなおかつ話も具体的で、信憑性は非常に高い。しかも、未だに業界の歴史を考えるうえで、埋もれている話なので、あえて全文を再録した。

文中に出てくる竹内竹次郎が、伊藤重男との対談の際、「あなたは玉の機械の発案者をご存じか。業界最大の功労者は玉の機械を最初に作った京極の藤井という人だ」と言い切ったのが昭和27年。こう聞いては黙っていられない伊藤が、その後、業界を離れた藤井をなんとか探しだし、インタビューしたのが4年後の昭和31年である。

藤井の話はその4年前の竹内のインタビューとの整合性がきっちり取れている。例えば、藤井が玉の機械で許可を取得した後、「悪いこととは知りながら、10時間もしないうちに同じものを作った」と告白しているくだりなどがそうで、竹内によると、藤井がそうした業者を呼び出して切った啖呵というのは、なるほど藤井自身が「私も若かったから」という、以下のような歯切れのいいものだ。

「あなたがたが素人だったら私はこれっぱかしの文句もいわない。仮にもあなたがたは日本のパチンコ屋さんだ。こういうことをしてもらっては道義にもとるじゃないか。去年の10月いっぱいで日付が切れたのを、一年もたたない現在までに、再び許可を取ったということについては、あなたがたはどう思うかは知らないが、相当自分としては苦労した。それはあなたがたにも分かるだろう。それを一言の挨拶もなしにやるというのは、人情がなさ過ぎる話じゃないか」

こういわれると、集まった人たちは「グウの音」も出なかったという。そこで、集まった人たちで日本で最初の遊技機製造者組合を結成した。その組合が遊技機に貼り付けたプレートが上写真。台あたり40銭が京極に入るようにしたという。パチンコが卑しい職業だといわれながら、パチンコにこだわって日本中を奔走した当時の業界人の正直さといかがわしさが表現されている。

愛知県名古屋遊戯器製造業者組合之証

語る人・林吉太郎氏／聞く人・伊藤嘉啓氏（三葉製作所社長）

対談・パチンコの創生期を語る

パチンコが初期の香具師（やし）といわれた大道商人時代に今日ほどの隆盛を来すと想像した人があったろうか。それより幾変転苛酷な当局の取締りに処しつつ今日に至ったわけである。ここに登場する林さんは業界に関係すること三十有余年、本邦最古の業界人である。そこで本誌はパチンコの創生期を我らの先輩が如様に生きぬいてきたか、林さんの回顧を語って頂き、今後の糧としたい。聞き手は林さんと親交厚き三葉製作所伊藤社長を以てした。

●OM式で淡路島へ

伊藤　林さん、あんたが業界に関係して何年になりますか。

林　そうですね、最初淡路島へ渡ったのが三十才のときですから、もう三十六年になりますね。

伊藤　とにかく、現在生きているんでは最も古いんですね。鈴富の上野さんよりも十年ぐらい古いと思います。まあ、ずい分苦労もしてきたと思いますが、今日の業界関係者に昔の話を語って頂きたいと思います。最初にパチンコの発生ということなんですが、そんな点についてひとつ…

林　なんでもパチンコを一番最初に作ったのはアメリカのシカゴということになっています。日本では大阪でもってOMというメーカーが一番古いと思います。

伊藤　一般的に大阪の陣内、OM、富貴屋が日本最古のメーカーということになっているようですが、その点は。

林　いや、一番古いのはOMであって陣内と富貴屋は十年位おくれていると思います。大正末期のことですね。

伊藤　そう致しますと、林さんはそのOMの機械を使ったわけですね。

林　そうです。まだOMの機械しかなかった。そのOMが大阪の新世界、大山館のそばへ機械を並べて営業していたわけです。その頃のことですから、大道でもって商売をやりながら、機械も販売していたわけです。

伊藤　OMの機械を持って淡路島へ行ったわけですね。

林　それまでが大変だった。何しろOMの機械は一台千円もしたのですよ。未だ自転車のパンク修繕代が十銭という時代だから千円という金は大金だったわけです。そこで借金致しまして中古の機械を五台六十円で買ったものです。OM式を自分で改良して、これをリヤカーに備付して淡路島へ渡ったのです。その改良方法はみな種々異なった改良をしたものですから、五台とも別の手を加えておいたのです。

伊藤　リヤカーのまま営業したわけね。

林　そうです。然し未だパチンコというものを淡路島の人が知らないものだから、すっかり失敗してしまった。借金を背負い込んで大阪へ帰ってきました。

伊藤　その頃の機械は？

林　穴は五つありました。一銭銅貨を入れて上に入ると三銭、次が二銭出るといった機械と四分玉ではじくやつの二種類に分かれておりました。盤はニューム製、レールなども非常に薄いものでありましたね。いまの機械に比してみたら、まったく雲泥の差という他はありませんね。

●ヒゲのパチンコ屋

伊藤　淡路島から帰ってきて、大阪でもって商売をやったわけですね。

林　ええ、それから大阪で商売をやったのですが、その後は割合順調にゆきました。当時は未だ東京ではパチンコは認可になっていなかった。大阪が一番早く認可になったのじゃありませんか。その関係で、大阪ではどこへ行っても業者が乱立していました。縁日などの夜店では華やかな存在でした。大阪は市内に限らず府下一円認可になっていたのでリヤカーで以って転々と歩いていたわけです。

伊藤　その頃の身入りは？　大分良かったという話でしたが。

林　良かったですね。縁日の夜、大阪の堺へ行ってやった処、いつになっても客が絶えないのですよ。他の店はみんな閉め、終電車がなくなっても未だ客がついていた。実際、こちらが驚きましたよ。一晩に三十円ぐらい儲かった。お陰で淡路島へ行くときの六十円の借金も返済できました。あの時は本当にうれしかった。

伊藤　それからどんなコースをたどりましたか。

林　府下、河内方面をたどり、そして大阪の中心へかえってきました。郡部方面もかなり成績が良かったです。

伊藤　大阪から北陸へ行ったわけですが、その間どの位の年月がありましたか。

林　随分大阪でもってやりましたね。とにかく私はあの辺では有名になってしまった。ヒゲがあったでしょう。そこで、「永代のヒゲのパチンコ屋」で通った存在になったのです。

伊藤　林さんがパチンコ屋で非常に有名だった、ということはよくきいております。そのころは露店の営業は鑑札があったわけですか。

林　ええ、鑑札がちゃんとあってそれで通用したわけです。北海道あたりは無許可で営業できたようです。

●景品は二割前後で

伊藤　メタルになったのは何時ごろからですか。

林　私が新潟へ行ってからです。それ以前はみんな銅貨のやつだった。

伊藤　淡路島から新潟へ行くまでに何年くらいたっていましたかね。

林　十年は経っていましたね。四十過ぎていたかも知れない。伊藤さんは？

伊藤　あんたが新潟に行っていた時分、私は名古屋にいましてね、一番苦労した時代です。

林　機械はメタルが新しく出来て、メタルと銅貨と半々ぐらいだった。私は新潟から水戸、静岡、豊橋とまわって名古屋

へ入りました。名古屋でもって映画館の前に二十円の家賃の家を借りて営業しようと思ったら、許可にならないのです。県でもって許可していなかったわけで、伊勢の関さんという人を通して玩具のパチンコをトランクに入れて日参した挙句、期限付きでやっと許可をとりました。

伊藤　どこへ行ってもそうでしたが、許可をとるまでには随分苦労をしましたね。その頃私は名古屋の大須観音の側で二十一台で店を営業していました。

林　二十一台といったら、立派な店でしたナ。

伊藤　ええ、大きい方の遊技場でした。一日に百円位になりましたね、ずい分儲かったものですよ。それでいて、景品は一割五分からせいぜい二割。三割出すのは馬鹿だといわれていた。

林吉太郎／明治二十三年岡山県阿哲郡に生まれる。本年六十六才。最初自転車屋に奉公したがその後志を立ててパチンコ五台を持って淡路島へ渡る。それより業界に関係すること三十有余年、日本最古のメーカーOM時代より営業をなし、のちメーカーも兼任。現在は東京小岩地蔵にてスマートボールを経営している。
※昭和30年当時の人物紹介です。（編集部）

伊藤嘉啓／スマートボールの代表的なメーカーである有限会社三葉製作所の社長。遊技機メーカーのなかでも戦前から横モノ一本で通してきた唯一の人であり、それでありながら、連発禁止令後のスマート・ブームの際には「商売人じゃないんでね。人様の後塵を浴びました」と乗り遅れた。が、その後、スマートメーカーが次々に消えゆくなかで最後まで残り、様々な新型機を世に送り出しながら、息の長い商売を続けた。

●懐かしい御難時代

林　名古屋からどちらへ？

伊藤　名古屋を打ち上げてから苦労しましたね。和歌山へ行って失敗して、岡山へ廻ったらここは許可になっているのですが、景品は認可していなかった。そこで津山へ行ったら初めのうちは良かったが、間もなく景品を押さえられた。仕様ないから四国へ渡って高松愛媛とみな駄目なんですよ。松山では営業を始めて二時間も経たない中に禁止になってしまった。従業員も連れていったので、どうしようかと本当に途方に暮れた時代です。今から考えると懐かしいですが…。（笑）

林　いや、どうも現代の人では想像もつかない頃でしたね。

伊藤　機械面のことですが、あんたが淡路島時代は銅貨でやっていた。新潟へ行かれた頃からメタルになったわけですね。ボールになったのは、つい最近のことと思いますが。

林　昭和十年前後にパチンコが一時禁止になった時代がありました。それが再認可になったのが昭和十二年頃、そのときはボールになっていました。景品はアメなどが主でした。菓子自動販売器が出現したのはこの頃です。

伊藤　ヤサ打ちといって、軒を構えて営業するようになったのは、新潟時代からですね。それ以前はほとんど大道商人といって、転々と街道を歩いていたわけだ。それと、林さんが仙台の田中さん（現東北地区協議会長）とお会いになられたのはいつごろですか。

林　新潟で会いました。田中さんと私とあと一人、三人で新潟県下を廻って歩いた。田中さんは宮川会といって大阪の親分の弟分なので、随分幅を利かしていましたわ。（笑声）

●大阪がPの発生地

伊藤　鈴富の上野さんとお会いになったのもこの頃ですナ。

林　そうです。新潟を廻っていた時代に会いました。鈴富さんとも露店時代は知らなかった。ヤサ打ち（編集部注・屋内営業のこと。サヤをひっくり返したテキ屋の隠語）以来の交際です。それから鈴富さんは北海道へ渡って、現地でメーカーと遊技場を兼ねられて、大分成績をあげたようです。

伊藤　その頃ですか、林さんがメーカーも兼任されたというのは…機械も自分で作っておられたというが…

林　ええ、その頃は自分で作っていました。但しメーカーではなかったから、自分の営業する機械だけでした。然し、営業していて、人気が出るのですね、そうすると、是非作ってほしいと注文がくるのですよ。不調だと困るから私は受付けなかったですがね。

伊藤　林さんは真面目な方ですからね、本当のことしかやっていなかった。…しかし、当時はメーカーというものが確立されていなかったから、自分のところの機械は自分で作る人が多かったですね。

林　それでも一番多かったのは大阪でしょう。いまじゃパチンコの本場は名古屋ということになっており、パチンコの発生の地も名古屋というのが常識になっておりますが、本当は大阪ですよ。

伊藤　パチンコ発生地大阪論、というわけですナ（笑声）。しかし、これは事実であって、名古屋というのは戦後のことですからね。

林　正村さんも戦後ですナ。

伊藤　いや、正村さんは昭和七、八年から十年頃までやっていましたよ。その後一時製造を中止して、戦後再び発足したわけなんです。

●今の盛況は昔の夢

伊藤　あの頃のパチンコの人気は素晴ら

大正9年のパチンコ営業…本当ならば間違いなく最古の証言

当初、この対談は藤井正一のインタビューとは違い、内容的に信憑性は低いのではないかと編集部では判断した。何しろ、この頃ですでに一番古い業界人といわれていた上野鈴吉よりも、さらに10年も古いというのである。

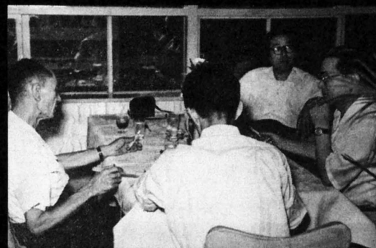
昭和30年当時に66歳の林氏が、36歳の頃のことを語っているのだから、年代は大正9年前後ということになる。大正9年といえば、パチンコのルーツといわれたコリントゲームが、日本に最初に輸入された年だ。となると、林氏の話はパチンコ営業に関する最古の証言ということになるのだが、どうしても疑念の方が強くなってしまう。

しかも、対談中、遊技機価格が１台千円もしたということなど、どうにもすっきりしない部分が散見される。中古の機械は5台で60円と一気に値が下がり、そうなると最初は「1台4円」の誤植かとも思ったのだが、それでも合わない。また、上野鈴吉がパチンコ営業を始めたのは大正12年で、鬼泣かせや腕相撲機と並べて四日市で商売したというから、「10年も古い」というのは明らかに間違いである。

それでも、こうして再録したのは、会話の面白さがあるからで、とりわけ昭和30年に昭和初期の話をして、「なんといっても時代ですナ」とお互いに懐かしむのだから、なんとも味わい深い対談である。借金してまで渡った淡路島では、島の人がパチンコを知らなかったので、まるっきり失敗して大阪に帰ったと笑われると、こちらも笑ってしまう。

また、パチンコ草創期が香具師といわれる人たちの手で全国に広まった様子がよく分かる貴重な逸話も見逃せない。

そんな軽い気持ちで再録したのだが、あらためて読むと、今度は興味深い点ばかり目についてきた。大正時代の遊技機を「穴は五つありました。一銭銅貨を入れて上に入ると三銭、次が二銭出るといった機械と四分玉ではじくやつの二種類に分かれておりました」と語るところなどがそうで、実はこの構造は、パチンコのルーツ欄に掲載した、欧州の遊戯機そのままの構造なのである。具体的にいえば、前者が「ボランズ」

対談の模様

といわれる遊戯機のスタイル、後者は「マシン・ア・スウ」のスタイルだ。こうした欧州の遊戯機の存在が知られておらず、コリントゲーム元祖説が根強かった昭和30年当時に、果たしてこんな具体的な話が出来るだろうか。しかも、自らの年齢から逆算した自らの行動の記憶であるだけに、上野鈴吉の部分のような他人のことで間違いがあっても、林氏当人の行動までもが否定されるわけではない。この話を一転して肯定的に捉えると、「淡路島では島の人がパチンコを知らなかった」という笑い話も、草創期ならではのエピソードではないか。

1台千円の件などは、考えてみれば、魏志倭人伝における邪馬台国の場所探しと同じだ。素直に信じてもいいし、林氏の記憶違いでもいいし、昭和30年当時の遊技通信の編集者のミスでもいい。（編集部）

しかったですね。

林　良かったですよ、警察であまり人気があるので驚いていた。大体大阪のパチンコは初めから大人が対象だった。当時はチンドン屋も花環も宣伝に使わないで、貼紙一枚でフタを開け営業したものです。

伊藤　然し、今から考へたら随分経営者もインチキをやりましたな。林さんは真面目だから、やらなかったと思うが。

林　今の機械と違って命釘が大きなメンコで被われていたからいくらでもイタズラが出来たわけです。命釘の間に釘を打ったり、木綿針をちょっと指しておいても当り玉がみなはねてしまう。それでいてメンコがあるから客にはわからないんですね。もっとも余ほど悪質な業者でないと、これはやらなかったですが。

伊藤　いずれにしても、パチンコが今日ほどの隆盛を来すと思った人はいなかったですね。実際、全国的にこれほど発展するとは思わなかったです。昔は警察単位の許可だったから必ず不許可地区があった。

林　終戦後間もなく、大阪に住んでいましたが、家内が十三へ行ってパチンコを見てきたがすぐに商売をやる気にならなかったです。あの頃からやれば良かったが。（笑声）

伊藤　林さんはいま小岩でお店を持ってスマートをやっておられるのですが、小岩で始めてどれ位ですか。

林　二年になりますナ。小岩の前に早稲田で半年やりました。伊藤さんに引っ張り出されて始めたのですが、今では感謝していますよ。

●スマートの創生は

伊藤　では最後にスマートの創生記について話しましょうか。スマートが初めて世に出たのは昭和８年頃、栃木の岡本さんという人が考案されて、そのときはスピットボールとかスピードボールとかいわれていましたね。

林　考案者は岡本さんですが、販売に当たったのが泉さんでこの人は従兄弟に当たっていたのですが、同じ機械に異なった二つの意匠登録をめぐって本家争いをしたという話です。

伊藤　ゲージもいまのとは随分違っていますが、驚くのは機械の大きさね、何しろ幅一尺六寸、長さ三尺五寸という細長いものだった。ハンドルも今のように立派なものでなくもっと軽いキャシャなものでしたね。

林　それとボールね、今こそみんなガラス玉を使っていますが、以前は八分三厘のベークライトの玉を使っていた。

伊藤　それに木の玉もありましたナ。木は樫の木で、また金属性のボールもありましたね。釘なども真鍮より鉄のほうが弾き方に味わいがあると言われ、鉄にメッキをかけた釘を使用していたものです。遊技料金もボール一個一銭、景品はほとんどバット（七銭）かキャラメル（二銭）に限られて原価交換率だったわけですね。

林　そうでした。なんといっても時代ですナ。パチンコにしてもスマートにしても、我々の若い時代から比較したら驚異の一語につきますね。随分発展したものです。

伊藤　では林さん、お忙しいところありがとうございました。こういった初期の創生期の話しを是非とも一度聞きたいと思っていたのです。

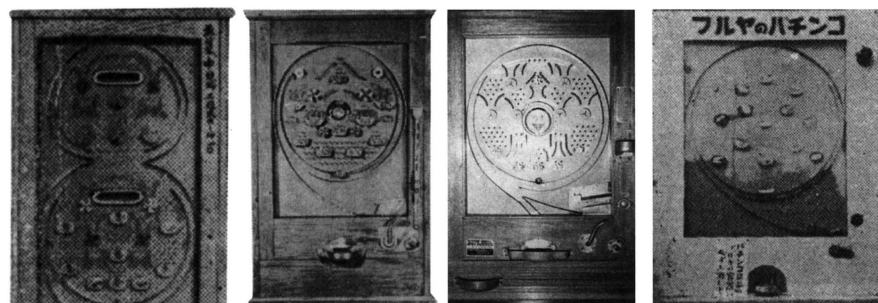
林　いや、こちらこそどうもありがとうございました。（終）

（昭和30年7月30日号　遊技通信161号～166号）

歳末景気パチンコ街
パチンコのキカイうってくださいアメリカへのおみやげにしますナ
お父さんをさがすには竹馬にかぎる
景品をとりかえてくるまで番をとっておくれ
ウラしいわね店の中でモクひろいとは
このすみっこでキッスしまホ
ナニお母ちゃん産気づいたって…
七番はよくでるキカイだ
お客さんそんなカナヅチでクギを直してはいけません
福引の景品だよ
まあスケベ
どこでたってるのもおんなじさもう一パツやるかナ
一個二十円は安い！二十五円！二十五円！！
歳末大売出し
どうせひろった玉でしょう
あゝいいきもちだ
チーン
ザラザラ
たばこかしてくれ
ほいきた！
おとうちゃんがいないワーン
PACHINKO
まさかパチンコとはきがつくまいデパートのかえりみたいだ
じょうしゅうはんみっけた！
しまった！
ごろごろ
ねえパパパチンコしましょうよ
おれの彼女にプレゼントするのよせ
きょうは八十六番がはいってるぞウ
すごいネボーナスがはいったらしい！
また色じかけだわ
パチンコの景品をプレゼントしてる
あらすみませんわネ
あっ借金とりだ
玉百こかしてよう
いやよ
しっかりケイヒンとってよ
こんどはバアさんやってごらん
グウスカグウスカ
キャッ
いっちょういこうか
けんぜんごらくさ
景品でおせいぼまわりしよう
まあもうおべんとうたべるの
まいどありイ
ブウブウうるさいわね
すみません玉が…
うわっブタみたいだ
おーいでないぞウ
お火おつけします
全館冷房
字をまちがえたぞウ！
いっかいみはりをたのむぜ
おてゝをこういうふうにね…
へーいいらっしゃい
漫画自由人クラブ
森比呂志
山崎善一
筑摩鉄平
白路徹
吉田久三郎
小泉紫朗

●全遊連創立総会／昭和26年12月5日、熱海・青木館に全国の遊技場代表が参集。翌6日に全国遊技場組合連合会が結成された。主な出席者は西本熊蔵（愛知）、牧野胖（大阪）、梯正雄（京都）、廣瀬榮太郎（神奈川）、松原八郎（川崎市）、安田清太郎（静岡）、佐藤瀧治（福島）、笹木一郎（埼玉）、木村富男（福岡）、貞松徳三郎（宮崎）。ほか、愛知遊技器組合から大山正雄、東京球遊器組合から石原俊一、上野鈴吉、遊技通信の伊藤重男らが出席。初代会長に西本熊蔵（写真下）を選出したほか、組織化のきっかけとなった入場税問題などが話し合われた。

■昭和26年は業界団体の設立が相次いだ年である。メーカーにおける物品税問題、ホールにおける入場税問題といったように、組織化の背景には、個々の業者では抗しきれない税金問題が絡んでいた。本誌初代社長の伊藤重男が、県レベルでは組織化されていたホール団体の全国統一の必要性を訴え歩いたのも、この税金問題の解決が主軸となっていた。その全国行脚から東京に戻った伊藤は、10月5日に遊技通信を創刊。当時の遊技通信はパチンコだけではなく、ビンゴ、Zゲーム、赤玉式ロケットゲームなどの団体競技も射幸性に絡む業種としてカバーしている。なお、この創刊号には、都内に設置してあった「ストリップパチンコ」が警視庁保安部によって禁止されるというニュースもあった。入賞すると電気がつき、裸体画が映るというもので、下写真のように、パチンコ機の多様化も著しく進んだ年でもある。

●遊技通信創刊／昭和26年10月5日。

●パチンコの流行とともに登場してきた変わり種パチンコ機の数々。左から中台工業の「ダルマ式」。元々あった縦長タイプだが、ハンドルの具合が良くないと玉が上まで上がらなかった。次が東福商事の「自動玉入器」付きのパチンコ機。盤面右に縦長の玉入れ装置を取り付けるという、連発式のはしりである。次が豊国の「でんでん虫」。連発式に発展する直前のかたちで、玉入口を上から見るとでんでん虫のように渦巻いていた。右はフルヤの巨大パチンコで、これはキャラメル販売の宣伝用。東京有楽町の日劇前に置かれた。高さ4尺5寸、幅3尺。キャラメルを買うと貰える4分5厘の玉を弾き、入賞するとキャラメルが1箱出てきた。

●通刊1265号に及ぶ遊技通信の創刊号がトップで伝えたニュースは愛知県下のメーカー団体の結成の模様。名古屋市内の6税務署管区にあった「遊技器物品税納税協力会」の昭和区協力会が中心になって9月5日に設立された。初代組合長に大山商店の大山正雄（写真）が就任。副組合長に長崎製作所、久野製作所、会計に大野製作所、監査が竹内商店と正村商店といった具合で、当時の業界を代表するメーカーが勢揃い。東京の組合は1カ月後の10月に設立され、グラハン・石原俊一が組合長に就任した。

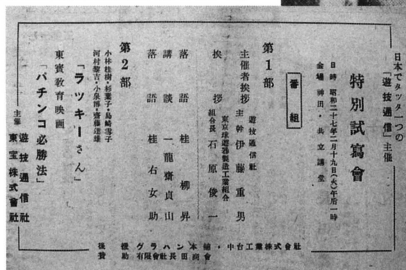
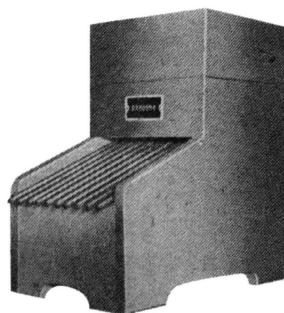
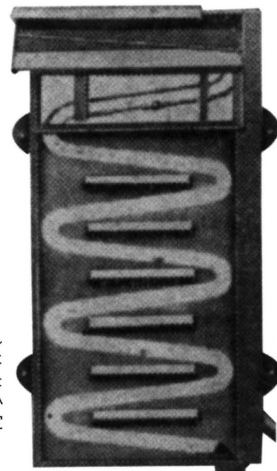
●左から「建国式」と「OS式」の玉磨機2種。パイオニア的存在のオーエスは、「ニュー光液」という薬剤も販売した。右は「自動玉売機」。玉売機のメーターは税務署に目を付けられるとして、設置を躊躇するホールもあったという。価格は9千円というから高価である。

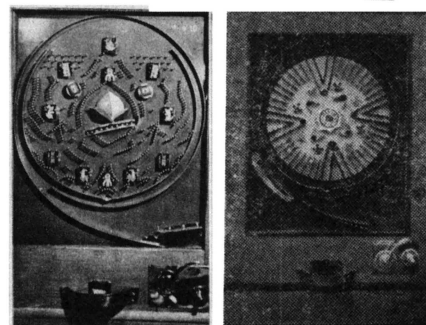
遊技器界最大の人氣王！愈々発賣
遊技者の押すスヰツチにスリルを盛つたアメリカ式
赤玉式
ロケットゲーム
特許番号第251773号
実用新案登録第372754号第382620号
株式會社 山田製作所

●射幸性が絡む業種としての当時の「遊技場」にはパチンコのほか、ビンゴなどの団体遊技も含まれていた。

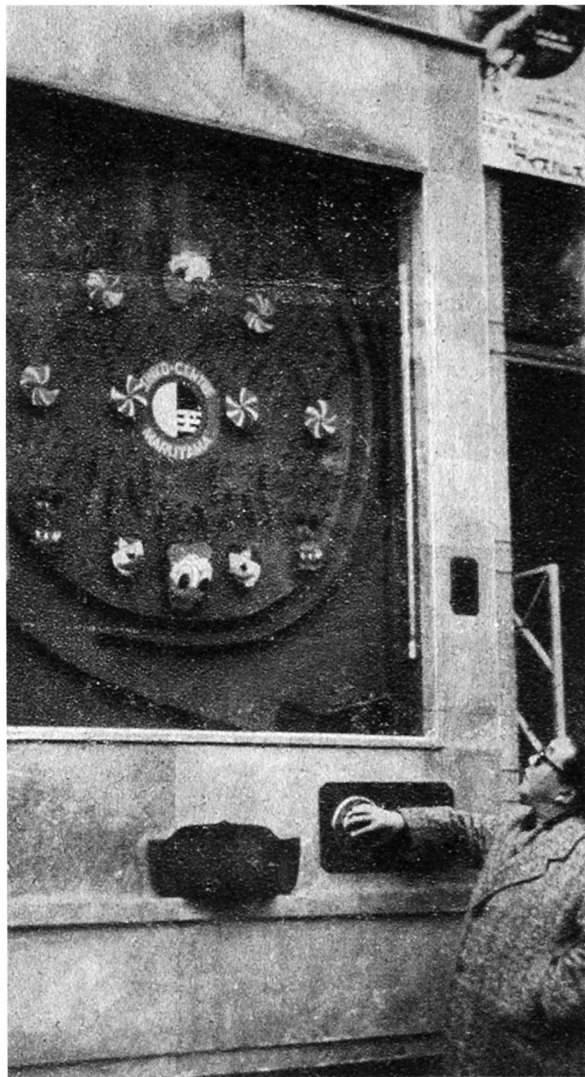
●女性の景品買い（神戸）。この頃からパチンコ店の周辺に景品買いが出没しはじめた。大阪道頓堀には左写真のような景品買いの自粛を促す横断幕が。

●右は新東宝の映画「大当りパチンコ娘」。古川緑波、柳家金語楼、伴淳三郎、キドシン（左）、田端義夫（右）、清川虹子ら、当時の錚々たるメンバーが出演したパチンコ店を舞台にした人情喜劇。主役の「パチンコ娘」は関千恵子（中央）で、玉売娘役を演じた。東宝はこの年、やはりパチンコ店が舞台になった性教育映画も製作している。

日本でタッタ一つの「遊技通信」主催
特別試寫會
日時 昭和二十七年二月十九日（火）午后一時
會場 神田・共立講堂
番組
第1部
主催者挨拶 遊技通信社 主幹 伊藤重男
挨拶 東京球遊器製造工業組合 組合長 石原俊一
落語 桂柳昇
講談 一龍齋貞山
落語 桂右女助
第2部
小林桂樹・杉葉子・島崎雪子 河村黎吉・小泉博・齋藤達雄
「ラッキーさん」
東寶教育映画
「パチンコ必勝法」
主催 遊技通信社 東宝株式會社
後援 (株)グラハン本舗・中台工業株式會社
賛助 有限會社長田商會

●左は東宝教育映画が製作した「パチンコ必勝法」の特別試写会のチラシ。当時の製造工場などをフィルムに収めており、現存していれば貴重な資料になるのだが。併映されたのは源氏鶏太原作、小林桂樹、杉葉子主演の「ラッキーさん」。

●なんとも仰々しい機械だが、これはどちらも遊技球の選別機。当時は生玉を使うところもあり、こうした玉は磨いているうちに僅かながら小さくなったり歪んできたりして、定期的な選別が必要だった。

●愛知県遊技機製造工業組合の主催で開催されたパチンコ機見本市。関西ボール工業組合なども協賛。

●秋葉原デパートで3日間に渡り開催された東京で初めての合同展示会。業界関係者に一般ファンも混じり、連日、身動きできないほどの熱気だったという。ミスパチンコ・コンクールもあり、電々公社事務員の小野田悦子さんが選出された。

●変わり種パチンコ機はこの年も多数登場。右は「ロータリー」という釘なしパチンコ。ハンドルを回すと中の円盤がグルグル回り、回転盤の角度によって入賞するかどうかが決まった。近藤というメーカーの作。左はオール10の変型ゲージ。ケースは中央に横流しになっており、全くもって変型モノの極みともいえる。

■浅草観音のおさいせんにパチンコ玉が混じっていた、というニュースで始まった昭和27年。戦後の復興が急ピッチで進んだこの年は、パチンコも概ね順調に成長していく。4月26日の朝日新聞がパチンコの年間市場規模を800億円と試算した記事を掲載するなど、パチンコは庶民の娯楽として社会に定着してきた。が、そこは地域格差が著しかった時代の話。業者数の多い四国などではオール10以上の設置を許可しない措置なども出てくる。大阪でもオール20は制限されるなどしたが、一方の北海道ではオール100も登場。東京には白セルでメンコのない機械が出て、「モダンだ」という人と「葬式みたいな機械」という人と賛否両論になった。また、正統派パチンコ機の代表、正村式には「村正」「正村製作所」「大正村」「新正村」といった偽物プレートが続出。完全偽造の正村プレートも1枚300円で名古屋の駅裏で売られていたという。

●路上で中古機を売る少年（福岡）。

●この当時、最も先端を走っていたパチンコ店は京都の「マルタマ」。店頭にはジャンボパチンコが置かれ話題をさらったほか、2階はサービス料を取っておしぼりとお茶が配られ、「上品な客」に好評だったという。椅子島第1号店でもある。社長は右写真の木下弥三郎氏。（開店したのは昭和27年）

●福岡のパチンコ祭

●豊国連発式／オール20で正村ゲージで循環皿で、アウト玉の巻き上げ機も付いていて…といった具合に、当時のスタンダードなパチンコ機のひとつの完成形。連発式は豊国の菊山徳治（写真）の考案。循環式は竹屋の竹内幸平の考案。正村ゲージはいうまでもなく正村竹一。オール物は長年、長崎一男の考案といわれていたが、後年、違う説も出ている（鈴木笑子著・天の釘参照）。

●ある会合でのツーショット。左は全遊連第2代目会長の成毛菊五郎、右は正村竹一。着飾ることのない正村はここでもノーネクタイ。

■連発式の人気に湧いた昭和28年。単発式と違ったリズムの遊技になったため、テンポの早い「お富さん」がよくBGMに使われるなどして、各地のホールが活気に湧いた頃である。山口県の小野田市は財政赤字の建て直しのために市営パチンコ店を開設するも、見通しの甘さからすぐに取りやめになるという出来事も。さらに、関西汽船の別府航路にもパチンコ機15台が営業用として設置されるなど、パチンコは社会の隅々にまで浸透していく。が、そうなると当然、今も昔も変わらず、好調さとセットでついてくる過当競争に悩まされるエリアが続出。差別化のための大型化やサービス合戦が過熱していった。なかでも、他の追随を許さないぐらいのハイグレードな店舗が京都のマルタマで、写真の通り、椅子島設置もそうだが、金メッキ球を使用したのもこの店が始まり。金メッキ球を使った理由は「ヤミ玉」防止のためだ。このヤミ玉問題は当時のパチンコ店の最大の悩みで、新潟では1個90銭（当時の玉貸料金は2円）で鉄球を売って、男性に「光」20個を交換させた男が、詐欺教唆で懲役八月の有罪判決を受けるという出来事もあった。

●東京八重洲の「タンポポ」のアドマンは何故かチョンマゲ侍。当時の東京業界、今では信じられないことだが都内有数の激戦地はこの東京駅の周辺で、集客合戦が激しかった。

●最近流行のパチンコをどう思うか、とNHKが街頭インタビュー。蒲田駅前。

●旭川で本誌記者がみた変型モノのゲージ図。興奮したのか写真を失敗し、手書きで掲載。

●中古業者の店頭。機械はもとより古玉まで扱った。

●昭和29年はパチンコ祭が各地で開催された。このおじさんは7月11日に開催された鹿児島のパチンコ祭における「パチンコ名人大会」の優勝者。優勝賞品はこの自転車…だけではなく、荷台に積まれた様々な品物（ミシン、蚊帳、カッターシャツ、洋傘）もそう。手持ち20個の玉で競う大会だったという。周りの人も楽しそうだ。

●小さい店舗が軒を連ねる名古屋の駅裏。全国の業者が遊技機の買い付けに来る際に立ち寄った。

●モーターパチンコを導入した小樽ゲームセンター。「エレクトロン応用」という言葉が時代を感じる。

●シバタサーカスの柴田興業が映画館をパチンコ店に鞍替えしてオープン。あまり「パチンコデパート」には見えないが。

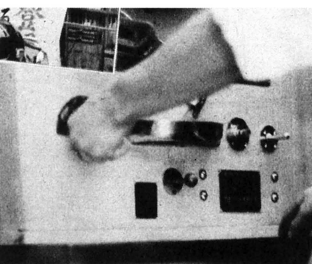
●北海道岩見沢の「キングタイガー」。炭坑労働者相手の商売なので、営業は1日2回転。それにしても「飢餓辛年」とはシャレがきつい。

■昭和29年は、膨張したパチンコ業界に対する社会的な批判が高まった年である。世間から批判されたのはまずは射幸性の問題。連発式の登場以来、とどまるところを知らないパチンコの射幸性の上昇は、この年の5月、モーターパチンコが都内・銀座のホールに登場するに至り、そのピークに達する。「賭博か遊技か」といった議論のはて、許可にならない地域が多かったなかで、警視庁がこれを許可したことで、多くのメーカーがこの「モーパチ」製造に乗り出した。社会的批判が高まった理由の2番目は「バイ人」による景品買い。2月中旬には大阪・曾根崎署がバイ人を一斉摘発し、これを容認したとして、20軒余りのホールに4日から1週間の営業停止処分が下されている。東京でも新宿、新橋で警視庁による一斉検挙があり、大量のタバコが押収されたほか、京都では景品タバコにホールの押捺をせよとの命令が出るなど、景品買いは全国的な問題に発展していく。しかし、景品買いがなければ成立しない業態になっているため、この健全化を図ることで批判をかわそうとする動きも出てきた。川崎市の組合では、バイ人組織「川崎生活協同友の会」を結成。共同購買所を設置するなどの策が講じられたが、社会的な批判は収まらず、秋になると政治家や評論家がパチンコ批判を展開してくる。こうした社会批判を受けた東京の公安委員会は11月16日、循環式パチンコ機の禁止を決定するに至る。この流れはまたたく間に全国に波及。各地で同様の措置が取られた。ほか、岩手県の釜石市議会は「パチンコ禁止条例」を作るよう県に要望することを決議。熊本では第三者の景品買いで摘発されたホール経営者が警察を相手取り訴訟を起こすなど、業界は混乱を極めた。

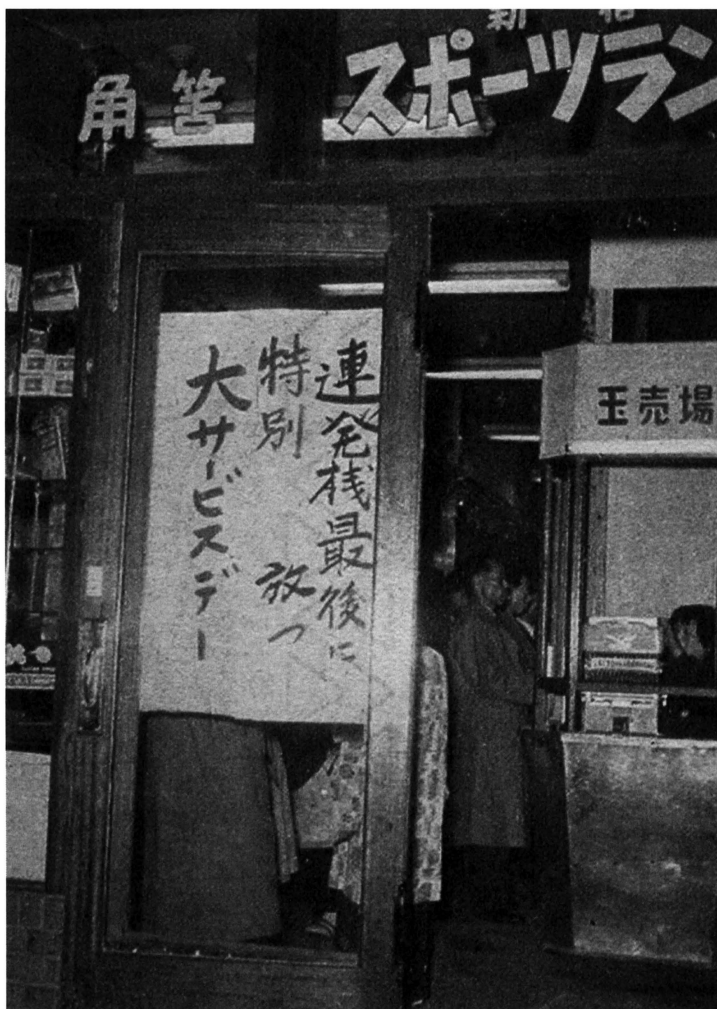
●連発禁止でNHKが街頭録音

●この当時、店内に水物は厳禁ではなかった。大阪道頓堀の「豊国」。

●渋谷「エイラン」のアドマン。この頃、アドマン好き（?）の本誌は彼らを集めてコンクールや座談会を企画、うるさい巡査が内勤になって喜んだりしている内容が掲載されている。ちなみに「連チャン」というのは、2個同時入賞のこと。

●名古屋の大手ホール「ドリームセンター」の景品場。

●連発式の極みともいえるモーターパチンコが都内銀座に登場。射幸性は一気に跳ね上がり、連発禁止令を早めることにつながった。

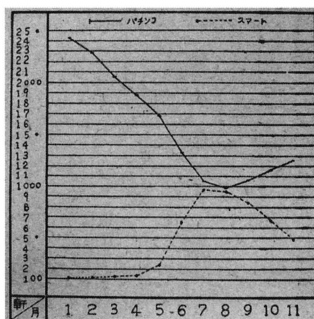
●名古屋駅裏の開店前の光景。ルンペンの女の子が店員にキャラメルをねだっているが、店員はこれを無視して清掃作業。

●関東メーカーの模様2点。左はこの時代から流れ作業で効率のいい生産体制を作った平和商会。シルバー号のヒットで生産が追いつかず、職人以外の初心者の労働力も必要とした。上は西陣の工場のカット。鳩のケース絵を書く女性工員。

●東京は3月いっぱいで連発禁止に。3月31日、新宿スポーツランド。

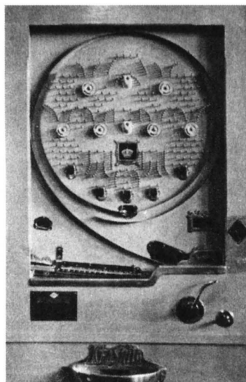
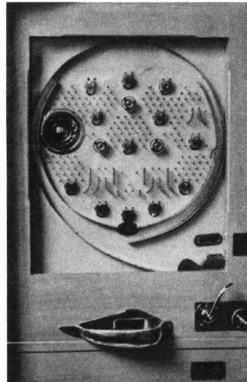
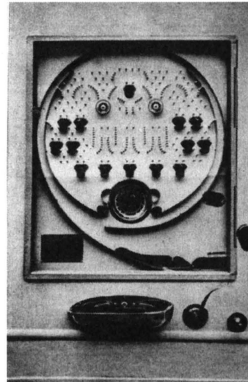
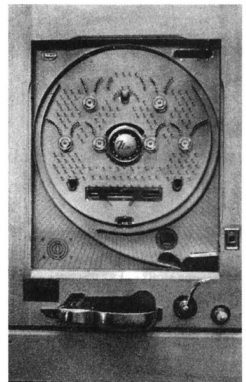
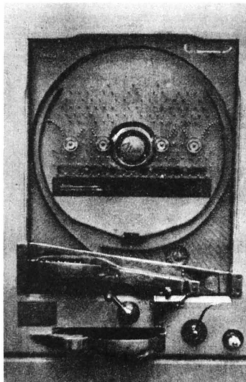
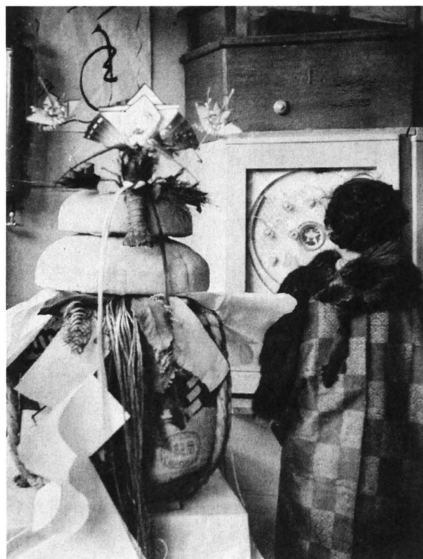
●連発禁止後、業態が一気に悪くなった北海道の業者が5月23日、抗議行動を起こした。娯楽施設利用税の低減、1カ月ごとの許可更新制度（！）の撤廃などを訴え、札幌市内をデモ行進した。大会終了後には、組合幹部8人が道庁正門前にすわり込みハンストを決行。ハンストは72時間に及び、要求事項の8割方が認めらた。

●連発禁止前後、非常に忙しかったのが中古業者（左写真）。連発機を単発式に簡易改造して販売したため。地域によっては、この簡易改造は認められなかった。右写真は対称的に暇になった景品買い。どちらも都内。

●4月1日、都内のホール。1日で連発式を切り替えて単発機で営業開始。

●9月26日、都内下谷公会堂で開催された全日本パチンコ展。スマート人気に翳りが出て、パチンコ人気が盛り返すも往時の隆盛はみられなかった。この時から、単発式では無人機が登場してくる。

●東京都の営業軒数の月別推移グラフ。上がパチンコ、下がスマートの軒数を示している。スマートブームがいかに短かったかが分かる。

■前年末からの業界団体の猛烈な陳情活動も効を奏さず、ついに連発式パチンコ機が禁止になった昭和30年。2月になって名古屋、東京と相次いで発表された遊技機の新基準は、予想されたものよりもかなり厳しい内容だった。都市圏での厳しい新基準決定は、各地の警察がこれに倣う可能性が高いこともあって、全国の業者に深い絶望感を与え、パチンコに見切りを付ける業者による廃業が相次いだ。29年から徐々に増え始めたスマートボール営業に活路を見出そうとした業者は転業という道を進むが、このブームは短命に終わる。業界の混乱期にありがちなことだが、10月にはオール10なら連発式が認められるという根拠のない噂が流れたりもしたが、むろん、そのような事実はなく、業態は厳しいまま推移。ついには業界団体の混乱も招き、10月に第4代の全遊連会長に就任した相川一太氏（写真）は、とにかく組織強化を図ることを第一に掲げて全国を遊説した。

●上は新基準でも連発ハンドルが認められた二式。セーフ・アウトの確認が出来た時点で次の玉が打てる構造になっている。これは七分ゲージにしてその確認を早めたもの。「らっきょ」といわれた二式の初期形態である。下はブームになったスマートボール営業店。夏には早くも過当競争になり、この店は小さい扇風機を各台に設置して他店との差別化を図った。

●ヤクモノの先駆けとなったマジック。天に入賞すると中央の四角い窓が開き、大きな入賞口になる。竹屋、竹内幸平の考案。

●変型ゲージの極み。賞球ケースを左に持ってきて、ゲージ面をフル活用、全部で十二穴の入賞口を作った。

●こちらは賞球ケースを下に持ってきての盤面フル活用型。ドボンを3つ並べた独特なゲージだが、やっぱりセンターが寂しい。

●一番下の入賞口は一定の間隔で2つの入賞口が連結されており、玉がハネに当たると左右に移動する。「移動チャッカー」という。

●「移動チャッカー」が発展した「キャッチパチンコ」。下枠中央のハンドルを回して入賞口を左右に動かす。駄菓子屋の店先でよく見たタイプ。

●連発禁止やオール20の廃止、台頭してきたスマートも短命で終わり…と、あまりいいことがなかった昭和30年に別れを告げ、新規一転、薦被りの上に本格的な大鏡餅をでーんと置いた新宿の「東新ホール」。

●池袋スポーツランドの開店2時間前の風景。狭い島の中での作業は過酷なものがあり、これが無人機や補給装置の開発につながっていく。この店はちゃんとした従業員寮があるが、島の中で従業員を寝泊まりさせるホールもあった。

●連発禁止令後に残った「連発式」には、アウト・セーフの確認後に次の玉を発射できる二式と、一部地域で認められた1分間30発以内の連発式の2通りがある。写真は豊国の二式。片手がふさがっている人には、やはり連発式は便利だった。

●都内赤羽駅前の「らしんばん遊技場」。豊国二式31台、銀座号14台の小ホール。

●風変わりな店名。都内蒲田駅東口の「裏窓」。

●雪深い会津のスマート専門店。スマートはブームが去っても40年代まで活躍した。

●当時、一般マスコミにもてはやされた人気ホールは有楽町の「ねこの店」。ソファーではビジネスマンが商談をしている。

●機械事情の悪化を受けて、この頃から店内装飾に凝るホールが数多く出てくる。新宿の「ハト」は本物の桜をアレンジ。

●大分の高稼動ホール。連発禁止でパチンコが大打撃を受けたようには思えないカットだが、大都市のホールと違い、店内の作りや設備は古い。地方は付属設備に力点を置く余裕はなかった。

■厳しい業態から脱出できないパチンコ業界。連発機を禁止したから警察行政も甘くなったかというと全く逆で、警視庁は年明け早々から構造設備の無承認変更、景品限度額制限破り、換金行為、賭博類似行為の徹底取締りを進める。6月には都内・赤羽のホールで暴力団同士の乱闘事件が発生、バイニン問題が再度浮上するなど、連発禁止の後遺症が続いた。この「赤羽事件」は後の全国的な暴力団排除活動のきっかけとなるものだったが、当のお膝下の東京は組織の分裂問題も加わって対応が遅れた。一方、遊技機製造メーカー側も連発禁止で大打撃を受けるのだが、残ったメーカーは射幸性に頼らない、パチンコそのものの面白さの追求に乗り出し始めた。上写真のように、試行錯誤を重ねた変型物が多数登場。これら「変わり種」といわれた遊技機の中から、竹屋の「マジック号」のような、その後の業界を救うアイデアも登場する。全遊連はまたも会長が変わり、広島の坂口三治氏（写真）が就任した。

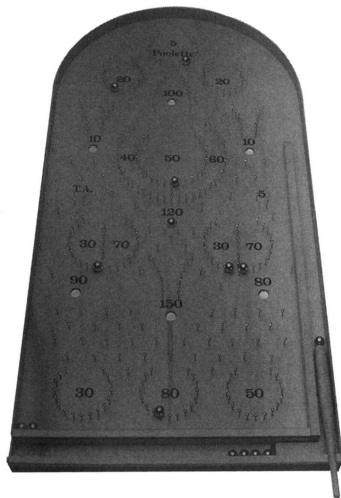
曖昧だったパチンコのツール 定説はコリントゲーム元祖説

◇思えば不思議な話なのだが、日本全国津々浦々にこれほど存在するパチンコ機のルーツは、実に長い間、曖昧なままだった。百科事典の類はパチンコの元祖はコリントゲームだと明記する一方で、パチンコ機そっくりの欧州型遊戯機の存在も一部では知られていた。が、社会的に信用度の高い百科事典や商品事典の類が一様にコリント元祖説を記していたこともあって、「定説」としてはパチンコ機の元祖はコリントゲームであり、欧州型遊戯機はなんというか、いわばそこを突っ込まれると困ってしまう存在だったのである。いずれにしても、パチンコのツール探しは遊技通信も何らかの進展がある度に掲載していたテーマのひとつで、本稿ではこの「パチンコのルーツ探し」そのものの流れを振り返ってみたい。

◇前述の通り、コリントゲームがパチンコの元祖というのは、長い間の「定説」であった。これに対し、「それは違うんじゃないか」として欧州型遊戯機に焦点をあてたテレビ番組が放映されたのは平成4年。当時の情報ドキュメンタリー番組、「テレビムック・謎学の旅」である。担当ディレクターのF氏は博覧強記の人物で、パチンコのルーツ探しでもかなり徹底した動きをみせた。F氏以下のスタッフの動きは、まさにバブル期のテレビの力を感じさせるもので、各地のコーディネーターを駆使、アメリカやイギリス、フランスと取材を重ねた。放送された番組も説得力のある仕上がりだったが、30分番組とは思えない徹底ぶりのため、制作予算を遥かにオーバー。当時、三共、平和、西陣などが番組協賛として名を連ね、なんとか不足分をカバーしたという後日談もある。弊社も僅かながらそれに協賛したが、これは番組制作の過程から携わっていた関係から無視できなかったというのが理由のひとつ。そしてまた、コリント元祖説が有力な中にあって、どうもそれは違うのではないかという、かねてからの本誌の疑問をF氏に伝え、それを元にスタッフが海外取材を重ねていった手前もあった。

◇が、番組公開後は、「実は私もそう思っていた。寝ているコリントゲームが立っているパチンコの元祖なわけがない」とする人が出てきて、もとよりコリント元祖説を疑問視していた本誌ですら、そういう人たちのいい加減さというか、功名心にやはる姿には不快な気持ちを抱いた。さらに、全体が欧州元祖説に傾斜し、番組の功績を無視して、自分が発見したかのように発言する人が複数出るに及んで、さすがにコリントゲーム元祖説にも逆襲の機会を与えるべきだとも思った。あまのじゃくのようだが、みんなが言うようにコリント元祖説がそんなにナンセンスなものならば、なぜ長年に渡ってそう言われ続けたのか。せめてその背景は考えるべきだろうと。

●百科事典などによると「コリントゲーム」を考案したのは米国シカゴのカイル兄弟会社。これはそのカイル兄弟会社の製品。コリント元祖説の否定派は、パチンコにはバネがあってコリントにはないというが、このマシンは玉をスプリングで発射する。

●昭和初期の営業用コリントゲーム。鈴富の製品。名称を「オリンピックゲーム」という。1940年（昭和15年）には、幻に終わった第12回東京オリンピックが予定されていたので、多分、その少し前の機械だろう。

●日本人にとっては、おそらくこれが一般的なコリントゲームだろう。コリントゲームという名称自体、これを発売した小林脳行の「小林」を「コリン」と音読みしたという説と、盤面に整然と並んだ釘がコリント式円柱に似ていたからという説に分かれていた。ところが08年になって、プレートを見ないと区別がつかないぐらい、これと全く同じ作りの英国製「コリシアン・バガテール」の存在を版画家の杉山一夫氏が指摘、コリントゲームはその名称も含めて海外製品の模倣であることを証明した。

マシンのルーツは欧州でも 営業スタイルは露店の発展形

◇とはいえ、コリントゲームがパチンコの元祖であると言われ続けた理由は実は簡単なことで、草創期の人たちがそう言っていたからである。昭和26年に遊技通信を創刊した伊藤重男は、業を離れた草創期の人たちまで訪ね回り様々な証言を得ているが、大雑把にいってその10人中9人がコリント元祖説をとる。コリント元祖説をとらないのは、今回、再録記事で紹介した林吉太郎のような証言が少しある程度。著名な玩具研究家などが、著書でパチンコのルーツはコリントゲームだとし、同様の内容を記した百科事典、商品事典が各地の図書館に置かれていったことも、コリント元祖説に拍車を掛けたと思われる。

◇一方、欧州の遊戯機は写真を見て分かる通り、姿形がパチンコとそっくりだ。が、これが日本に輸入された形跡は見当たらない。つまり、外見上は欧州型の遊戯機、証言の面ではコリントゲームというわけで、その整合性をつける作業をした人がいなかったのである。「謎学の旅」の功績は、今まで知られていなかった欧州型遊戯機が輸入された痕跡を、なんとか探り出したという点にある。大正末期に宝塚新温泉が輸入、設置したのを当時の露店商や娯楽施設が真似たというのがその骨子なのだが、そうなると確かにコリント派も口を揃える「大阪が元祖」という地理的な整合性もとれる。この番組がコリント元祖説に打撃を与えたのは事実で、しかしそれではなぜ草創期の人たちは伊藤重男にコリント元祖説、アメリカからの輸入説を述べたのか。ウソをついたのか、何かの勘違いか。「そんなバカな！　10人中9人

が！」と思うのは本誌だけだろうか。
◇コリント元祖説の背景には、全国各地の縁日などを回った的屋（てきや）とか香具師（やし）といわれる存在の証言が重い。大正期にこうした露店営業で全国各地を歩いていた上野鈴吉は、大正12年、四日市で鬼泣かせなどと一緒にパチンコを置いたのが私のパチンコの始まりというが、その前はコリントゲームなどの横モノで営業していた。こうした横モノは大正9年に輸入されたコリントゲームが元祖であり、そのためにパチンコの元はコリントだといわれるようになったのかも知れないが、本誌に残る証言には「パチンコ以前」が少ないので、この辺りは不確かだ。
◇それでもカギはパチンコ前の露店営業にあると思って調べると、的屋、香具師、三寸などは全て同じと書いてあったり、その源流は5つに分かれていて、そのひとつが芸や見せ物を用いて客寄せし、薬や香を売った香具師で、的屋（「てきや」ではなく「まとや」）は射幸性を伴った営業とある。的屋は「矢師（やし）」ともいうから、この辺り、もはや用語の音読みだけで迷走してしまう上に、的屋・香具師の商いは雑貨や食品等のモノ売りが圧倒的に多く、ゲーム、遊戯の類はあまり資料が残されていない。それでも、「パチンコ機」そのものではなく、今の「パチンコ営業」の原型は、コリントゲームを使った露店営業にあるというのは間違いないようだ。草創期の業界人の多くが「パチンコのルーツはコリントゲーム」と言ったのも、こうした営業スタイルの原型のことを指したのだと考えると、ちょっと整合性はついてくる。

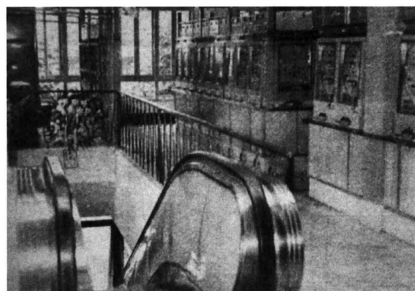
パチンコ営業の原型は楊弓 まさに「射幸性」営業の原型

◇それではコリント以前はどうなのか。射幸性を伴った「景品交換式遊技」はコリントゲームが輸入される以前からあり、例えば明治期からしばらくは「玉ころがし」という、傾斜を付けた板に穴（孔）を穿ち、ボールをころがして入賞を競う遊戯があった。明治12年には都下で「擲玉戯」（てきぎょくぎ）という露店営業があったというが、字面で捉えるとこれは玉を投擲する遊戯で、フランス発祥の球技である「ペタンク」のようなものなのか、これもまた、欧州などでも見かける地面に掘った穴にビー玉を投げ入れる遊びのようなものだったのかは、資料を漁っても分からない。「玉ころがし」を難しく表現しているだけなのかも知れない。が、どちらも丸い玉を使った露店営業だっただろうことがポイントで、「露店による横モノ営業」は明治期にまで遡るということだ。また、こうしたゲームの源流は古代エジプトまで遡ることができるようだが、さすがにそこまでいくとパチンコのルーツとは関係ない。洋の東西問わず。人間は同じような遊びを考えるものである。
◇ここまできたついでに書き記しておくと、露店商による横モノ営業のさらに前における射幸性を伴った営業には何があるかといえば、これはもう、的屋、矢師というように、楊弓がその代表である。射的場はパチンコと同じ風営法の7号営業種だが、景品交換式遊技場、つまり「遊技の結果に応じ客に賞品を提供させる営業」という7号営業の趣旨は元来がこの弓矢を使った射的場からきたもので、「射幸性」という言葉は、「射」に限らず、実は「幸（倖）」もそれこそ弓矢絡みの漢字で成り立っている。
◇いずれにしても、露店の営業形態がパチンコの元になっている以上、機械（マシン）としてのルーツと、遊びとしてのルーツは違う可能性がある。欧州型であろうとコリントであろうと、日本においては大道商人と融合して初期のパチンコが形成された。そう考えると、まだまだ調べるべきことは多そうだ。と、口でいうのは簡単で、実際にはこうしたことをお金と手間暇かけて調べる人は、そうそういないだろうなと思っていた。ところが、そういう「物好き」がいたのである。
◇平成20年8月、現存しないとされていた昭和初期のパチンコ機と、その原型となる日本製のウォールマシンが発掘された。これを見つけた横須賀在住の版画家・杉山一夫氏は、ただレトロな実機の蒐集をするだけではなく、古い地図や電話帳を頼りに現地を訪ねたり、時には海外にも足を運び、さらには膨大な特許資料や当時の新聞などを使ってパチンコのルーツに迫った。その十数年にも渡る調査の結果をまとめた「パチンコ誕生　シネマの世紀の大衆娯楽」は、まさにパチンコのルーツ探しの決定版ともいえるものだったのである（129ページに続く）。

●パチンコのルーツにしか見えない欧州の遊戯機は、コリント説が有力だった昭和40年代からその存在が知られていた。上は西陣が入手した英国の「ボランズ」。コインをそのままハンドルで弾く。下は東京上板橋の「太閤会館」の高屋博先代社長がパリに旅行した際に購入した仏製の「マシン・ア・スウ」。戦前、パリに留学していた複数の日本人がその存在を文章に綴っているが、日本のパチンコと結びつける人はいなかった。こうした遊戯機を総称してウォールマシンという。

●英国の「ペニー・アーケード」では、古いウォールマシンが現役で稼動している。遊戯機に使うコインは実際に流通していた古いペニー硬貨。日本でいえば、一銭パチンコが当時の一銭銅貨を使って今も現役で稼動しているということになる。

●日本娯楽の昭和12年のカタログ「日本娯楽商報」。業界最古の遊戯機カタログと思われていたのだが…。

■しばらく暗い話が続いただけに、昭和32年の遊技通信は努めて明るい話題を提供しているが、これは1月期の都内のホールが、連発禁止後で最高の景気を呈しているというニュースが新年早々に舞い込んだからかも知れない。社会も神武景気に沸き、それに刺激されたかのように、パチンコも復活の兆しを見せはじめる。遊技機の面では西陣の「ジンミット」を皮切りにしたヤクモノブームが到来。多種多様なヤクモノの開発に鎬を削るとともに、メーカーも当時人気のタレントを使って宣伝活動を行なうなど、業界内に華やいだ雰囲気が広まっている。ただ、多数登場してくるヤクモノの構造や射幸性を個別にチェックし、許可を出す警察行政は大変だったようで、この煩雑さが後の「ヤクモノ基準」になり、さらには昭和44年の「うるさいことは言わない。オール15以下で1分間100発以内なら良し」という、画期的な機械基準につながっていく。一方、ホール設備ではこの年、初めてエスカレーターを設置した店が登場。「豪華な大型店」というのが、大都市を中心に生まれ始める。こうして、ちょっとした余裕が生まれると、社会貢献に目を向ける業界関係者も多く出てきて、7月の九州水害にはメーカーや業界団体、個々のホールから多数の見舞金が贈られたほか、同じ7月には千葉県連が県内の養老院にテレビを寄贈。初めて見るテレビ映像に涙を流すというニュースが掲載されている。また、年末になると東京都遊連が養護施設に250万円分の毛布や菓子をプレゼントするという、大規模な社会福祉事業を展開するなどしており、こうした明るい雰囲気につられるかのように、遊技通信社では8月、銀座、奥村、西陣の後援を得て3社のパチンコ機を富士山に奉納、業界発展を祈願している（下写真）。

●8月、京都駅前のイセヤ遊技場が階上も営業フロアに使う改装を行ない、パチンコ店で初めてエスカレーターを設置した。三菱電機製で当時の価格で千数百万円を投入。経営者の浜口一生氏は名古屋を本拠地として早くから各地に大型店をチェーン展開していた。

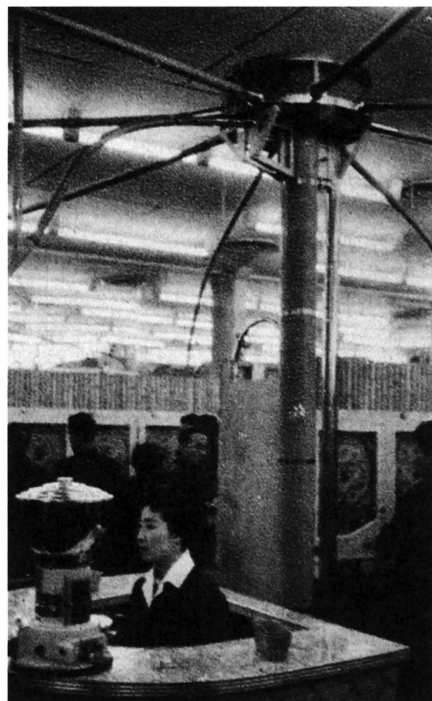
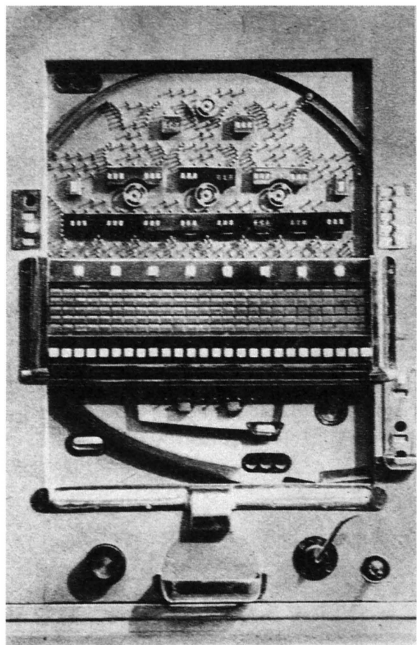
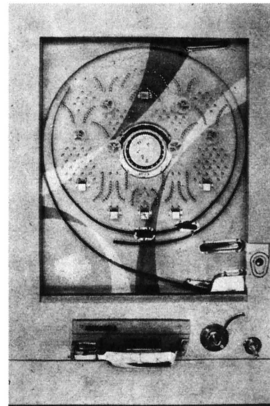
●東京都遊連の大規模な社会福祉事業。12月10日、都庁2階の講堂で贈呈式を開催後、毛布3000枚、菓子4000個をトラック5台に分乗させ、協賛した森永の宣伝カーを先頭に乗用車20台を連ねての街頭パレードへ。都庁、尾張町、新橋、虎ノ門、四谷、新宿、杉並と周り、杉並浴風園、東京家庭学校、東京養育園を訪問し、愛のプレゼントを配った。当時の新聞・テレビもこのニュースを大々的に伝えた。

●これはちょっと珍しい写真。靴ベラを木枠とガラスの間に挟み、ガラス面と釘との間をなくし、玉が絡みやすくなるというゴト手口。「ゴキ」という。偶然撮った写真のようで、本誌では普通に某店の稼動を伝える写真として掲載している。

●西陣「ジンミット」の広告。ヤクモノ時代の幕開けは前年に登場したこの機械から始まった。ヤクモノは盤面に従来にはない「動き」を加え、パチンコの妙味を増した大発明。とりわけこの「ジンミット」は入りそうで入らない玉の動きが楽しかった。

●都内恵比寿の「正華」は設置した4機種中、ヤクモノ機を3機種揃えて連日の高稼動。写真は平和の「コミックゲート」を打つご婦人。左は豊国のヤクモノ第1弾「ダイバーカップ」の宣伝で動員したビクター5人娘。右から神楽坂浮子、藤本二三代、浜村美智子、久保幸江、青木はるみ（というらしい）。

●業界の社会貢献活動はますます活発に。上は京都府連が歳末助け合いで市内10施設にテレビ、洗濯機、毛布、布団、菓子袋など計1500点をプレゼント。京都府連はこの年の伊豆水害でも義援物資をトラックで運んでいる。下は大阪府連が5月11日の母の日に開催した「内職にいそしむお母さんの集い」の模様。中之島公会堂に3000名もの母と子を集め、カーネーションを贈ったり演芸が披露されたりと、盛りだくさんのアトラクションを用意した。

●大都市を中心に大遊技場が相次いで登場。上は名古屋の「フジ」。一式(単発式)を228台、二式を146台揃え、全てを椅子島に。中は502台を設置した大阪キタの銀座センター。下は都内武蔵小山に誕生した「26号線」の景品場。

●タコの足/遊技場の近代化が謳われていた頃、竹屋が業界で初めて全店還元方式の玉補給装置を作った。地下で研磨した玉が柱を上がっていって中央のタンクに貯蔵、八方にひかれたビニールパイプを伝って玉売場などに流れるというものだが、遊技機へはご覧の通り、直接補給された。メーターできちんとアウト・セーフ玉をカウントするオートメ遊技場の誕生である。

●雀球登場/昭和40年代に一世を風靡した雀球は昭和33年に登場。今よりもっと麻雀人気が高かった時代で、旭精工が製造。メカ式なため故障が多く、この時はブームを作るまでに至らなかった。上写真は銀座オリンピックで開催された展示会の模様。

●モナコ式オール20/連発禁止の措置と同時に、多くの都府県がオール20も制限、賞球はオール15までというところが多かったなかで、九州や四国、北海道はオール20の設置が認められた。この時、他メーカーが躊躇するなかで、積極的にオール20を作り続けた奥村遊機が九州、四国を席巻。九州モナコ会(岩下又三会長・写真)を結成しシェアを維持し続けた。この時期、四国での奥村遊機のシェアは実に80%にまで達していたという。

■ヤクモノブームに後押しされるように、ホールの構造が一気にグレードアップしたはいいが、一方には問題も抱えたまま推移した昭和33年。客の不正(ゴト)問題は昭和20年代からの「ヤミ玉」「磁石」が解決されないままで、西陣は右カットのように、磁石を近づけると盤面から針が出てきて不正入賞を阻止するアイデアを遊技機に盛り込んだほか、奥村モナコからは磁石に反応する豆電球を機械に取り付けて、島内の従業員が磁石ゴトが分かるというアイデアを打ち出すなど、メーカー側の試行錯誤が続いた。ヤクモノ開発だけでは差別化が図れなくなってきたことも、不正対策に力点が置かれた背景にある。また、「ヤミ玉」問題では、この年、尚球社が「ナイトボール」を完成。特殊加工で黒色に仕上げたもので、他店玉・持ち込み玉を一発で見分けようというものだが、その実効のほどは今では分からない。こうしたゴト問題は今の業界関係者でも理解できるだろうが、「景品返上問題」、「ベル返上問題」という、この年の暮れに発生したふたつの「返上問題」となるとどうだろう。答えは昭和34年の項で。

●全日本パチンコ展に出品された奥村遊機の磁石防止機能付きパチンコ機を試すのは、当時の警視庁保安課営業係の警部さん。

●西陣の磁石防止装置「マグノン」。当時の広告から。

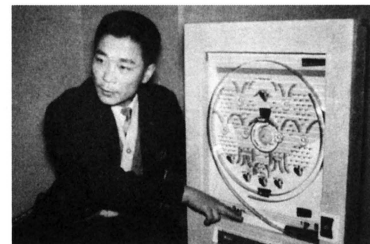
●全遊連の青山金次郎会長（左）が急逝。後を受けた水島年得（右）は従来の組織にはないアグレッシブな行動を起こし、その一連の活動は「水島構想」といわれた。写真はそのひとつ、組織強化のために全国から150名の業界の「重鎮」を揃え、相談役会を組織した時の模様（大阪・国際見本市会館）。岸信介や佐藤栄作ら政界からも多数の激励メッセージが届いた。

●四目並べの横モノ遊技機、ワイエム商会の「YM式ラッキーボール」を都内で初導入した池袋の「山城センター」。横モノを141台もワンフロアに並べるとさすがに壮観。この四目並べは後、デパートの子供向け遊戯場などでもよく見かけた。

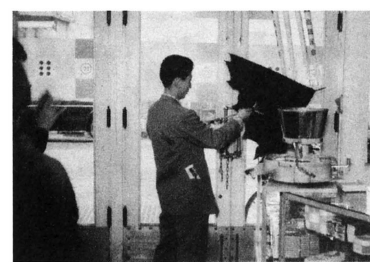
●大阪の「マルタマ」がまたも業界初の試みを。島にイヤホーンを取り付けナイターなどのラジオ放送を聞きながら遊べるようにした。イヤホーンは玉50個で貸し出した。設置初日はなんと、あの巨人─阪神の天覧試合の当日。

■まずは昭和33年欄の解答。まず「ベル返上問題」というのは、大阪府警が自動車の「警笛廃止」の成功に気を良くして、府下のホールに「ベルの音がうるさい」と注意したことに始まる。チンジャラの「チン」を取れというのだ。これを受けた大阪府連はベルを遊技機から外すことを決議、同様の動きが各地に広まった。これが賛否両論があったベル返上問題である。これをひとつの需要と捉えたメーカー側は、早速ベルに代わるものを模索、大盛遊機が景品球が流出する際の玉の重みでクランクが動くオルゴール付き遊技機を発表。たて続けに平和が賞球ケース前面の風車（コミック）が点滅する「ボンネット号」を発表したが、人気ヤクモノの「コミック」が光っただけに軍配はこちらに上がり、後の遊技機電化につながっていった。「景品返上問題」というのは靴下やガム、石けん、剃刀など、店が知らずともバイ人に換金されてしまう景品の取り扱いをやめようというもの。県警が指導したところ、自主的に「返上」した所があったが、どちらにしても、同時に魅力ある景品をそろえる必要があり、各地の組合が景品単価の値上げを行政に要求。愛知県のホールには全国の先陣をきって500円景品が並んだ。ちなみにこの時の東京の景品単価は100円で、500円景品が認可されるのは昭和43年である。また、この年は風俗営業取締法が「風俗営業等取締法」に改正された年でもある。改正の主眼は深夜営業、飲食接待業に対する規制で、これらを風俗営業に組み込んだことで、パチンコは7号営業に指定された。

●玉貸機いろいろ／左からオーエスの自動玉貸機。続いて愛産産業の「ホーマーゴールイン号」、宝商事のコロナ玉売器、東莫会館が扱った「キング玉売器」、谷角商店が扱った「スーパーロケット号」。とりわけ、この頃から登場した自動玉売機は売上アップと省力化に多大な貢献を果たした。

●平和のヤクモノ機「コミック」のヒットで、同社はPR映画「愛の流れ」を制作。脚本は柏光男氏。

●新しいアイデアを矢継ぎ早に繰り出す平和、中島健吉社長。桐生メーカーの本格的な台頭期である。

●都内某店。東京は地価の関係で台を詰め込む傾向が強いが、いくらなんでも島幅が狭い。

●一方、東京の豪華店銀座のモナコ会館は大型冷房機を入れて盛夏に高い稼動を。

●500円景品が置けるようになった愛知県では、健全化との引き換えに売上低下のホールが続出。

●入賞すると人形が飛び出る西陣の話題機「当たりだよおとっつぁん」を打つおとっつぁん。

●西陣が満を持して放った「新型電子頭脳オートメーションパチンコ・レコンジスター・マンモス」の発表会で。「従業員を重労働から開放しろ！」と、遊技機右にいる清水一二社長の号令で開発を進めていた「レコンジスター」、この機能を逐一説明するとなると、どのくらいの紙数を費やすか分からないぐらい複雑な仕組みになっている。ようするに、左写真を見て分かる通り、島の中から従業員を開放し、玉補給などを表からしたというものだが、2個同時入賞への対応や打ち止め作業、他店玉の発見など、当時の裏回りの仕事は多岐に渡り、それを遊技機の持つ機能として代用しようというのだから、開発の苦労は並大抵ではなかったようだ。一尺島を生んだ大発明である。

■大遊連がホール団体でトップを切って協同組合の認可を取得した同じ2月に、一足早くメーカー団体である全工連が解散し、新たに平和の中島健吉氏を初代理事長に、日工「協」組が設立されるなど、昭和35年は業界団体の組織形態の変化が出始めた。日工組の設立は単なる協同組合化ではない。全工連はいってみれば機器供給側の団体であり、純粋な遊技機メーカーによる組織の必要性は、そのしばらく前からの懸案事項であった。しかも、長年その無効性を訴えていた物品税訴訟に負けたことも相まって、苦しい台所事情に追い込まれた遊技機製造メーカーが多かったことも、組織化を促した背景にある。日工組設立によって、物品税問題は無効闘争から軽減闘争に変わり、団体交渉力を身につけた遊技機メーカーはすぐさま「歩調を揃えた機械代金の値上げ」に成功する。圧倒的に買い手（ホール）が強かった時代、メーカーの生き残りのために致し方ない措置だったのだが、日工組設立時は60社あったことを考えると、業界の構造の中でメーカーのみが庇護されていたわけではないことは言うまでもなく、やはり自由競争が基本にあった。無論のこと、機械代値上げにはホールの反発があったが、日工組と全商連では遊技機1台を製造・販売するにあたっての原価計算書を公開。1台6500円の遊技機は、原材料費一式が3371円、工賃が430円、特許料300円云々と事細かに書かれており、メーカー利益はたった300円（販売店利益も同額）であることを告知した。こうもメーカーが苦しかった時代があったことは、最近のホール関係者には信じられないことなのかも知れないが、ライバル関係の者同士が手を組み、共通の利益のために団結したのだから、まさしく協同組合の精神である。もちろん、ホール団体の活動も当時は活発で、とりわけ全遊連・水島年得会長の動きは、地元大阪においても協同組合化に続いてアグレッシブな活動を展開していく。

●新型遊技機展での成田式。成田式チューリップは35年の発明というが、初秋に行われた展示会の時はまだ出ていない。

●廃棄台処理がうるさくなかった時代。上野で。

●宮城県仙台市の老舗「まるたま」が東一番町を開店させた。ワイヤレスマイクの指令で従業員が動いた最初の店である。

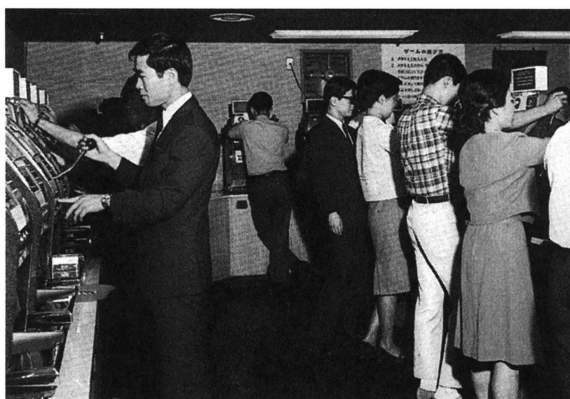
●「ベル返上」に無縁だった東京。店名もストレートだが、「クラブ」は合わない（と思う）。

●11月7日、群馬県遊連が組合創立10周年を記念し、県下のホールが一斉休業しての従業員慰労大会を開催。

●都内新宿のビンゴホール。国警と自治警察と分かれていた時代はこうした団体遊技の行政上の取り扱いの格差が著しく、なんとか生き残ろうとする業者は「大阪マリ入遊技業組合連合会」（昭和26年）という組織を作るなどして対応したが、結局、国警で統一された行政側の方針は技術介入性のなさを指摘してこれを排除。その後の新規営業は許可されず、軒数は減る一方になったが30年代はまだ残っていた。中央の女性従業員はゲームガールといい、独特な節を付けた言い回しでゲームを進行させた。

●この年に誕生した日工組の仕事の最初はこの物品税協証の貼付による完全納税。悪税でも法律は法律、きちんと適正納税に務める一方、その軽減活動も本格化させた。7月21日には全遊連と契約書を交わし、遊技機販売の際に税を貰うことの了承を取り付けた。左は前年からスタートした日特連の証紙制度。メーカー団体の基礎が出来た頃である。

スロット異聞

●昭和33年、銀座6丁目並木通りに開店したラッキーゲームの店。事実上の和製スロットの第1号だが、日本におけるスロット関係は歴史が一度断絶しているので、昭和39年が初登場という認識を持つ人が多い。銀座という土地柄かそれともスロットのせいか、パチンコとは感じが違う。玉（コイン）売娘もちょっと雰囲気が違う。

●昭和39年に登場した「オリンピアゲーム」の営業風景。営業割は異常なまでに低く、本格的な支持は得られなかった。客もメダルがなくなるまで遊ぶゲーム感覚で、パチンコのように景品交換する人は少なかったという。

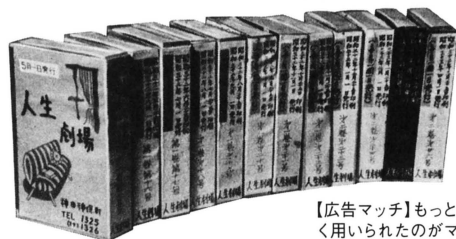
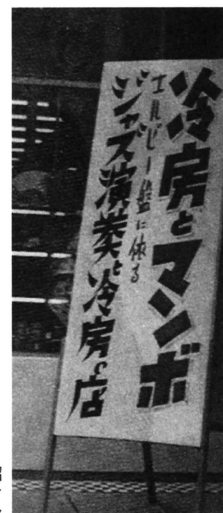
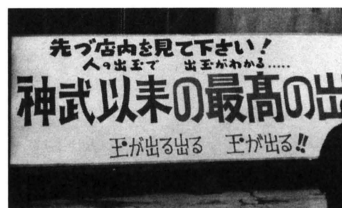
●昭和39年に発表されたオリンピアゲームマシンの第1号。タイトーの前身とセガの前身が共同出資で立ち上げたオリンピアという会社が作った。シリーズは全3作。2番機からボーナスゲームを搭載。

●今に続く日本のスロットマシン営業の基盤を作った昭和52年の「ジェミニ」（マックスアライド製）。マックスの角野氏は当時のスロット最大メーカーのバリー社の輸入代理店を営んでいた。

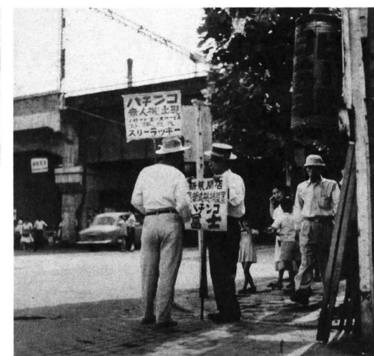
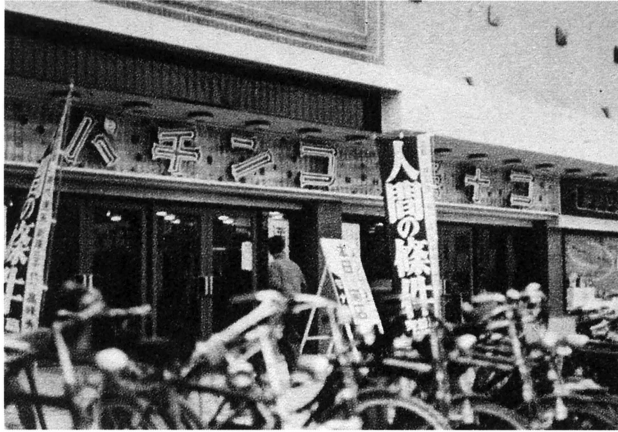
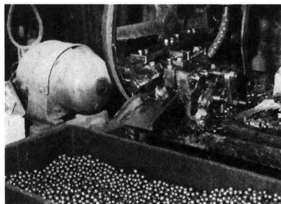
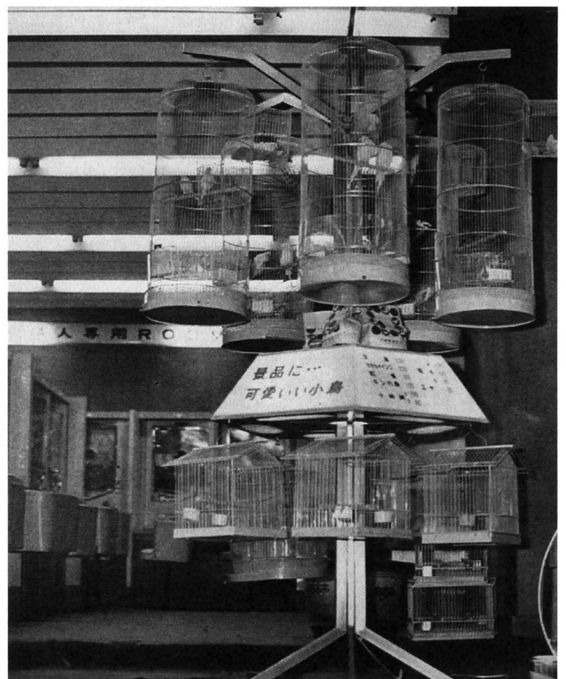
■和製スロットマシンの開発は欧米のスロットにはない「技術介入性」をどう取り組むかが焦点になった。その第1弾の試みが世に出たのは、実に古い話で昭和33年の夏、40年以上前に遡る。写真にある通り「ラッキーゲーム」という、あまりにも直接的な名称で都内銀座に登場した。この和製スロットの第1号を製作したのは、自動車パーツ工場だったという大東製作所。開発と警視庁の許可取りに2年6カ月も要したというから、連発禁止で業界が大打撃を受けた頃に着想を得たことになる。警視庁の指導は、とにかく欧米型スロットマシンは「遊技場」には設置できない、なぜなら技術介入性がないからだ…というものだが、これを受けた同社ではその技術介入性のためにリールを止めるストップボタンを取り付けた。同機の前身に「フレッドマシン」というのがあり、これは第1・第2リールはストップボタンで停止するが、第3リールを偶然性に頼ったために門前払い。しかし、第3リールにもストップボタンを取り付けると目押しで出されてしまうので…と、この複雑化の試行錯誤を重ねたという。図柄は和製スロットならではの十二支を採用。結局、第1リールは勝手に止まるが、必ず何かしらの干支の図柄が出て、第2・第3リールにストップボタンを取り付けて再度持ち込んだ。和製スロットを正式に許可取りに来る会社なんて初めてのことなので、警視庁もかなり苦慮したようで、ゲーム1回が15秒以上かかること、ゲーム料金は1回20円以下であることなどの条件を付けてこれを許可。早速、銀座に導入され、続いて渋谷のアメリカ人経営の店に導入された。最初は物珍しさも手伝って高い稼動をみせたが、貸メダル単価が高く、それに相反して出率が低かったこともあってすぐに稼動はダウン。機械本体の価格が1台10万円以上で、当時のパチンコ機の20倍近かったこともあって導入は遅々として進まず、和製スロットの歴史はここで一度断絶する。そのため、昭和39年に登場したオリンピアマシンが和製スロットの第1号として扱われる誤解が生じてしまった。ともあれ、この「ラッキーゲーム」が本誌が確認した和製スロットマシンの第1号。が、実を言うと戦前にも持ち込まれたスロットマシンがあり、それを模倣して製作していた日本のメーカーがあったという話も残っている。ただし、これはどうにも確認できていないので「正史」にはできない。また、戦後（昭和27年）では、進駐軍用とはまた別に「もぐり営業」で設置していたところが都内にいくつかあったが（やはり場所は銀座なのだが）、これは当然のこと本場モノのマシンで、警視庁による手厳しい摘発を受けている。

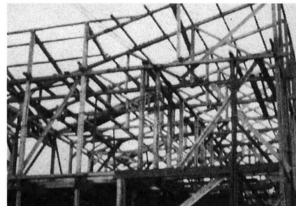
●パチンコ島に入るサイズにした上、今に続くパチスロという言葉を最初に使ったのは尚球社の「パチスロ・パルサー」。パルサーは、関係者が機種名を考えている時にふと窓の外を見たら、同名の自動車が走っていたので、そのまま名付けたのだという。

【マスコット人形】昭和33年、都内新橋のホール前に置かれたマスコット。叩けば大学帽をかぶった頭を軽く振るタイプで、愛敬のある看板として人気に。

【ポスター】街にいろんな手書きポスターが貼られていた時代（昭和32年）、都内池袋のパールは、可愛い女の子のシリーズのポスターを貼り続けた。少女が「面白いほどよく出るジャランの連続」というなんて、あまりにもミスマッチで、逆に不思議な味わいを醸し出している（ように思う）。

【広告マッチ】もっとも手軽で実用を兼ねたサービスとして広く用いられたのがマッチ。東京・神田の人生劇場は月変わりのデザインにして、背は豆本を模して巻号を入れた。裏面はカレンダー。12カ月分貯めるともれなく粗品をプレゼント。

【看板】上は大阪のマルタマ。神武景気に沸く昭和33年。下は広島のマツヲ。広島地区を担当する正村商会の代理店でもあったので、正真正銘の正村式であることをロゴデザイン（オール10の賞球ケース）を使ったネオンでアピール。右はホールでの冷房装置の普及が進んだ昭和30年、「ウチは冷房だけじゃないよ」とジャズの店内放送をアピールする店の立て看板（東京）。

【チンドン屋】いわずと知れたチンドン屋は昭和40年代まではパチンコ店のアウトソーシング型宣伝部隊の代名詞。必携の楽器は鉦（かね）、締太鼓、大胴（おおどう）で、これらの音色がそのままチンドン屋の語源になった…のかというと、実はそうではなく、鉦と太鼓を組み合わせた純国産のこの不思議な楽器の名称そのものが「チンドン」であり、それを使うからチンドン屋なのだという。昭和30年代はサーカス失業楽士の多くがチンドン屋を始め、それをパチンコ業界が支えた。写真は昭和29年、都内。

【アドマン】どちらも昭和31年の上野で撮影。アドマンには奇抜な格好をするタイプ（上）と、オーソドックスな紳士然としたタイプがいた。右写真は御徒町駅前。「上野村」の人なら分かるだろうが、この駅は45年前からあまり変わっていない。

●斜陽産業となった映画館が次々にパチンコ店に転身。上は豊橋の松竹会館の一部をホールにした「モナコ遊技場」。この時は映画館も残した（「人間の條件」上映中）が、松竹はこれを試金石にし、次々に各地の映画館をパチンコ店に変えていった。右上は藤沢市の「パチンコトーエイ」。左は広島の銀座東宝が「広島会館」に生まれ変わっての宣伝カー。この店は当時では大阪ミナミの「ナンバー番」の840台に次ぐ750台を設置した。

●連発禁止令で玉の需要が激減、大阪に集中していた多数の玉メーカーが廃業に追い込まれたが、新星商事は質の高い玉製造で生き残った。14工程に及ぶ作業風景を見ると実に大変な作業である。

●生き物を景品として扱った店の第1号は名古屋のアカダマ。当時、500円景品が許された唯一のエリアだっただけに景品の多様化は営業上の必須条件。それなりの人気があったというが、「景品」にエサを与えないといけないとか「夜になるとネズミに襲われる」など、管理は結構大変だったらしい。

●富山駅前の「大当り遊技場」。総台数25台で、なんとも味わいのある小さな店だが、富山は元来がこうした小さい店が多かったエリアである。この地に2000台を超す大型店が出来るなど、当時の誰もが予想しなかったことだろう。

●全遊連と大阪府遊協の代表を務める水島会長の「水島構想」着々。上は市ヶ谷の全遊連会館完成直前の模様。下はいわゆる大阪方式の拠点、大阪福祉事業協会。

●当時のラスベガスのカジノの模様。なんでラスベガスが？と思うかも知れないが、この頃は業界関係者の「外遊」が大流行。パチンコ産業の参考になればと、なかでもラスベガスへの視察が多かった。写真は奥村遊機の奥村社長の視察旅行後、本紙の座談会でラスベガスの現状を語ってもらった時のスナップ。

■ヤクモノ機の台頭などで多少なりとも息を吹き返し、連発禁止の痛手から脱却したかに見えた昭和36年。連発禁止令とともに、ほとんどのエリアで禁止されていた「オール20」は本州では神奈川県でのみ、その設置が許されていたが、この年、ついに入れ替え禁止の措置が打ち出された。この措置は四国へと飛び火し、翌37年末を持ってこれらの四国のオール20は姿を消す。最後に残ったオール20の聖地、九州は38年1月末で、北海道は3月末でその使用が禁じられる。また、36年はいわゆる大阪方式が始動した年でもある。名古屋に次いで500円景品が認められたが、一方で換金を完全停止することには営業上の不安が大きい。そこで、この景品買いを福祉団体がとり行なって、身障者や未亡人への仕事の提供、さらには暴力団排除と益金の福祉事業活用という「一石三鳥」を考えたのが水島年得である。この「水島構想」に対し当時の府警防犯部長は、一般紙に対して「年間5億円といわれる景品買いの利益が暴力団の資金になるよりは…」と許可せざるを得なかった苦しい胸の内を明かしている。タバコや塩などの専売品を取り扱い品目から外し、福祉協会は古物の鑑札を得て客から景品を買い上げる、しかもそれは社会に少しでも貢献する仕組みにするという、その後の換金スタイルのモデルを築いた点では、全国のホール関係者にとって朗報だった。

●慢性的な人手不足に悩まされた当時、省力化機器の代表的存在である還元機が本格的に普及しはじめた。写真は都内大井町の「楽天地」が平和の還元機「ミラクルセット」を全台に設置した際の一枚。裏回りは10台から15台に1人必要だといわれていたが、還元機の設置で1島1人に。その残った1人も重労働から開放されて、のんびり雑誌を読んでいる（ように見える）。

●前年の豊橋での成功に気を良くしたのか、松竹は続いて都内浅草の名画座ローヤル劇場をパチンコ店にした。奥村モナコ機350台を設置、階上には当時流行した「ガンコーナー」というゲームセンターを置いたが、映画館からの転業には、当時「アメリカンゲーム」と言われたゲームセンターにするところも多かった。86歳の大谷竹次郎会長も様子をチェック（右写真）。

●昭和27年の欄で「デパートに見えないパチンコデパート」を作った柴田興業が新潟県長岡市に新規店。こちらはまさしく「王様会館」と呼ぶにふさわしい偉容だ。設置台数は500台。同店の開店前は長岡市全体で1120台というから、周辺のホールには大打撃だった。これも映画館からの転身組である。

●地価の高い東京。四谷の「リボン」は間口16尺、奥行74尺という従来であれば遊技場にはできなかった土地に開店した。店舗中央の折れ曲がったところは12尺というから、なんと3.6メートルしかない。ここに玉売場とクロークと豪華な景品場、そして118台の遊技機を設置した。これをデザイン面で上手く処理したのが大木康三氏（左）だが、西陣の完全無人機・レコンジスターがなければ生まれなかった店である。右は同店の王社長。

■日工組は物品税軽減運動を強力に推し進め、市ヶ谷に遊技会館を作った全遊連は水島会長を四選、組織力充実に向けて諸活動を展開した昭和37年。比較的無風で落ちついた年だったようだが、各地で細かい問題は発生している。東京を例にして挙げると、まずは「景品の自粛9品目の解除」。換金されがちな景品として取り扱いの自粛が促されていた調味料、ガム、靴下、文房具などが解除され、ただし法令で禁止する5品目（現金・有価証券・麻薬、危険物、薬事法指定の医薬品、刃物類、酒類）について警視庁が注意。これを温情溢れる措置と捉えた都遊連では「換金される可能性があるガムや化学調味料などはバラにして提供する自粛案」を採択している。また、10月には「公衆に著しく迷惑をかける暴力的不良行為等の防止に関する条例」が東京都で公布。通称「グレン隊防止条例」といい、同種の条例はその後、各地で制定されたが、その条文にはホール周辺での景品買いを禁じる項目があった。業界側でもこれに呼応するかたちで景品買いの追放が再度始まっている。が、それに代わる換金システムの構築は全国バラバラの状態が続いた。風俗営業に関しては一律行政ではない時代だけに、致し方ないのかも知れないが、地域差を勘案しながらの全遊連の運営は大変だったようだ。また、東京では11月に防犯部長名で「パチンコ機の設置台数の最高を500台とする」旨の通達が各署に出されている。これはまだ有効なのかどうか、平成に入ってからの都遊協理事会で話し合われた。

●都内尾久の「毎日ホール」が導入した西ドイツ製の電子計算機。「玉の出入り率が即時に集計・計算される秘密兵器」と本紙で紹介されているが、詳しい仕組みは分からない。申しわけないが。

●神奈川県下での「オール20」の期限切れが間際に迫った8月、丸三商事が銀座号、マルト号、三高号、モナコ号を揃えて横浜で展示会。

●松竹と芸映プロが共同で制作した「ちんじゃらじゃら物語」。伴淳三郎主演、共演はフランキー堺、岩下志麻、藤山寛美、三木のり平、佐野周二とかなりの豪華版。

通信 全国版 第477号 (4)

中部地区特集

三重県

全国で始めての試み……(次号グラビア参照)

「賞品券」制度を採用する

四月一日より実施のために
三月二十八日業者大会を開く

3月28日・津文化会館

三重県で「賞品券制度が採用されると言う具体案をこの一月末に聞いたが、一応県連の方針もあるので記事にしなかったが、いよいよ県警本部もこれが諒解となって、去る三月二十八日、津・文化会館でこの問題の踏み出しへの業者大会を開いた。当日は田中知事は選挙中であった為、高谷副知事、荒井津検次席、柏原県警本部長の来賓が出席して全業者が参集して決議、宣言文等を決定した。
当日NHK・TVを始め各日刊紙も取材に来た。

高谷副知事角谷津市長(代)
白県 県警本部 長

●景品買いの摘発は各地が「迷惑防止条例」の適用で行ない始めた。これを受けて業界は、各地で暴力追放と換金システムの整備に乗り出すが、周知の通り、行政の対応と業界側の行動力には温度差が生じた。

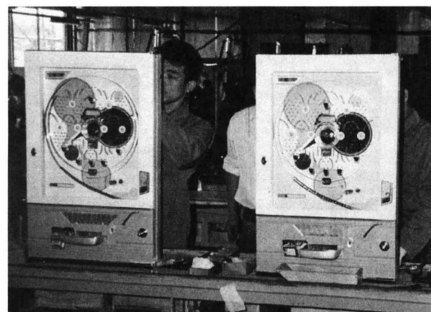
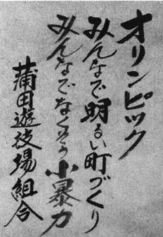
●人混み2点。上は都内立川市の人気店「ナゴヤ」がプロレスラーを招いて餅つき大会。ついた餅は金一封を添えて市内の恵まれない子供たちに配られた。下は鹿児島の大型店「リンデン・レジャー」新規オープンの模様。写真を見て想像がつくように負傷者が出た。

●補給装置のパイオニア企業の写真2点。左は竹屋のタコの足がますますグレードアップ。作りもしっかりしてきた。上は西陣「宇宙パイプ」を導入した北海道の「グランド若草」。導入店の声を聞きながら試行錯誤を重ねた「宇宙パイプ」は、この時から玉送り機にメーターがついて計数管理の完成度を高めた。

●日本で3番目にエスカレーターを設置した新潟の「ニューヒノマル」。2番目は福井のホールだったらしいが写真は残っていない。

■東京都の「ぐれん隊防止条例」が施行されて1年、その間における検挙・取締状況が発表されて驚いた。条例適用で検挙されたのは2690人。うち、景品買いがなんと433人。全国に先駆けてこの種の条例を施行した東京。その後に続いた他県の条例は罰則が厳しく、「同じ景品買いをするならやっぱり罪が軽くて店が多い東京」という傾向があったのだという。前年欄でも触れた通り、一連の「ぐれん隊防止条例」や「迷惑防止条例」を契機に、換金機構の整備や換金に代わる景品システムの構築に乗りだした県は多く、なかでもこの年に始動した、三重県の賞品券制度は注目を集めた。また、この頃一般メディアで、パチンコがよく好意的に取り上げられた頃でもある。連発禁止後のパチンコ業界は、水面下でヤクモノや省力化機器の開発を着々と進め、社会的には「たかがパチンコ」と思われているなかで、結局は我が国のレジャーの王様の地位をずっと保ち続けていることに、一般メディアもやっと注目したといったところだろう。学者や作家によるパチンコ研究も進み、例えば開高健は週刊朝日誌上で「レジャーの王様」と題するパチンコ論を展開。大手メーカーやホールの取材をきちんとしたうえで、「ものすごい狂騒のただなかに自分を放り込み、一発、二発、三発、重く湿って手のつけようがなくこんぐらがったこの世のわずらわしさから自分を穴に向かって解放し、砕き、無化し、その破片を叩きこむのである」と、開高らしい表現で締めくくっている。パチンコを「禅の極意か」と表現したのも、おそらくこの開高の文章が初めてである。

●NHKが3000億円産業になったパチンコをあらゆる角度から取り上げて「パチンコ文化論・孤独の遊技」を放映。上は丸新工業(ニューギン)の工場を撮影した際の記念写真。新井社長と日工組の武内国栄専務理事(当時)の顔が見える。その下は名古屋「アカダマ」の朝礼風景。右は翌39年にNHKが放送した「自動化」と題する番組の撮影風景。家電製品やピンを自動で戻すボーリングなどと並んでパチンコの還元機を取り上げた。撮影場所は都内町屋の「梅田園」。

●オリンピックで来日する外国人向けのポスターを貼る有楽町の「モンタナ」。製作したのは西陣。「パチンコ玉は真珠じゃありません」というセンスは秀逸で、配布されたホールは大喜びでこれを貼った。写真は秋山庄太郎。右は蒲田組合の手書きポスター。オリンピック開催決定後は東京中で街の浄化が叫ばれ、パチンコの営業は禁止されるのではないかという噂も出たという。さらにその右は店内に万国旗を並べた銀座の「モナコ会館」。さすがに当時、都内随一のグレードの高さを誇った大型店らしい装飾である。

●パチンコで初めてプラスチック枠を採用し、裏機構をひとつのボックスに収めた平和の革命機「ユニパック」の生産工場の模様。平和は効率のいい遊技機の生産スタイルを確立する牽引役を務め、他のメーカーのみならずホールにも、その合理化スタイルを普及させた。

●都内・初台の「初台会館」。広さ11坪、総台数67台という小さな店だが、やはりここも西陣の無人機がなければ開店できなかった店である。極限まで狭めた島の細さに注目。

●その土地ならではの店名を持つホールをいくつか。左から北海道の「アラスカ」、佐賀の「はがくれ」、会津の「白虎ホール」、左下が長崎の「オランダ」。ほか、銚子の「大漁」というホールもあったが、看板に店名が書かれていないので割愛した。

●四国道後の「丸の内クラブ」が大改装。近くの松山市には大きい遊技場もあり、「温泉街でのパチンコは丹前客を相手にした儲からない商売」といわれていた頃、敢然と豪華店を誕生させたのが、写真の佐々木重太郎社長。なかでも自慢は東芝に製作依頼したこの天井照明。佐々木社長自らの考案によるもので、僅か220台のホールの照明に当時の金で600万円を投入、明るさにムラのない遊技空間を作り上げた。こうした妥協のない店づくりとハイレベルな接客スタイルは、その後、多くのホール経営者に影響を与えた。

■東京オリンピックが開催され、東海道新幹線が開通し、名古屋のパチンコ店「い波橋」を経営する橋元幸吉氏が馬主のシンザンが三冠馬になった昭和39年。この年、風営法の一部改正があり、パチンコの許可更新が1カ月から3カ月に変更された。この許可更新期間の延長は、ホールサイドの長年の課題だったが、こうした「長年の課題」のひとつに景品単価の値上げがある。ちなみに、この年の8月末時点での各地の景品単価は500円以下が愛知、大阪、滋賀の3府県。300円以下が三重、岐阜、長崎、兵庫。260円以下と半端な広島があって、200円以下景品は北海道、東京など16都道府県。東北全県を含めた22県は100円以下と、大きな格差がある。とはいえ、東京がこの年の7月に200円景品を獲得したことによって、この警視庁の緩和措置は全国に波及。景品単価が1万円になった時もそうだったが、「高額景品時代」に入ると景品カウンターの装飾は様変わりをみせてきて、西陣の無人機による「一尺島運動」も相まって、遊技場のスタイルは現在のそれに近くなってきている。これといって大きい話題はなく、ちょっとづついいことが積み重なった39年だが、ホールの業態はイマイチ伸び悩み。どうも、この頃から普及が進んだテレビの影響ではないかという声も出てきているが、確かに国民がテレビにかじりつく「オリンピック不況」はあっただろう。また、この年は遊技通信社に現社長の伊藤壽志夫が入社。編集部は目白から上野に移転し、東遊商の田口喜太郎理事長から「上野村入村を歓迎」との言葉を頂いた。

遊技通信アンケート 各界名士よりのハガキ回答①

（昭和29年1月2日号より）

①パチンコをおやりになりますか。おやりにならないとすればその御理由を。②パチンコの遊技場に対する御感想を。③どうしたら面白くお遊びになれますか。

◆西条八十（詩人）
①私としては、少しも興味はありません。理由は私はもっと、ぐんと大きい賭事が好きなのです。②大衆の娯楽として結構だとたのしんでよいのは、ブルジョアばかりではありません。③なし

◆大下宇陀児（探偵作家）
①月に一回やる。②時間つぶしによい。③わからない。

◆浅原六朗（作家）
①やったことがある。しかし常習的ではない。時折り感興的にである。②近頃だんだん設備の良いのが出来て来た。スペースをひろく取って出来るだけ愉快な設備をすること、混むので場所がせますぎる。③遊びと言うものは、本来ぜいたくな性質をもっている。都会的、近代的ぜいたくな設備をした娯楽場で愉快に遊びたい。

◆清水千代太（評論家）
①キャッシュ引換の、スロットマシンは誘惑を感じるが、煙草ぎらいなので、パチンコには、全然誘惑を感じないのです。②騒音を戸外から聞いて、急ぎ足に通ります。③なし

◆下村海南（法学博士）
①まだ、やった事はありません。やらなければならぬ訳もなく、やってやみつくと困るから。②日本の人間が、多すぎるのか、用がなさすぎるのか、あまりにも、遊技場が多すぎると思います。③やったことはありませんから、返事のいたし様も、ありません。

◆安部恕（裁判長官）
①やりませぬ。理由は特に興味がないのと、子供の教育上よくないと思いますので、子供がパチンコにこり学課をおろそかにし、浪費して、困りました。パチンコの為に原因もあると思います。②なし。③なし

◆宮尾しげを（漫画家）
①旅のつれづれにやります。東京ではやりません。暇がないからです。②空気が悪いので、「①」の答え通り暇がありませんが、もう暇があっても、あの空気ではやる気になりません。③マニヤでないので考えつきません。

◆古川緑波（俳優）
①やらんのですな、性に合わんから。②だから無いですな。③分からんですな。

◆古賀政男（作曲家）
①やります。②もう少し、清潔に奇麗に、ならない、ものでしょうか。③玉さえ出れば面白いです。

◆宇井無愁（作家）
①子供用の室内遊戯であった時代に二、三度やりました。今はやりません。理由は「②」に書きます。②喧騒、不潔、病的で近づく気が致しません。従って子供にもやらせない様にしています。③子供相手に遊ぶのが一番面白い。大人相手なら、これは庶民生活貧困である限り続くでしょうから、国民経済の立直しをやらないようにすれば（即ち現在の政策をいっそう押し推し進めれば）更に面白くなるでしょう。

◆徳川夢声（漫談家）
①名古屋で一度、神戸で一度、東京で数度だけやりましたが、常習的にはやりません。②なし③なし

◆源氏鶏太（作家）
①致します。②不潔なのがいけません。事務員（？）の態度がゴロツキめいている事があります。③「②」の点をあらためて下さい。

◆池田みち子（作家）
①やります。②なし③玉が出れば面白い。

◆柴田早苗（声優）
①やりません、非衛生ですから。②別にございません。③わかりません。

◆村松梢風（作家）
①やります。今年の夏から覚えたので、まだ初歩です。でも、面白い。②庶民的で今のままでいいでせう。③すでに結構面白く遊んでいますよ。

◆海音寺潮五郎（作家）
①時々やります。②パチンコ場における、音楽のやかましさが厭だ。③切角出る様になると、ほんの暫くで、裏から細工して出ないようにする店がある。実にイヤだ、これさえなければ面白く遊べる、大体、儲けようなどという了見はさらにないのだから。

◆三遊亭金馬（落語家）
①やりません。何時でもがっかりするから止めました。②大阪のパチンコには、キボの大きいのに驚きました。プロが多過ぎます。③もっとジャンジャン出して下さい。ハハ・・・

◆由起しげ子（作家）
①昨年は十回程しました。今年は三回程です。パチンコ場の空気がゴミゴミしているのであまり致しません。②パチンコは面白いのですが、釘の打ち方で玉が入らない様にしてあるのを見ますと、折角上手にはじいても結局無駄でせう。そんな時は賞品を貰わなくてもよいから、もっと入る様にして置いてくれればよいと癪にさわります。③御客と業者が、喰うか喰われるかと云った現状で、場内に入ると遊びにしては、真剣過ぎる顔・顔で恐くなります。もっと違ったパチンコは無いでせうか。技術に応じて玉が出て、パチンコ屋さんもつぶれないようなｰ・・。兎に角、今の儘では健全な遊びとは思われません。

遊技通信アンケート 各界名士よりのハガキ回答②

（昭和35年1月1日号より）

①パチンコをおやりになりますか。おやりにならなければその理由を…。②パチンコ遊技場は商店街、土地の発展に役立ちますか。③パチンコ遊技場に対する御意見、ご感想を…。

●横綱・吉葉山。昭和29年。

●内海突破と呉清源（中央は本紙伊藤重男昭和29年。

●春風亭柳橋。昭和29年。

●曾我邇家五郎（松竹新喜劇）。昭和29年。

●天路圭子（平和のコミック1日工場長）昭和32年。

●三ツ矢歌子。昭和34年。平和の広告。

●林家三平。昭和34年。平和の広告

●大空真弓。昭和34年。

●伴淳三郎とフランキー堺。昭和37年。映画「ちんじゃらじゃら物語」の撮影風景。

●オルテガ（プロレスラー）。昭和34年。巡業先の広島県呉市のホールで。

●レスラー軍団、アントニオ猪木、ユセフ・トルコ、オルテガ、吉村道明、大木金太郎。座っているのは立川の「ナゴヤホール」の社本社長。

◆淀川長治（映画評論家）
①やりません。遊んでいるというよりも、もうけようとする客の顔つきが無邪気を欠いております。あの仲間にははいれません。ざんねんです。②発展には大変役立つと思います。③場内の雰囲気をもっと工夫できぬものでしょうか。街路外にまでチンジャラが派手に聞えて、とてもいやらしい。もっときれいな遊び場にはなれぬものでしょうか。

◆船山馨（作家）
①やらない。愚劣だから。②少しも役立たない。愚連隊と遊民のために役立つのみ。③有害無益。

◆ペギー葉山（歌手）
①やりません。ひまがありませんから。②役立つと思います。③パチンコで身代をつぶしたという事はあまり聞きません。競輪などと違って、パチンコの様な娯楽はあってもいゝと思います。

◆柳亭痴楽（落語家）
①四、五年前までは人ぞ知る落語家仲間のマニアのNo1でしたが、最近はやりません。それは長く立っていると足の裏が痛くなって仕舞うからです。二十三貫六百ではネ。②大いに役立ちます。旅行者にとって先ず第一番の楽しみでしょうから。③最近は大変デラックスになって申分がないでしょう。各遊技場の定連が月に一度位、技を競って選手を決め、その土地のNo1を決めるリーグ戦など如何でしょう。

◆三鬼陽之助（経済評論家）

●倍賞千恵子。昭和39年。映画「21才の父」で

●鰐淵晴子。昭和39年。映画「この空のある限り」で。後にちょっと見えるのは新人女優・中村晃子

●ジャイアント馬場と春川ますみ。昭和40年。中央は遊技機販売商社・中央商会の社長。

●大村昆。昭和41年。奥村の展示会でゲストに。

●ミヤコ蝶々。昭和41年。アフタヌーンショーの特設セット。

●大関・豊山。昭和41年。右はマルホン工業の岸社長。

●林家喜久蔵と十勝花子。昭和45年。TBSのラジオ番組の実況中継でパチンココーナーを担当。

●南美川洋子。昭和45年、ニュー東京の開店。

●左からアンルイス、不明、池玲子、不明、真理アンヌ。47年。平塚の「みどり会館」オープニングセレモニーで。

●田中真理。昭和47年、日活直営店の開店で。

①時々やります。罪のない、ひまつぶしの遊びとして面白いからです。②役立つと思いますが、これで役立たせようという考えには賛成出来ません。③一人の人が、何時間も、なかば職業的にやっているのは感心いたしません。

◆正木ひろし（弁護士・評論）
①貴重な時間、もっと面白く、有益な仕事に従事していますので、やりたくない。②一時的の発展は必らずしも好もしきものでない。③亡国の兆と信じています。たゞし、もっと悪い遊びもある。

◆三遊亭円歌（落語家）
①何か店でやっていると人がサインを迫まったりして好きだが、せっかちだし入らないよ。②商店街、土地の発展には有力に役立つと思う。③箱の係りの女の子が愛嬌を持つこと。是が客には引かれる力になる。

◆田中清一（参議院議員・自民党）
①やりません。②役立ちません。③非生産的な事で余り関心ありません。

◆トニー谷（俳優）
①ぜん々やりません。嘘とお思いでしょうが、私生来「カケゴト」「バクチ」類は大ッ嫌いですしたいせつな時間をチンジャラ等に使うのは勿体ないです。②ぜん々役立ちません！顔役、やくざ、不良発展には役立ちますでしょうが…。③ナクスベキです！！断乎！！

◆山崎豊子（作家）
①やりません。あの騒音が生理的に不愉快なので。②役立ちません。③なし。

◆桂三木助（落語家）
①やります。日に一度ヂャラヂャラの音を聞かないと、何かつまらなく感じます。②大いに役立つと思います。③儲けようとは思わないから、楽しく感じ好く遊ばして呉れる店が一番ですネ。

◆リーガル千太（漫才）
①やります。②役立つと思います。③私は景品を取った事の無いパチンコ師でうまい方でない事はたしかです。願わんば百円で三十分間遊ばしてほしいと思います。場内は静かにしてほしい。

◆徳川夢声（話術・俳優・随筆）
①時々やることあり。②役立つと思う。③あすこ（遊技場）では皆パチンコに気をとられ、私がいても誰れも見ないからよろしい。

◆林家三平（落語家）
①好きで好きです。②街がにぎやかになっちゃいますね。③この頃は設備が良いのでいゝですが、もう一寸、玉が入るようにして下さい。僕だけでもいゝです。すいません。

◆別所毅彦（野球選手）
①以前はやりましたが、最近では全くやらない。あきたからやらない。②役立つと思う。③東京より大阪の方がすべてにおいてすぐれて居る。

◆三遊亭円遊（落語家）
①数年前迄は熱烈なファンでしたが、現在は時折やる程度。②大変に土地の発展に役立つと思います。③リクリエーションとしても、非常に結構な遊技と思っております。

◆大山康晴（将棋名人）
①大好きです。②発展には役立たないが、ジャラジャラの音がすれば賑やかな感じはする。③機械の後ろからのぞいたり、用もないのに裏を歩くのはとても嫌な感じがする。（使用人のこと）

◆三遊亭円馬（落語家）
①時折りやる。②店のある場所による。③まあ、あっても良いだろう。

遊技通信アンケート 各界名士よりのハガキ回答③

（昭和38年4月25日号より）

①パチンコはお好きですか？②遊技場のありかたに対する御意見は？③パチンコに対する御意見は？

◆東海林太郎（歌手）
①一度もやった事がありませんし、あの遊技場の騒々しさは好きになれません。②解答なし。③しかし、パチンコ遊技そのものは、仲々面白そうですし、家族か親しいもの同志でやったらさぞ面白かろうと思います。

◆宝井馬琴（講談家）
①相当好きな方です。②大体現状より仕方ないと思う。③人間は勝負をしていなければならぬもの他人に迷惑をかけぬ勝負はこのパチンコだけ。

◆中村メイコ（俳優）
①好きでも嫌いでもありません。②現在のうら町的ムードから、一歩前進してラスヴェガスとまではいかなくとも、世の女性たちがおしゃれをして出入り出来るぐらいになるといいと思います。
③まず、さわがしさ（音の悪いレコード、客のざわめき、玉の音等）がもう少し整理されて、清潔感がプラスされたらいいと思います。

◆柳家小さん（落語家）
①好きでもなし、きらいでもないが、たいした事はない。②どこのパチンコ屋でも狭くて人が通るのがわづらわしい。もっとゆとりがほしい。③あまり夢中になる人は考えものだ、ほどほど。

◆嵐寛寿郎（俳優）
①好きです。よくやります。②健全な遊技であります様に。③別にありません。

◆三原脩（プロ野球監督）
①遊んだことがないから分らない。②遊園地歓楽街（特種地帯）などの施設としては非常にいいが市街地の何処にでも遊技場のある事は一般的に見て好ましくない。③「②」に関連するが大々的な遊技場は特種地帯へ一般市街地のものは言わば副業的小規模なもの、例えば薬屋とか菓子屋の奥に三台ぐらいある様な形のものが、健全でいいと思う。

◆永六輔（作家）
①名古屋に行ったときだけやります。②解答なし。③解答なし。

①パチンコをおやりになります？②パチンコも茲まで上昇してきたのですが、名前を変更してはの意見もありますが③パチンコ、又はパチンコ業界に対する御意見は？

◆佐野洋（推理小説）
①やりません。金属性の音に弱いのです。②変えるなら、百万円位の懸賞で一般募集したらいかが。③レコードをかけることだけはやめて下さい。

◆小林秀雄（文芸評論家）
①やりません。②このままがよいでしょう。ここまで売りこんだのですから。③ありません。

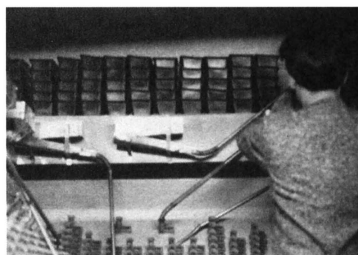
◆鮎川哲也（推理小説家）
①碁、将棋、マージャン、トランプ、競馬等々に一切興味なく、パチンコもやったことがありません。折角のお問い合わせながら、お答えの資格がないようです。②アウトサイダーとしてですがいい名前と思います。そのものズバリで、大衆的で。③解答なし。

◆渡辺紳一郎（評論家）
①やります。②パチンコでよろし。③別になし。

◆林家三平（落語家）
①大好きです。でもよく損をします。②大変よくなりましたが、打止めの廃止、もっとよく球を出すこと。③フンイキをもっと明るく。

◆田村泰次郎（作家）
①やらないことはないが、ふだんはあまりやりません。②その必要はないと思う。が、変えたほうがいいのなら、それでもいいでしょう。③庶民の健康な遊技の一つと思っています昼間やっている人とは、どういうことかわからないが、ほかにやることがなければやったってかまわないと思う。

●蒲郡の「中日ホール」が監視モニターを設置。遊技機350台を全6台のカメラでカバー。切り替えはもちろん、ガチャガチャとチャンネルを回して行なう(上写真)。右は広島の新規大型店「フレンド」のモニター。大型店なのにカメラは2台でモニターも2台。こちらが業界初導入。モニターを見ているのは坂口三治社長。

●一見するとパチンコとは関係ない食堂の風景だが、これは当時、都内で「荏原ゲームセンター」などの大手ホールを経営していた小川産業が世に送り出した1杯30円の「トーキョーラーメン」。ラーメンブームに目を付けた小川太助社長が、これを遊技場の景品にすることを思いつき、巨費を投じて安価なラーメンを開発。それでは飽きたらず、今度は新橋に1杯30円でこれを食べさせるラーメン屋を作り大繁盛した。この小川社長、昭和25年に都内・西小山にオープンさせた店は全国で初めて楽団を店内に入れて生演奏をさせたほか、錦糸町で開店させたホールではヌードを入れたりと(これは警察にこっぴどく叱られた)、とにかく思いっきりの良さには定評があった。

●上は都内荏原の「26号線」が導入した西陣の「月光ライン」。宇宙パイプに代わる島還元方式の補給装置として、その後、爆発的な普及をみせる。右は都内江古田の双葉会館。平和の島還元装置を設置、全国からホール業者が視察に訪れるので、正式な見学会を催した。補給装置は画期的な省力化機器として、全国業者の注目の的。その左は岐阜の太陽ホール。またも柴田興業が映画館から転じたホールだが、宇宙パイプを導入し、二階にある指令室から全283台を1人で処理している模様。

■警察庁が組織暴力追放に本腰を入れ始めたことを受け、各地の警察が景品買いの取り締まりを再度(再々度?)強化しはじめた昭和40年。2月上旬には千葉県警が県内33署から1000名を超す警官を動員して不良パチンコ店の一斉手入れを行ない、59店舗79人を検挙、うち3人を逮捕した。これを受けた千葉県連ではタバコを除く景品全てに「不滅インク」を使ったスタンプを押すことを決議するなどして、再発防止に務めている。また、前年には東京での同様の摘発劇があり、東京国税局は「警視庁の暴力取締りには国税も税法面から協力する。たとえ不法所得でも課税する」として強い姿勢を見せていて、今回の千葉での大量摘発劇でも同様の措置を取っている。パチンコと暴力団…というテーマは当時の人気ドラマ「特捜検事」でも取り上げられ、これは「組織暴力団に屈しないホール経営者を助ける本多検事(藤巻潤)」という、業界には好意的な扱いだったが、当時のマスコミにはパチンコと暴力団をほとんど直線で結びつけている記事もあった。また、この年は都内の名店「東莫会館」の従業員が全繊系の労働組合を結成。労働環境などを巡って経営陣と激しい対立をみせた。さらに、この年の出来事として無視できないのが日工組(内ヶ島正一理事長・写真)の出荷制限を目的とする調整規定。過剰生産とそれに伴うホールによる買いたたきを防ごうというもので、調整期間中はメーカーごとに生産する台数を決めて安定取り引きを図った。メーカーが苦しい時代、名古屋通産局の認可を得て実施したものである。

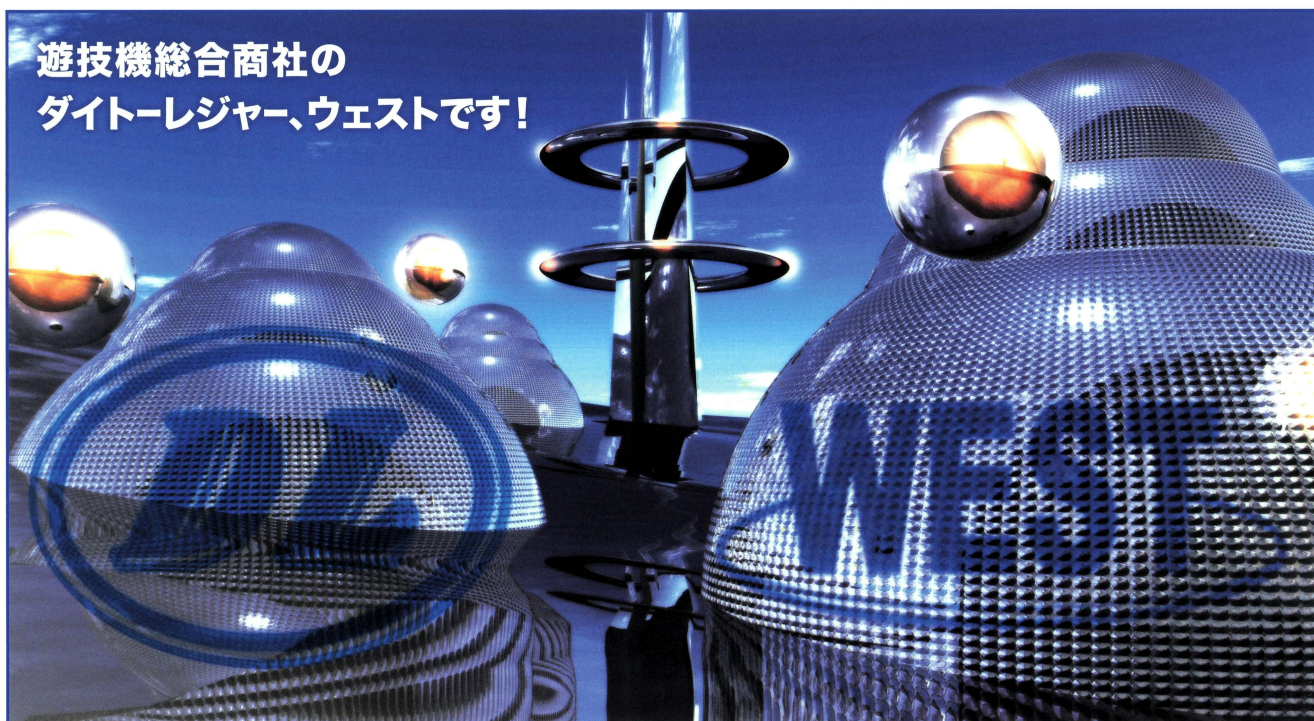
●新型ゲームマシン「アモスコ」。「アオシマ・モウカル・オカネ・シコタマ・カンパニー」の略。要するに青島幸男の考案である。サイコロの目を使ったものとフルーツ図柄を使ったものと2通りあり、写真は後者の「SP-2」型。SPとは「しょっぱな」の略である。10円硬貨を2枚入れてレバーを引くとドラムが回転、ストップボタンで目を揃えるという、ただのゲーム機だが、半年間で400台ほど売れたという。

●創立15周年を記念し開催された「西陣薊会」で。タクトを振りながらツイストを踊る清水社長に会場は大盛り上がり。後の「宇宙楽団」のデビューである。6月。

『遊技通信』創刊60周年、おめでとうございます。
今後益々のご発展を祈念申し上げます。

代表取締役社長　石橋保彦
〒110-0015
東京都台東区東上野2-22-9
TEL:03-3839-0077　FAX:03-5818-8714

代表取締役社長　兼次民喜
〒110-0015
東京都台東区東上野2-11-7
TEL:03-3835-2181 FAX:03-3835-2189

代表取締役社長　町田 徹
〒379-2206
群馬県伊勢崎市香林町2-1818
TEL:0270-62-7731 FAX:0270-62-9554

第3弾

ホールコンピュータ × スマートフォン

スタイリッシュ営業

- 持玉チェック・出玉確認もスピード解決！
- アラームチェックで小さな異常も見逃さない！
- 釘整備はペーパーレス。テスト打ちもスマート確認！
- お客様の目の前で会員発行！

STYLISH [zeusis] for Android™

その先のホール営業へ。

アミューズメント環境のトータル・プロバイダー

Daito 大都販売株式会社 本社 〒110-0015 東京都台東区東上野1-1-14
TEL.03-5688-2111(代) http://www.daito.co.jp

信頼の輪、そしてまちづくりへ

私たちプラザグループは1982年創業以来、経営理念に「信頼」を掲げ、地域密着の企業として
着実に歩んで参りました。
私たちにとって「信頼」とは、お客様との信頼、地域社会との信頼、社員との信頼など
人や地域との固い絆や結びつきのことを指し、この信頼こそが企業発展の原点と位置づけております。

信頼の輪が“まちづくり”のきっかけでした。

「地域を活性化したい!」その熱い思いに突き動かされ“まちづくり”へと踏み出しました。
地域の皆様のご理解をはじめ、多くの関係各位のご賛同ご支援をいただき
千葉県富津市に大型複合商業施設を完成させることが出来ました。

このことを踏まえ、これからも地域活性化の一翼を積極的に担って行き、“まちづくり”を通して
地域の皆様とともに歩んで参ります。

株式会社 大原興商

〒292-0801 千葉県木更津市請西1-24-29
Tel：0438-36-8587㈹ Fax：0438-37-2022
http://www.plaza-group.jp/

アミューズメント施設に楽しさと安心を創造。

新商品!!

IP対応

ネットワークビデオレコーダー
AV-N7216K
全てのチャンネルでハイビジョン対応
ライブ画面も録画も30フレーム/秒!!

固定IPボックスカメラ
AV-P120K
フルハイビジョン対応
高画質カメラ

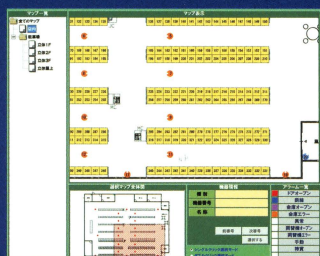
フルハイビジョンコントロールドームカメラ
AV-3600HDMSC
ズーム比120倍付カメラと回転台を
コンパクトなデザインのドームに収納。

同時対応で
動きがよりスムーズに

ハイビジョンレコーダー
HD-SDVR1600
完全フルハイビジョン動画録画だけでなく
分割表示もおまかせ！

HD-SDI対応

- 完全フルハイビジョン動画録画
- カメラ入力を16チャンネルとしたモデル
- 2TB×4（最大約15日）の記憶容量
- 録画方式 H.264
- 1,4,9,11,12,13,14,16分割表示可能
- スポットアウト出力
- センターモニタリングシステム対応

タッチパネルカメラコントロールシステム

操作モニターもハイビジョン映像でより鮮明に!!

- メガピクセルなので、再生画像をズームアップしてもきれいな映像がそのまま。
- 最大30フレーム/秒でよりスムーズな動きが実現。
- マップモニターをタッチするだけで見たい映像を簡単に表示することが可能。

アミューズメントホールの新しいセキュリティーシステムをシステム エイ・ブイがご提案します。

株式会社 システム エイ・ブイ　http://www.systemav.co.jp

■本　　社/TEL086-233-0555　FAX086-233-1610　■東 京 支 店/TEL03-3835-1122　FAX03-3831-7955　■名古屋営業所/TEL052-569-1979　FAX050-3737-3965
■大阪営業所/TEL06-4807-3001　FAX06-4807-3008　■中四国営業所/TEL082-504-0965　FAX082-244-8359　■松山駐在事務所/TEL089-900-0655　FAX089-900-0852
■九 州 支 店/TEL092-474-9111　FAX092-474-9155

ビック搬送から新たな搬送方式へ。

NB紙幣搬送システム

フレキシブルなNB搬送に加え、
更に、あらゆる用途に応じた金庫を
ご用意いたしました。

ECO 省エネ
モーター1つで
紙幣搬送全体をカバー

拡張性
補助搬送装置にて幅広島にも
金庫1台で対応可能

信頼性
信頼性の高いチェーン方式と
独自開発のキャリヤーを採用し
安定した紙幣搬送を実現

メンテナンス性
島内での紙幣詰まりを極限まで減らし
パチンコ台開閉作業を低減
搬送部の消耗品は
ワンタッチ交換

金庫
TSBシリーズ

湾曲島対応
玉、メダル島共に
対応が可能

TSB800
超小型
- 省スペース
- 省電力
- 4金種対応

TSB710
識別混合
- 入金管理
- 小型
- 4金種対応

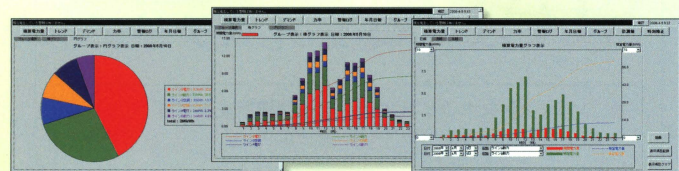
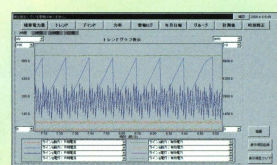
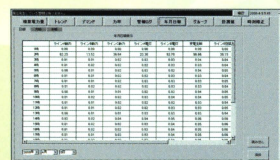
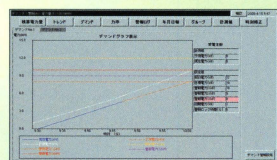
TSB900
分離収納
- 金種別回収
- 入金管理
- 4金種対応

エネルギー監視システム

電力量の徹底管理により、ロス・無駄の削減が可能!

電力の使用量、把握していますか?

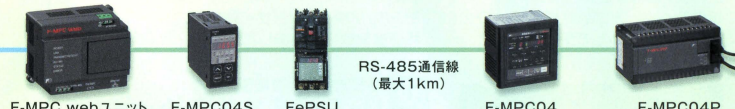
誰でも どこでも

既存のパソコンのwebブラウザを使用し、LANで接続された
パソコンから電力を監視。場所やパソコンの台数を選びません。

電力量割合グラフ
グループ別
比較グラフや、
電力量年月日報を
グラフ化

トレンドグラフ
最短30秒周期で
リアルタイム監視

年月日報表示
電力量の一覧表

デマンド監視
30分電力デマンド

警報監視
警報設定値超えを
メールで通知

システム構成(概念図)　※最大31台のF-MPCシリーズが接続可能

エネルギー監視システム

構内LAN
F-MPC webユニット
F-MPC04S
FePSU
RS-485通信線
(最大1km)
F-MPC04
F-MPC04P

富士電機リテイルシステムズ株式会社

通貨機器本部 営業部
〒104-0032 東京都中央区八丁堀4-5-4 ダヴィンチ桜橋ビル Tel 03-6280-1116

富士電機リテイルシステムズ(株)本部・営業部門は
環境マネジメントシステムISO14001の認証を取得しています。

フジコム北海道	TEL.011-879-5200
フジコム青森	TEL.017-762-3530
フジコム仙台	TEL.022-352-1172
フジコム東京	TEL.03-5688-4703
フジコム関東	TEL.048-240-0861
フジコム中部	TEL.052-834-1200
フジコム長野	TEL.0263-27-7715
フジコム新潟	TEL.025-242-0011
フジコム静岡	TEL.054-238-3811
フジコム金沢	TEL.076-291-5003
フジコム大阪	TEL.06-6717-7073
フジコム広島	TEL.082-847-2010
フジコム四国	TEL.088-678-5166
フジコム九州	TEL.092-412-5367

最新の製品情報はホームページでご覧になれます。 http://www.cofu.co.jp

More Enjoy!
More Challenge!

パチンコをもっと面白く！

パチンコファンをもっと笑顔に！

循環型社会の実現に向けて！

ぼくたちはチャレンジし続けます。

楽亀
らっき

幸亀
こーき

本　社　〒453-0803　名古屋市中村区長戸井町3丁目12番地
☎(052)452-8111(代)　FAX(052)452-0354

TOYOMARU Industry Co.,Ltd.
URL http://www.toyomaru.jp/

東京警視庁がチューリップを認可 三月一日より

注目を浴びつつあるヤクモノの認可について東京警視庁はメーカー側とホール側に対して二月二十七日午前十一時左のような指示をなした。

① チュリップのヤクモノを三

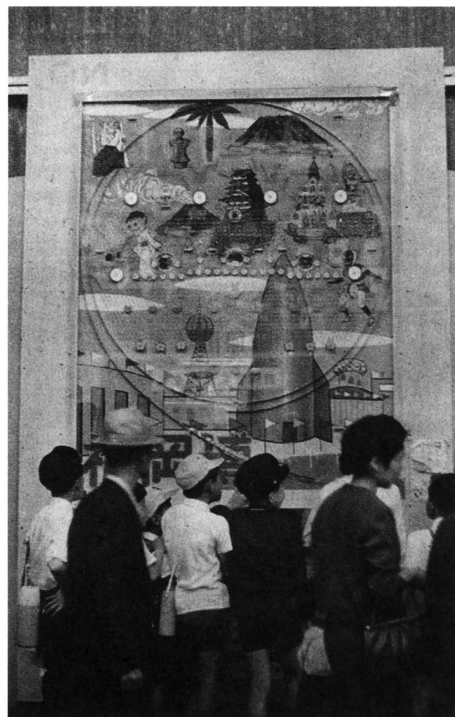
② 玉入口は従来通りの大きさであるが、厚みについては適当でよい。但しリングのようなものを貼付するのはよいが玉を入れやすくすることは不可。

これに依ってホール側としては待望のヤクモノとしてチュリップが認可となったのであり、東京警視庁に続いて関東管区でも認可になる見透しが強くなった。

なお、当日ホール側より都連を

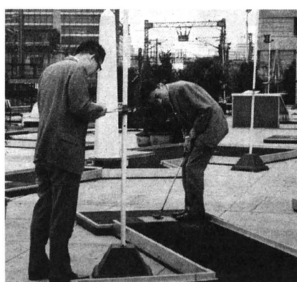
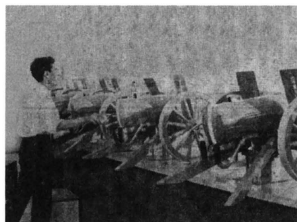
安田の三常任副会長外松岡名誉会長が出席した。

メーカー側よりは日工組戸田理事長、武内専務理事、田口東日本理事長、西陣(梅崎)平和(中島、山田)の人々が出席した。

●3月1日から東京で待望のチューリップが認可された。各地の公安委員会に今以上の裁量権があった時代だけに、ヤクモノが欲しくて陳情を繰り返す県、「これ以上ヤクモノを許可すると、機械をすぐに入れ替えないといけない」として規制を望む県と分かれていたが、この東京でのチューリップの認可は、東日本に集中していた前者にとってはまたとない朗報。いち早く設置したホールの営業成績は急上昇、それを見た他店が後追いで設置したころはすでに標準化されて旨みは少なかったという。が、一部ではチューリップ機の釘調整に難航し、メーカーに「出過ぎる」とクレームを付けたホールも出るなど、ちょっとした混乱もあった。右は開店花輪もチューリップになった都内上野の「ニュー東京」。

●3月19日にオープンした福岡博に日工組、日特連が協賛して大型パチンコ機が出展した。なぜか「スポーツ科学館」に陳列されたが、ご覧の通り、子供たちに大人気。福岡博のひとつの目玉になった。

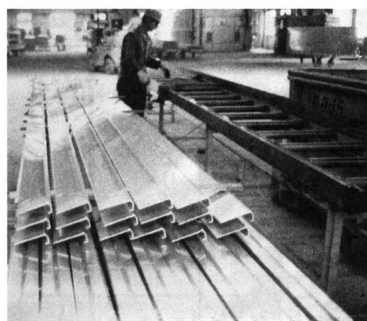
■全遊連が創立15周年を迎えるとともに、協同組合連合会、つまりは全遊協が誕生した昭和41年。3月には東京で待望のチューリップが認可され、その直後の3月7日には、警察庁がヤクモノ基準を設定するなど、明るい話題が多かったが、業績自体は今ひとつの状態が続いた。警察庁が設定したヤクモノ基準は、その当時に出ていたヤクモノを変動セーフ穴と変型セーフ穴とに分類・整理したもので、多くの県警がひとつひとつ認可を与えていた許認可スタイルが若干ながら改良され、警察庁の基準内のヤクモノはほとんど各地で認可されるようになった。そのこと自体は朗報とはいえ、発射装置制限、ヤクモノの個数制限、さらにはチューリップなどのヤクモノ連動の制限などは生きており、秋には早くも遊技機のマンネリ化が顕著になる。それでいながらホールの過当競争は進み、各地で台数制限などが話し合われるようになってくる。業態が悪いのに店(台数)が増えた背景には、還元機や無人機の普及によって省力化が進んだこと、並行して限られたスペース内に設置できる遊技機台数が増えたことなどが挙げられる。この年、山梨県で過当競争防止による台数制限の自主規制が始まっている。また、不況が続く業態の打開策として、玉貸料金値上げの要望が各地で沸き起こった頃でもある。景品単価の値上げと玉貸料金の値上げ、機械基準の緩和と、ホール団体の要望事項は数多かった。

●進む一尺島／従業員不足解消に大きな威力を補給した補給装置。それでも当時の業界の社会的な地位の関係から根本的な不足状態は解消されず、各地で引き抜き問題が発生。組合で申し合わせ事項を作るなどした。

●一気にレジャーの多様化が進み、パチンコはジリジリと成績を下げていった時代。写真は青山バッティングセンター。マシンの精度が低かった時代、あちこちで事故が発生した。財政難の自治体は早速これに娯楽施設利用税を課税しようという動きも。ちなみに、バッティングセンターという業種を考案したのは大阪の遊技場経営者といわれている。一方バッティングセンター花盛りの川崎市では、軟球を空気圧で飛ばし、標的を狙う「バズーガ砲ゲーム」が登場(右上)。これは流行に至らなかった。右は国内初の室内ゴルフ場。有楽町駅前の東京交通会館3階のテラスを利用した。この頃から、ゴルフブームは業界人にも。

●椅子島、立ち島混合の新宿「歌舞伎センター」。遊技機はオール三共で500台。当時は遊技機全てを1メーカーに委ねるホールが多かった。メーカーの営業マンがいう「他社に島を取られた」は、すなわち「店を取られた」の時代である。チューリップ登場前の都内のホールは、他店との差別化手段に乏しい環境にあり、無人機「赤城」と有人機「三共号」はデザイン性に優れた遊技機として人気になった。また、この店では初心者コーナーを儲けたり、右写真のように島飾りは景品ショーケースを兼ねるなど、随所にアイデアを盛り込む工夫もみせた。

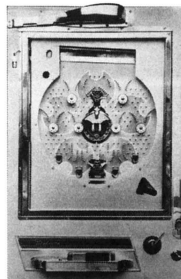
●台数規制問題が台頭してきたなか、金沢に開店した「オーロラ会館」の設置台数はなんと1381台。左写真はその関係者へのお披露目の時の模様だが、この店は店名通り、オーロラのように数カ月で閉鎖した。下写真はその直後、千葉市に1152台でオープンしようとした「ホームラン」。台数規制の関係で直前になって設置台数500台に減台してのオープンに。そのため、ご覧の通り1階の一部が閉鎖島になり、そのうえ2階は完全閉鎖。しかも、次の入れ替え時には100台減らすことになるなど、気の毒な環境に同情の声も。

●女性専用ホール／女性客獲得が叫ばれていた時代、静岡県浜松市に遊技機台数275台を揃えて誕生した「パチンコ・ゴールデン」は初の女性専用店。近所の主婦からBG、ホステスら多数の女性客が来店し、他人の目を気にせずのんびり遊ぶ。景品は各種調味料などの家庭用品を揃えた。右写真は同店の休憩所。ポットには無料のお茶もあって、のんびりした雰囲気が漂っている。子供連れのパチンコにうるさくなかった時代である。

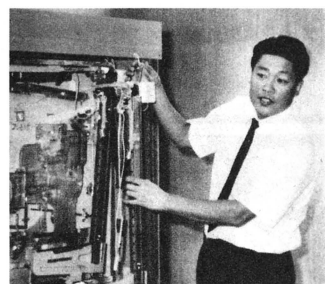
●名古屋駅前に開店した「モンテカルロ」はオリンピアマシン専業店。当時、オリンピアマシンがパチンコとの「仕切りなし」で併設で認められていたのは北海道と秋田県だけだった。

●新星商事から発売された自動玉貸機。省力化機器の代表的なものだが、この設置は警視庁管区内では難しかった。玉貸料金規定とは別に、「1回の遊技料金」が定められていたからである。

●40年に登場したアルミニューム天板は品質劣化がなく美観もいいということで、この頃全国的に大ブームに。写真はそのパイオニア企業、マルヨシ商会の生産工場の模様。

●ホールの組合活動が活発に。上は仙台遊協が全国で初めて従業員研修会を開催した時の模様。ホール従業員は社会的な地位が低いと言われていた時代、自己の職場に誇りを持とうというテーマで開催された。下はこの年の4月に群馬県遊協の宮本政春理事長が前橋署に新学童用横断旗8000本を寄贈したときの模様。

■この年、経済企画庁から発表された「独身勤労者消費動向調査結果」によると、独身勤労者のレジャーで最も多かったのがパチンコの36%で、さすがに「大衆娯楽の雄」と言われた時代である。なかでも男性に限っていえば54%もの高い回答率を示しているが、一方の独身女性は7.3%。パチンコは圧倒的に男性の娯楽という印象が強い。独身男性の半数以上がパチンコで遊んでくれても、ホールの営業成績は一向に上がらず、やっぱり女性客を獲得すべきだという声が多くなったこの年、静岡県浜松市に初の女性専用店が誕生した。こうしたホール経営者の個々の努力がある一方、もっとも直接的な不況打開策として、玉貸料金の値上げを訴えるホールも多かったが、一方には「不況時の値上げは危ない」という慎重論もあった。結局、玉貸料金が1個2円から3円に引き上げられるのは昭和47年まで待たなければならない。そうなるとやはり、不況打開策は画期的な遊技機頼み。パチンコというジャンルを超える存在に注目が集まり、39年に発表されて以来、徐々に導入店を増やしてきたオリンピアマシンが台頭してきたほか、一度は死んだはずの雀球の人気が高まってくる。三高工機からは玉皿が上についた不思議なパチンコ機「パラボール」(写真)が登場する。

●10月、宮城県遊連が身障者施設にパチンコ機を寄贈。機能訓練に最適なものとしてパチンコ機が欲しいという、施設側の要望に応じたもの。同時に400人分のクリスマスプレゼントも配った（右写真）。サンタクロースに扮したのは佐藤副会長以下、組合幹部自身で、「世界で一早くここに来ましたよ」と挨拶。

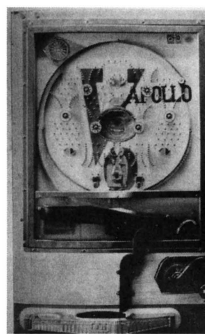
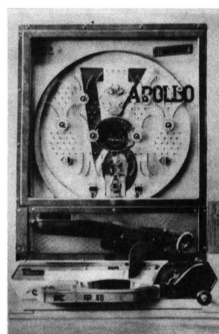
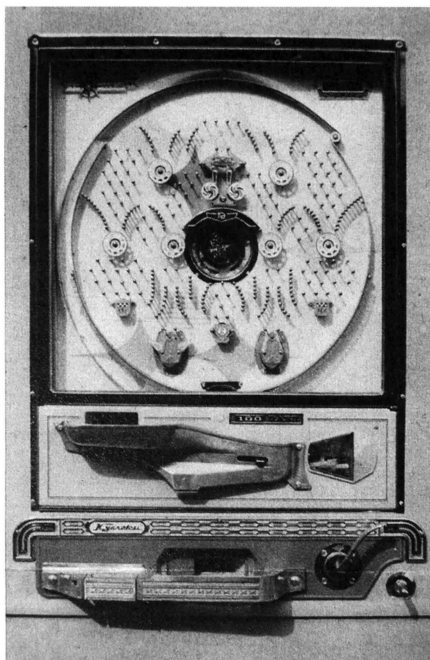
●オリンピアマシンの設置店はこの頃、都内に50店舗あったが、うち販売元である太栄商事の直営店が半数を占めていた。写真はその直営店のひとつ、浅草の「東莫オリンピア」。このマシンから特定図柄が揃うと連続して7回の高確率の権利を取得するという、ようするに「ボーナスゲーム」が組み込まれた。ほか、メダル投入口を大きくしたり、リールの回転速度による「調整機能」が付いたりと工夫が施されている。

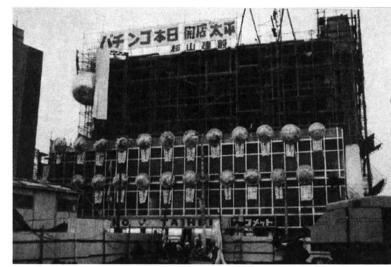
●北九州の小倉組合は日本警備保障と提携し、定期的に組合員傘下の16軒のホールを巡回。「黒メガネ、ダボ服お断り」などと張り紙を出しても従業員ではなかなか対応できないことから、組合単位で踏み切ったもの。ゴト被害も減ったという。

●還元機に力を入れる豊丸産業。かつて「ドラゴン号」という還元機を製造販売していた同社、他社製還元機の総発売元となったため一時中断していたが、この年から自社製造を再開。コンパクト化してメーターと完全ワンセットにした「オートリレー」を永野社長自らアピール。

■この年、相変わらず物品税に悩まされ続けた遊技機メーカーの団体・日工組は、ついに遊技機1台につき1000円の納税準備金を設定する措置に踏み切った。この1000円を出さないところには証紙も出さないという措置である。1台あたり20％もの高率の物品税、「虎は死んで皮を残すが、メーカーは倒産して物品税を残す」といわれたほどの苦境時代である。幾度となく繰り返した物品税対策も、結局はメーカー過当競争による価格競争があったり、圧倒的買い手市場だった時代だけに遊技機価格に転嫁できないところも多かった。結果、納付できないメーカーの罰金や延滞税を合わせると4億円にも上り、税務署による差し押さえや競売が生じた。遊技機の入れ替え時期が今より明確だった時代だっただけに、オフシーズンともなると工員の手が空き、「仕方なく」必要以上の機械を生産し、原価割れで売り出すところもあったというが、それでも物品税は払わなければならない。が、そんな商売で税金を払えるわけはないのであって、この年を挟んだ2年の間で相次いだメーカーの倒産数は21社。日工組立ち上げの時のメーカー数の実に3割にも上る。一方のホールはというと、ボウリングブームに代表されるレジャーの多様化時代を迎え、小さい好転材料の積み重ねではどうにもならない状態を迎えている。警察庁まとめによると、この時期は「店舗数の減少、台数の増加」という、今と全く同じ傾向を辿っており、結局のところ、一番の問題はやはり「過当競争」と言われた。当然、台数規制問題が各地で過熱していくのだが、新規参入組から見ると、パチンコはやはり儲かる商売に見えるのだろう。

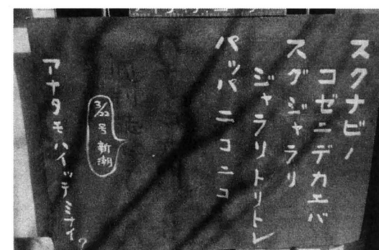
●この年、一番古い組織である東京都連は組合創立20周年。その記念大会は西陣の「宇宙楽団」の演奏で幕を開けた。

●テイチクレコードからデビューした有門マリが都内武蔵小山の「26号線」に。新人歌手だというのにこの人気。カウンターで本誌先代社長の伊藤壽志夫が手伝っている。

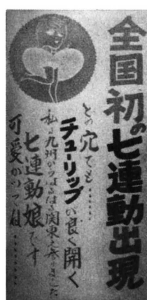
●メーカーが苦しかった時代。ソフィアはコンベア方式を導入し生産効率化へ。

●連発皿復活／3月31日付けで警察庁から発表された新要件によって、15年ぶりに連発皿が復活した。左は神奈川県下で圧倒的シェアを誇った「京楽ダッシュ号」。文字通りのダッシュで、神奈川県の100発機の80％のシェアを誇ったという。一方、連発皿復活に頭を悩ませたのは西陣や平和などの無人機に力点を置いていた大手メーカー。無人機はその機構上、上皿に賞球を出すことができず、下皿から連発皿へ玉を手で入れなければならなかった。上写真は平和の「アポロ」。右は循環式の有人機、左は無人機である。西陣は連発皿を取り付けた初期の遊技機「英雄」において、上皿を投資皿、下皿を貯蓄皿として、これが投資貯蓄の循環心理に合致する構造としてアピールした。確かにこの「英雄号」はヒットするが、別にそれは循環心理によるものではなかったようだ。その後、西陣も無人機「青い海」、有人機「白いかもめ」の2本立ての販売を進めたが、還元機の普及もあって有人機に移行していく。

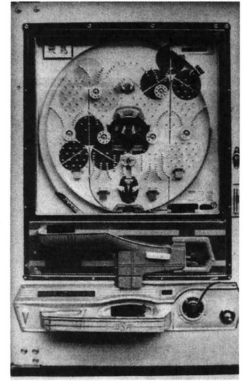
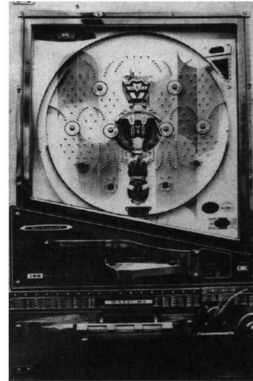
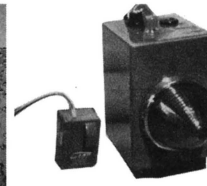
●都内点描その1／「キャバレー太郎」といわれた福富太郎氏が遊技場経営に参入。その第1号店の「小岩会館」。

●都内点描その2／巣鴨駅前の人気店「ニュー太平」が鉄筋8階建のビルにリニューアル。駅前店舗を中心に、こうしたビル化が進んだ頃である。

●姫路のホール。軒を連ねた「ニューコンパ」「第三ホール」「パレスホール」は同一経営による3店舗で、これを1カ所で監視、社長室は37台のテレビモニターで埋まった。台数は3店舗で573台。うち西陣の英雄号が274台。

●都内点描その3／新宿の「ニューミヤコ」の景品交換所。500円景品認可で40坪の広さをとった景品場を作り、多種多様な賞品を揃え話題に。

●都内点描その4／当時流行の「巨泉調」でアピールする芝の「パチンコ大門」。週刊新潮で掲載されるなどして、105台の小さな店だが健闘した。

●都内点描その5／池袋の「プリンス」は創立10周年を記念して、過去10年間の遊技機を設置。ヤクモノ時代の変遷が楽しめた。

■この年の3月31日、ぱちんこ屋営業に係る事務の煩雑化解消のため、警察庁保安部より遊技機の新要件が発表された。新しい基準は「発射装置は手動式で発射速度は、性能上、1分間に100発以内のものであること」「賞品球の出球は、1回15個以内であること」の2点のみという、画期的なものだった。が、もちろん、許認可の裁量は各地の公安委員会に委ねられていたので、緩やかな基準だからといって、射幸性が急激に跳ね上がったわけではない。また、機械規則が改正される時にいつもつきまとう無責任な噂としては、この時も「オール20が認可される」というのがあったが、無論、これは認められなかった。ともあれ、この44年改正はよく画期的な遊技機基準と言われているので、あえてこの時の問題点を挙げると、写真キャプションで触れた通り、無人機に力点を置いていたメーカーが連発皿の復活で苦境に立たされたこと。そしてもう1点、「性能上、1分間に100発」という規定だったため、ファール玉も含めての100発ということになり、実質的な打ち玉は有効玉で60発程度まで落ちたという問題点があった。そのため、せっかくの連発皿復活も、当初の出足は悪い。全遊連や日工組では「有効玉で100発に」と陳情するがこれは認められず、結局、メーカー努力に委ねられることになる。それでもメーカーの開発自由度が高い基準のお陰で、遊技機の進化は主にチューリップの連動という面で促されていった。それはそれでいいのだが、メーカーの開発競争が激しくなると、入れた途端に他メーカーからもっと過激な台が出るなどして困惑するホールも出てきた。

全国初の七連動出現
どの穴でも……
チューリップが良く開く
私は九州からはるばる関東へ参りました
七連動娘です

●自動玉貸機が普及しなかった東京業界、写真は都遊協がNECに依頼して製作した玉貸機。100円遊技が当たり前の時代に警視庁管内には「1回の遊技料金は50円」という決まりがあったので、他府県で使われている普通の玉貸機は設置できなかった。この玉貸機も当初は100円投入口を潰すことになっていたが、設置される頃には100円貸しが許された。都遊協ブランドで発売されたため、東遊商の組合員からはクレームも。

●当時の人気遊技機。左が大一商会の「ニューバンガード」。右は三共の「飛鳥デラックス」。有人機ブームで都内のシェアを拡大した。

●左、牛次郎の「パチンコ入門」。元々宇宙楽団にいた牛氏だが、のち、釘師サブやんの原作として、マンガとパチンコにどっぷり浸かる。右は警報機付き磁石防止器、愛産産業の「スターマグノン」。

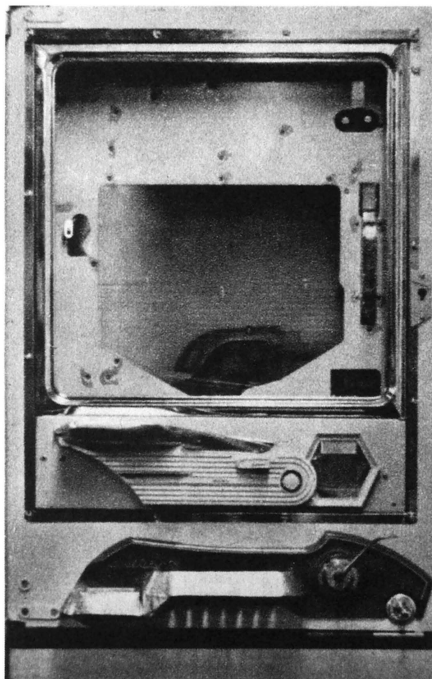
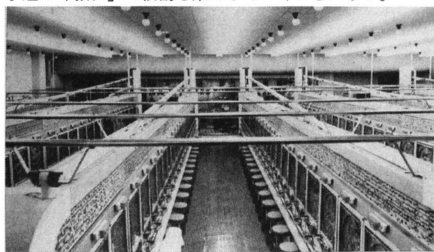
■前年の改正規則を各メーカーがこなし始めた45年には、4年振りの大がかりな展示会「'70ぱちんこ・ショー」が上野の台東体育館で開催された。都道府県の公安委員会の裁量権が強かった時代は、全国規模の展示会というのはなかなか難しかったのだが、この時は北海道から中部エリアのホールも集まって大盛況。引き続き開催された大阪展示会も盛況で、今さらながら100発皿に対する関心の高さが窺えた。この展示会では、基本的にヤクモノの無条件使用が認められたこともあって、「チューリップが開いている時に玉皿の玉がなくなるような機械」がいいのか悪いのか、メーカー側は試行錯誤のなかでとりあえず連動モノを多数出してきた。そんななか、平和の「五連動」は賞球数をオール10に落として発表。チューリップが開く快感を少しでも与えようとした目論見が当たり、導入店にとっては初心者やお年寄りを呼び込むカンフル剤的な効果があった。が、釘に自信のあるホールは「それは田舎の営業スタイル」としてこれを拒否。経営が苦しい時、一歩引く営業をすることは死活問題だというのだが、この時も（そして今も）こうした考え方が業界にとって悪循環に陥る要因になっているように思える。なお、この年の早々、アメリカのウォルト・ディズニー・エンタープライズ社が弊社を通じて「最近、当社の著作物の無断使用が、特に遊技場のチラシや看板に多い」と、著作権関係に無警戒だった業界に警告を発している。

●左はオーエスの「電磁カウンター」を導入した東京・武蔵境の「パチンコ大学」。43年の発売以来、計数管理の強い味方として普及した。アウト玉、セーフ玉を「電磁力の作用」で行なう画期的製品。それまでの計数用メーターは歯車の組み合わせ、つまりはメカ式だったので故障が多かった。上は平和の「ニューサテライトSD7」の指令盤。熊本の大劇。

●連動機の登場で賞球の少ない平和の「五連動オール10」が人気に。写真は池袋西口の「ひかり」。

●沖縄のパチンコは射幸性の高いスロットマシンに押されて苦境。

●ぱちんこショーを視察する警察庁の浜田課長補佐。案内役は日工組の武内国栄専務理事。

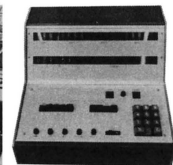
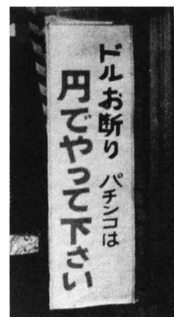
●東京都下、国領の「さくら」。ゆったりとした店舗も出てきた。

●平和がこの年に発表した分離式「救世」は、長い業界の歴史のなかでも画期的な発明として非常に評価が高い。遊技機入れ替えの機動性を高め、氾濫するヤクモノ機の選定にミスした際のダメージを最小限に抑える方式として、文字通り「救世」の役割を果たしていくことになる。

●平和は補給装置にも力を入れ、ホールの省力化を推し進めた。

■前年、グアム島のパチンコ店誕生（写真）に協力した西陣に、ソ連からも是非…という話が舞い込んだ昭和46年。この年の金融四季報で、パチンコに詳しい経営評論家の平野義明氏は業界の市場規模を7000億円と弾き出した。もちろん、この数字は世間的には大きい数字だが、その恩恵を受けていると考えるホール業者は非常に少ないのは、今も当時も同じである。そんな47年の秋、平和があの分離式を発表する。その名も「救世」。当時、年間200億円といわれた遊技機入れ替え費用が半分以下で済み、その差額だけでもホールにとって大きな利益になるとアピール。日特連との紆余曲折を経ながらも、結局はこの分離式が「パチンコの当り前の姿」になっていったことは周知の通りである。また、遊技機関連でいえば、100発皿認可から2年が経過したこともあって、旧型機の使用はこの年の8月31日限りという措置も打ち出された。同年2月末現在で全国161万台のパチンコ機のうち、新要件機は154万台に達していたが、北海道、愛知、大阪、兵庫、滋賀などは旧要件機が数多く残っていたという。ともあれ、少し前までは「旧要件機の永久使用を」と訴える声もあったが、この頃にはそうした声が聞かれなくなったというから、各メーカーの新要件機が使えるものになってきたことを示している。それでもレジャーの多様化はパチンコを苦しめ続け、なかにはパチンコ業界に直接響く業種も登場。ロタミントやスロットマシンが盛り場のスナックや喫茶店などに氾濫し、暴力団の新たな資金源になりはじめているとして、警視庁はこの摘発に動いている。

●補給装置の本格的な普及期、これを店内装飾に活用するホールも登場、文字通りの透明性をアピールする名古屋・栄の「オリンピック」。隣はますます普及するオーエスの電磁カウンター。こうした状況を受け、この年の5月には補給装置工業会、今の補給組合の前身が竹屋の竹内幸平を代表幹事に誕生する。装置普及とともに起こった特許問題が、組合設立の直接的な契機になっている。

●進む省力化／43年に三栄実業が発売した「ジェットカウンター」は3年間で1000台を突破、マーケットシェア80％に達したという当時の大ヒット商品。周知の通り、商品名が製品ジャンルの通称になったほどである。写真はそのニュータイプ。右は大成商会が扱っていた「ハイスピード電子計数機」。

●東京・蒲田に開店した1500台の「ヒロキ」の奥行きのある島構造。42年の金沢の「オーロラ会館」の撤は踏まず、高い稼動を維持した都内の名店のひとつである。

●新宿「ニューミヤコ」がまたも景品場をグレードアップ。ただ広くとるだけではなく、完全なスーパー方式で品揃えも豊富にした。「広い景品場」はこの頃からの流行だが、同店レベルの店はなかなか登場せず、しばらくは繁華街型店舗では後が追いつけないほどの独走ぶりを示した。写真からは、この店での景品選びがいかに楽しいかが伝わってくる。

●この年の暮れ、都内荏原の「26号線」に北電子のコンピュータ第1号が導入さた。ベテラン従業員が数人揃って、しかも長時間かけた閉店時の集計作業があっという間に終わるという、計数管理の高速情報処理時代の幕開けである。

●ニクソン大統領のドル交換停止、いわゆるドルショックを受けて新宿の「オメガ」が。無論、シャレである。

お知らせ

この度、皆様、マスコミ新聞等で御承知の如く業界の協定により、十月十五日より一斉に百円につき、玉三十五個と改定されました。

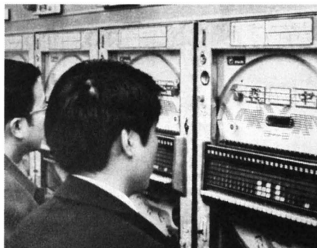
今後共より一層、サービスにつとめて参りますので何卒、御了承の上、宜しくお願い申し上げます。

お客様各位

オメガ遊技場

●20年間、据え置かれたままの貸玉料金、この引き上げには賛否両論があったが、徐々に引き上げ賛成派が主流を占めた業界団体の運動の結果、2円から3円に。普及が進んでいた自動玉貸機は5個10レーンの構造を3レーン潰して35個貸しに。手動玉貸機はレバーを70円の位置で止めるストッパーを付けたりして対応。ちなみに1個4円になったのは昭和53年。23年間も据え置かれている。

■昭和40年代の後半は停滞する業態打破に向けていろいろな動きがあった頃だが、雀球ブームもそのひとつ。ヤクモノの開発が進んでも根本的なマンネリ状態に陥ったパチンコを尻目に、設置店をどんどん増やしていった。ブームを作ったこの時の雀球が、昭和33年に初登場した時と大きく違ったのは構造自体の進化で、なかでも37年に登場したコイン式雀球の存在が大きい。「テンポの早すぎるパチンコ」に対して、ゆっくりと考えながら遊べる面白さがウケ、関西方面を中心に徐々に人気が高まり、この年、全国的なブームの頂点を迎えた。この雀球ブームは、翌年のアレンジを筆頭とした「変わり種」遊技機のブームの前兆ともいえた。一方のパチンコは、ヤクモノ規制が撤廃されても遊技機自体の著しい進化はなく、むしろその環境が整備されていた時期で、コンピュータとドッキングさせた補給装置や自動玉貸機などの省力化機器の普及が進んだ。こうした各種省力化機器の普及と東海地区から火がついた郊外パチンコの流行、さらには遊技機ジャンルの多様化といった現象を今になって振り返ってみると、この時期は明らかに環境整備期であり、旧来の店舗が苦境に立った業態再編期である。また、この47年は貸玉料金が100円で割り切れない1個3円となり、各種機器を改造して乗り切った年。中央公論別冊で当時、日本長期信用銀行調査部だった竹内宏氏がパチンコ業界を包括的に捉えた特集記事を執筆したほか、茨城県水戸市では交通事故に遭ったパチプロが市役所に休業補償を求め、紆余曲折、議論百出のなかで1日2000円を2カ月間出すという出来事もあった。

●桂小金治の司会で人気の「アフタヌーンショー」が長島温泉で「尾張美女パチンコ早打ちコンテスト」を開催。日工組の武内専務理事が出演し、名古屋がパチンコのメッカといわれる理由を解説した。このコンテストに何の意味があったのか、昔のテレビは今よりナンセンスなおかしみがあった。右側でマイクを持って走っているのは大野しげひさ。

●雀球ブーム／前年あたりから雀球ブームに。上は都内赤羽の「赤羽ホール」右は山梨県で初導入となった甲府の「天進」。遊技機はどちらもトップメーカーの「大信」製。

●景品いろいろ／学生街、東京高田馬場の「国際センター」は書籍コーナーが充実。高橋和巳、五木寛之、大江健三郎の本が人気に。その下はダンヒルを出した「26号線」。さらにその下は「カセットテープ」がコンスタントに出た都内浅草の「レジャーセンター」。上写真は音楽景品に力を入れる同店がその後に置いた30曲セットのカセットテープ。

●名古屋の郊外店「大恵会館」がマルホンの「上海号」でオープン。郊外店誕生と同時に出てきた車上狙いに注意を促す。

●46年7月に惜しまれて亡くなったソフィアの井置光男氏を再び社長として迎えた西陣とソフィア。同時に無借金経営に向かうべく経営4原則などを発表した。

●ところ変われば客変わる。左は静岡・御殿場の「がらくホール」で遊ぶ制服姿の自衛官。右は両国「ぼたん」のお相撲さん。

■再取材 ①【雑貨景品の登場と普及】

雑貨景品のパイオニアが語る「時代を映すパチンコの景品」

株式会社トリオコーポレーション／沼田通弘 代表取締役会長兼社長

昭和38年に30歳で独立して業界の景品分野に参入した沼田氏。タバコ、菓子に次ぐ「第三の景品分野」として雑貨の市場を開拓した。

射幸心を伴った娯楽であるパチンコ。つまりは、勝った場合には景品がもらえるという遊びである。逆にいえば、景品なくして語れない業種でもある。戦後間からしばらく、社会にモノが不足してパチンコ景品が重宝がられた頃から、モノが溢れかえって換金景品が主力となった今に至るまで、「パチンコの景品」は社会と業界の関わりを端的に示し続けている。

単価100円時代の雑貨景品はキーホルダーとボールペン

都内などでは、昭和40年代までは換金に頼らずに営業していたホールが、少数とはいえ存在していた。しかもそうした店は後々まで「優良店」「名店」と呼ばれたところが少なくない。遊技機の射幸性が低かったという側面もあるが、物資自体が社会に不足していた頃は、パチンコ景品として代表的な缶詰やチョコレートなどの食品類、歯磨き粉や石鹸といった品々を戦利品として家庭に持ち帰ると、奥さんや子供に喜んでもらえた時代である。

戦後間もなく、あらゆる物が社会に不足していた頃は、タバコをばらして景品にしても喜ばれていたというが、昭和20年代後半の連発式でもって遊技機の射幸性が大きく跳ね上がると、景品のタバコを路上で買い受ける「バイ人」が登場。急上昇した遊技機の射幸性と「バイ人」による換金行為はセットで社会問題になった。マスコミや有識者からは「亡国遊技」のレッテルを貼られ、結果、昭和30年の連発禁止令による壊滅的打撃という憂き目に遭う。

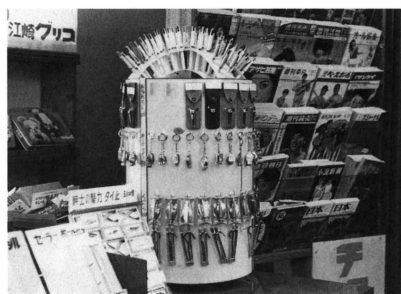
この苦い経験をした少なからずのホール経営者には、換金に対する抵抗感がその後も残った。が、一度生まれたシステムは姿を変えながら残り続け、昭和30年代から40年代にかけては、大きく分けると換金景品とタバコ程度のホール、一般景品のみのホール、そして一般景品と換金景品が五分五分のホールとが混在した。換金オンリーの店は殺伐とし、一般景品のみのところは客の換金ニーズに対応できずに苦戦を強いられ、結果的には一般景品と換金景品との中間派が多くなっていく。トリオコーポレーションの沼田通弘氏が業界に参入したのは、こうした端境期となる昭和38年。当時の社名はトリオ金属といった。

東京オリンピック開催を目前に控え、高度経済成長を迎えようという活気にあふれていた時だ。でありながら、パチンコの景品といえばタバコと菓子・食品類程度で、しかも東京などの多くのエリアでは景品単価が100円の時代である。貿易関係の仕事をしていた沼田氏は、いわゆる雑貨系の景品を組織的に卸している業者がいないパチンコ業界に目をつけたのだという。

「とはいっても、当時は今と違って商品そのものが豊富にあるわけではありません。貿易の仕事をしていた関係で仕入れのルートはなんとかなりましたが、最初は商品を風呂敷に包んで都内のホールを1軒ずつ回ったものです」

取り扱った最初の品物はキーホルダーとボールペンだった。ホールの景品カウンターはまだまだ小さく、しかもそのスペースは換金景品とタバコ、そして菓子類で占められていた頃である。雑貨景品に対して理解を示すホールは少なく、「まずは雑貨を置くスペースをもらうために歩いていました。キーホルダーやボールペンというと、場所も取らないでしょう？」。

ただ、キーホルダー景品の出足は決していいものではなかった。「当時は例えばマンション暮らしをする人なんかいないわけで、ようするに日本人があまり鍵を持ち歩かない時代だったんですよ。ホールに行っても『キーホルダーって何？』って言われたぐらいで。車も普及していないし、家には誰かがいて、鍵を掛ける必要はない。だから、キーホルダーもいらない。そこで私は、キーホルダーに鈴や爪切りやラグビーボールの財布といった、実用的なものを取りつけた。『付け物』といってね。これで勝負するしかなかった」

一方のボールペンでは圧倒的なシェアを築いた。「トリオペットというオリジナル商品です。パイロットさんなどにも負けなかったので、是非、一緒に置いてくれと向こうから頼んできたりして、専用ディスプレイを用意したぐらいです。それと、イタリアの有名メーカーと独占契約をしたボールペン。商品の質もいいのですがグリーンだったりオレンジ色だったりとカラフルでね。これを置くだけでホール自体もカ

キーホルダーとボールペンでもって、雑貨景品というジャンルの基礎を築いたトリオコーポレーション。これは100円単価時代の景品コーナーの貴重な写真。

ファンが景品を手に取って品定めが出来る、いわゆる「スーパー方式」の景品コーナーの先駆けとなった東京自由が丘の「ミツボシ」。昭和43年の大改装の際の一枚。

参考／各地でばらつきがあった景品の最高限度額

右の表はパチンコ営業における景品単価の最高限度額の推移だが、これが各都道府県の条例に委ねられていた時代は、各地でばらつきが大きかった。特に200円時代から500円時代にかけてがそうで、そのため表では「○年頃」と表記した。1000円景品以前は、あくまでも参考として捉えて欲しい。

ちなみに、昭和42年当時の資料によると、この頃、各地の差異は特に大きく、500円景品が許可されたのは大阪など6府県。33都県はその半分以下の200円景品であった。それでは残りのエリアはどうだったのかといえば、その間の300円。娯楽施設利用税同様、各地の差異が著しいことから、当時の全遊連などが統一化を要望していたというが、その功あってか、少なからずの県がこの300円景品という区分を経験しないまま500円景品を許されている。そのため、古い業界関係者に話を聞いた際に、「300円なんて時代あったかな」と首を傾げることもある。東京で200円景品が認められた際の各地の景品単価が資料として残っていたので表にしたが、ご覧の通りの格差である。

また、景品単価の値上げ陳情は最近のホール団体は行っていないが、一気に1万円に引き上げられた平成2年前はこれが頻繁に行われていた。貸玉料金が2円だった時代、これを4円に引き上げるよう陳情した結果、中間の3円になったように、景品単価についても1000円時代に2000円を要望して1500円に、そこから3000円を要望して2500円、そしてさらに4000円を要望して3000円になるなどの綱引きが続いた。減額されたとはいえ、こうした要望に警察行政が応えた背景には、当時の諸物価高騰という側面があるのだが、実はもうひとつ、換金需要を減らすという大きな目的があった。

逆いえば、景品単価がいち早く500円に引き上げられた県では、換金に対するプレッシャーが強まるわけで、こうしたエリアでは多くのホールが一般景品の品揃えを充実させて対応するなどしている。

いずれにしても、それまで小刻みに上がった限度額が、平成2年に一気に1万円になって20年以上が経過する。この長期据え置きはデフレのせいばかりではない。少なくともこの10年間は、業界側が換金適正化への努力を棚上げした期間に思えてならない。

【景品単価限度額の推移】

年	限度額
昭和23年	100円
昭和29年頃	200円
昭和37年頃	300円
昭和42年頃	500円
昭和48年	1,000円
昭和52年	1,500円
昭和58年	2,500円
昭和60年	3,000円
平成２年	10,000円

【昭和39年8月時点の賞品最高限度額一覧】
（昭和39年＝東京が200円景品になった時点）

［500円］
愛知　大阪　滋賀
［300円］
三重　岐阜　長崎　兵庫
［260円］
広島
［200円］
北海道　東京　栃木　石川　京都　奈良
和歌山　鳥取　島根　岡山　山口　福岡
佐賀　熊本、宮崎　鹿児島
［100円］
青森　岩手　宮城　秋田　山形　福島
茨城　群馬　埼玉　千葉　神奈川　新潟
山梨　長野　静岡　富山　福井　徳島
香川　愛媛　高知　大分

ラフルになった。それらをいろいろ揃えて『世界のボールペン』とディスプレイしてお客さんが手に取れるようにオープンスタイルにした。万引きが怖いからとショーケースに入れているとお客さんは交換してくれないのですよ」

ただ、同社は創業時から完全保証制度を採用していたこともあり、「品質のチェックには相当時間をかけました。雑貨景品を置く店が多くなると競合相手も出てきて、安ければいいだろうといった感じで我々が開拓したスペースに割り込んできてね。パチンコの景品の品質をきちんと維持するというのは、今も昔も大切なことですよ」

500円時代の主役はライター
時代を映す「人気景品」

「都内のホールさんが雑貨・百貨に本格的に理解を示してくれるようになったのは、500円景品が認められるようになってからです。私が創業した当初は、都内でデラックスなホールといえば銀座の『モナコ』さんぐらいでしたが、『ニューミヤコ』や『ミツボシ』といったお店が景品場を広く取り始めて、それこそオープンスタイルとかスーパー方式というのですが、景品に力を入れるホールが増えてきた」

当時の遊技通信のバックナンバーによると、昭和45年当時の「ニューミヤコ」の景品品目数は約1000種類。64ページの同店の写真を見ると、この店での景品選びがいかに楽しいかが分かる。

「500円時代はライターが主力商品のひとつでしたね。ブロニカ、マルマン、プリンスなどの。ただ、場所によってはライターにガスが封入されたまま置いてはいけないという規制があったりして、ガスを抜いてから持って行ったり、何かと大変でしたが」と沼田氏。

定番商品以外では、「これもオリジナルでしたが、瀬戸物の貯金箱も人気があった。頭をポーンと押すと動く首振り貯金箱。この頃は、実用性があるか、動くものが人気がありました。あとコップの水を首を振りながら飲むハッピーバード。いろいろと見て回って、その時代時代の流行り物をいち早く用意したものですよ。ルービックキューブやゲームウォッチ、たまごっち…」。

パチンコ店の景品は、その時々の世相と同調していたということだ。

「1万円景品になった当初は、ゲーム関係がかなり出ましたが、一方では返品が怖い状況になりました。それでも、換金景品の比率を下げる効果は確実にあった。なんといっても、それまでの

昭和49年、北関東販売所を開設したトリオグループでは宇都宮で「雑貨・百貨展示会」を開催。景品単価1000円時代を迎え、革製品やライター、化粧品、時計、ラジオ、玩具…と品揃えが充実してきた時期である。

3000円から一気に3倍以上ですからね。ただ、その後の様子をみていると、なんというか…今の500品目にしても、行政の意図とは違って、ただ品物を並べているだけのようにしか映りませよね」

世の中にモノが溢れかえっている今、一般景品の出をよくするのは難しいかも知れない。が、パチンコの景品はその時々におけるパチンコと社会との関わり方を端的に示している。茶色の紙袋に入れて家庭に持ち帰った景品が女房子供に喜ばれて、一人暮らしの独身サラリーマンや学生にとって重宝な「生活物資」になっていた時代は、パチンコで遊ばない人にとってもその存在が許容されていた時代にほかならない。

ニーズを先取りする周辺機器が人手不足のホールをサポート

シルバー電研株式会社／下口二郎常務取締役

遊技機の能力で売上が決まる時代から周辺機器のサポートで売上を上げていく時代へと変えていった省力化機器。なかでもホールの人手不足の解消に貢献した還元機、時代ごとに売上アップを実現させた玉貸機、パチスロの普及をバックアップしたメダル関連設備について、業界歴42年の下口常務に聞いた。

ホールの省力化機器の変遷とともに歩んだシルバー電研の下口常務。同社ショールームには、各種省力化機器の変遷を辿ることができる古いカタログが並んでいる。

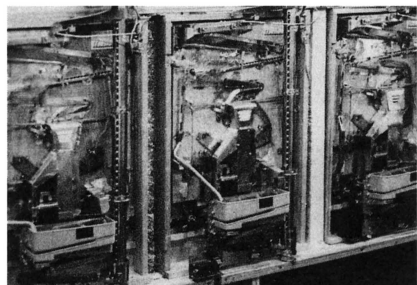
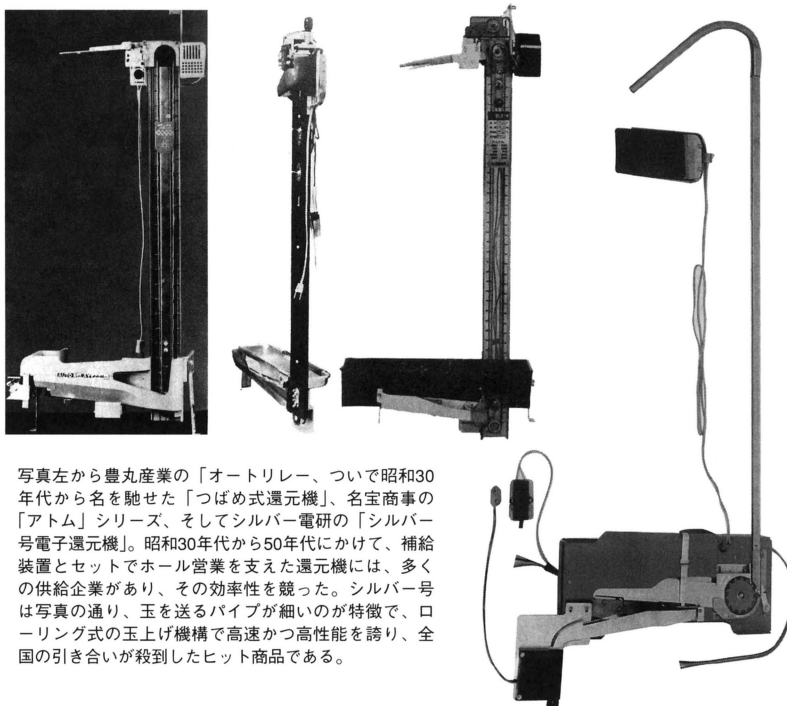
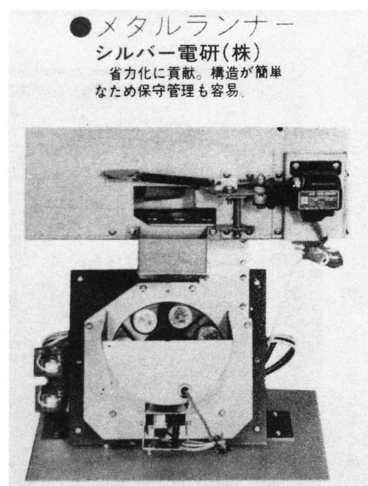
ホールの省力化に貢献した設備機器といえば無人機のほか、弊社が業界に関係するようになった製品で大ヒットした還元機が挙げられます。それまでのパチンコは島の中に従業員が入り、玉の補給はすべて人手に依っていました。島の中には常時2人は置いておかなければならず、10島あれば20人、遅番早番で40人は必要ですから、ホールは慢性的な人手不足に悩まされていました。それに島の中は暑くて従業員の労働環境は劣悪です。さらには島に人が入るために当時の島は三尺島といって約1mの幅で、都市部の狭い店舗では思うような島配置ができませんでした。

還元機はパチンコ台1台に1つ設置し、下部にアウト玉の受け皿が付いていてそこから玉を台上のタンクへと揚送する装置です。自動補給の原点となった無人機を端緒に島幅33㎝の一尺島が登場し、島の中に従業員が入る必要がなくなるわけですが、一尺島の普及には還元機が大きな役割を果たしました。当初の無人機はお客の手動で玉揚げしたりしていましたが、還元機を入れるとその必要はありません。還元機との併用で一尺島が普及し、島配置の効率は格段に上がりました。それに何より、人手をいらなくしたのでホールは固定費をかなり削減することができました。

昭和30年代から50年代にかけて、弊社の還元機は全国的に飛ぶように売れました。玉1個が通る細いパイプ1本で玉を揚送する構造でしたから、幅が必要なベルト式揚送部を使っていた他社製品よりもコンパクトで島裏の省スペース化が図れたのもあります。

ちなみに、現在の島にはその還元機は使われていませんが、今でも海外の個人用パチンコ玩具向けに年間500～600個ほど製造しています。現在でも当時の還元機を製造しているのは弊社ぐらいではないでしょうか。

●売上を変えた玉貸機の変遷

今のような台間玉貸機が登場する前は卓上型の玉貸機で、当時の玉貸しはいちいちカウンターに行き、従業員が手動レバーで100円ずつ玉切りして玉を出すという格好でした。そこで手動式が電動式にして玉出し速度を上げた高速玉貸機が登場し、弊社も「シルダック」を発表しました。1,000円でも一発で玉貸できるので玉貸の時間を大幅に短縮できて、その分売上も上がります。また、以前の手動式は最後までレバー

客がハンドルを回して下タンクから上タンクに玉を上げる、いわゆる捲き上げ式パチンコ機の台裏。昭和30年代の後半から補給装置とセットで活躍した還元機のルーツである。これにモーターを付けた自動捲き上げ式のパチンコ機も登場するのだが、たしかにこれは還元機として独立させた方が経済的かつ効率的だろう。

写真左から豊丸産業の「オートリレー、ついで昭和30年代から名を馳せた「つばめ式還元機」、名宝商事の「アトム」シリーズ、そしてシルバー電研の「シルバー号電子還元機」。昭和30年代から50年代にかけて、補給装置とセットでホール営業を支えた還元機には、多くの供給企業があり、その効率性を競った。シルバー号は写真の通り、玉を送るパイプが細いのが特徴で、ローリング式の玉上げ機構で高速かつ高性能を誇り、全国の引き合いが殺到したヒット商品である。

昭和56年当時の本紙、新製品紹介欄に掲載された「メタルランナー」。記事ではあまりにあっさりした説明なので、今となってはどんな製品なのか分からず、下口常務に聞くと「ああ、メダルの補給ですよ」と当時のカタログを持ってきて説明してくれた。各台下に設置し、島端タンクにつながるベルトコンベアと回転式メダル充填装置から台へ揚送する2つのベルトコンベアで補給・回収する仕組み。メダル補給装置の嚆矢となる製品である。

メダル研磨機「シルクリーン」。円筒状の研磨部の中にある螺旋状の羽根を使い、メダルを昇揚すると同時にペレットで研磨する。なお、本誌の昭和57年の欄で紹介している箱形状の「シルクリーン」は、ホッパー連動による完全自動タイプの2型。円筒状のこちらがその第1号モデルである。写真右は、台間メダル貸機「メダル・アイダック」。島端に設置する幅広タイプのメダル貸機が多かった頃、いち早く台間タイプを発表した。

を引かないと売上カウントしなかったので、レバーの引き方で内部不正もありました。そこで、カウンター側で金額分の玉数のボタンを押すと、お客側では玉貸機の金額表示ランプが点灯する仕組みにした玉貸機が登場し、そうした不正はなくなりました。その後に紙幣識別機付きの玉貸機が出るようになると、従業員いらずで自動的に玉貸しできるスタイルになりました。

フィーバーが登場すると、従来では考えられない玉の動きになったので、玉貸機も玉計数機も必然的に性能アップしなければなりませんでしたが、実はその前から玉貸と玉計数を自動化して高速化する動きはありました。

台間玉貸機の登場もフィーバーが出る前のことです。今のような各台設置でなく2台に1台の設置でしたが、座ったまま玉貸しできるわけですから当然売上は上がります。弊社でも「アイダック」を出すと爆発的に売れました。製造が追いつかず、割当を決めて30台ずつ出荷するような状況で、部分導入のところは店舗の半分を従来の卓上型玉貸機で対応するという格好でした。同じ機種でも売上の違いが明確に出てくるわけですから、需要過多の状況が続いたのも当然といえるでしょう。

その後も、フィーバー登場や郊外型店舗の流行でさらに需要が伸びました。フィーバー前後でホールの売上は一気に10倍ほどまで上がり、当時の郊外型店舗にしても出店すると1年足らずで元がとれる状況でしたから、台間玉貸機はもとより、周辺機器に対する投資意欲は旺盛でした。昭和50〜60年代にかけては500円硬貨や新札の登場、その前には貸玉料の変更などもあって、玉貸機の中身をその都度変えなければなりませんでしたが、中身の変更というよりは当時4〜5万円していた台間玉貸機を買い替えるホールが多かったと記憶しています。それほど当時のホールは潤っていました。

ちなみに「アイダック」は当初、30㎜、40㎜、50㎜の3タイプで出しましたが、50㎜は弊社だけだったと思います。昭和50年代までは台間が狭いホールが多く、30㎜、40㎜を入れるところがほとんどでした。地方によっては台間が広いところもありましたから、50㎜はそうした店舗向けに出した製品です。30㎜の台間玉貸機もセレクタから何から30㎜に収めなければならないので技術的に難しく、他社の製品は奥部が広くなっているものもありましたが、弊社では奥部も30㎜にきっちり収めました。結局のところ40㎜の台間玉貸機に市場が落ち着いたわけですが、技術的な部分でそうなったのかもしれません。

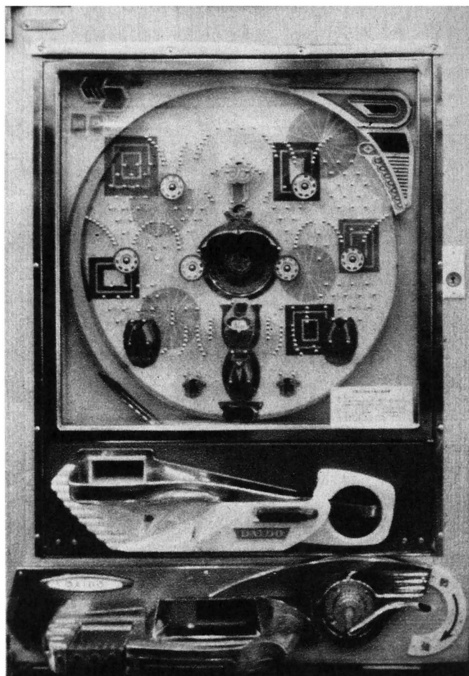
●メダル時代を先取りした循環装置

フィーバー登場前はロタミントなどメダルマシンにはいろいろなものがあって、初期のパチスロはその一ジャンルという扱いでした。初期のスロット営業は、1台約80万円、1店舗に10〜20台ほど設置されていました。高価でしたがそれを賄うだけの利益は採れていて、それなら周辺機器を整えて省力化しようという動きになったわけです。ただし、当時のパチスロは規制も含めて浮き沈みが激しく、多くの設備メーカーが手をつけないジャンルでもありました。

パチスロがアップライト型の頃に弊社が出した「メタルランナー」は、1台ごとに設置するいわばスロット版の還元機のようなもので、メダル自動補給の先駆け的製品でした。島端にタンクを置き、そこから水平にベルトコンベアを設置。またパチスロ台下に置く回転式のメダル充填装置から台に向けて垂直方向にもベルトコンベアを付けて、十字型に配置した2つのベルトでメダルを循環させるという仕組みです。

この製品は四国の松山のホールで設置したのが第一号で、その他にも弊社が提案できる範囲のメダル設備を入れました。当時はじゃん球やアレンジでもメダルが使われていましたが、パチスロのメダルの動きは比較にならないほど激しいので、メダル研磨機が出たのも同じ頃だったと思います。

弊社で最初のメダル研磨機はペレット式の「シルクリーン」で、当初からかなりの引き合いがありました。やはり当時のメダル設備は大掛かりで高価でしたが、そこから全国に広まり、沖縄にも随分入れた記憶があります。当時のパチスロはただ置いているだけという感じでしたが、メダル設備が普及していくに従って徐々に現在の島構造へと変わっていきました。

昔から設備メーカーの開発は、遊技機の動向やホールの情勢を見据えた上でアイデアを出す提案型でした。今後も提案型の製品提供でホールをサポートしていきたいと考えております。

●日野式電動ハンドル／ハンドルに関する規定も前年の玉貸料金3円引き上げ時に改定され、電動ハンドルが許されるようになった。広島県呉市の日野義久氏が試作機を手に警察庁へ日参、2年半かけて許可を取得したもの。これはモーター付きのカセットを既存遊技機に取り付けるだけで、普通の手打ちハンドルがモーター仕様に変わる。前年12月に福岡で初導入され、都内では都立大駅前の「日の丸パチンコ」に初導入。写真は日野和喜社長。電動ハンドルは他メーカーもこぞって開発へ。

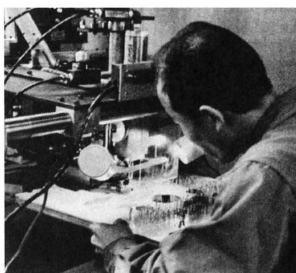
●グローリー製で初の紙幣対応玉貸機が登場、新星商事から発売された。客の2割が千円紙幣を使いはじめ、需要が高まっていた。

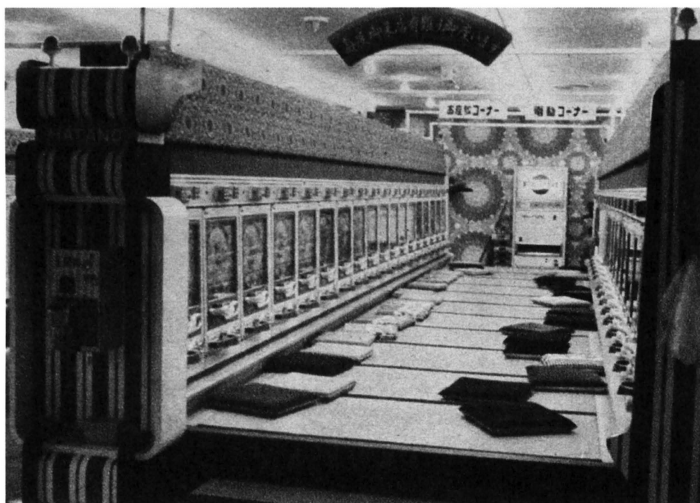
●前年の初秋「ビンゴレット」として初披露されたスリースター工業の新型機は「アレンジボール」という名称で1月1日から本格発売。あっと言う間にブームを作った。左写真は同社が力を入れていた東北エリアでの展示会でアピールする柏木社長。上は都内初導入店の自由が丘「三光ホール」。

■電動ハンドルが認められ、ホールにはコンピュータが入りはじめ…と、着々と電化が進むパチンコ業界をオイルショックが襲った昭和48年。当時のホールオーナーを悩ませた人手不足は、数々の省力化機器がなければ乗り切れなかったのだが、もとよりホール関係者に「省エネ」という概念がないのは当然で、日本中がガソリンをがぶ飲みして走っていた時代である。ガソリン不足で「夢のマイカー」を手放されては、ブームになっていた郊外店の存続も危ういとまでいわれた。諸物価高騰に対し、今よりも手軽なレジャーだったパチンコの人気は高まったが、電力節約の折、ネオンを消してまで営業しても、と営業時間短縮に踏み切るホールが続出。警察庁が「石油電力等の節約の方針」を打ち出すまでもなく、煌々と輝くネオンはホール経営者に心理的圧迫感を与えたようだ。世間常識を無視した華やかさは命取りと考え、前年の新規開店時には話題になった自慢の大ネオンを消したホールもある。一方のメーカーもエネルギー割当で四苦八苦。電動機などの登場による遊技機価格の値上げに反発していたホール団体は「不買運動」に突入していたが、一連の諸物価高騰はそういう環境下で、さらなる値上げをせざるを得ない状況に追い込んだ。また、石油不足はプラスチック製品を供給する部備品メーカーも直撃。プラスチック玉箱から木箱に戻るんじゃないかとまで言われた。さらに玉メーカーは焼き入れ時に使う重油の調達に苦慮し、6カ月先の納期、しかも受注量の1割から2割を削減して納品する事態に。景品業者も「モノ不足」とそれに付随する卸値価格のアップに苦慮し、業界誌は紙不足に慌ててと、ようするに業界のあらゆるジャンルに影響を及ぼした。

●「案山子はパチンコをしないんだよ」と冷やかされた郊外パチンコが東海エリアを中心に大流行。上は静岡県焼津の「パチンコスター」。左は東名横浜インター側に開店した「タイガー」。圧倒的広さは駅前店舗にはないものだ。

●上野村の業者で立ち上げた株式会社東遊が遊べる島飾り「フジヤマ号」を。

●埼玉・川越の「いこい」はオリンピアと雀球を設置。当時のオリンピアマシンは高価だったので、設置台数は3台。

●宮山技術研究所がソフィアの全面協力で自動釘打ち機を開発。ソフィアに6台、京楽に2台導入された。

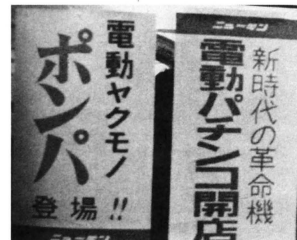
●大阪府遊協の「善意の箱」。この年は吹田市の老人リハビリ庭園の建設費用に活かされた。

●神奈川県秦野に誕生した「パチンコハタノ」の36台分のお座敷パチンココーナー。よくここがお座敷パチンコ第1号と言われるが、愛知県豊川市のホールが先鞭をつけている。郊外ボウリングからの転業した同店、設計から施行まで面倒をみたのは京楽産業であった。

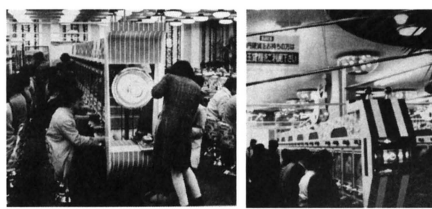
●アレンジボールや雀球は補給装置にとらわれないので島構造に自在性があった。都内では珍しい八角島を採用したのは都立大駅前の「後楽園ゲームセンター」。

●今思うと非常に危ないが、当時の新装・新規の開店は喧噪渦巻く戦争状態だった。自動ドアが開店初日で壊されたり救急車が出動する騒ぎになったりと大変だったが、ホールオーナーのなかには「開店はこうじゃなくっちゃ」という人もいた。上は埼玉県北本の「ボナンザ」左は兵庫県尼崎市の「福徳会館」。

■オイルショックがそうだったせいか、昭和48年と49年は年を越した問題が山積した時である。例えば、諸物価高騰につき、景品単価の引き上げを要望していたホール団体は、3円貸玉にひきつづき1000円景品を獲得。ただし、この時も警察庁から「景品持ち帰りを推進すること」「暴力団の換金行為を徹底的に排除すること」という2点の注意事項が付いた。これは、それ以前の景品単価値上げの時もそうだし、その後の同様の措置の際にも言われつづけたことだと考えると、景品単価の値上げ自体は業界の健全化を促すものではないのかも知れない。また、一連の諸物価高騰は遊技機メーカーも機械価格を値上げせざるを得ない状況に追い込み、ただでさえ電動ハンドル認可などで価格を値上げしていた折だけに、ホール団体はこれに猛反発。遊技機価格2万円がひとつのラインになっての攻防が行われ、全遊協は事実上の「不買運動」に突入した。異常値上がりしたプラスチックで遊技機関連部品を供給していた愛材協組合員なども混迷を深めていたが、この不買運動は49年に解除される。ホール団体とメーカーの対立による「不買運動」の話は、その後も度々出てくるが、「抜け駆けが出て成功しない」ともいわれる。この頃から本格的なブームとなったアレンジなどのメダル機は、高くても売れたのも事実である。

●群馬県でも郊外店続々。上写真は高崎の「新効」。ボウリングからの転業が多かったが、同店は廃業した郊外レストランを改造してオープン。下は仙台市の老舗「まるたま」が郊外進出した中田バイパス店。16レーンのボーリング場を全面改装。パチンコ、アレンジ、スマートを設置した。

●ヒットしたグローリーの千円紙幣玉貸機。右は池上通信機の紙幣対応玉貸機を設置した都内赤羽の「三洋ホール」で。

●ニューギン号250台を導入した福島県郡山市の「新英ホール」で。ハンドルのみならずヤクモノも電化した頃。

●サミーのアレンジボール「ミラクル」はIC採用。

●異業種からの参入続々。左は日拓ホームの第1号店、高田馬場の「朝日会館」。右は横井英樹社長率いる郵船グループの日本産業が業界参入。神奈川県大井町に「東洋ボール」開店。

●間寛平の「ひらけチューリップ」(上)のヒットでパチンコソング花盛りに。大瀬しのぶの「スットコ成金音頭」のB面には「パチンコ天国」という歌が入ったほか、はたけんじの「夢のマーチ・浮気なチューリップ」とか、正司敏江・玲児の「チューリップ人生」とか、また演歌でも香川英子の「釘師一代」などが出たが2匹目のドジョウはそうそういなかった。もっとも、こうした関西芸人のコミックソングは笑福亭鶴光の「鶯谷ミュージックホール」が先鞭を付けたもので、「ひらけチューリップ」は2匹目のドジョウだった。

●全遊協が青年部会作りに乗りだした。2月5日、遊技会館で行われた発起人会に参加したのは、福島の佐藤隆、山形の井上静夫、新潟の小林章、栃木の安川喜商、千葉の高石護、大阪の瀬戸賢三、兵庫の米田義一、京都の水田和夫、富山の井波勝一、広島の二上英信、香川の平尾和義、宮崎の前園善彦の各氏。ほか、当日は出席できなかったが発起人に名を連ねていたのは宮城の竹田紘造、大阪の金谷一彦、段為梁など錚々たるメンバーである。代表は平尾氏が務めた。

●小田急グループの箱根登山鉄道のさらにその傘下にある小田原商事が遊技場経営へ。関東私鉄では京成が早く、高い利益を上げていることを、小田急としても看過できなくなったのだろうか。

●エース電研のサンドイッチを導入した栃木駅前の「武蔵ホール」。エース躍進の原動力となった画期的ベストセラー商品。

●郊外進出はまだまだ続く。ボウリング場からの転業組はその圧倒的広さが特徴だ。富山・高岡の「東洋ローズ」。

●「'75パチンコショー」は東京と大阪で開催された。写真は東京・流通センターで開催された時の模様。

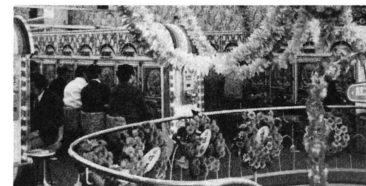
■昭和40年代を支配した高度経済成長の軌道が変わり、企業の倒産件数は戦後最悪を記録、それでも街にはリズミカルな間寛平の「ひらけチューリップ」が流れていた昭和50年。週休2日も定着しつつあり、国民の余暇時間が増えはじめたことに呼応するかのように、ホールへのコンピュータの導入は進み、メーカーは自動釘打機で量産体制を整備しはじめたこの年の10月18日、「パチンコの神様」とも「現代パチンコの父」ともいわれた正村竹一が逝去した。正村はかねてから「この先、パチンコはコンピュータの時代になる」と予見していたというが、パチンコが本格的な電子化の時代を迎えた年に、技と勘を重んじて精魂を込めて1本1本の釘を盤面に打ち込んだ正村が逝くというのは象徴的である。告別式は11月1日、名古屋の東別院で日工組、名古屋市遊協の合同葬として執り行われた(写真)。

●玉箱も大きくなってきた。オーエスの「ニューアーク」は取っ手付きの1500個入り。

●端数玉は客のものという意識が出はじめた。メイセイの端数玉返却機。

●不況に強い(といわれた頃の)パチンコ。愛知県豊中市の「オリオン会館」のポスターと大阪府門真の「新橋会館」の開店前風景。

●エース電研が先鞭をつけた台間玉貸機が各メーカーから続々登場。本誌では当時、薄型玉貸機と記していたが、写真右のエース電研「サンドイッチ」や左の大都製作所「ハンバーガー」など、ヒット商品の名がジャンルの呼称になった。そうした台間玉貸機を導入していないホールの新装新規はというと…、下写真の通り、入店して台を確保したらカウンターに直行。

●写真左は名宝グループが取り扱ったセル盤クリーナー。とはいえ、幕板から壁面、椅子などなんでも洗った。右は平和のSP盤（着脱分離式）の広告から。両者ともに女性を全面に出し、作業が簡易であることをアピール。省力化時代を象徴している。

●この年の9月、名古屋にメーカー団体待望の遊技機会館が落成。日工組、日特連、補給組合が共同で建設を進めていたもの。

●この頃、なぜか店舗内装飾として「ギリシャ風デザイン」のホールが続々誕生した。

●タバコに火を付けるにはマッチで両手を使っていた時代。天板からコードで繋げた「パチライター」なら片手でOK、として登場した新製品だが、写真をみるとやはり両手を使っている。

●何やら複雑でよく分からないだろうが、これはコイン系遊技機の普及でニーズが高まったコイン還元機。三友産業の「ドラゴン」で、100枚のコインが収納でき、そのコインが常に循環した。コイン系遊技機の割数の低さからすると、これで十分か？

●景品と交換できないゲームセンターに客を取られ始めた状況を受け、メーカーも苦心しながらパチンコのマイナス点をカバーすることを模索。大一商会からは「新型イースター」と呼ばれるヤクモノが登場した。連続60発のアウト玉で両サイドのチューリップが開放する救済型である。平和、豊丸なども同種のヤクモノ機を出すなどし、許可が下りたエリアへの導入を進めた。大一は秋には「マジックトリオポンパット」という、逆にセーフ玉が一定数に達すると開放する電動ヤクモノも出した。

●昭和51年の関西エリアのホール点描。左上は広い駐車場とレストラン併設でオープンした寝屋川の「オアシス会館」。その右はコンピュータや台間玉貸機を導入してリニューアルした難波の「四海楼」。左下の天王寺駅前の「朝日クラブ」は椅子島改装を機にアレンジなどのコイン系専門店に。右下、神戸の官庁街に誕生した「センター会館」。写真に映る客全員がスーツ姿、見事なまでに客質が良さそうなホールである。

■前年に第三次産業の就業者数が50%を超え、政府は増税先のターゲットを絞った。パチンコも当然ながらその対象で、予算編成を進めていた大蔵省も娯楽施設利用税の増税を模索していると伝えられたが、業界だって苦しい時期が続く。ブームが去ったボウリングが息を吹き返し始め、スロットマシンやルーレットを置くメタルゲーム場が登場するなど、レジャーの多様化もどんどん進んだ。メーカーが食らう不渡りは数年前の10倍にもなったといわれ、遊技機の入れ替えも長期化プラス細切れ化へ。ホール側の救いは各種省力化機器の普及なのだが、当時のホール運営で最も深刻な課題だった人手不足が和らぐと、多店舗展開を図るホールの勢いが増す。水戸駅の南口には前年の1年間で他業種からの転業組を中心に5店舗の新規店が誕生したというから驚きで、「業界の外から見ると好景気、内実は過当競争でアップアップ」という、長年続く図式が固定化されてきた。この年の1月、西陣創業者で当時、会長だった清水一二氏が52歳という働き盛りで逝去。業界屈指のアイデアマンの早すぎる死であった。

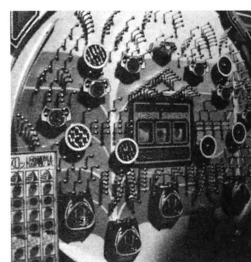
●都内中野の「セコイア」は当時の名店のひとつ。笑顔を振りまく（当時としては異質！）マスコット・ガールを採用し、一般マスコミなどでもそのサービスの質の高さが取り上げられた。そのマスコット・ガール、2人でペアを組んで3時と7時に写真の通り、ワゴンサービスを行った。

●世はテレビ時代。西陣から盤面中央にテレビを取り付けた「テレパチ」が登場（左下）した。が、プレイに集中できないからと、今度は幕板にテレビを取り付けた（右下）。こちらはオオキ建築、西陣、ナショナル、四谷の「コメット」の共同開発だった。名称を「パチカラー」という。

●竣工したばかりの遊技機会館で日特連と補給機特許がまとめて記者会見。当時は一部に無証紙の遊技機が残っており、日特連はこの購入に注意を促した。補給機特許も許諾証のある補給機器を使うよう求めた。

●この年、全遊連は創立25周年。11月14日の帝国ホテルでの記念式典には、中曽根康弘代議士（写真）など大物政治家も多数はせ参じた。

●景品単価が1500円となり、都内のホールにどんどん広がるスーパー方式の景品場。上は大型景品コーナーの先導役、新宿の「ニューミヤコセンター」。下左は「吉祥寺ニューセンター」で右は自由が丘の「ミツボシ」。こうした景品場の拡充には、単なるファンサービスという側面の他にも、換金比率の低減という非常に真面目で高い志があったことが、今では忘れ去られている。寂しいというか、情けないというか。

●郊外パチンコは今まで考えられなかったエリアにも広がる。外木材の集積地、清水市の三保にできた「三保ジャンボ」。倉庫、工場の密集地は当時は異例の立地。

●三共からスロットマシン付きパチンコ機「ブレンド」が登場。フィーバーの原型である。

●この年公開された「人間の証明」のパロディ。東京上野の「ジャンボ」で。

■厳しい業態が続くなか、ホール組合は貸玉料金の改定陳情を行い、ホールは景品場の拡充などでサービス強化を図った。が、業況は好転しない。頼みの綱である遊技機では西陣のテレパチ、平和の逆転パチンコ、さとみの着脱分離式アレンジ、マックスブラザーズの風営法認可のスロット「ジェミニ」など、低迷打破に向けての模索が続いた。タイトーからはメダルを入れると30秒間だけ玉が飛び、31点以上の得点でメダルが払い出されるという風変わりな「電動パチラー」なる機械も登場。こうした試行錯誤はすぐに業態回復には直結しなかったが、様々なアイデアを具現化した電動ヤクモノの幅の広がりなどは、数年後には確実に花を咲かせることになる。また、決して楽ではなかったこの頃から、メーカー展示会は派手になり、平和工業の東京會舘での展示会はアトラクションに由美かおるショー、セミナー講師に竹内宏、五味康祐を招くという豪華版。おまけにハワイ旅行やカラーテレビが当たる抽選会も行った。一方の三共は明治座での観劇招待とセットの展示会。この時、スロットマシンを組み込んだパチンコ機「ブレンド赤坂」がリリースされた。そう、あの「フィーバー」の原型である。なお、前年の12月、弊社会長だった創業者の伊藤重男が71歳で逝去。1月に執り行った告別式には、全国から多数の業界人が焼香に訪れてくれた。

●東京青梅で「和風ぱちんこ」と看板を掲げた「奥座敷」には、店名と同調したお座敷パチンコ。客が台を離れる時の食事札を取り入れた店である。

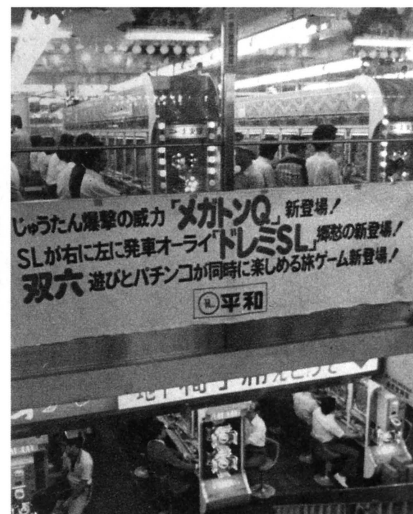
●前年にテレパチを出し、テレビ導入を進めていた西陣グループ。幕板テレビでは上を見上げるからと、今度は台間に設置した。

●定着する社会貢献活動。大阪府遊協の善意の箱は6年目に。写真上は前年12月の寄贈式の模様で、この年の寄贈額は深刻な不況下にありながら過去最高の6200万円に上った。また、東京八重洲で「呑ん兵遊技場」を経営していた故・島田伊三郎氏が、私財を投じて開設した我が国初の心身障害者施設、島田療育園が経営困難に陥り、都内の業界有志がこの守る会を結成。左写真は3回目の寄付の模様。

●写真上は広島駅前の「駅前会館」の開店風景。もう、なんというか、とにかく凄まじいが、よく見ると笑顔のヒトが多く、やはり心が浮き立っているのだろう。左下は仙台の中央通りアーケードにオープンした487台の大型店、「ABC会館」の行列。右下は長崎の「まるみつ」の新装開店の行列。実はこの日、まるみつチェーンは同日に5店舗が新装開店するという離れ業をみせた。

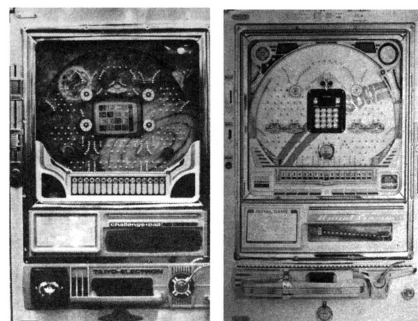
●写真右は前年から人気となったタイトーの「電動パチラー」。50発中、31発以上入賞してメダルの払出があるという、「遊べるパチンコ」である。左は竹屋の電動ハンドル機。60発から100発までの速度調整装置「PCレバー」がついていた。同様の機能は三共なども採用していた。

●台間玉貸機のシェアを伸ばしたシルバー電研。当時は右から30ミリ、40ミリ、50ミリと3サイズを用意していた。

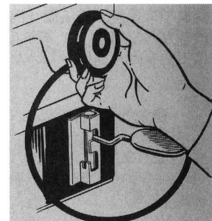
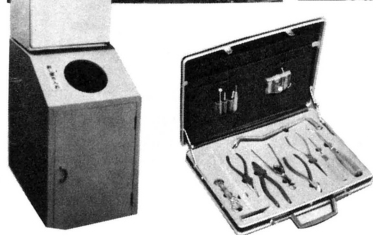
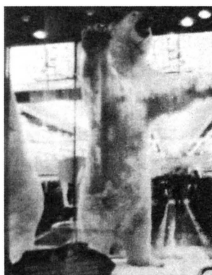
■6年ぶりに貸玉料金が改定され、この年の3月1日から1個4円時代の幕開けである。諸物価高騰を理由に全遊連が陳情していたもので、陳情では1個5円が目標だったが、4円でも33%のアップ。その後、30年以上に渡って4円時代が続くなどと、当時の業界人は思ってもみないだろう。ましてや、21世紀になって1円パチンコなるものがこれほど普及するなど、想像の埒外である。ちなみに、雀球、アレンジのメダルは1枚50円から70円に上がったが、こちらはタイムラグがあって、値上げは9月から。それ以上に、当時のアレンジには最高賞球が5点のところと10点のところに分かれており、その統一が先だろうという声も多かった。いずれにしても、こうした貸玉料金の値上げには反対派も多く、諸物価高騰の折りに玉を値上げすると客に負担がかかるという懸念が強かった。この問題は普及が進む電動ハンドル機にとってもマイナスで、値上げを機にゆっくり遊べる手動式を増やした店もあった。その一方では川崎に432台全て電動機というホールも登場。考え方はホールで様々である。その電動ハンドル関連でいえば、この年の前年には、2年に渡ってもめていた「日野氏の電動機特許」問題が円満解決。日野義行氏が考案した電動ハンドルの専用実施権を日特連が預かることになったのだが、日特連は早速、電動機への改造（手動式に電動カセットを取り付ける作業）には所定の手続きが必要であることを記者会見で訴えた。この電動ハンドル、実はこの頃でもその導入には著しい地域差があり、近畿エリアと栃木はこれを組合として頑なに拒否した。電動機の価格が高く、客にも店にも負担が重いからである。

●センター上部に入った玉がプールされ、ランプが3列揃うとボタンを押してチューリップを開くとともにプール玉が一斉に落ちるという、平和の話題機「メガトンQ」導入店で。「じゅうたん爆撃」の威力である。

●昭和51年の欄で紹介した等身大騎士像がサンドイッチマンになり、福岡県で開催されたパチンコ祭りのピーアール役を。感謝祭期間中は来場者にもれなく100円ライターをプレゼントしたほか、きちんと客に「ありがとうございます」と挨拶するとか、利益を度外視して玉を出すとか、今では考えられない取り決めをした。実施期間も10月1日から15日までと長かった。

●昭和54年といえばインベーダーブームである。よくインベーダーゲームの大ブームでパチンコ店には閑古鳥が泣いたと言われるが、そういう店ばかりではない。ブーム時でもサラリーマンで満員盛況の東京神田の「ジャンボ」。また、「インベーダーハウス」はパチンコ店の兼業組も多く、業界だってただ指をくわえていただけではないことを記しておきたい。

■昭和54年といえば、インベーダーゲームの大流行である。風営法での規制が必要なのではないかと国会で議論になったり、日銀が100円玉を増発したりと社会現象にまでなった。インベーダーは突然のブームのように思うかも知れないが、米国アタリ社が出した「ポン」というテレビゲームが発展し、前年の昭和53年には我が国でもブロック崩しが喫茶店などで静かに流行の兆しをみせていた。ともあれ、54年の狂乱ともいえるインベーダーブームでもって、パチンコ店には閑古鳥が鳴き、それを救ったのが三共の「フィーバー」である…と、よく語られるが、これはちょっと短絡的かも知れない。ホールの稼動は低迷し、「インベーダーハウス」への転業組みが相次いだのは事実だが、当時のホールが置かれていた苦境には、過剰投資と過当競争という、その後も連綿と続く業界内部の課題が背景にある。しかも、このインベーダーブームは実に短命で、ピークはこの年の2月から4月、秋にはインベーダーハウスからまたパチンコ店に戻すなど、ホール企業の軽いフットワークも目立った。また、昭和46年以降、初めて全国の店舗数が減少したのが昭和52年で、翌53年も減少、「ミセスの社会進出」と言われ、女性も各種レジャーに積極参加するようになったこの54年には、全国の遊技場数はさらに減って9961軒、ついに1万軒を割り込んでいる。そう考えると、三共の「フィーバー」が救ったのはインベーダー不況からではなく、昭和30年の連発禁止令以降、長く続いた業界の低迷からだと捉えた方がいいかも知れない。

●インベーダーに負けてたまるか、とアレンジにインベーダーとブロック崩しの要素を盛り込んだ太陽電子の「テレコンマシン」。右は京楽産業の「ロイヤルゲーム」。パチンコ機メーカーもメダル機に積極参入した。

●景品と交換できる風営法認可機種として浸透し始めたスロット営業。この頃から併設店が増えてきた。写真はジェミニを導入した東京目黒の「日の丸パチンコ」。

●なぜカプセルホテル？と思うだろうが、これは実は東京武蔵野市の「親和会館」の社長、阿施邦恭氏が「眠るためだけの施設がない」ことに着目し、考案した新業態だったのである。ただし、同じ年に大阪で建築家の黒川紀章デザインによるカプセルホテルがちょっと早めにオープンしたため、親和会館2階の「ホテルファーストイン三鷹」は2番目扱いになった。

●この頃から登場したサービスのひとつ、「清涼おしぼりサービス」で首筋まで拭う中年男性。東京渋谷の「タイガー」で。上段中央の写真は金融機関への強盗事件が多発していた頃、ホールでも設置が進んだ監視カメラ。池上通信機製。右は電動ハンドルの普及で出てきたアイデア商品、日本プレジャーの手枕「アームラック」である。そして左写真が大成商会から発売されたアタッシュケース入り釘調セット。いろんなジャンルで今につながる商品やサービスの開発が進んでいることが窺える。

●東京小岩の「パチンコ大野屋」が敬老パチンコ大会。写真は前年の好評ぶりを受けて開催された第2回目の様子。豪華景品と演芸ショーの組み合わせ。

●体長3メートルの白熊の剥製を店頭に置き、度肝を抜いた久留米のラッキー。

●この年、全遊協の企画で第1回パチンコ感謝デーが開催された。

●回転するディスクをストップボタンで止めて図柄を揃える「ロタミント」は、元々が西独のウォールマシンらしいが、我が国ではギャンブルマシン扱い。スナックやドライブインなどで硬貨をそのまま使って遊ばせていたからである。このタイプの遊技機は、昭和48年の「風俗・性に関する世論調査」のギャンブルに関する項目のところですでに出ているのだが、実はきちんとした風営法認可機種として複数のメーカーから発売されていた。そのことを無視し、今でもアングラ機としか扱われないのは、ちょっと気の毒である。左からスリースターの「トライスター」、サミー工業の「スーパースピン」、太陽電子の「ロータリームーンベース」。上写真は大一の「ロータリー・ミラージュ」を導入した東京小岩の「サンパレス」の模様。

●「計数管理の本格的幕開け時代」のその1。ダイコク電機の「分類機」。何を分類するのかといえば、長期間の稼動データから機種別稼動率や出玉率、評価値など、きめ細かいデータの分類、抽出をするというものである。同社のその後の方向性がここからすでに窺える。

●平戸屋の「スーパーライン」を導入した東京、小岩の「サンパレス」。ゲーム機でもなく、ギャンブル機でもない風営法認可機種であることをポスターでアピールしている。同店は左のロータリーマシンの導入店でもあり、こうしたメダル系に力を注いだホールなのだが、例えば関東連などはいち早くこれら遊技機の併設を自主規制するなど、ホールによってこうしたタイプの遊技機に対する思惑はかけ離れていた。

●この年に登場した歴史的名機の筐体をそのまま載せるのもちょっと芸がないかなと思い、ちょっとひねって…写真左が「フィーバー」が初お目見えした三共のこの年の展示会。この時の目玉機種は「ジュピター」という電役機であった。ご覧の通りで、展示会がどんどん豪華になっていった頃である。右上は平和工業の大ヒット機種、「メテオ」の製造風景。左下は京楽産業「UFO」を導入し、新装オープンをした名古屋の「大宝プラザ」。昭和の開店風景はどのカットを見ても熱気があって、しかも楽しそう。

●「計数管理の本格的幕開け時代」のその2。エースタック・システム81を導入した広島因島の「ホームラン」。エース電研のシステムはこのコンピュータと「クリーンマスター」、そして「サンドイッチ」を併せてホール近代化の三種の神器とまで言われた。

●手動ハンドル機をカセットで電動式に替えられた頃の日特連の許諾証紙。

■あくまでも今になって振り返ってみればだが、インベーダーブームが去ってフィーバーブームが始まるまでの端境期にあたるのが、この昭和55年。全国の遊技場はまたも減少し、この4年間で1割の1048店舗がなくなった。この頃から始まった余暇開発センターの調査ではパチンコ参加人口は2449万人で、1人あたりの年間支出額は2万円、1回あたり支出額はたったの1100円である。「キャバレー・クラブ」の9分の1、麻雀よりも低く、ゲームセンターと大差ないというレベルだ。貸玉料金の1個4円は完全に定着し、景品単価の上限はまたも引き上げられて2500円になるなどしたが、ホールにおける稼動と売上の減少に歯止めがかからず、景気の低迷も相まっていい要素が見あたらない。ここで奮起したのが（これも結果からみた場合なのだが）遊技機メーカーで、平和工業の「メテオ」、京楽産業の「UFO」が大ヒット。80年代の電役時代の到来を窺わせた。やはりこの年に出た三共の「フィーバー」が普及するのは翌年だが、この年の暮れには、あの「長岡詣で」（79ページ参照）が始まる。また、この数年でシェアを高めていたアレンジ、雀球などのメダル物も電子基板を搭載したタイプが主流になるなどの進化をみせた。さらに、単なるゲーム機かギャンブル機かの両極端のイメージが強かったスロットも本格的普及期に入ったほか、同じ扱いのロタミント（スロットの回胴式遊技機に対し回転式遊技機という）でも風営法認可機種が登場するなど、ホールに置く遊技機が多様化。が、ホール組合ではこうした新興勢力に対するアレルギーが強く、自主規制で設置比率に歯止めを掛ける動きも広まった。対するスロットメーカーはこの年、日電協を結成。その後の様々なジャンルの遊技機の興亡をみると、やはり組織化することの意義の大きさを感じさせる。これも結果から見た場合なのだろうが。

ヒット商品開発秘話①

(平成12年2月23日発行「パチンコ・パチスロ産業フェア2000」特別号より、一部加筆修正)

半年間見向きもされない「使えない機械」が業界を救う

超特電機第一号『フィーバー』/株式会社SANKYO

半年間見向きもされない、
使えない機械が業界を救う

パチンコ業界における名機は数々あれど、フィーバーほど短期間に人気が爆発し、社会現象になった遊技機はないであろう。この遊技機が発売当初まったくの不人気だったことは語り草だが、あらためて話を聞くとそれなりの理由が隠されている。(年数等は2000年当時のものです)

過去幾度となく衰退の危機を乗り越え発展してきたパチンコ産業であるが、窮地からの挽回には必ずと言っていいほど新機軸の遊技機の存在があった。その代表的なマシンといえば言うまでもなく株式会社SANKYOが19年前(編集部注・2000年当時から振り返って)に世に出した『フィーバー』に他ならないだろう。

当時同社の技術部に席を置き、その開発に深く関わった関係者の話を聞くと、この遊技機が業界を救ったのみならず、周辺機器やパチンコホールのスタイルにまで大きな影響を与えたことがよくわかる。

前年からのインベーダーゲームによって若者のパチンコ離れが進み、稼働の落ち込みが目立っていた昭和55年の夏。大阪で開催されたSANKYOの展示会に、これまでのチューリップとは違う『アタッカー』という目新しい仕組みを取り入れた新製品が登場した。これこそが輝ける『フィーバー』の第一号機。この遊技機はチャッカー入賞によってスロットマシンのようなドラム(1ラインしかなかった)が回転。太陽マークがぴたりと三揃いし、なおかつ上部のセグメントに7が点灯すると前途の大入賞口であるアタッカーが開放。30秒以内に中央にあるVゾーンに玉が入れば開放が再度発生するという、それまでのチューリップがらみのパチンコ台とは大きく異なる遊技性を持っていた。当時のパチンコは役物といえばチューリップが基本。『開きっぱなしになる役物』などというのは考えようもないコロンブスの卵的な発想であったのだ。

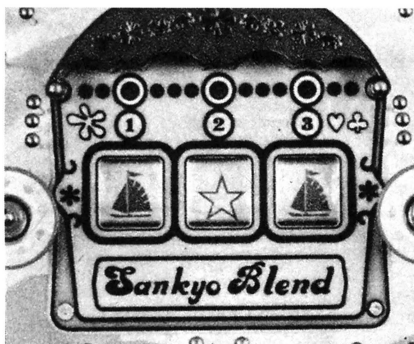
しかしながらこの最新遊技機、その際の大阪展示会では実は島の片隅に小規模に設置されただけであった。もっと率直に言えば『参考出品』に近い程度の扱いだったのだ。その理由はこの新機種の、従来機とあまりにもかけ離れた出玉の多さにあった。

「開発してみたものの、営業サイドでは『これは使いものにならない』という意見が強かったんです。一度にこれほどの大量の出玉があるのでは営業的バランスが取れない、つまり使いこなせないだろうというのがその見方でした」(SANKYO関係者)

当時のチューリップがらみのパチンコはなんらかの役物の作動があっても一回当たりの出玉量は数百個がいいところ。いわばハネ物以下の穏やかな出玉しか期待できなかった。当然ながら営業の上で大きな比重を占めたのは釘調整で、この部分が客付きを左右した。そんな時流にあって『フィーバー』は30秒以内にVに入れば、延々と繰り返しアタッカーが開き続ける。一挙に数千から打ち止めがなければ数万個もの出玉を吐き出す機械はコントロール不能の暴れ馬のようにしか遊技場経営者の目には映らなかったのだろう。フィーバー1号機の登場は夏なのだが、最初の約半年はまったく見向きもされなかった。従ってスロットマシンから取り入れた斬新なアイデアであるドラムアクションも、まるで脚光を浴びなかったのである。

第一号フィーバー。大当たり図柄は7ではなく太陽であった

ところで話は逸れるが、このドラムというアイデア、実はこのフィーバーが最初ではないのを読者はご存じだろうか？「昭和52年に開発した『ブレンド』という機種がドラムを取り入れた第一号で、フィーバーの原形です。この機械はドラムが揃うと盤面の5つのチューリップが一斉に開くというものでした。しかし、この機種にはちょっと問題があった(笑)」(SANKYO関係者)

この『ブレンド』にはパチスロと同じようにそれぞれのリールを停止させるためのボタンが3つ付いていたのだが、ソフト基板によって大当たりを抽選しドラム制御を行っていたわけではなく、ハード側のタイミングによって抽選していた。つまり、狙ってボタン

フィーバーの原型となった「ブレンド」のドラム部分。ストップボタンを押して図柄が揃うとチューリップが3～5個開放するという電動ヤクモノ機だった。

朝からアッと言う間に満席となり、立錐の余地もない昭和56年当時のフィーバーの島。（ホール名など不明）

を押すことで攻略できてしまったのである。これは同社でも計算外のことだった。

「いまの言葉で言えば技術介入性が非常に高い機種だったわけです（笑）。ファンにはたいへん喜ばれましたが」

もしかするとフィーバーは、この攻略されてしまったブレンドの先入観もあって、とっつきが悪かったという面もあるのかも知れない。

話を戻す。展示会での来場者の反応の悪さばかりが目立ったフィーバーは、夏に発表され秋を過ぎても引き合いがほとんどない。当時のフィーバー機の導入は、大体15台前後の注文がほとんど。しかしフィーバーのような極端な機種は少数台設置したのでは放出台と回収台の差が歴然としてしまい、営業的に極めて使いにくい面がある。やはりこの機種は駄目だったな…。そんな諦めがSANKYOの営業マン達に広がっていた12月。新潟県長岡市にある一軒の遊技場から注文が入った。開けば、年末年始の目玉としてフィーバーを入れたいという。しかも相手側が欲しがっている台数は120台以上。驚いたのは当時のSANKYO側だった。

フィーバーを成立させた稼動重視の営業方法

「営業マンは『責任持てません』とまで言ったようです。しかし。そのオーナーの方は勝算があると踏んでいた」

フィーバーの、さらにはいわゆる『超特電機』大ブームの火付け役となったこの遊技場は、長岡市内の『白鳥会館』。そしてこのオーナーとは、エース電研の創業者である故・武本宗一氏である。この決断はあまりにリスクの高い賭けであったが、武本氏はまったく逆の発想に立っていたようだ。

「台ごとにこまめな釘調をしていた時代に、出る出ないが激しい遊技機を、大量に導入して稼動させて全体での割数を合わせるという思い切った考え方で営業した。これが成功のポイントだったのではないか」

フィーバーを大量導入してのオープン当日、店頭に貼られた『玉箱に入り切らないほどの出玉！』という宣伝文句に『白鳥会館』には数時間前から人の列ができた。そして、席を取れなかった客が背後で見守るなか、120台を越える新型機が一斉に稼働を開始しはじめた。ところが、1時間も過ぎないうちにつぎつぎと新台がダウン。ついには、あろうことか途中で島を閉めざるを得ない事態に陥った。

「ノイズ（静電気）による誤作動でした。対策基板を緊急製造してすぐに納入し乗り切りましたが、その後もこのノイズ問題にはずっと頭を悩まされ続けました」

対策を施された『白鳥会館』のフィーバーはその翌日から満席の大盛況。あっという間に打ち止めまで突っ走るこの機械に、ファンはこれまでにない刺激を受け、店内は異様な興奮に包まれたという。その人気は日を追うにしたがって鰻上りとなり、島は連日座れない見物人が人垣を作った。そして、年明け。SANKYO営業部の電話は、評判を聞き付けた遊技場からのコールが続々入りはじめ、『使えない』はずのフィーバーは全国に瞬く間に出荷されて行く。そして昭和56年、業界はそれまでになかった一大成長を見るのである。

フィーバーが業界にもたらしたものは、単なるファンの獲得と市場の拡大にとどまらない。たとえば補給装置。ひと島で大量の出玉が集中する可能性があるフィーバーの出現は、従来までの補給速度では追い付かず、ラインの高性能化を促した。同様の理由で計数カウンターなども大きく能力を向上させる。そして遊技場の在り方も、釘師による台毎のアナログな調整と家業的経営から、一律調整と補給コンピュータのデータを軸にした近代経営へと様変わりした。間違いなく、フィーバーの出現がなければ、業界の規模はここまでにはならなかったはずだ。

当時をよく知るSANKYO関係者は、同社にとっても最大の貢献機であった初期型フィーバーの写真を手に取りながら当時を懐かしみつつ、21世紀に登場させるパチンコについてこう語る。

「ドラム式はこだわりをもってこれからも作り続けていきたい。液晶にはない迫力があって好きだという固定ファンがいるんです」

遊技機というものは、ときにメーカーやホールでも予測外の突拍子もないものがヒットすることがある。必要なのは柔軟な発想だ。業界を活況に導く、新たな発想の機械開発を切に期待したい。

（平成12年2月23日発行「パチンコ・パチスロ産業フェア2000」特別号より）

“オリンピアマシン”から“パチスロ”へ

山佐株式会社／執行役員　吉國純生氏

欧米のスロットマシンをベースに、日本独自の進化を遂げた回胴式遊技機。今では140万台以上が市場に設置され、多くのファンに親しまれている。飛躍のきっかけとなったのが、今から31年前の昭和55年、山佐が開発し世に送り出した「パチスロ・パルサー」(製造・尚球社)だ。同機は、CPUの採用といった現在のパチスロの原形となる技術が多数盛り込まれたパチンコサイズスロットマシンであると同時に、今に続く「パチスロ」という言葉を最初に使った遊技機として知られている。ここでは、山佐の吉國氏に、パチスロの黎明期を「パチスロ・パルサー」とともに振り返ってもらった。

「パチスロ」の黎明期を語っていただいた吉國氏。今や当時を知る数少ない業界人のひとりで、その話は貴重だ。

アップライト型からパチンコ型へ

――「パチスロ・パルサー」開発当時の市場状況を伺えますか。

吉國　全体の設置台数は1万台強といったところでしょうか。なかでも昭和54年頃にかけては、㈱マックス商事（後のマックスアライド）の「ジェミニ」の人気が高く、設置されていた比率も多かったですね。市場もこれからどんどん拡大していきそうな雰囲気を感じていました。

――それまでのオリンピアマシンと違い、「ジェミニ」には、ビッグボーナスが初搭載されることで人気を得ましたが、後に、ボーナスゲームを狙い打ちできてしまう問題が生じてしまいました。

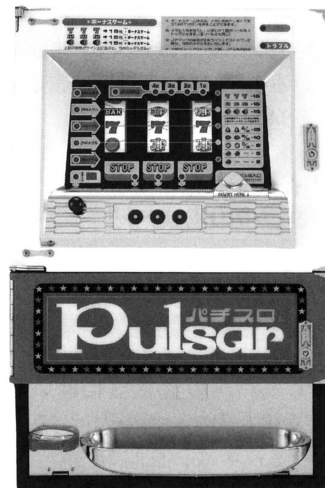
吉國　技術的に問題だったのは、「ジェミニ」に代表されるアップライト型のスロットマシンは当時、メカ・リレー式の制御を採用していた点です。そのためストップボタンで狙い打ちができてしまいました。それでも「ジェミニ」はメカ式であるにも関わらず、当初から4コマ、5コマ制御を搭載し、簡単に狙い打ちができないような仕組みになっていました。ただ、リールの停止位置はこのいずれかだったので、狙った図柄周辺でストップボタンを押し、タイミングが合えば図柄が揃ってしまいます。熟練者はこのタイミングを利用してボーナスゲームを狙い打ちしていました。これは導入店にとって深刻な問題です。それに当然ですが、その打ち方が広まるにつれ、販売台数は伸び悩み、撤去する店舗も出始めました。私たちメーカーも、市場の今後に危機感を抱かざるを得なかったですね。

――そこで考えだされたのが、「パチスロ・パルサー」に搭載されたCPUとステッピングモーターの組み合わせですね。

吉國　この組み合わせで、機械があるコマに停止させると決めたら、絶対そこに停止させるランダムではない正確な1コマ制御を実現し、ボーナスの狙い打ちを防止することが可能になりました。と同時に、CPUの搭載は、基板の小型化が図れ、パチンコサイズの実現に寄与しました。というのも、当時は狙い打ち防止対策だけでなく、アップライト型のスロットマシンを小型化できないか、という要望が高かったからなんですよ。

アップライト型は構造上、どうしてもレバーを引く高さ、奥行き、幅などを確保するために、一台ずつ離して置かなければなりませんでした（※下写真参照）。なので、必要なスペースはパチンコ機の倍近くにもなります。必然的に設置はパチスロ専門店がメインとなりました。パチンコと併設していた店舗では、店内の一部をベニア板などで仕切って営業していましたね。つまり、スロットマシンの

アップライト型スロットの代表作「ジェミニ」の導入店。レバーを引くスペースを取るため台間を空けて設置している。写真は東京大田区雑色のホール「万両園」で昭和53年に撮影された。同店はパチンコ機との併設で16台を導入。少し分かりにくいが、壁に景品交換に必要なメダル枚数を掲示しており、当時の「ジェミニ」設置店の多くは、風営法認可機として景品交換できる点を客にアピールしていた様子が見て取れる。

3メダル5ラインのスロットマシン第1号機となった「ジェミニ」。東京では昭和51年10月に認可されている。当時の広告に打ち出されたキャッチコピーは、「景品交換O.K」「パチンコ併設O.K」。

現行パチスロの原形になった「パチスロ・パルサー」。当時の売り文句は、「コンパクトタイプで注目の新登場!!」と、パチンコサイズに小型化した点を強調している。シリーズ機として考えても30年以上に渡る最長タイトルだ。

●昭和45〜54年の回胴式遊技機設置台数

年（昭和）	パチスロ台数	パチンコ台数（参考）
45	9,494	157万1000
46	9,414	161万5000
47	9,549	162万9000
48	9,701	171万3000
49	10,098	179万2000
50	10,340	191万7000
51	10,574	199万
52	10,436	197万9000
53	10,302	196万2000
54	9,961	188万3000

※（警察庁調べ）昭和50〜53年は10月末、それ以外は各年末の数値となっている。

昭和55年の秋、神田のみとやに初導入されて以来、56年の夏までに約30店舗1000台超の出荷を果たしたパルサー導入店の様子（店名は不明）。台売上は当時のデジパチを大きく上回っていたという。

●昭和57年当時の各都道府県別・回胴式遊技料金一覧

県　名	認可	貸メダル料金	県　名	認可	貸メダル料金
北海道	○	20円	滋　賀	○	10円
青　森	○	6枚50円	京　都	○	10円
岩　手	○	10円	大　阪	○	10円
宮　城	○	20円	兵　庫	○	10円
秋　田	○	10円	奈　良	○	10円
山　形	○	10円	和歌山	○	10円
福　島	○	10円	鳥　取	○	20円
茨　城	○	10円	島　根	○	20円
栃　木	○	6枚50円	岡　山	○	20円
群　馬	○	10円	広　島	○	20円
埼　玉	○	20円	山　口	○	20円
千　葉	○	3枚20円	徳　島	○	20円
東　京	○	20円	香　川	○	20円
神奈川	○	20円	愛　媛	○	20円
新　潟	○	10円	高　知	○	20円
山　梨	○	20円	福　岡	○	20円
長　野	○	20円	佐　賀	○	20円
静　岡	○	20円	長　崎	○	20円
富　山	×	-	熊　本	○	10円
石　川	○	10円	大　分	○	20円
福　井	×	-	宮　崎	○	20円
岐　阜	×	-	鹿児島	○	20円
愛　知	○	20円	沖　縄	○	20円
三　重	○	10円			

昭和57年9月当時、メダルの20円貸しが可能だった地区は1都1道23県。回胴式遊技機の設置が認められていない県も存在していた。特徴的なのは近畿エリア。2府4県全てで、1枚10円貸しに統一されていた。

さらなる普及には、パチンコとの併設を簡単に行えることが必要で、そのためにはパチンコ島に導入できるように、パチンコと同サイズにすることが最良の方法でした。加えて、付加設備を含めると1台で100万円〜120万円もする価格の引き下げ要望も強かったです。（※当時のパチンコ機の価格は1台8〜10万円ほど）。

——狙い打ち防止対策に、小型化、あげくに低価格化という課題が突き付けられたわけですね。

吉國　ただ、悲観的にはなりませんでしたね。逆に、次の段階に進むために我々が取り組まなければならないことがはっきりし、結果として新技術を搭載したパルサーの開発にこぎ着けました。その後、昭和55年に、東京都公安委員会の認定証明を、今でいう検定通知書になりますが、当時の製造協力会社であった尚球社製の「パルサー1」で頂いたのが最初です。

——尚球社について少し聞かせてください。それと、「パチスロ」という呼称はどうやって生まれたのですか。

吉國　尚球社はもともと、大阪のパチンコ球メーカーでした。工場に量産が可能なライン設備を持っているだけでなく、製造には欠かせないユニット部品生産のインフラを有していました。パチスロというのは、これはシンプルに「パチンコサイズスロット」の略ですよ。

多くて1日30台を手作りで生産

——設置の許認可ですが、当時の状況はどのようになっていたのですか。

吉國　東京を皮切りに、各県の公安委員会で遊技機検定願（今の検定申請）を行っていきましたが、これは大変でしたね。当時は、それぞれの公安委員会独自の考え方があって、許可を頂くには多くの日数が必要でした。県によっては、最初から検定申請願を受け付けない地域もありました。販売よりも先に、設置できるできないの確認が前提条件だったのです。しかも当時は、公安委員会の検査に実機を持っていかなければなりませんでしたので、機械を車に乗せて全国を飛び回りました。今思えば、一生のうちで一番車を運転した時期かもしれませんね。

都道府県での違いといえば、この頃から昭和60年の風適法施行までは、低価貸しという、今あるような営業戦略上の料金設定ではなく、あらかじめ設けられた都道府県の決まりに沿って貸しメダル料金が設けられていました（※別表参照）。その金額がバラバラでしたので、ソフト対応に追われたことを覚えています。

——当時の生産体制をうかがえますか。

吉國　昭和56年5月に発売した「パルサーⅡ」から製造元を岡山県の日活興業（山佐）に切り替えていますが、当初の生産体制はお粗末というか、のんびりとしたものでしたよ。ほとんどが手作りだったので、製造できたのも、1日に10台から、多くても30台でした。ヒットしたとはいっても、まだその当時は、販売台数も多くなく、製造ラインの拡張を必要としなかったからなんですけれどね。

パルサー初導入は神田の「みとや」

——導入後の感触はいかがでしたか。

吉國　最初の導入店は神田の「みとや」さんでした。それからの2年間は、許可の関係上、東京を足がかりに岡山、広島、香川、兵庫、福岡の約40店舗に導入して頂きました。そのいずれも併設で30台強という大量導入が多かったです。確かに、価格を低減したことに加え、パチンコ島への設置が簡単にできるということで注目を浴びましたが、これだけの大量導入には思い切りも必要だったと思います。我々としては、その期待に応えることに懸命でした。結果的に、導入後の稼動はどこも100%近く、それを目の当たりにしたときはじめて、「これならいける」という自信を抱くことができましたね。

——リーチ目もパルサーが最初です。

吉國　リーチ目は、ボーナスゲームの内部成立時にボーナス図柄を引き込めなかった場合、ボーナス図柄と代役図柄をテーブル制御で決定された停止位置で出現させるというものです。これを何千パターンも用意し、パルサーは大量リーチ目スロットマシンと呼ばれました。

——販売網の整備はどのように。

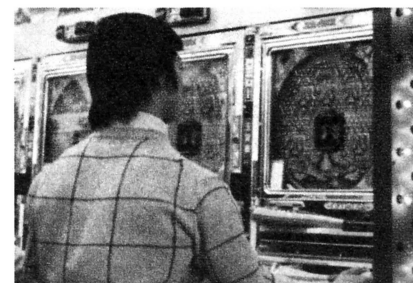
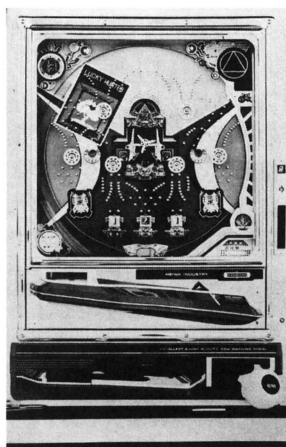
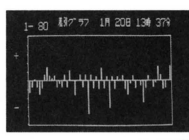
吉國　導入店の評価が上がるにつれ、全国の販売網を整備する必要性が生じてきました。それからは業者選定に明け暮れましたが、採用業者の多くが素人さんでした。これも黎明期ならではのことですね。今はそれからもう30年以上たちました。今と当時では市場規模が大きく違いますが、今後もパチスロ市場が健全に発展していくことを心から願っています。

■昭和56年は業界にとってフィーバーブームに沸いた年であることは間違いないのだが、それはその後の景況感の良さから語られるひとつの側面に過ぎない。業界の歴史として振り返ると、従来の特電機を超えた性能に業界全体が戸惑った「超特電機問題」の年という側面の方が大きい。前年暮れから巻き起こったフィーバー旋風は、一度図柄が揃うとVゾーンに入るたびにアタッカーが開放し、玉箱代わりにバケツを用意しないと間に合わないという、あまりの射幸性の高さを警察庁も問題視。6月3日に全遊協と日工組に対して、7月15日以降に新設する超特電機は、初回を含めてラウンド数は10回まで、スタートの記憶は4個までなどとする新要件を通知した。併せて、9月末日までに現行設置機はこの基準に合わせて改造するよう促している。それに先駆けての5月27日には、全遊協が営業面における自主規制を制定。超特電機は総設置台数の30%以内とすること、玉箱にバケツを使用しないこと、「ただいま○○番台フィーバー中」などの店内放送を控えることなどを盛り込み、即日実施した。が、この時点ですでに33万が市場に出ていただけに、「すでに30%以上ある店はどうするのか」「基板交換に関わる改造費用は誰の負担か」「デジタル付きアレンジも含めるのか」「10月以降の新要件機は自主規制に関係ないのか」などの混乱が広がった。改造費用問題では全遊協と日工組との全面対決になるのだが、いずれにしても、この全遊協の自主規制と警察庁の素早い規制が、結果的にフィーバータイプを守ったこととなり、その後の業界発展の礎のひとつになったと振り返る業界関係者は多い。混乱の中にあって、組織としての舵取りを誤らなかった好例だろう。ちなみに、前年の暮れには、ホール営業の不振を理由に、全遊協と日工組とで「1分間の発射個数を100個から130個に」「1回の最高賞球数を15個から25個に」と警察庁に陳情していた。「二要件の改定陳情」というものだが、そういうことをしなくても、その直後に射幸性が跳ね上がったのだから、なんとも皮肉である。

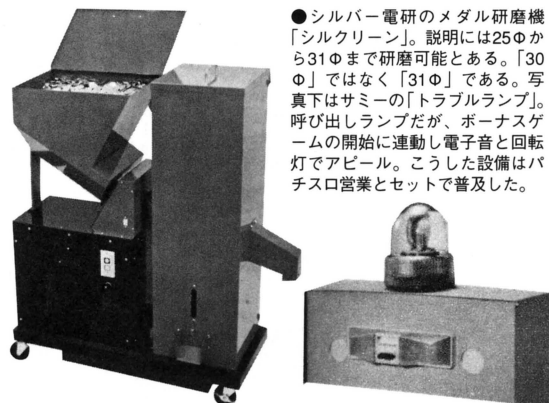
●射幸性の高さを問題視する警察庁による規制に先駆け、この年の総会において営業面での自主規制を決めた全遊協は、さらにこれを徹底させるために6月15日の緊急理事会（写真）で「超特電機を30%以上置いているところは7月15日までに撤去する」「打ち止め個数は打ち込み玉も含めて5000個以内にする」という2項目を追加した。左は三共の「フィーバー」を導入した川崎の「ニュージャパン」。このモンスターマシンの登場は業界を一変させた。

●オール平和機でオープンした神奈川県横須賀市の「平楽」の開店模様。オープン直後の混乱の中でも釘をきちんと読んで台選びをする客が多かった時代である。

●上野タカラホテルで開催された大一商会と藤商事の合同展。当時はこうした試みが時折、見受けられた。会場は弊社編集部から徒歩10秒で、取材がラクだった。余談だが。

●奥に島が見えることからも分かるように、ここは本屋ではない。東京神田の「アイウエオ」。ご覧の通り、立ち読み客が多く、やっぱりパチンコ店には見えない。

●奥村遊機の超特電機「スカイラブ」はチューリップの連動と電動ヤクモノ、さらにボタン操作を組み合わせ、複雑だがゲーム性に富んだ機械だった。

●セブン機とハネ物との区別がなく、全て「超特電機」と総称されていた頃の平和の「タイガー8」。そう、あの「ゼロタイガー」である。この年の10月からの新要件に対応したもので、ラウンドの継続回数は8回だが、当時は10カウント規制がなかった。継続率自体は低かった時代で1回の出玉にはばらつきが大きく、それだけにハネの開放時や大当たり中には思わず息を止めていた客が多かった。規則上でもハネ物の基準となったほか、ハネ物、ヒコーキタイプという名称も生んだ名機中の名機である。

●サン電子のホールコンピュータはブラウン管を採用して見やすさをアピール。写真は「T5000」に引き続き登場した「T7000」で、データをグラフ化してより見やすくなった。いわゆる「スランプグラフ」である。

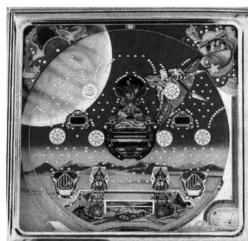
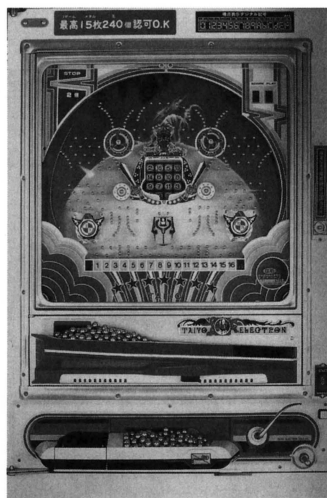
●福岡の中州にオープンした「ライオンズ・スタジアム」。店内には球場の売り子スタイルの女性スタッフ、オープニング音楽は軍艦マーチではなく「甦れライオンズ」、店頭には自店のアピールではなく、「返せ！ライオンズ」ののぼり旗。熱狂的ライオンズファンの社長、所沢に移転して3年が経過しても忘れることができず、こうした店にしたのだという。ちなみに、この3年後の58年の西武優勝では、店頭でくす玉を割ったり振舞酒をしたりの祝勝会。で、社長は「西鉄ライオンズの東尾バンザーイ！」。

●サミーのパチスロ「エンパイア」を導入した横浜の「ゴールドセブン」。四角四面だったパチスロに丸みが出て、なんとなくカッコいい。なお、この店ではシルバー電研のホッパーを使ってコイン回収の手間を省いた。今につながるパチスロの島構造の原型ともいえる。

●シルバー電研のメダル研磨機「シルクリーン」。説明には25Φから31Φまで研磨可能とある。「30Φ」ではなく「31Φ」である。写真下はサミーの「トラブルランプ」。呼び出しランプだが、ボーナスゲームの開始に連動し電子音と回転灯でアピール。こうした設備はパチスロ営業とセットで普及した。

●パチスロ普及とともに設備も充実。左から大泉製作所、グローリー、大都製作所の紙幣対応メダル貸機。

●計数機は左上が大泉製作所製で右がナダ電子製。下は東洋テックの計数機。玉もメダルもこの1台でOKというもので、要するに重さで量る変わり種である。

■超特電ブームに沸き、出店ラッシュとなったのが昭和57年。山佐が先鞭を付けたパチンコサイズスロット、いわゆる「パチスロ」も夏には10社から登場。高い売上を誇るこうした遊技機の普及はめざましかった。が、各公安委や県遊協の考え方で地域差が大きかった時代。スロットの遊技料金は大別すると1枚10円と20円の地域に分かれていたが、青森などは6枚50円、千葉は3枚20円など、貸機メーカーを悩ませた。そうした多少の不都合はあったものの、こうした新興勢力の台頭で遊技機台数はこの年の10月末現在で200万台を突破、1万軒を割っていたホール数も1万0303軒に回復している。が、そうそういい話ばかりではない。全遊協が前年に設定した超特電機自主規制では、アウトサイダー問題で紛糾したり、「執行部の店でも守ってないではないか」と問題になったりと混乱。しかも、この頃からもっと根深い問題出てきており、改造基板による違法機の存在がクローズアップされてきた。要するに、「見た目で分からない不正機」の登場である。中には7揃いの1コマズレでも大当たりになる見た目で分かるものもあったというが、いくつかの県警が強硬姿勢を取り始める。なお、この年、娯楽施設利用税は標準税率で250円から280円にアップすることが決まったが、業界の陳情で先送りに。また、この年の4月から500円硬貨が登場するのだが、売上、粗利のアップのお陰で改造費用は賄えた。

●メーカーの開発努力がどんどんたくましくなった時代。上は三共の「ソフトハンドル」。ハンドルの角度に注目。真ん中は太陽電子が開発した「アレパチ」。アレンジはこの年、最高得点が10点から15点になるなど基準が緩和されたが、スピード感とスリルが不足。超特電機に押され気味になっており、これに奮起した同社がアレンジの良さとパチンコの良さを合体させた。写真右上は奥村遊機の「ロイヤルエース」で、下は大一商会の「コスモパワー」。これらはもう、当たり前だが好きなヒトは好きな機種であった。

●写真が小さくて申し訳ないが、よく見ると…。左は長崎の「えびす浦上店」。よく見ると飛行機が刺さっている。当然、ディスプレイだが、張りぼてではなくて本物。真ん中は船橋の「薬園台ホール」で、ドアには「託児所」の文字。若い主婦層に好評で稼動が3割アップしたそうだ。右は店内にDJブースを置いた新宿歌舞伎町の「ラスベガス」。文化放送のキャンペーンガールによるプロの喋りが店内に流れた。よく見るとホント、美人なのである。小さくて申し訳ないが。

●超特電機ブームで従来とは違う調整技術が求められるようになったほか、新店ラッシュで技術者養成のニーズが高まり、上野の釘学校は大繁盛。

●仕事でも遊びでも女性の社会進出はまだまだ進む。写真上は名古屋の「今池プラザ」で行われた女子大生300人を集めたイベントの模様。写真左はそれとは対照的で、多くのおばあちゃんで賑わう東京池袋の「ひかりホール」の女性専用コーナー。この頃は、女性専用コーナーではなく、「女性専用台」を置く店もあった。で、プレートに気付かずに遊ぶオヤジの姿も時折、見受けられた。こうした台は概ね甘く、少なからずの男性客は理不尽さを感じたものである。

月刊パチンコ情報 6 250
ユリ・ゲラー
超能力で打ちどめ
創刊号

●攻略マガジンや必勝ガイドに6年も先駆けて創刊された「月刊パチンコ情報」。超特電機の普及で必勝法が従来のアナログ的手法から変化したのは分かるが、「ユリ・ゲラー　超能力で打ちどめ」という特集がメインなのは、どうなのだろうか。

●ホール組合の結束が固かった地域は、組合行事も盛んだ。宮崎の延岡地区組合は晴天にめぐまれた10月のとある日、なんと全店休業しての大運動会。

●ひとつのホールの開店に携わる業者数も増えてきた。もはや開店花輪も飾りきれない。千葉八千代市の「山一ホール」。

●アイ電子の「PC-8800」の本体とモニター部分。高解像度のカラーモニターで必要なデータをグラフィック表示。操作の簡易さもあいまって、注目を集めた製品である。

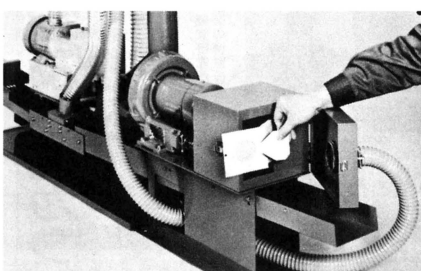
■行政との信頼関係に亀裂が生じ、それが形となって現れ始めた。ただでさえ射幸性の高い超特電機にダブルフィーバーとかモーニングとか、「見た目では分からないが当たってしまえばすぐ分かる」ロムの改造が横行し、行政の態度はどんどん硬化。日工組はこの年の1月から基板点検と封印作業を開始するのだが、千葉の地元紙では、「パチンコ・フィーバー禁止か」の見出しが踊った。千葉といえば、その報道直後に県警が超特電機で10カウント規制や使用期限等の厳しい独自措置を打ち出し、業界を混乱に陥れたのは古い人であれば周知の通りだ。また、静岡県警も改造されるケースが多かった6機種を名指しして、3月末までの撤去を指示。静岡は普及が進んでいたパチスロ機で新機種はもとより、一度許可したものでも更新は認めないとするなど、不正に対して非常に厳しい姿勢を打ち出してた県のひとつ。さらに、愛媛県警は10月の一斉立入で超特電機の登場で増えた固定ハンドルを軸に、県下63ホールに警告書を発出している。警視庁の対応も硬く、昭和56年には年間903機種あった認定機種数が57年には190機種にガクっと落ち込み、さらにこの58年は6月中旬までの半年間でわずか1機種という惨憺ぶり。やはり、不正機はいつだって業界側にマイナスにしか働かないことを肝に銘じるべきか。なお、一連の行政の厳しい姿勢の背景には、前年の大阪府警賭博ゲーム機汚職事件もあった。いずれにせよ、この頃の警察行政は、全体にパチスロに対して厳しく、ホールの入れ替え申請の許可を保留するところが続出している。この年の日経ビジネスでは、エレクトロニクス化が進むパチンコ業界を特集しているが、こうした技術革新に警察行政がついていけず、認定作業が遅滞するという側面もあった。

●前年に開店した大宮の「ジャンボ宝」は、果物屋さんと見間違うほどの景品コーナーが特徴。土日でみかん100箱、スイカ10ケース、メロン20ケース、そしてさくらんぼ100箱を出したというから驚きだ。「景品持ち帰り運動」に真面目に取り組んだホールである。

●不正改造問題で揺れる2月の全機連総会。基板封印を軸とした対応強化を確認したが、その直後、警察庁はホールに対して許可営業者であることの自覚を強く促す一方、供給側にも製造責任を追求する構えを見せた。

●この年からミス・パチンコが登場してパチンコ感謝デーに華を添えた。1200名もの応募の中から選ばれた初代ミスは写真の榎本明美さんで、感謝デー期間中は全国を奔走。ちなみに「吉里吉里国」でブームとなったミニ独立国家「ヨロンパナウル王国」の初代女王でもあった。仲畑貴志作詞、市川昭介作曲の「パチンコマーチ」も歌った。

●店内における空気環境への配慮も進む。上はJ.Gコーポレーションの空気清浄機を導入したホール。左は東京、田無にオープンした禁煙ホールの「ジュピター」。500台中、200台を区切って禁煙に。

●景品コーナーにドーンと置かれたこの装置。セガ・エンタープライゼスが出した景品自動払出機である。埼玉・川口のホールに初導入された。

●島還元のベストセラー、西陣のスペースラインに「ザ・シャトルワン」が登場。研磨材も一緒にきれいにし、研磨屑と集塵も自動回収するという画期的商品。

●インカムと監視カメラの最新設備を導入して開店した東京・三崎町の「丸十」。従業員全員が学生アルバイトという、画期的で活気のある店が話題に。

●超特電機問題の先行きが不透明だった時期。東京・上野の「百万弗」は一般機オンリーでオープンした。

●当時人気のお笑いタレント、レオナルド熊を招いてイベントを開催した東京・東十条の「モナコ」。芸能人イベントが少しずつだが広まり始めた。

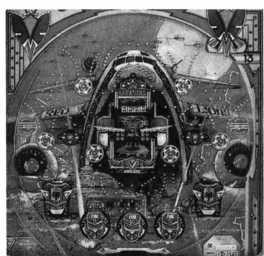
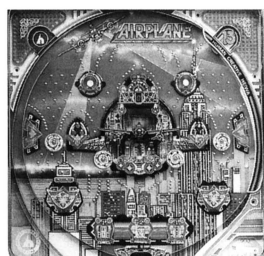
●10月に開催されたアミューズメントマシンショーは、日本のゲーム機のレベルの高さが注目され海外からも多数来場。勉強熱心な西ドイツの視察団は、日本独自の遊びも学ぼうと平和工業とソフィアの工場を訪問。

■超特電機問題がまだまだ落ち着かないのに、追い打ちをかけるように風営法改正の話が急浮上した昭和59年。超特電機問題では千葉の30秒10カウント規制が2月から実施され、県内のホールは売上が2割から3割ダウンしたというが、結局これは千葉だけの問題に留まらず、警察庁が全国的にアタッカー開放時間を15秒に制限する規制を通達した。既設機はこの基準に沿うよう改造することになるのだが、改造には当然、手間と費用が発生する。日工組と全遊協でその価格と改造方法を巡ってすったもんだの末、6月からは一斉に15秒機に切り替わり、案の定、ホールの売上はダウンした。ハネ物や一般電役機、パチスロに客が流れ、「超特電機は終焉」との声が出たほどである。一方、風営法の抜本改正はこの端境となる3月に急浮上した話で、この背景には野放しになっていたセックス産業の膨脹があり、青少年の健全育成と清浄な地域環境の保持に向けた法整備が柱に掲げられた。昭和23年、たったの8条で出来たこの法律は、その後、12回の改正を重ねたが、社会環境の大きな変化が抜本的改正を促していたのは事実で、法律の遅れを補うかのように、この少し前から関西エリアを中心に市条例でもってパチンコ店やラブホテルの建築規制をする自治体が増えていた。この改正案で業界には、立入調査権や管理者制度などに疑念が沸いたほか、型式の「認定」の基準統一化などがどんな影響を与えるかの予測が付かず、様々な観測が乱れ飛んだ。さらにさらに、この年の11月には新札が登場。ここでもまた、「改造」が促され、ホールの設備投資負担は増す一方であった。

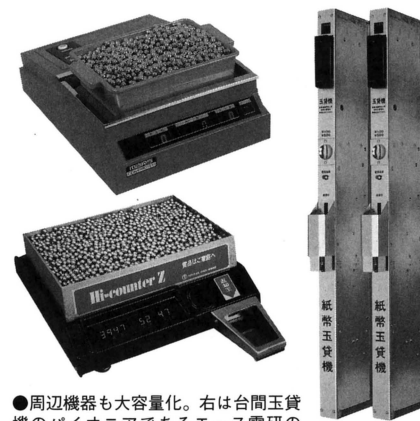
●約75万台ともいわれた「15秒機」。新法の機械規則で定めた「10カウント機」にとってかわった結果、ご覧の通りの廃棄処分に。この頃からマテリアルリサイクルを行う業者もいたが、その多くは焼却処分となった。これだけの台を一斉入れ替えしても文句が出なかったのは、実はそれだけの余裕があったからなのだろう。

■前年に成立した改正風営法の施行は昭和60年の2月13日。「かい人21面相」騒ぎで世相はざわついていたが、この新風営法施行の際も多くのマスコミが繁華街を取材し、その変わり様をレポートした。一般マスコミの興味は性風俗やスナックなどの飲食店であったが、業界も大きな変革の波に晒されたのは周知の通り。様々な整理整頓作業が進み、全国風俗環境浄化協会に全防連、遊技機の指定検査機関に保通協が指定されるなど、現行制度の枠組みが出来上がった。施行にあたって行政サイドでは、一般賞品はタバコの2割マージン以外は等価が原則であること、福祉に絡めた3店方式は理解を示したものの、これは行政が積極的に勧めているわけではないことを注意。遊技機関係では前年に改造された「15秒機」は「10カウント機」にとってかわり、短命「15秒機」は廃棄処分になった。また、パチスロみなし機は9月末日までの設置が許されたが、保通協もメーカーも初めての制度とあって検定作業に遅滞が生じ、期限に間に合うのか不安視する声も出た。一代限りの「みなし検定除外機」、「みなし検定機」、「検定合格機」の3種類が混在した時期である。なお、長く射幸性と健全性との狭間で揺れた超特電機は、射幸性が落ちたため設置台数の30%規制は不要という声も出たが、全遊協理事会はこれを堅持することを決議。しかもこの10カウント機、登場してすぐに一部の機種で押しボタンと出目表による攻略が出回り、今ほど構造変更に対する認識が深まってない時だったので、ボタンの配線を切るホールが各地で続出した。

●新風営法でもって射幸性が下がった上、検定の遅滞も生じていたパチスロ。10月には日電協主催で大規模な展示会を開催し、メーカー21社が新機種をアピール。

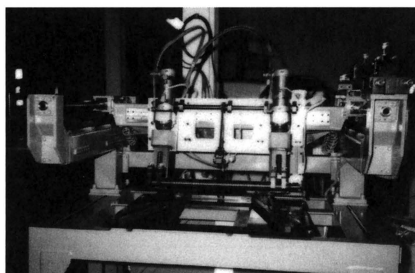
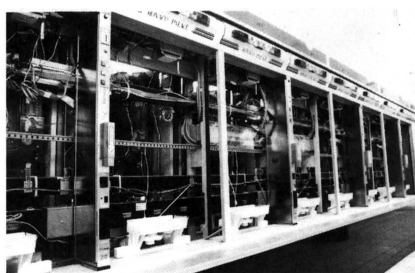
●昭和59年の欄で紹介した「丸十」が全員学生アルバイトなら、こっちは全員が女性スタッフ。東京・大島の「ダイアナ」。店舗の2階には託児施設を設けてベビーシッターも雇用、子どもを持つ女性でも働ける環境を整えた。

●新風営法施行直後のホールを支えた第2種ハネ物。写真左上が平和の「エアープレーン」。入賞すると光り輝く綺麗な台だった。右上が西陣「レッドライオン」。「ガオーピヨピヨ」の音と台ごとの癖でファンを魅了。左下が「キングスター」新規則バージョンの三共「ロイヤルキング85」。誰もがステージ奥のVゾーンに吸い込まれる様の快感に酔いしれた。これら3機種が全て新規則第1号機なのだから、今考えても桐生3社のハネ物の充実ぶりは素晴らしい。一方の第1種では、奇数だけではなく、全ての数字の3つ揃いで大当たりとなったニューギン「エキサイトヒーロー」がヒット（右下）。

●新風営法機で検定の遅滞が進んだパチスロでは、これが下りた機種のスタートダッシュと、射幸性の下落による様子見とが相まって微妙な時期。写真は検定をパスした西陣の「モンスター」を導入した東京神田の「みとや」。

●この年から現行検定制度がスタート。まだまだ不慣れだった頃の保通協の模様。

●周辺機器も大容量化。右は台間玉貸機のパイオニアであるエース電研の「キングサンド」。千円一発貸しという思い切った製品で、東京東中野のホワイトですでに稼動させていたものが、この年から正式発売。九州エリアを中心に爆発的にヒットした。左上はマースエンジニアリングの「PC-10」。あの底抜け式である。サイズもコンパクトで技術力とアイデアが光る製品で、実績のあったPOSとの組み合わせで普及した。その下は余り玉返却機能付きの大一電機産業「DSP-6000」。高速計数がウリ。

●全遊連創立35周年、全遊協結成20周年を記念して赤坂プリンスで盛大な式典を開催。歌や踊りや抽選会といった盛りだくさんのアトラクションとメーカーが協力しての大展示会でもって、ロイヤルルームには2500名もの人が押し寄せ、文字通り立錐の余地もなかった。この時、記念事業としてスタートしたパチンコ文化賞では社会党の土井たか子委員長（写真左。左は松波哲正理事長）、放送大学教授の加藤秀俊氏、日本長銀常務の竹内宏氏、作家の吉行淳之介氏の4氏が受賞。特に土井委員長への授賞は一般マスコミでも大きな話題となったが、その少なからずは批判的記事で、後年のパチンコ疑惑とリンクしてくる。写真上はジャンボスロットのリールを回す柳勲副理事長と、ジャンボパチンコを前に松波理事長と握手する日工組の武内理事長。

■フィーバーブームとなった昭和56年からのわずか3年間で、ホール数はなんと3500軒プラスの35%増、遊技機台数も100万台以上の伸びをみせていたのだが、新風営法の施行でこれが様子見状態となり、昭和60年は軒数は減、台数は微増にとどまった。急成長にも一区切り…と思われたこの昭和61年。実はここからまたほぼ同じポテンシャルでの成長が平成7年頃まで続くのだが、この時、そんな展開を誰もが予想だにしていない。バブル景気の初期であり、不況に強いと言われたパチンコは一般を相手にした娯楽である以上、好景気でも恩恵を受けるのは当然である。風営法改正の混乱も少しずつ落ち着き、新法では宙ぶらりんの状態になっていた中古機流通の仕組みもこの年の早々に出来上がった。が、遊技機関係では不正改造問題を軸に、まだまだ落ち着かない。電子基板搭載型遊技機の普及とともに広がったロムの不正改造事犯は、その撲滅が声高に叫ばれたがなかなか減らず、パチスロでは設置済み遊技機への基板封印作業が展開された。この頃の回胴式の台数は全国に18万台、行政側の3月いっぱいで終わらせろという指導に対し、日電協は作業人員延べ2万人、経費12億円をかけて作業。が、すぐに偽造封印シールが登場し、抜本的セキュリティ対策の必要性に迫られることになる。結果、翌年からは「改造防止機」としての1.5号機の時代に入ることになる。一方のアナログ的不正といえば、釘調整でもって射幸性の低い普通機がモンスターマシンに化ける一発機が普及し、全国的に物議を醸した。例えば都遊協はこの排除決議を行い、極端な釘調整がいらなかったマルホンの「フレンド」は4000個打ち止めにして残したが、他の一発台も4000個打ち止めならOKとばかりに、なぜか存在し続けた。

●この年、あの「ビッグシューター」が登場。ハネ物に対する平和の開発意欲の高さと、ヤクモノの微妙なバランスを具現化する技術には誰もが感心した。パチンコ機に関する各種アンケートでも必ず上位に入る名機中の名機。多くのホールの稼動を支えた。

●自動釘打ち機の宮山技術研究所がリサイクル時代の到来で、逆に釘を抜く高速自動釘抜き機「MTR-01」を開発。当時、中古機解体業者は全国に50社程度あった。

●好景気に支えられて千円紙幣対応の台間玉貸機が普及。写真は宮崎「モナコパレス」に導入された竹屋の島還元とアイラブユーの台間玉貸機兼紙幣搬送機。

●景品コーナーは凝ったレイアウトとファッショナブルな品揃えが進んだ。写真上は「辰巳蒲生店」。写真下の通り。パチンコ景品を入れる袋といえば茶色の紙袋が定番だった時代、オリジナルの景品袋を用意。

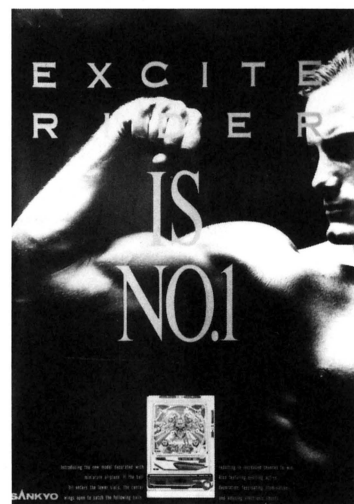
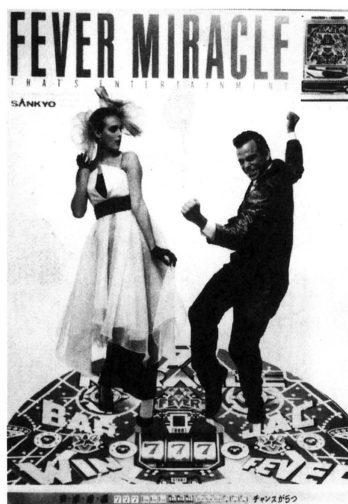
●フィーバーブーム以降の過当競争下に晒されたホールの女性客獲得に向けた動きが活発化。女性専門店、高知市の「レディース浜幸」は108台と小粒ながら、画期的試みに注目が。上は翌62年の写真だが、女性限定オープンイベントを行った福岡の「ドリーム」。卵1パックを玉10個で提供し、ご覧の通りの盛り上がり。

●パチスロメーカーの巨額脱税事件が起こり、一般マスコミによるパチンコ業界批判が加速した。警察OB議員との癒着や新たな保通協制度、AMマーク制度への疑問、ホール業者の脱税の多さなど、ネガティブ記事の幅がどんどん広がっていく。写真は「週刊現代」の5月24日号。

昭和61年のメーカーポスター

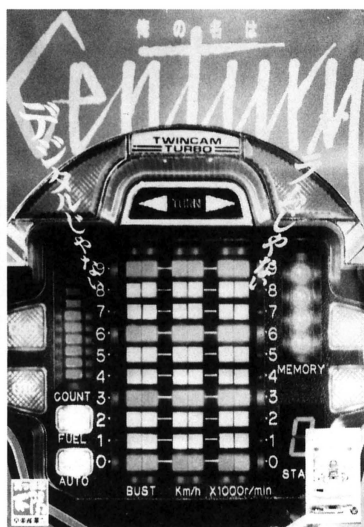
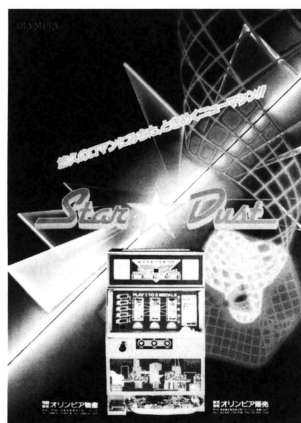
【三洋物産】

【西陣】

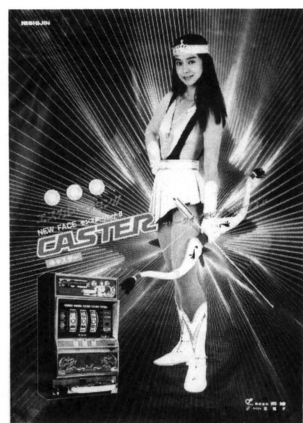
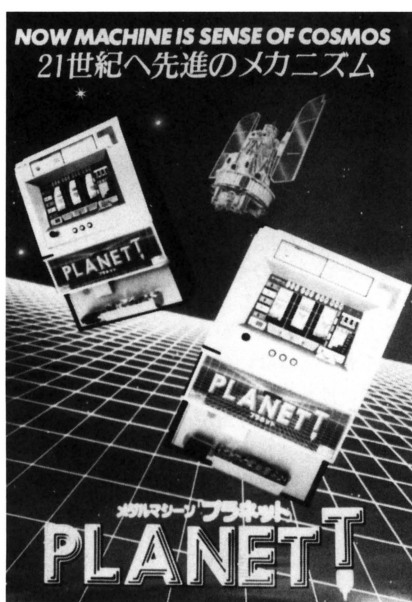
【三共】

【大一商会】

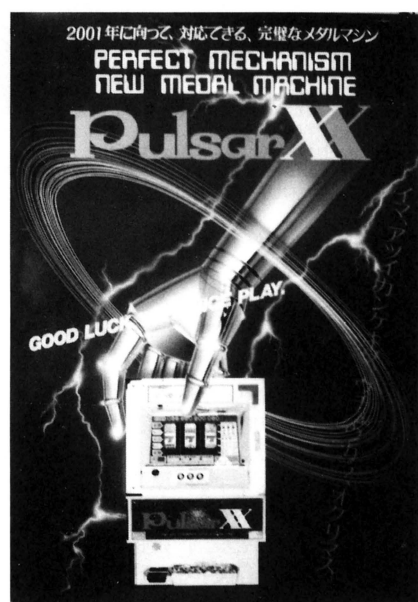
【遊技通信】

【平和工業】

【京楽産業】

【奥村遊機】

【オリンピア物産】

【興進産業】

【千里遊機】

【北電子】

【山佐】

【ユニバーサル販売】

【日活興業】

●貸玉スタイル多様化。エース電研「キングサンド」の千円一発貸しの威力は絶大（写真左）。写真上は前年の6月、関係官庁の許可を得て登場したセントラル通商の「エレクトラシステム」。上限千円、当日限り、精算機能付きのいわゆるハウスカードの登場である。右写真はまだまだ多い硬貨の需要で登場した「100円玉ホルダー」。三者三様。

●全遊協の第2回パチンコ文化賞は作家の野坂昭如氏、シェイクスピア研究の第一人者で知られる小田島雄志氏、そして女優の中村玉緒さん。

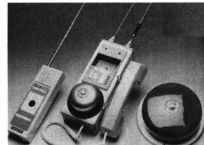
●開店音楽の定番はいわずと知れた軍艦マーチ。ホール向けレコードは少しテンポを早めていた。ちなみに、昭和20年代にこれを最初に採用した店については諸説あって不明。ちょうどこの頃から、ホールでは「ロッキーのテーマ」をかけるのが流行し、その後、F-1やプロレス曲を採用するホールが増えるなど、軍艦マーチを聞く機会はどんどん減っていった。

●大阪府下でホール経営者に携わる若手有志で結成した大遊青は、60年秋の「パチンコデザインコンテスト」で、新しいコンセプトのパチンコ機を一般公募して話題になるなど、新時代の到来を感じさせる数々の試みを行った。写真上は府下の施設の子どもをクリスマスに招待する「未来っ子カーニバル」の第1回目の模様。その企画力を多くの業界人が賞賛した。

●この写真、何かがおかしい。よく見ると、左手でハンドル操作している。筐体の左右に電動ハンドルを取り付けた京楽産業の「サンスカーレットV」。左側にもハンドルを付けた結果、灰皿が小さくなった。東京八王子の「毎日会館」で。

●売上税構想で景品への課税は死活問題だとして、全遊協は反対署名活動を展開。千葉の「松戸ホール」でパチンコ店の手を休めて署名する来店客。

●計数カウンタを2つ搭載し、大ヒット商品となったオーイズミ「WSディスクカウンター」とその製造風景。

●ホールの売上拡大で増えたのが景品交換所の強窃盗事件。大平商会は非常無線警報装置を取り扱った。写真左は照明社の「シマライト」。幕板が照明装置を兼ねた新製品。

■前年11月のファン感謝デーの一環として特別企画した、全遊協グアムツアーの応募総数はなんと30万通。うち200名を抽選で招待するという太っ腹企画で、いろいろと業界内には課題があっても、好景気だったことが窺われた昭和62年。この頃の全遊協の活動は充実しており、景品の家庭持ち帰り運動の一助としてカタログ景品の嚆矢となる「景品百貨店システム」の開発も行っている。伊勢丹の包装でパチンコの景品が宅配されるという画期的なものだったが、残念ながら利用客は少なく、高まる換金需要に対抗することはできなかった。また、NHKでは鈴木健二アナが司会の人気番組「クイズ面白ゼミナール」でもパチンコが取り上げられるなど、全体に楽しい話題も多いのだが、前年から沸き上がった大型間接税（売上税）構想などの不安要素も山積したままだ。それら諸々含めて、やっぱりこの年も迷走したのが不正機問題。前年に一斉封印作業を行ったパチスロ機では、すぐに偽造封印シールが登場。今度は特殊印刷した封印シールの貼付作業を全国40万台に行った。パチスロはこれを機にカスタムロムを採用した1.5号機時代になるのだが、パル工業「ニューペガサス」、オリンピア物産「ニュースターダストⅡ」、瑞穂製作所「ファイアーバード7U」など、ホールの稼動を長く支えた名機が揃った。一方、新型セブン機のいわゆる1300発機では、極端な釘曲げが横行。「おまけ付きセブン機」というものだが、前年の一発機同様、多くのエリアではこうした遊技機が即摘発されるということはなかった。不正機の存在を認めるわけではないが、普通機、ハネ物、セブン機、権利物、一発台、パチスロと遊技機の射幸性も機種バラエティも多種多様で、多くのファンを楽しませたのは事実であることは、是非とも覚えておいて欲しい。

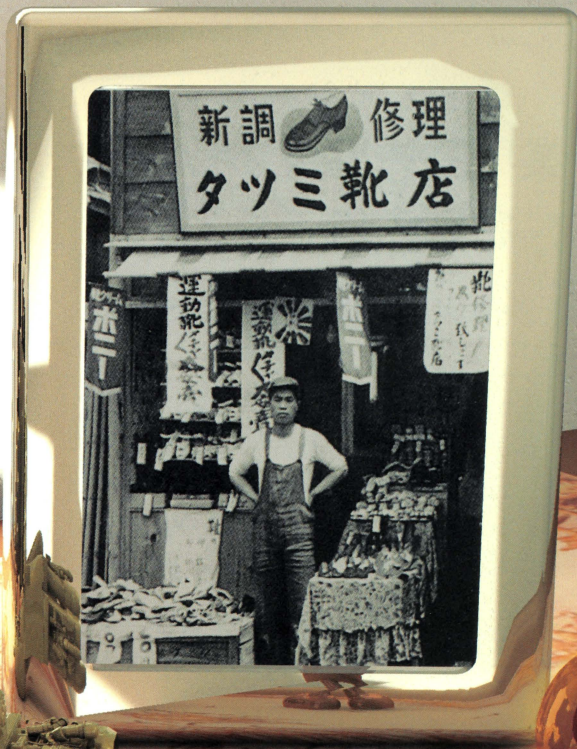
●偽造シール対策として基板の上にボックスを被せ、大日本印刷製のセキュリティシールを貼付した日電協の封印作業。ホール負担は台9000円。

Fun for Life
「パチンコを、その先へ。」

ピーアークの起点には、1枚の写真があります。
遥かさかのぼること60年、
街の小さな靴屋の写真です。

広さはたった15坪。
ミカン箱が陳列棚の代わりでした。
商品をいっぱいに積み上げて、自慢げな店主。
モノを売って喜ばれる商いを基本に、
地域に愛される店づくりを目指しました。

入学式で初めて履いたピカピカの上履き、
運動会のリレーで一等賞をとれた運動靴、
楽しみで、前の日は眠れなかった遠足に
履いていった新しい靴、
商品を通じた思いを絆に、たくさんのお客様から
「ありがとう」をいただいてまいりました。

商いの喜びを糧に、
地域とのリレーションを育てる商売を積み上げ、
お客様との絆の先のビジネスとして、
小さな靴屋がパチンコホールへと転身、
「感謝の気持ち」をDNAに受け継いで、
ピーアークは誕生しました。

■創業者の庄司定男氏が、東京都台東区谷中に辰巳屋靴店を開業したのが昭和26年5月。同時に地元商店街をまとめて、協和サービス専門店会を結成。当時としては珍しかったチケット販売をはじめた。

時代が、昭和から平成へと移り、
そのスタイルが手打ち式から電動式へ、
チューリップからデジタルへと、
どんなに劇的に変化しても、
パチンコの遊びの本質と醍醐味は、
今も昔も変わることなく、
身近で手軽な楽しみと、お客様の笑顔と共にありました。

そして今、明日への元気を、活力ある日本の礎も、
私たちエンターテインメント産業こそが担うべき
ミッションと確信いたします。

今までも、そしてこれからも。
ピーアークは、
お客様の「笑顔」と「ありがとう」のために
進化し続けます。

Fun for Life
「パチンコを、その先へ。」

おかげさまで、ピーアークは創業60周年を迎えます。

ピーアーク　検索

遊技通信創刊60周年
おめでとうございます

業界団体協賛
名刺広告

【順不同・敬称略】

全日本遊技事業協同組合連合会

理事長　原田　實

〒162-0846
東京都新宿区市ヶ谷左内町八番地
遊技会館一階
TEL〇三-三二六〇-七三七一
FAX〇三-三二六〇-七三七七

社団法人
日本遊技関連事業協会

会長　深谷友尋

〒104-0033
東京都中央区新川二-一二-一五
ヒューリック八丁堀ビル二F
TEL〇三-三五五三-四三三三
FAX〇三-三五五三-四三三四

日本遊技機工業組合

理事長　市原高明
副理事長　石橋保彦
副理事長　金沢全求
副理事長　澤井明彦

〒104-0031
東京都中央区京橋一-一二-五
京橋TDビル二階
TEL〇三-三二八一-〇〇一二
FAX〇三-三二八一-〇〇一六

一般社団法人
日本遊技産業経営者同友会

代表理事　松田高志

〒110-0015
東京都台東区東上野一-二六-二
オーラムビル309号室
TEL〇三-五六八八-三五一一
FAX〇三-五六八八-三五二二

日本電動式遊技機工業協同組合

理事長　里見　治

〒110-0015
東京都台東区東上野四丁目八番一号
TIXTOWER UENO 九階
TEL〇三-五八二六-〇七七七(代表)
FAX〇三-五八二六-〇七九九

遊技通信創刊60周年
おめでとうございます

業界団体協賛
名刺広告

【順不同・敬称略】

一般社団法人
プリペイドシステム協会
（略称 PSA）

理事長 小堀 豊
（平成23年5月24日着任）

専務理事 恵良道信
（平成23年9月28日着任）

〒103-0022
東京都中央区日本橋室町四-二-一七
第5サンビル7F
TEL〇三-三二七九-六〇〇六
FAX〇三-三二七九-六〇〇七

東京商業流通協同組合

理事長 髙橋雄豪

〒171-0014
東京都豊島区池袋二-七一-六
流通会館内
TEL〇三-五九五二-〇八一一(代)
FAX〇三-五九五二-八一八三

神奈川県遊技場協同組合

理事長 伊坂重憲

〒221-0835
神奈川県横浜市神奈川区鶴屋町一-六-一〇
組合会館四階
TEL〇四五-三一一-五一三三
FAX〇四五-三一一-七〇三三

兵庫県遊技業協同組合

理事長 米田義一

〒650-0012
神戸市中央区北長狭通五丁目三番一一号
兵庫県遊技会館
TEL〇七八-三五一-二三七一
FAX〇七八-三五一-五〇一八

EPA
東日本遊技機商業協同組合

理事長 中村昌勇 ㈱中商
副理事長 斎藤孝雄 ㈲さくら企画
副理事長 安藤享 ㈲安藤商事
副理事長 水口佳孝 ㈱アーバン
副理事長 笹本教光 ㈱ユーギン販売東京支店
専務理事 高島和男 ㈱高和商事
専務理事 増田裕之 ㈲峰庸商事
常務理事 佐々木勝司 ㈱エスケイ企画
常務理事 小島利幸 ㈲丸幸商会
理事 孔高成 ㈱ゴーイング
理事 杉田浩樹 ㈱アドバンス
理事 伊藤公正 ㈲アスクトレード
理事 森下文雄 ㈱タックエンタープライズ
理事 吉田明男 ㈱ダイイチ
理事 小手隆好 ㈱大貴商会
理事 佐久間隆智 ㈲晃冨商事
理事 村上永政 ㈲三葉企画
理事 木原一雄 大都販売㈱
理事 相田浩司 ㈱トーカイ
理事 白石光男 ㈱スリーストン
理事 杉木一彦 ㈱テクシーダ
理事 水野孝 ㈱三洋販売東京支店
理事 田結和浩 ㈱竹屋東京支店
監事 大澤雅之 ㈱サン・ラック
監事 松永進一 ㈲マツナガ
監事 根岸源治 大同商事㈱

〒110-0015
東京都台東区東上野三-一八-七
上野駅前ビル九階
TEL〇三-三八三三-五四三九
FAX〇三-三八三一-三〇五三

http://www.toyusho.com

千葉県遊技業協同組合

理事長　大城正準

〒260-0031
千葉市中央区新千葉二丁目七番二号
大宗センタービル八階
TEL〇四三-二四八-七〇七〇
FAX〇四三-二四八-〇八八八

愛知県遊技業協同組合

理事長　森山定幸

〒460-0008
名古屋市中区栄二-九-三
伏見第一ビル六階
TEL〇五二-二〇一-五〇一六
FAX〇五二-二三一-八六五四

山梨県遊技業協同組合

理事長　大森武正

〒400-0032
山梨県甲府市中央三-四-六
遊技会館
TEL〇五五-二三六-〇〇三八
FAX〇五五-二三六-〇〇三九

広島県遊技業協同組合

理事長　池田仁志

〒730-0016
広島市中区幟町八-一一
TEL〇八二-二二一-六四四五
FAX〇八二-二二三-八八五三

栃木県遊技業協同組合

理事長　金中烈

〒320-0804
栃木県宇都宮市二荒町五-一九
遊技会館
TEL〇二八-六三四-六六五五
FAX〇二八-六三四-六六五六

奈良県遊技業協同組合

理事長　相羽宗一郎
組合員一同

〒634-0803
奈良県橿原市上品寺町三四五番地五
TEL〇七四四-二四-七七七七
FAX〇七四四-二四-七七七六

私達は業界の健全な発展の為に
景品のお持ち帰りを推進しております

東京遊技雑貨卸組合員一同

(アイウエオ順)

有限会社 浅草長岡商事
有限会社 イイダ商事
株式会社 グローバル サウンド
株式会社 熊良
株式会社 神戸屋
光洋通商 株式会社
コーヨー通商 株式会社
三栄食品 株式会社
有限会社 サンエム商事
株式会社 三友
真和商事 株式会社
有限会社 泰盛
タケダカンパニー 有限会社
有限会社 富木商事
株式会社 トリオコーポレーション
株式会社 ホーク
堀井商事 株式会社
有限会社 丸正商事
株式会社 モリシタ
有限会社 大和屋 石川商店
株式会社 柳商事
株式会社 吉田園

東京遊技雑貨卸組合事務局
〒158-0097
東京都世田谷区用賀四-一九-四
TEL〇三-三七〇八-一二〇〇
FAX〇三-三七〇八-一二〇一

社会活動の一端を担う企業において最も大切なこと…。
それは社会全体と調和しながら、持続的な発展を目指していくということです。
そのため私たちは、関わる全ての人々にとって大切なものを生み出すことを使命と考えます。
それぞれの街における、かけがえのないコミュニティ。そこで遊ぶ人、働く人、地域の人へ…。
私たちが生み出すものが、人々の心をワクワクさせ、ときめきで満たすとき、そこには笑顔が溢れます。
その笑顔が響き合って、さらに多くの人々の笑顔が生まれ、街を包み、そして社会全体へ広がる。
そんな笑顔の環 ── “Smiloop”が、未来へと向けて、ずっとつながっていくように。
私たちはその中心で、お客様・従業員・そして社会にとって、「価値あるもの」を求め続けます。

KELOT

●パチスロコーナーでの女性スタッフの積極採用が流行。写真上はカナダから来日した女性による明るい接客が話題となり、「11PM」も取材した名古屋今池の「ポパイ」。写真左は東京六本木の専門店「モナコ4」。場所柄というか時代というか、スタイリッシュである。右は東京浅草の「国際ゲームセンター」。「美人」ばかり揃えたのが自慢というだけあって、浅草でもスタイリッシュである。

●西陣がマレーシア政府と契約し半官半民のパチンコ店がクアラルンプールに6軒登場。ハネ物の名機「ロボQ」などを設置した。

●輸入も生産も禁止されていた台湾で5月からパチンコが解禁に。本誌も何度も取材に行ったが、行く度に様子が変わり、常に戸惑いの連続であった。写真上は景品のバイク。

■売上税が廃案になってホッと一息と思ったら、今度は政府自民党から消費税構想。全遊協の試算では当時で110億円ほど払っていた娯楽施設利用税は廃止されるが、消費税が導入されるとホール負担は600億円に跳ね上がるというから、たまったものではない。売上税同様、消費税反対運動を展開したいとする全遊協であったが、これと並行して浮上した「全国共通プリペイドカード」構想ででもって、消費税問題は二の次になった。警察庁から全遊協に対して全国PC構想の原案が示され、同時に新会社への出資を打診されれのが7月上旬。その回答期限は7月いっぱいと性急なもので、8月5日の全遊協理事会で「我々ホールが知らないところで何を目的として浮上した話なのか」といった疑問が相次いだのも無理はない。結果、全遊協は「長期に渡る検討が必要。短期間で結論を出すのは無理」を全員一致で決議。全遊協はその後、このスタンスを長く維持することになるのだが、警察行政の態度が硬化するにつれて業界の一部では現状を危惧する声も膨れ上がった。この頃、市場規模は10兆円に拡大していたが、陰では「オモテ10兆ウラ10兆」とまで言われ、経理の透明化が課題になっていたのは事実。ところが、関係者からは当初は「脱税防止」という言葉は出ず、「近代化」と言われた。そうした声の代表として、10月5日にはホール経営近代化の推進グループというか、カード賛成派としての日本遊技業経営者同友会が設立された。この年は8月8日に業界で初めて平和が株式公開を果たすなど明るい話題も多々あったのだが、業界の話題はもっぱらカード問題一色であった。

●世界最大100面マルチビジョンの外観で話題となった札幌の「巨人の星」。昭和60年にオープンした店で、この頃からホール内外での映像表現の多様化が一気に進んだ。左は上から新宿「アラジン」、埼玉川口の「サンケイ86」、東京足立区の「ジョイタイム」。

●第2回目となった大遊青「パチンコ・デザインコンテスト」。今回は平和も後援。見事グランプリに輝いたのは「パチンコ屋さん」自体をモチーフにした台。

●ホール営業におけるベース管理の必要性を打ち出し、各地で特別セミナーを展開したダイコク電機。写真は奥村遊機でのセミナー。メーカーにもベース管理の必要性を訴えた。

●松竹がパチンコ店を舞台にした青春映画「ほんの5g」を制作。写真下は全遊協の10月理事会に先だって行われた試写会で挨拶する主演の富田靖子。カード問題で大揺れの全遊協は試写会後、第3回パチンコ文化賞の延期を決めたほか、カード問題ではまたも先送り決議。富田靖子に罪はないが、なんともタイミングが良くなかった。

●10月、NTTや三菱商事ほか、名だたる大手企業36法人と8個人が株主となって日本レジャーカードシステムが設立された。

●あると便利なホールの小物。メダル投入をスムーズにするアイテム、谷角商店の「ヒフミ」。こういうアイテムの付加にうるさくなかった時代は、様々なアイデアが具現化された。

●全遊協執行部を批判する全関東連の創立総会は5月8日。「もっと説明しろ」「関東連との関係はどうなる」「県ではこの問題を審議していないのに勝手に進めるな」の野次・罵声が飛び交う中での創立であった。その後、全関東連に参画した県では、理事長を交替してこの組織からの脱退を決議するところも出た。

●前年に誕生した同友会は3月に下稲葉耕吉参議院議員を顧問に迎えるなど、組織強化を着々と図った。写真上は挨拶をする松岡英吉会長と左が下稲葉氏で右が平沢保安課長。同友会はこの年の6月、警察関係公益法人化を果たして日遊協となる。カード推進派の集まりだが、それとセットでの換金合法化が目標に掲げられた。

●松波哲正理事長が辞任し、その後、理事長代行に選ばれた4氏も辞任するなど、行政との信頼関係回復を巡って混迷の度合いを深めていく全遊協。ところが、意外にもこの年の総会はシャンシャン総会で終わった。全日遊連を旗揚げした都県からの出席がなかったためである。警察行政関係者の出席もなかった。

■元号が平成に変わったこの年の業界の出来事を1ページでまとめるというのは、どう考えても無理な話なのだが、とりあえずざっと追うと…前の年にカード推進派としての同友会が誕生すると、2月には全遊協内部でも亀裂が生じ、1都3地区21県で「全遊協正常化推進協議会」が発足。前年11月、平沢勝栄保安課長に「全遊協の現執行部は相手にしない」とまで言われていたこともあって、何はともあれ行政との信頼関係の回復が主眼であった。さらに5月には関東7県が集まった「全関東連」が、次いで先に触れた「正常協」が母体になって1都8県による全日遊連が誕生。全日遊連は7月には1都15県に拡大するのだが、まだまだ微妙なバランスの上に成り立っていた組織であり、日和見県を激しく批判するなどしている。ホール組織と行政側との信頼関係が崩れたのは、実は前年の警察庁の主導で全遊協と日工組、日電協とで行う予定にあった「アンケート問題」という布石がある。平沢課長時代の警察行政はカード以外でも数々の改革が掲げられ、アンケートはそのための資料として実施される手筈であったが、全遊協側がナーバスな質問項目に抵抗を示し、結果、全遊協を外して実施。その問題が尾を引いて全遊協専務理事が辞任するという展開になっていた。ともあれ、当時の行政サイドが考える業界の改革テーマのひとつが換金問題であり、行政側の主導で各種の「懇談会」「委員会」が開催され、この景品買い取り問題を含めた改革に向けたアクションが起こった。ところが、一連の業界の混迷はマスコミも知るところになり、「カードシステムは警察の利権か」とする報道が相次ぎ、それと間髪入れずに出たのが週刊文春のパチンコ疑惑報道である。社会党とパチンコ業界の癒着をメインテーマにしたこの連載では、土井たか子委員長のパチンコ文化賞受賞を八百長としたところからはじめ、カード問題では平沢課長を呼び出して社会党が注意をしたとか、全遊協の裏金が政治献金に使われているなどと書き立てた。この連載を受け、かねてからカード問題に触れていた朝日ジャーナルでは室伏哲郎氏が「パチンコ疑惑」自体、何かがおかしいとレポート。追随して新聞各紙も大きくかき立てた結果、秋の国会ではこの一連の問題が2日に渡って集中審議された。が、自民党議員の方が遙かに多い献金を受けていたこともあって、審議は尻切れトンボに。文春報道の時点から、消費税反対を掲げる野党の人気マドンナの追い落としだったのでは、という逆疑惑もあったのだが、いずれにしても政争の具に利用された感が拭えなかった。また、この年は消費税3%が4月1日からスタート。いくら組織問題が迷走しても棚上げできる課題ではなく、全遊協の陳情を受けた警察庁は、景品交換時の転嫁を「当面の措置」として了承した。さらに、換金機構からの暴力団排除を掲げ、東京の景品に金地金を採用する構想が持ち上がるなど、とにかく様々な出来事があった年であった。

●前年の11月、「パチンコ必勝ガイド」が創刊されて、「ファン」「マガジン」「ガイド」のいわゆる攻略雑誌が出そろった。それぞれ公称20万部の大ヒットに。

●福岡に1200台の「ディズニー清川店」が誕生。日本一の台数。61年には同じ福岡に767台の「Gion1.1」が開店するなど、同県では台数規制がいち早く撤廃された。

●マースエンジニアリングから台間玉貸機からそのまま玉皿に玉が流れるノズル付きの「スーパーサンド・ペリカン」が登場。台間は一台一機の時代へ。

●台湾パチンコはますます進化。カクテルグラスに飲料を入れて回るフロアレディも登場。ちなみに、この年は中国本土にもパチンコ店ができている。

●昭和60年、四国宇和島に誕生した「センチュリー21」に、全国の若手経営者が見学に訪れる「宇和島詣」が流行った。オオキ建築による内外装の出来映えもそうだが、何よりも注目されたのがその接客レベル。パチンコの店員が客に頭を下げること自体が珍しい時代である。最高の接客で迎えるが、「足組み禁止」「ハンドル固定を2回やったら出入り禁止」など、客にもマナーを求めるというこの店の登場は、プリペイドカード以上にホールの近代化を果たしたといっても過言ではない。

●この年、大ヒットした遊技機といえば、なんといっても奥村遊機の「ドリームX」。シンプルながら奥深いゲーム性でファンを魅了、多くのホールが大量導入した。

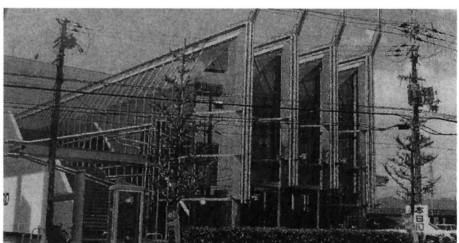
●青い液晶文字とゴールドレリーフで高級感を醸し出した平和の「ブラボーエクシード」。あまりの鮮やかさに目を見張った。同じ年には西陣からきらびやかで賑々しい「ファンキーセブン」も登場。この頃はメーカーごとのコンセプトが明確だった。

●全国共通プリペイドカードが導入された。コスト負担とともに券売機でのカード購入という煩わしさも懸念されたが導入初日は混乱もなく無事に営業を終えた。券売機はカード発行までに多少時間がかかったがその後、改善。

●売上のガラス張りに向けた業界の新たな試みにTV・新聞・一般紙など多くのマスコミが取材に訪れた。写真はテレビ朝日系列の「素敵にドキュメント」のインタビューに応える女性客。

●この年、創立30周年を迎えた東遊商主催の「'90パチンコ産業展」が東京・晴海の国際見本市会場で行われ、遊技機メーカー、関連商社など60社以上が出展した。昭和50年以来実に15年ぶり、かつ過去最大規模で行われたということもあって、2日間で延べ2万500人の来場者を動員した。

●景品単価の上限が1万円に引き上げられホールでは景品コーナーの拡充も進んだ。写真は神奈川県ジャパンニューアルファの独立型景品施設「パッションプラザ」。

●ダイコク電機が大阪で開催される「国際花と緑の博覧会」にパビリオン出展。世界の名画4点を陶版画にして話題になった。写真はメイン画、ミケランジェロの「最後の審判」。

●女性客を取り込むため、90年代に入ってから特に豪華で斬新なホールも出現し始めた。写真は売れっ子建築家の高松伸氏が設計した京都の郊外店「パーラー・ヌーベル」

●1都8県でスタートした全日遊連もこの頃には1都2府38県に規模が拡大。全国組織としての主導権を奪われた全遊連はこの年の11月、創立から39年の歴史に幕を下ろした。この後「組織一本化」のための理事長交代劇も各地で行われた。

●難航していた都遊協の理事長選は原田實氏が現職の松岡豊氏を破り新理事長に選出された。松岡豊氏は東京都打球業組合連合会の結成から数えて42年にわたって東京都の組合のトップをつとめてきたが、この年から名誉会長に。

●写真は福島県会津若松市で行われた「竹屋オートメーション装置取扱主任」の技術講習会の模様。省力化が進む島補給システムの知識とトラブル発生時の対応のために同社が定期的に行っていた研修会。この頃は遊技機だけでなく周辺機器の専門知識に詳しいスタッフが多かった。

■規則改正が行われたこの年、パチンコ第1種の一回の大当たり出玉が1300個から2400個に、景品提供の上限価格が3000円から1万円に引き上げられた。業界団体の要望にほぼ応える形で実現されたが（貸玉料金の5円は見送られた）、営業上の主力機であるオマケ付きセブン機や一発台といった極端な釘曲げの排除と、急激に上昇していた換金比率の抑制が改正趣旨ということもあって、新要件機登場まで営業的な不安を抱えるホールも少なくなかった。また、この年の4月、東京、神奈川、千葉など11店舗のホールで初めて全国共通パチンコプリペイドカードシステムが導入された。「宇宙センター」「安田屋」「ピーアーク」などいずれも「カード推進派」である日遊協幹部経営ホールが第一次モニター店となった。導入初日にはTV・ラジオなど多くの一般マスコミが取材に訪れるなど社会的関心を集めたが、当時はカードシステムを導入すると新店の営業許可が下りやすいとも言われ、しばらくはコスト負担の少ないパチスロコーナーを中心とした「一部導入」スタイルで進行した。一方、全国組織の分裂にまで発展したカードシステム導入を巡る組織問題は、それまで「カード反対派」とされ当局から没交渉に近い扱いを受けていた全遊協がこの年の11月に解散。代わって前年に設立された全日遊連がホール組合の全国組織になった。組織一本化に伴っては全日遊連が全遊協からの「脱退決議」を行ったのをはじめ、一部県遊協が「A級戦犯」と名指し批判され、全日加入のための人事刷新を断行するなど泥沼化。全遊連の解散総会で理事長代行を務めていた三宅正平氏（兵庫）は「組織分裂で得たものは少なく、失ったものは多い。かつての盟友が反目し業界の力は半減された」と漏らした。

●この年の8月、関西遊商主催による「新・遊・'91パチンコ博イン大阪」が開催。2日間で延べ1万6000人の来場者を集めた。遊技機にとどまらず最新技術を駆使した設備機器など各ブースでは話題に満ちた新製品が数多く発表されたが、注目を集めたのは次世代パチンコとして開発されこの展示会で初めて発表されカード対応機、いわゆるCR機の試作機（右写真）だった。また、このフェアには釘調整不要の新しい遊技機「パチコン」がユニバーサル販売、エーアイの各ブースで出展されている（左写真）。一定の大当たり確率に基づいてスタートの入賞率をチューリップ開放で近づける入賞補正システム機能が搭載されているのが特徴で、今考えるとこちらの方が「次世代パチンコ」という表現がしっくりくる。

この年、廃棄物の増加や質的変化に対応するため、さらに不法投棄廃絶を目的として「廃棄物処理法」が改正された。この事実上の規制強化を契機にして、全国で潜在していた廃棄物問題が表面化。廃棄遊技台の行方も当時から危惧されていたが業界側の対応は後手にまわり、その後、発覚する遊技機の大量放置事案、「寄居問題」「鹿沼・宇都宮問題」へとつながっていく。

●J-NETによる「再プレイ」が日遊協会員ホール4店舗で実験的にスタートした。前年に行われていた「貯玉」システムの実績を踏まえて実施されたもので、導入店では会員数、貯玉数ともに「再プレイ」を契機に増大。会員拡大・顧客獲得の手段として有効と評された。写真はカウンター側の操作で貯玉を引き出すファン（ダイナム高田馬場店）。

■前年施行の規則改正でこれまで営業の柱だった一発台とオマケ付きセブン機が全面的に撤去され、新基準機が登場した平成3年。ゲージ上の違法性は取り除かれたものの、いわゆる「連チャン機」問題で内部的な課題も表面化した。一方のパチスロでも瑞穂製作所の「コンチネンタル」が検定取消しを受けたのをはじめ「セブンボンバー」「ワイルドキャッツ」の2機種も立て続けに同処分になるなど、不正改造問題がクローズアップされるようになる。特にパチスロでは「かばんや」と呼ばれる不正業者の存在や「弁当箱」「注射」といった不正行為の隠語が表だって飛び交うなど不正改造が日常的に行われていたことも窺え、一連の遊技機不正事案について当時の保安課長は「問題が多すぎる」と指摘。主要団体の理事長等に対し不正遊技機を出さない管理対策に重点を置いた「情報交換制度」の確立などを提案した。また、各地で策定していた組合の台数規制などが主にカード導入店によって崩れ始めたのもちょうどこの年。店舗構成や機種選定の面では自由度が拡がりホールの個性を出しやすくなったと言われたが、一方で違法機や連チャン機による射幸性の上昇も進行。現場では「鉄火場」化も進み、売上至上主義に走るホールも増え始めた。

●新要件機をメインにした展示会が各メーカーで行われた。西陣の展示会では東京だけで3150名、全国で8670名と通常の倍以上という動員を記録した。また、ポスト一発機の担い手として期待された当時の権利物は確率変動、2回1セットという新しいキーワードと共に新ジャンルを確立させた。

●カラー液晶表示機を搭載した「麻雀物語」が平和から発売された。同機から価格が値上がりしたが、それでも稼動面で大きく貢献するソフトと秀逸な演出で大ヒットとなった。見栄えの良いカラー液晶表示機はその後、各社から次々と発表されモニタのインチを広げながらスタンダード化していく。またこのヒット機種によってその後の同社の「～物語」シリーズも定番化した。

●組合員の検定取消処分が相次いだパチスロ業界。一連の不正改造問題に苦渋の表情で記者会見に応じる日電協の飯田蔵太理事長と雫田総務部長。

●目黒区碑文谷で東京モデル構想第一弾が始動した。金地金を採用し、買場がショップという形態になり、千円未満がカットされた東京の新システムだが、続く第二弾となった北沢地区では、換金システムの変更よりも「暴排」そのものが焦点となってその難しさが示された。2カ月以上にわたる街宣車の活動は「下北戦争」と呼ばれ、組合長宅には銃弾も打ち込まれた。ホールはもとより地域商店街の関係者も頭を痛めた問題。

●夏に行われた各メーカーの展示会で初めてカード対応遊技機「CR機」が披露され、東京上野のショールームには多くの関係者が駆け付けた。とはいえこの年に発表されたCR機はいわゆる「花満」以前の第一弾で、発表された「CRうちどめくん」(西陣)「CRフィーバーウィンダム」など7メーカー7機種（いずれも第1種セブン機）は当時憶測として流れていたような射幸性の域を超えるものではなかった。

●「注射」という言葉が一般紙に取り上げられる程、パチスロの不正機問題が表面化したこの年、ホールで稼動中のパチスロの基板を「保通協検査を得た状態に戻すため」の改修・点検作業が全国的にスタートした。改修作業はRAMへの不正な書き込み行為を阻止・防止する対策基板の取り付けとCPUの交換で、全国パチスロ機の約50万5000台が対象に。一方の点検作業は基板ケースの封印シールの破損状態の目視確認とRAMクリアするための6段階設定調査を行う作業でこちらは約28万8000台が対象となった。また、この作業にあわせるかたちで基板ケースと本体との結合部分を貼付する封印シールの取り替え措置も行われている。構造変更を伴う半年にわたるこの改修・点検作業は総額80億円、延べ8万人による大規模なものとなった。写真は大規模改修作業実施を発表する日電協幹部。

●「他店にはないオリジナルのパチンコ台を」という発想からピーアークが独自のパチンコ機「南国の魚屋さん」を系列2店舗（谷中店と北綾瀬店）に導入して話題を呼んだ。機種コンセプトはファン向け攻略誌「秘密のパチンコ術」の企画で募集。600通を超えるアイディアの中から栃木県在住の佐藤信さんが考えた「魚屋さん」が採用された。遊技機はこの原案を平和がアレンジしてハネモノに仕上げたもので、盤面下にはオリジナル機をアピールする「ピーアーク」のロゴも描かれている。

●福岡県の日本ピンボールレジャーが専門店として最大規模となる520台の新店をオープン。これまでも1200台という当時としては日本一のホールを出店するなど多くの話題を提供していた同社だが、この専門店では豪華なデザインや豊富な品揃えをみせる景品コーナーなど専門店とは思えない作りに業界関係者から高い関心が寄せられた。

●エレクトロコイン・ジャパン社がパチスロで初の新要件機（4号機）となった「チェリーバー」の発表記者会見を行った。ボーナス比1対0や、7.3回に1度の割合で出現する再プレイ、期待値方式の採用など新機軸が搭載された。その後は国内メーカーが相次いで検定不合格になったのを尻目に、米国IGT社が「ベガスガール」で市場参入。海外メーカーの市場参入問題を巡っては一般紙に「海外摩擦問題」とも書かれたが、4号機では海外メーカーが先陣を切った。

■前年のパチンコ博で参考出品としてお披露目されていたカード対応機、CR機が初めて市場に登場した平成4年は前年から続くいわゆる「連チャン機ブーム」に席巻された年だった。新要件機によってジャンルの細分化が見込まれたホールの機種構成は、選定基準が「連チャン性のみ」と思えるほどの拡がりようをみせ、第1種の市場が頭打ちになってくると、今度は第3種権利物やアレンジなど他ジャンルまで持ち込まれるようになる。また、島争奪戦の煽りを受けたメーカーの危機感がさらに過激な連チャン機の販売へと舵を切る方向に向かわせた。この事態は日工組による販売自粛措置で一応の収束が図られたが高騰した射幸性のなかに身を置いていたホールからは懸念の声も。話題先行型だったCR機はメーカー直営店に市場投入されたものの、独自の市場を確立させるまでには至らず第二弾以降へと持ち越すかたちとなった。また、不正改造事案の事後対応に追われたパチスロは手痛い代償を支払うことになる。警察庁から要請された指示項目の一つ「改修・点検作業」を全国規模で実施。動員人数で延べ8万人、諸費用で80億円という重い負担が強いられた。漸く登場した海外メーカーによる4号機も半ばこの騒動にかき消される格好となった。

●日遊協活動の目的の一つであるアウトのクリアとその具体的施策として注目された「Jネット構想」が北海道の2ホールでスタート。景品に市場流通性があり実態価値のある「ゴールドカード」を採用したシステムだが、機運の高まっていた換金適法化の動きは様々な事情で停止。見切り発車でのスタートなった。

●SANKYOのハネ物「オロチョンパ！〜一発師勝負編〜」は吉本興業のタレント・河内家菊水丸を起用した初のタイアップ機として話題になった。フジテレビ系番組「ヤマタノオロチ2」のスタッフが番組のテーマ曲「オロチョンパ！」を使ったプロモーションの打ち合わせ時に「オロチョンパ！」の音の響きから「パチンコ店でこの曲が流れたらどうだろうか？」と思いついたのがきっかけで、SANKYOとの共同企画によって生まれた。ゲーム性、役モノは同社のヒット機「ロボスキー」や「うちのポチ」の流れを汲むもので、チャッカー入賞時や大当たり時には「チャンスやで」「今や！今や！」といった菊水丸本人の声が流れるようになっている。

●全機連傘下メーカーの加入で横断的組織となった日遊協。かねてから役員構成がホール業者に偏りすぎとの指摘があって全機連サイドから6名が役員入りを果たした。また、対立団体と言われていた全日遊連との関係を当時の日野和喜会長は「協調路線、融和路線へ」と話した。

●写真は石川県で行われたマルハンコーポレーション（現マルハン）の創業35周年記念式典の模様。西原社長（現韓会長）は1000人の社員を前に、5年後の創業40周年には「2000億円」の売上目標を呼びかけた。ちなみにこの時点での同社の経営ホール数は全国36店舗で、年度売上目標は1400億円に設定していた。

ヒット商品開発秘話②
（平成12年2月23日発行「パチンコ・パチスロ産業フェア2000」特別号より）

疎んじられた異端の製品が業界のイメージを一新した

情報開示端末機『データロボ』／ダイコク電機 株式会社

遊技機の出玉・特賞回数を把握し機械の調子を予想するダイコク電機開発の『データロボ』は、パチンコの新しい楽しみ方を提案し、同時にマルチメディアへの進化を促した。しかし、その普及は当初社内でも半信半疑だった。（年数および関係者の役職は取材した2000年当時のものです）

疎んじられた異端の製品が業界のイメージを一新した

現在では、どこのホールでも抵抗なく導入されるようになった『情報開示端末機器』。据え置き型とマルチサンドタイプ、さらに簡易な呼び出しランプタイプもその仲間に含めれば、全国のホールの大半になんらかの形で普及したのではないだろうか？　これら、遊技機の特賞回数などのデータを遊技客に提供したシステムの元祖は、いうまでもなくダイコク電機㈱の『データロボ』である。このシステムがトリガーとなって、遊技場は大当たり情報をサービスの一環としてつまびらかにするようになった。間違いなく、業界のイメージ向上に、このシステムは多大な貢献をしたと言えるだろう。

しかし、いまでは当たり前となったこの『データロボ』も、開発当時は業界内で賛否両論。中には頭から否定してくる経営者もかなり多かった。そしてその誕生秘話には、不思議な偶然の重なり合いが見えてくる。

アイデア料は500円！お蔵入りの企画だった

このシステムの原案はいまから12年前の1988年に、現在ダイコク電機の営業統括管理室・室長である山下陽氏によって企画書として提出された。（編集部注・年数および関係者の役職は取材した2000年当時のもの。以下同様）

「もともとの発想は、当社の製品のひとつであった『スランプターミナル』という出玉推移の折れ線グラフの表示装置を、ファンが覗けるようにすれば面白いのではないか…というものでした。ですから発案時点の名称は『お客様向けスランプターミナル』でして」（山下氏）

だが、せっかくのこの柔軟なアイデアも、これを現実の製品にしようという動きにはならなかった。やはり製品化して売るにはとっぴもない品物と判断がくだされたのだ。アイデアはお蔵入り。ダイコク電機では社員の新製品などの企画案に点数を付けて報奨金を与える制度があるのだが、その時に山下氏は『ボツネタ』の報奨金として金五百円也を貰っている。いまでは牛丼の特盛りも食べられない額だ。「わたし、もうちょっと貰ってもいいですよねぇ」と山下氏は苦笑する。

右から古い順に展示されているデータロボ（ダイコク電機本社）。ロボの由来は上部のデモンストレーション用の表示画面がロボットの首のように見えたから、という

ところが、ひょんなことからこのシステムが実験的に作られることになる。山下氏が発案した翌年の89年、名古屋で開催された『世界デザイン博覧会』に愛遊連が主催で『パチンコ・パチスロ面白デザイン館』を出展することになり、ここに山下氏のアイデアが取り入れられて雛型となる製品が展示されたのだ。そのときの来場者（つまり一般の人々）の反応に、山下氏はこれはいけるのではないかと確信に近いものを感じたという。だが、それでもまだダイコク電機はこのアイデアを本格的に製品化しようというところまで踏み込めなかった。なにしろ、出玉推移グラフなどというのは店にとってはまさに企業秘密である。これを客に見せるなど言語道断。何を言ってるんだという反応だったのだ。

それから2年後の91年、今度はダイコク電機が自社の展示会として『ダイコクSISフェア』を開催。ここに山下氏の発案は再び取り入れられ『データステーション』という名称で2台、参考出品として展示される。今回の展示会に足を運ぶのは一般の人ではなく、ホール経営サイドの関係者ばかり。その反応は…。

「99％の来場者が見向きもしなかった…というのが本当のところです。しかし、そんななかに『これはいいね』と評価をしてくれる経営者もごく一部いた」（山下氏）

それら経営者の中に、業界人なら名

前を聞けば誰でも知っている関東の某優良ホール企業の現社長がいた。その社長は、計画中であった某県の新規ホールに、このシステムを設置してもかまわないという。発案から3年、ここについに新商品として『データロボ』が日の目を見ることになる。

膨らむ山下氏の期待。遊技場の『在り方』に一石を投じるこの新システムの、当初の販売目標は、果たして何百台であったのか？

元は在庫一掃の機器？幻の設置第一号店とは

「それが、実は40台だったんです」

そう裏話を明かすのは、現在同社の中部支店・名古屋第1ブロック長を務める田中伸明氏だ。当時、彼は情報機器事業部の新人社員として、ダイコク電機として初のファン向け新製品に関わっていた。しかしなぜわずか40台だったのか？

「当時のデータロボは、ホール向けのスランプターミナルを改良して生産されたものなんです。ロボ1台につき2台、この製品を使ったのですが、じつはターミナルの方の在庫が80台ありまして、それがハケたら助かるなあ…ということも考えのなかにあったんです」（田中氏）

なんと！　当初のデータロボ開発には、製品の在庫一掃の意味もあったのである。つまりは、開発しているダイコク電機自体が、この機器がそれほど普及するとは予想していなかったのだ。見方を変えれば、それだけ出玉情報の開示について、ホール業者には抵抗感が根強くあり、異端の製品として受けとられていたということだろう。

それは、開発された『データロボ』第一号の、情報開示メニューからもうかがうことができる。記念すべきこの一号機のメニュー内容は、当日と前日・前々日の大当たり特賞回数とハネ物の打ち止め回数のみだった。

「情報開示には賛同しても、スランプグラフまで見せるのはとても受け入れられないというホール側の声が圧倒的でした。折衷案としてようやく辿り着いたのが、三日間の特賞と打ち止め回数です。しかし、打ち止め回数のほうは公開しない店もありました。いまのようにデジタルがらみでラウンド抽選するタイプではない釘調整だけに頼るハネ物は、打ち止め回数を明らかにすると狙い打ちされてしまうからです」（田中氏）

いわば、データロボが普及する背景には、釘だけが出玉の要素ではないデジパチの普及があった。その基板の『波』を遊技客に予想させるというのが、この製品を成立させたのである。

話を戻そう。91年のSISフェアの後に開発された輝ける『データロボ』第一号機は、前述の関東のある優良企業の新規ホールに導入が決定。ロボはその既成の概念を破るコンセプト店舗の、ひとつの目玉として設置された。準備は進み開店は目前に迫った。そんなとき、東京から進出してきたこの話題の店に興味を示した所轄警察署員が、めったにない直接の立ち入り検査にやってきた。そして、見慣れない大型のロボットのような機器に目を止めた。これは何をするものか？　立ち合った店の人間から話を聞いた署員は、説明を聞き署に連絡。やがて回答がきた。射倖性をあおる機器であり、設置は認められない…。

中央に第一号のデータロボをはさんで山下陽営業統括管理室長（左）と田中伸明第一ブロック長。初期型はとにかくデカイの一言につきる

「オープン直前になって撤去です。幻の第一号店となってしまいました。それが既成事実となって、その後もその県ではデータロボ設置は認められず、ようやく最近になって解禁になりました」（田中氏）

なぜ遊技機の出玉情報を、正直にファンに見せることが射倖性をあおるのか？　田中氏は各都道府県の行政にこのシステムの趣旨を説明に動いたひとりだが、固い考え方の担当者と口論になりかけたこともたびたびあったという。だがこの業界、当局の意向は曲げられない。いまでは当たり前に設置されているこのシステムも、ホールが望んでも入れられないという時期があったのである。

『データロボ』はその後、長野県塩尻市の『大将軍』に初導入。地元のパチンコファンの口コミで火が付いた。やがて進取の気風のある九州地方に飛び火。同時にダイコクがスタートさせたテレビ番組『パチンコNOW』の影響で、やがて全国規模で普及が進んでゆく。そして2000年初頭現在、新旧タイプを合わせて全国で約1800店舗・2000台が稼動するヒット商品となった。

「この間に、当社ではロボカードを発行しての会員管理や、さらに分析指向のファンのために『ポケロボ』の開発を行ないました。ポケロボはいまだに一ヵ月に数百台単位で売れており、累計で30万台を越えています」（田中氏）

異端の製品から遊技場に当たり前にある製品に…。わずか9年で広く普及したデータロボは、店が公明正大に営業しているというプラスイメージを与える意味でも、ホールに欠かせないシステムのひとつになりつつある。情報開示機器は、この先どんな進化を果してとげてゆくのだろうか？（平成12年2月23日「パチンコ・パチスロ産業フェア2000」特別号より）

日工組・パチンコ機出荷中止を決定

日本遊技機工業組合（根本宏理事長）では十月十五日（金曜日）に緊急会議を開催して当面しているパチンコ遊技機の適正化対策を協議した結果、以下の自粛案を決定した。

①平成五年三月三十一日までに財団法人保安電子通信技術協会へ型式試験の申請を行なった機種の全ての出荷を十一月六日限りで中止する。

②上記機種の注文は十月二十三日限りとする。

③上記機種にはＣＲ機及びアレンジも含まれる。

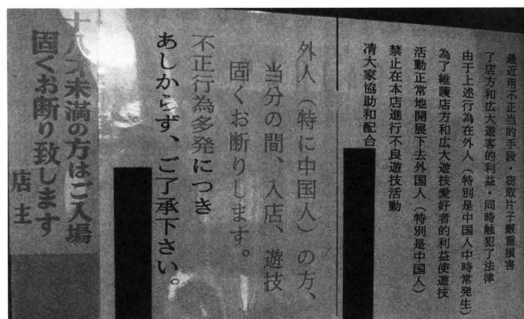
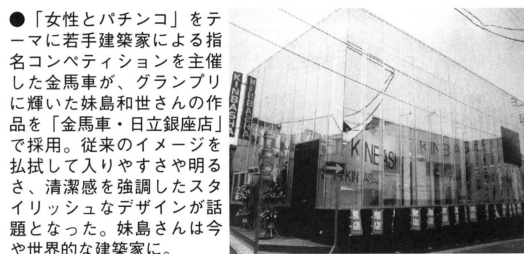
この決定内容は十月十八日（月曜日）に日工組幹部が警察庁を訪れてこの自粛案を説明して了承を求めると共に、関係団体である全日本遊技事業協同組合連合会並びに社団法人日本遊技関連事業協会にも説明を行なった。

今回の決定は過去になかった内容であり、業界全体に与える影響は図り知れないものがある。しかしながら業界の前途を考慮すれば、現時点で思い切った手を打たねば禍根を残すことになる、との判断で踏み切ったものである。これによって本年三月末以前に保通協へ申請され検定をパスして市場で販売されている機種のうち、大部分が販売中止となる。今後販売できる機種は本年四月以後に保通協に申請されて検定をパスした約100機種に限定されることになる。但し、各メーカーより毎月65ないし70機種程度が申請されており、うち60ないしは70%が合格していることから本年末には約200機種が販売対象になる見込みである。なお、前述の三月以前の機械でも一部例外もあり、更に四月以後の申請機種でも適正機種と見なされない場合には出荷中止の対象となることもある。更に、十一月六日以後に開店が予定されているケース等については常識の範囲内でという解釈で若干の弾力性が持たされている。また、中古機についてはメーカーからの保証書が発行されないと思われるので新台同様に出荷中止になるものと思われる。

お詫び／本号は日本遊技機工業組合の出荷中止の情報を緊急掲載したために発行が遅延いたしました。深くお詫びいたします。

平成五年十月十九日　　『遊技通信』編集発行人　伊藤登志夫

●遊技通信を捲っていくと時々こうした挟み込みを目にすることあるが、その全てが業界にとって重要なニュースであり速報性の高いものばかり。こうしたイレギュラーはコストや発行日遅延との兼ね合いで本誌が判断することになるが、この年の一枚は日工組がパチンコ機の出荷を中止決定したニュースを報じたものだった。連チャン機や不正機問題で混迷を深めていた業界を象徴する深秋のニュース。

●冷夏の影響で全国的に米不足に陥っていたこの年のファン感謝デーで埼玉県の「りっちらんど坂戸店」が「米騒動」と銘打ったイベントを実施。米の入った手前の容器から取り出した分だけがもらえるという簡単な競技だったが用意した130キロの米はすぐに底を突いた。

●外国人ゴトの増加を受け、都内では外人（特に中国人）の来店、遊技を断るポスターを掲示するホールも。人種差別を助長するという批判もあったが、全国的に頻発する外国人ゴトの報告は多く、現場ホールのせっぱ詰まった状況が窺える一枚。

●「女性とパチンコ」をテーマに若手建築家による指名コンペティションを主催した金馬車が、グランプリに輝いた妹島和世さんの作品を「金馬車・日立銀座店」で採用。従来のイメージを払拭して入りやすさや明るさ、清潔感を強調したスタイリッシュなデザインが話題となった。妹島さんは今や世界的な建築家に。

●一連のパチスロ不正事犯を伝える当時の一般紙。改修点検作業終了後もなかなか信頼を取り戻せなかった業界だが、今度は遠隔操作の摘発で「やっぱり」という社会的不信感が一気に噴き出した。

●無制限営業・大量出玉時代になると郊外店では滞留時間の長期化に伴って簡単に軽食を提供する自販機の設置も増えた。ニチレイと富士電機冷機が共同開発した「レンジ内臓・冷食自動販売機」は手軽な値段と豊富なメニューで本格販売からすぐに全国100店舗以上で設置された。

■国税庁がまとめた「法人税の課税事績」で1件あたりの所得隠し額でパチンコが10年連続ワーストワンになった平成5年。射幸性の追求がピークを迎えるなかで内規変更に伴うCR機第二弾「CR花満開」が市場投入された。2回ループという高射幸性機へとカスタマイズされたCR機は全国ホールから高い支持を得て、これまで滞っていたカードシステムを勢い推進させる立て役者になっていく。その反面、現金連チャン機や違法行為が警察の検挙によって表面化。大当たりを誘発させる釘曲げを教唆した疑いで大手遊技機メーカーに家宅捜査が入ったのをはじめ、北海道では遠隔調査による出玉調整（遊技機の無承認変更）でホールが摘発され系列店も含めて営業許可の取消処分を受けた。また、静岡県でも不正ROMを取り付けてパソコンによって出玉率を遠隔操作する容疑でホールが検挙。ファン心理として横たわっていたパチンコ店の不正行為が「遠隔操作」という現実を目の当たりにして一気に噴き出した印象で、一般紙などがこぞって報道した。こうした遊技機環境を背景に日工組は一定期間を遡って遊技機の出荷中止を決定。全日遊連、日遊協も不正業者にペナルティを課す不正防止策を策定したほか、二次使用での不正防止として全商協も販社の登録制度をスタートさせるなどした。また、ハード面からは不正対策を施すものとしてこの年からパチンコ、パチスロの基板にLEテックのワンチップの採用がスタート。花満ブームで湧く一方で不正対策の取り組みに終始した年となった。ちなみに景品買取問題の将来的な解決方法を調査する諮問機関「生活安全研究会」（警察庁主幹）が設置されたのもこの年だった。

●内規変更による2回ループタイプのCR機「CR花満開」が爆発的な人気を博したこの年、札幌市の「パーラー・ギンザ」が全国に先駆けて全台CR機のホールを出店した。当時はカード導入＝健全化店舗という図式が成立しており、オープン当日は道警関係者も激励をかねて来店。

●新要件機も一年近くたってやっと使える機械が出揃った感があったがその多くは連チャン機によるもの。2回ループのCR機で、「合法的連チャン機」と言われるなど大量出玉時代に拍車をかけた。

●出店反対ではなくパチンコ店を歓迎する張り紙。パチンコ店の出店反対運動を巡って起きた住民同士の対立が背景にあったがなんとも珍しい一枚。東京、光が丘。

●一連のパチスロ不正遊技機問題を受けるかたちで、流通過程の明確化と不正遊技機の排除を目的に回胴遊商が設立され、パチスロ専門で取り扱う商社142社が加盟した。初代会長にはアルファーコンピュータの阿良木正氏が就任。

●新組織の設立でいうとこの年は大手企業の論理を全面に打ち出した同友会も創立されている。独自の流通企業YKDやPB機の企画など会員メリットを追求した取り組みのほか自主規制の在り方に疑問を投げ掛けるなど業界に「自由競争」の概念を持ち込んだ。現在は解除されているが設立当初は5店舗以上のホール経営者という入会条件もあった。左から間部幹事、佐藤副会長、松岡会長、鈴木副会長、金光副会長

●日遊協事業の一つとして企画された「第一回遊技機取扱い主任者講習・試験」が都内上野の「ラ・ベルオーラム」で行われ東日本ブロックから236人が受験した。

●日電協非組合員である日本回胴式遊技機工業がパチスロ機の製造販売を開始。第一号機である「オールドバー」を市場投入して話題になった。

●この年の10月に行われた第49回国体の歓迎イベントに愛知県遊協が協賛してブースを出展。擬似ホールを通じてパチンコが名古屋の代表的な産業であることをアピールした。

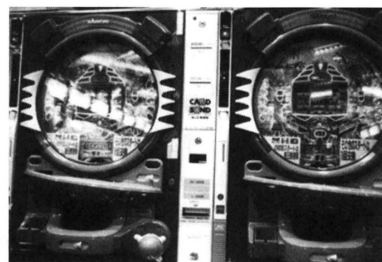
●日韓経済研究センター所長の間部洋一氏と山梨学院大学助教授の宮塚利雄氏が中心となり日本遊技産業学会が立ち上げられた。設立目的に遊技産業の文化、発展に寄与することを掲げ、研究会やシンポジウム、講演会などを定期的に展開した。写真下は学会が主催したパチンコ店の出店反対住民らとのシンポジウムの模様で、ホール側のパネラーとしてダイナム、ヒカリシステム、ニラク関係者が出席。反対住民側のパネラーと議論を交わした。

■回胴遊商や同友会といった業界団体のほか、自民党議員によるレジャー産業研究会や法曹政治連盟、遊技産業学会といった組織の設立や新しい動きが活発化した平成6年。いかにも業界の混乱期特有の展開で、様々な議論が展開されたが、それでも具体的に表面化するのは、やはり不正機問題ばかり。3月には日工組4メーカーの4機種が「互換部品等によって製造上認められる誤差の範囲を超えた誤作動をみせている」として、警察庁から不適正機との指導を受けた。これら機種の合計台数はおよそ12万5000台。ホールの主力機として稼動中であったが、撤去という厳しい措置が取られた。一方のパチスロではホールによる不正ロム事件が頻発した。福岡の大型パチスロ専門店に設置されているパチスロ機のロムが改造されているとして県警から摘発を受けたのをはじめ、広島のホールでも同様の疑いで複数の関係者が逮捕されるなど、警察行政の不正機排除に向けた踏み込みがどんどん強まった。そして、この年の暮れには、改造ロムを使ったパチスロを設置して営業許可を取得したとして業界トップのホール企業が摘発され、グループが経営していた38店舗のうち、摘発された企業名義であった30店舗が、営業許可取り消しになるという事態に発展する。ホールトップ企業が瞬時に崩壊するという衝撃的な展開に、行政側の強硬な姿勢が窺うことができた。後を絶たない遊技機不正改造事犯に対する「一罰百戒」の意味合いが強いといわれたが、その波紋は大きく、同社が参加していたホールの株式公開を目的とした組織「遊技業株式公開準備協議会」の解散にも繋がるなど、業界に与えた影響は実に大きかった。

●この頃は店舗デザインの面でも個性的なホールが多かった。左は砂岩と御影石を全面に採用した北海道の「プレイランドハッピー」。シティホテルを思わせる贅沢なレストコーナーやバーカウンター風の飲食コーナーなどゆとりと豪華さを兼ね備えたホールとして各メディアに取り上げられた。また、右は木造建築様式の藁葺き屋根が話題になった長野県の「よろこびの街100万＄」。「日本人にとっての快適空間」というコンセプトを上手く具現化した。

●女性客の獲得によって店内環境に配慮するホールが増えはじめたこの時期、三菱商事の子会社であるエム・シー・エレクトロニクス社が「クリーン・シャワー」を発表してヒット（写真上）した。店内環境関連ではもう一つ、吸い殻回収システム「クリーン・チャンネル」も登場している。タバコの臭いを排除するとともに清掃業務の省力化が図れることでこちらもヒットした（写真右上）

●新規開業や新台入れ替えを狙ったいわゆる開店プロに対抗するために浅草の「チャンプ」が完全会員制を導入。入会審査はなかったが入会には身分証明書の提示が求められた。

●地元の商店街が主催するフリーマーケットに東京三鷹の麻沼産業が中古遊技機を提供。

●2回ループタイプのCR機が爆発的な人気をみせるなか、都内のホールでは客の利便性と売上の向上を見込んで台間券売機を設置するホールもあらわれた。写真は全国で初めて導入した「みとや三河島店」。券売機の製造販売を手掛けたのは㈱ドルフィン

●1月17日に発生した阪神・淡路大震災ではホール、メーカー、販社、関連業者など業界も多岐にわたって大きな被害を受けた。震災によって全壊・全焼したホールは25店舗でその内、出店規制地域の対象となっていた9店舗の営業再開が認められなかった。ほかに店舗火災や島の倒壊、ガラスの粉砕などで多くのホールが営業困難に陥ったが、一方でボランティア活動も積極的に行われた。三宮のホール「セントラル」「ワシントン」では被災者に対して、豚汁やカレーライスの炊き出しを行ったほか、ソーセージやコーヒーなどを無料提供。また別のホールでは臨時のLPガスを調達してシャワー室やトイレを開放した。

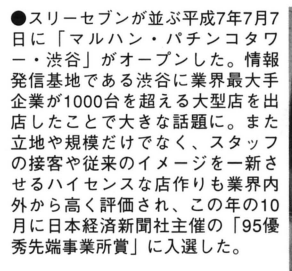
●平和が比叡山延暦寺で行った遊技台の供養。当日の8月8日は7年前に平和が業界で初めて株式公開を実現した記念すべき日でもあり同社が「パチンコ供養の日」に制定している。

●綜合ユニコム主催の「パチンコビジネスフェア95」が開催され業界関連企業57社が出展した。来場者は2日間で延べ1万人以上。写真は初日のテープカットの様子。左河崎清志ユニコム社長（左）、越水稔全日遊連理事長（中央）大木康三全店協理事長（右）。

●猪野健治氏、丸山実氏らジャーナリストが「マスコミで考える政官財癒着を露呈させたパチンコのオータ事件徹底追及の会」を結成。営業許可が取り消された同社がダミー会社で営業再開しているのは不可解として業界の政官癒着を指摘していきたいとした。

●山口県遊協の執行部2名などが発起人となって「平成維新の会」を発足。県遊協が組織分裂に陥った。維新の会は県遊協の一部執行部の解任を求めるなどしてその後一本化。

●都内京橋にある警察博物館に古い遊技機が展示され一般来場客の人気を集めた。遊技機のほかに警視庁管内の遊技場の推移や旧風営法時の鑑札なども展示された。

●パチンコをしながら野球や相撲中継を見ることができる台間液晶モニター「ジャスタン」。コストはかかるが「ながら遊技」の顧客ニーズは高かったようで、以降コンテンツの多様化が図られながら、ホールでよくみるアイテムのひとつとなった。

●スリーセブンが並ぶ平成7年7月7日に「マルハン・パチンコタワー・渋谷」がオープンした。情報発信基地である渋谷に業界最大手企業が1000台を超える大型店を出店したことで大きな話題に。また立地や規模だけでなく、スタッフの接客や従来のイメージを一新させるハイセンスな店作りも業界内外から高く評価され、この年の10月に日本経済新聞社主催の「95優秀先端事業所賞」に入選した。

●埼玉県の「宝石ノア店」。欧州の古城を思わせる優雅なホールとしてTVなどで紹介され話題に。

■阪神淡路大震災という未曾有の災害に襲われた平成7年。遊技機環境を巡っては、二つの大きな動きがあった。6月1日から施行された改正規則の運用と「遊技機の在り方検討委員会」の発足だ。折からの不正機、連チャン機問題のあおりを受けるかたちで検定制度の強化が図られたこの規則改正では、検定取消し事由が大幅に変更。検定申請時の性能を維持するという趣旨を根底に、その対象となる均一性を有しない事例として、製造誤差やプログラムミス、部品の性能誤差などが明示された。その一方で、申請時の厳格化も徹底され、添付する諸元表に膨大な記載が義務づけられた。その項目はパチンコで最大374、パチスロで180にも及んだ。この記載義務は手続きの煩雑さとメーカー開発者の混乱を招いたほか、性能を数値化しにくいハネモノの申請を極端に減少させるなど、その後の遊技機環境に多大な影響を及ぼすことになる。一方、前年秋に生活安全研究会がまとめた報告書「ぱちんこ営業の在り方について」を契機に発足した「遊技機の在り方～」はメンバーに日遊協、全日遊連、日工組、日電協のほか行政担当官がオブザーバーに。「適度な射幸性」の模索とともに、当時、問題視されていたCR機と現金機の「二重基準の格差是正」にホールの期待も集まった。また、不正改造事犯はこの年がピークを迎え、警察庁調べで電子部品改造事犯が103件と、前年の33件に比べて急増。なかにはワンチップの偽造品（44件）も出回るなど手口の巧妙・悪質化も進行した。

●東京千代田区の九段会館で行われた業界4団体（日組組、日電協、全日遊連、日遊協）が主催した「健全営業全国推進全国大会」で「社会的不適合機を業界自らの手で除去」することなど7つの取り組みを宣言した。第一次から第四次までリストアップされた対象機種はおよそ70万台で、全国設置台数の約18%にも及ぶ規模となった。「ホール自らが血を流す」（全日遊連小野理事長）この取り組みに対する業界内からの反発も大きかった。下の写真は宣言文を読み上げる日工組の榎本理事長。後ろは手前から全日遊連の小野理事長、日遊協の平本副会長、日電協の横内理事長。また、左の写真は後日市ヶ谷の遊技会館で行われた4団体共催による記者会見の様子。当日は業界マスコミのほかにTV局など一般メディアも多く出席するなど関心を集めた。

●浜松市の「王将2」がパチンコ玉を金色に変えて話題に。見た目の豪華さもさることながら耐久性や防音性など性能面でも優れており、一時的だが業界でもトレンドになった。また導入店では金色を強調するために透明な玉箱に変えるところも増えた。同店の白社長は以前もセラミックタイプの玉を考案するなどバイタリティ溢れる人物でこの金の玉も自らのアイディアだった。

●2月に行われた綜合ユニコム主催による「パチンコホールビジネス・フェア96」。2日間で延べ2万人が足を運んだ

●マースエンジニアリングが「パーソナルシステム」を（左）、SANKYOが「フューチャーランド」を（中央・下）それぞれ発表。各台、あるいは小型ユニット単位で計数機能を搭載したこのシステムは従来までの補給の概念をくつがえす画期的なシステムとして注目を集めた。省力化機器とはいえ出玉演出がカットされるため、半ば鉄火場と化していた当時のホールからはそれ程受け入れられず、12年後に本格的な各台計数機時代が到来するまで「時代を先取りし過ぎたシステム」と言われた。

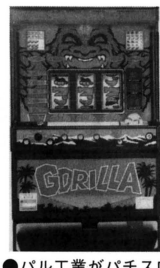
●在日本朝鮮人商工連合会が結成50周年を迎えた記念集会で「金日成勲章」の伝達が行われた。写真は会を代表して勲章を受けとる崔景植会長。集会には村山前首相の姿も。

●先行3社の変造カードが社会問題化するなか、第4のカード会社ナスカが導入コストの低価格化と高セキュリティに比重を置いたシステムを山梨県のホールでフィールドテスト。

●台間の僅かな隙間から空気を吹き出し隣席からのタバコの煙を遮断するダイトーエムイーの「エア・カーテン」がこの年から発売。ヒット商品になった。

●出店反対運動の全国組織が発足したこの年、都内台東区でも大型パチンコ店の出店を巡って反対運動が展開された。「吉原」もある竜泉にはこうした看板も立てかけられた。

●「世界最大」を謳った富山県の「ノースランド・ジャンボ山室店」が2000台でオープンした。同社澤田社長が県下で熾烈を極めていた大手ホール企業による寡占化競争のなかで「不沈空母」と位置付けた巨大店舗。50本の島構成に100人を超える店舗スタッフ、1700台の駐車台数と何もかもが規格外だった。

●フクコーエンタープライズが都内渋谷に出店した「ジャンボマックス」。「アミューズメントホテル」を店舗コンセプトにした多層階ホールで、各階ごとにカジノや和風、ニューヨークといったテーマ性を持たせた。外観のガラス面に廃棄台を再利用した個性的な演出も目を惹いた。

●パル工業がパチスロ3機種の不正改造関与の責任をとるかたちで解散。日電協は除名処分を行う予定だったが事前に出された退会届を受理。写真は同社製の「パワーゴリラ」。

■独禁法違反の容疑で日工組と日特連に公取委の立入調査は入った平成8年。業界はパチンコ依存症やのめり込み客、ホール敷地内での幼児の死亡事故といった一般紙の報道によって「業界バッシング」という厳しい環境下に身を晒した。遊技機の高い射幸性が社会問題化するなか「この際、具体的な策を講じよ」という行政当局の言葉を受けて取り組んだ「社会的不適合機」の撤去は70万台以上にも及んだ。撤去対象機は膾本交付日が3年以上前のもののなかから選定され、各地で進んでいた無承認の構造変更や検定切れを対象とした遊技機の撤去指導に歩調を合わせるかたちで進行。摘発とのセットで外されていくことになる。ホールの売上を底支えする多くの主力機を自主的に外すというこの取り組みには、全国の少なからずのホールが反発したが、業界はこの作業を平成10年1月まで2年間にわたって遂行した。また、この年はプリペイドカードの変造被害がピークを迎え、その被害総額が一般紙で550億円と報道され社会問題化。変造の手口は使用済みカードの磁気データを細工して高額券に書き換える方法から、架空の売上作りのために利用するケースなど様々で、これに関連する形で生カードやユニットの盗難も頻発している。カードの性能はもとより幾ら使用されてもホールに損失はないという決済構造が被害拡大の最大要因とも指摘され、カード会社から協力が求められたホール団体は、現場の反発を受けながらも受付機の設置や高額券の廃止、更には店舗限定型への切り替えという荒治療を実施。なんとか被害額を抑制したものの、感情的なしこりが残る展開であった。先に触れた社会的不適合機も含め、「カード会社のせいでこうなった」という思いを抱くホールが少なくなかったのである。

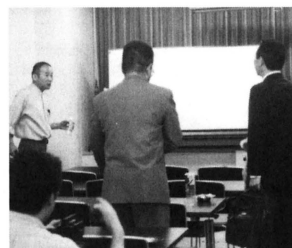
●ゴト行為による実害が肥大化したこの時期、業界団体ではゴト対策をテーマにしたセミナー・講演が頻繁に行われた。写真右は日遊協中国支部のセミナーで実際にホールから発見された裏ロムやぶら下げ部品を参加者が熱心に見入っている様子。また、ゴト行為の横行とその凶悪化傾向に危機感を抱くホールが合同で警備会社と契約。巡回警備でもってホール内の安全を保とうとする試みも話題になった（写真上）。実施したのは都内武蔵野市の「ツバメ」「吉祥寺ニューセンター」「オデヲン」「マックス」の4店舗と三鷹市の「ニューヨーク」系列4店舗の合計8店舗（上）。

●東京新宿で4月から施行されたポイ捨て禁止条例に合わせてパレードを行う都遊協第4ブロックの原田会長（左）。

●東京田無市の「ジュピター田無店」が客の負担を抑えるために64台を「遊び空間ハーフゾーン」と名付けて半価貸し営業（2円）を開始。

●ロシアタンカー「ナホトカ号」の船首部分が漂着し、重油漏れの被害を被った福井県三国町に都遊協が人的ボランティアとして26名を派遣。海岸の石に付着した重油をふき取るなどした。隣県・石川県の浅野理事長も参加。

●サン電子が店独自の情報掲示を簡単に作成できる台間情報端末「ハイパービジョン」を開発。

●JR千葉駅前に衛星放送「パーフェクTV!」のアンテナショップ的役割を果たす「ピーアークデジタルタウン」がオープン。パブリックスペースに設置した200基のマルチモニタで番組を常時オンエア。

●平成6年に設立された日本遊技産業学会の組織運営などを巡って日韓経済研究センター間部氏（左）とダイナム佐藤社長（右）が対立。学会員を招集して行われた釈明の場で互いが感情的になった。あまりに細かい部分に踏み込んで争う姿に会場からは「痴話喧嘩」という声が挙がったり途中退席する会員もいた。この対立を機にそれまで休眠状態だった学会は「もはや存続する意味がない」として解散した。

■社会的不適合機の撤去や内規変更によって遊技機環境が閉塞感に包まれた平成9年は、折からの不況に加え、CR機導入による設備投資負担、社会的批判の高まりによる顧客離れなどでホールの淘汰が進行した。この年、ホール企業の倒産は実に123件に上り、平成7年の31件、同8年の65件と比べて倍増。負債総額も平成7年から3倍に膨れ上がっている。ホールの過当競争の激化は大手企業も直撃し、富山県では大手企業が和議申請を行い、鳴り物入りでオープンした都内渋谷の大型店の撤退が伝えられるなどした。遊技機関連では社会的不適合機の撤去が進められるなかで内規変更による1回ループのリミッター付きCR機が市場投入されたものの、一部の機種を除いて総じて営業的貢献度が低くパチンコは低迷期を迎える。こうした背景から現場ではバラエティーコーナーの設置や店内ルールの緩和、貸玉料金、交換率の変更といった営業の多様化も目立つようになる。遊技機不正防止対策では遊技機主基板ケースの「かしめ」化やLEテック製ワンチップがロム内蔵の「V2チップ」に変更されるなどした。福井県のモーニングや福島県での「それ浜2」と周波数の変換機「スーパーV6」の接続を巡っての訴訟が行われたのもこの年。

●福岡県小郡市の「BASE小郡」が集客戦略の新しい試みとして出玉による台移動を自由にしたバラエティコーナーを設置。「わらしべ長者コーナー」と名付けられたこの一角にはチューリップ台からハネモノ、セブン機、権利物、CR機など新旧織り交ぜた多彩な機種構成が話題となり地元ファンから人気を博した。

●平和が東証一部上場を記念した披露パーティーを開催。業界内外から1500人を超える来場者が訪れ同社の躍進を祝った。写真中央は来賓者に囲まれる中島健吉会長。同社はこの年、遊技台の無公害廃棄処理システムで「地球環境大賞」（フジサンケイグループ賞）も受賞している。

●この年は平和に次いでSANKYOも東証一部上場を実現。ホテルグランドパレスで行われた祝賀パーティーには多くの来賓者が駆けつけた。同社は91年に店頭登録、95年に東証二部に上場していた。写真は左から毒島会長、山口東京証券取引所理事長、毒島秀行社長、丸山常務。

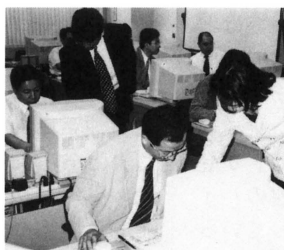
●ヘール・ボップ彗星の接近に伴って全日遊連がホール向けに作成した専用ポスター。環境庁より各方面に呼びかけられていた「ライトダウンキャンペーン」への対応。

●社会的不適合機の撤去以来、営業環境の悪化に拍車がかかるなか、愛媛県や福井県では等価交換営業にシフトするホールが急増した。特におよそ80%のホールが等価交換にシフトした福井市内の4つの地域ではこの営業スタイルが主流ともなった。「劇薬」とも言われたこの等価営業は当時としては珍しく、スタート回数が大幅に落ちてもギャンブル性を求めるファンには絶大なインパクトをもって受け入れられた。地域で先駆けて実施するという成功の秘訣や拡大するに従って頭打ち傾向を辿る市場は低貸玉営業と通じるものがある。

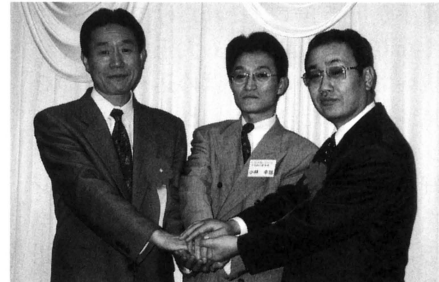
●全日遊連初の理事長選が行われ浅野元哲氏（石川）が予想を覆す逆転劇で現職の小野金夫理事長を26対23（無効票2）の僅差で破った。第三代理事長に就任した浅野氏は全日遊連を任意団体ながら旗揚げした草創期のメンバーでもあった。選挙では社会的不適合機の撤去とそれに至る情報公開への不満が「反小野票」に回ったといわれた。写真は投票が行われた別室から神妙な面持ちで出てくる浅野氏（中央）、島本理事（左岡山）、千田理事（右島根）。左は緊張感漂う総会会場。

●同友会中部支部設立に伴って行われた同友会シンポジウムのパネラーに公正取引委員会の関係者が出席（右から2番目。右は司会の佐藤洋治ダイナム社長）。組合が規制する交換率や台数規制は独禁法に抵触するおそれがあると指摘。その後の組合運営に大きな影響を与えた。左の写真は松岡会長（左）から贈られた支部看板を受け取る松田泰秀支部長（中央）。

●一回のビッグボーナスでおよそ600枚のメダル獲得が可能な大量出玉タイプ「ビン貧神さま」を発表したサミーの展示会。初のCT機「ウルトラマン倶楽部」のヒットなどこの頃からパチスロ市場での同社の躍進が始まる。

●SANKYOの毒島秀行社長がゴルフコンペで見事ホールインワンを達成。その記念コンペが同じ鳴沢ゴルフ倶楽部で行われた。

●都連青年部がネット導入に向けたインフラ整備の一環としてパソコン教室を開催。この頃は情報交換や会員連絡など電子メールが使われだした時代。「青年部」とはいえ一から覚えるには苦労した年代だったようだ。

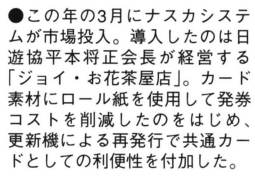
●平和がオリンピアとの業務提携を発表。オリンピアが開発・製造するパチスロの一部を自社の販売網を活用して販売するとした。翌年オリンピアが製造し、平和が販売を請け負うパチスロ機「スノーキー」が第一弾として市場投入されている。写真は握手を交わす中島潤社長（左）と石原昌幸社長（右）。シナジー効果を見込んだ両社の提携を機に以降、遊技機メーカー間の業務提携は活発化される。

■風営法の改正が行われ、特例風俗営業者の認定や営業者の認定基準が新たに規定された平成10年。千葉県幕張メッセで行われた産業フェアには各メーカーから多くの新機種が発表されたものの、主力機の一つとされていた1回ループのリミッター付きCR機が営業的に使いづらかったこともあってホールからは大きな期待感が示されず、併行して行われたセミナーでも日工組の内規変更を中心とした来年以降の見通しに終始した。一方、上昇気配をみせ始めたパチスロはCT機や大量獲得タイプのポテンシャルに期待が寄せられたが、市場での評価は来年以降に持ち越される状況で、可能性を感じさせながらこちらも大きな動きがないまま推移した。遊技機関連ではむしろゴト問題が深刻化しており、それまでの不正ロムやぶら下げに加え電波発射機を使用しての電波ゴトが進行。全日遊連、日遊協などの組織活動もセキュリティ問題に比重が置かれたが、被害額の拡大とともに対応の遅れや実効性の掴みにくい対策で現場の混乱も招いた。営業の多様化が進み、各地の自主規制が足枷になっていたこの頃、同友会主催のシンポジウムに公正取引委員会の関係者が出席し組合規制の幾つかが独禁法違反の恐れがあると指摘して組合関係者の関心を集めた。公取委は実際に一部の県遊協へ調査に入るなどその後の組合運営に大きな影響を与えている。

●ダイナムに労働組合が誕生した。同社正社員862名、パート社員1828名の内一部を除いた80%が「ゼンセン同盟ダイナムユニオン」に加入した。中央執行委員長に就いた北海道エリアの小林幸雄氏は「信用できる産業という認識を社会へ与え会社の健全発展に寄与したい」とあいさつ。

●創立25周年を迎えたタイヨーエレックが記念懇親会を開催。会場には約1600名の関係者が参列し同社の新しい門出を祝福した。あいさつで大型液晶モニタで話題の「海底天国」に触れた佐藤社長は伝統の正村ゲージでないことに不安感を示しながらも販売が好調で安心、とコメント。

●「パチンコ産業フェア98」が千葉県の幕張メッセで行われ、2日間で3万6000人以上の関係者を動員した。初の披露目となったCT機2機種に注目が集まった。この頃から「CR加トちゃんペッ」や「CRがきデカ」「ウルトラマン」シリーズなどタイアップものの機種が目立ち始めた。

●サミーが初のCT（チャレンジタイム）機「ウルトラマン倶楽部」を発表した。技術介入性の高いジャンルだが視認性の高いリール配列で初級者にも配慮。

●この年の3月にナスカシステムが市場投入。導入したのは日遊協平本将正会長が経営する「ジョイ・お花茶屋店」。カード素材にロール紙を使用して発券コストを削減したのをはじめ、更新機による再発行で共通カードとしての利便性を付加した。

●ナスカに続く第5のカード会社となるクリエイションのカードシステムが福岡県の「アクセス博多」にテスト導入された。千円紙幣の入金対応型で遊技席にいながら現金サンドと同じ感覚で利用できることで西日本で火がついた後、全国に拡がった。

「イタチごっこ」の長い歴史も深刻さは増す一方のゴト問題

A・Pグループ／中野耕平社長

ゴトは昭和20年代から今現在に至るまで、一度も途切れることなく存在し続けている大きな課題だ。本誌でもその都度、特集記事を掲載してきたが、今ではかつてのローテクゴトと変造カード問題以降に急増したハイテクゴトとが入り混じった状況下にあるのは周知の通りだ。ゴト対策企業のパイオニア、APグループの中野社長に一連のゴトの流れを聞いた。

会社を立ち上げて16年になるAP総研の中野社長。ゴト対策会社のパイオニアであり、ライバル企業が乱立し、その多くが淘汰されても一線で活躍している。

昭和20年代のホールをもっとも悩ませた不正といえば、本誌の古い記事で振り返ると圧倒的に「ヤミ玉」被害が多い。今でいうところの他店玉ではなく、粗雑なベアリング球を持ち込むというもので、刻印球などで対処しても監視の目はなかなか行き渡らず、紛れ込んだ不良玉は定期的に選別するしかなかった。特に貸玉料金が値上がりする際には、この「ヤミ玉」が増えることが懸念された。

「そうした玉の系統でいえば、油玉とか小玉とかにも発展するけど、小玉は特に一発台の全盛期から増えた手口です。糸付き玉とか大玉とか、今でも玉の系統というか、何かと絡めた手口は新手が出てきて、それだけでも話は長くなりますよ。最近も大玉の中をくり抜いてスプリングをはめ込んだものを見つけたんだけど…」というAPグループの中野社長。確かにゴトの歴史を詳細に追えば、この別冊の大半のページを使ってしまうだろう。それだけ、パチンコ店とゴトとの「イタチごっこ」の歴史は長い。

ヤミ玉と並んで昭和20年代から被害が生じていたのは磁石ゴトだが、「これもなくなってないのはご存じの通り。磁石そのものが磁力が強くて小型化したことで指輪型になったりしてましたが、最近では人差し指と中指に挟んでちょっとガラスを撫でるだけというぐらいのものもある。今、磁石感知器は機械に触れないように取り付けますが、パチンコ機のヤクモノが大きくなったせいか、ベニヤも厚くなりましたからね。磁力はもともとが減衰率が高いので、感知しづらくなってます」という。

こうした古典的手口がなくならない背景には、遊技機の構造上の課題など多数の要因が絡んでいるが、やはりゴト師側の手口が巧妙になっているという要素が大きい。「例えばセルやピアノ線に対してはセル返しを取り付ければいい、隙間を埋めればいいという対策でしたが、筐体そのものに穴を開ける手口が出たでしょう？　最初に穴を見つけた時にはびっくりしたし、ではどう対応すればいいのか悩みましたよ」。

古典的手口ですら対応がままならない状態は今でも続いているが、平成に入ると、いわゆる「セットロム」が登場。計数機ゴトと合わせ、一連のハイテクゴトが横行するようになっていった。が、まだトイレなどの天井裏に身を潜め、夜間にロムを交換する手口が出た当初は、ホール関係者の危機意識は薄く、「ゴトもサクラになるって言うホールオーナーがいたぐらいですから」と中野社長は振り返る。

変造カード以降は新旧手口が入り混じる横行ぶり

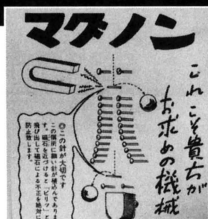
「結局のところ、カードなんですよ。プリペイドカードの変造。こっちの方が手っ取り早いし打ち子を動員する必要もあって、増えつつあったセットゴトはこの平成8年頃は確かに一時的に減ったかも知れない。ですが、資金を蓄えて機械のゴトに戻ってきた時には、仕込み方も仕込むモノも相当進化した」

遊技機のプログラム解析が進み、電波ゴトが横行したと思ったら、ぶら下がり系は小型になって見つけづらいものになり、ロム系ではセキュリティチップも偽造される。カシメ基板はホールも行政も滅多に開封することがないのに、ゴト師側だけが易々とこれを開ける。仕込み方も営業時間中に堂々と人の壁を作って、数十秒で異物を取り付けたり、倉庫や搬送途中を狙ったり、清掃業者やそれこそホールスタッフと組んで行う。コンクリートの外壁だって破られた。

一方、パチスロでは電波やセルによるホッパーゴトが出たと思ったら、その電波でリセットゴトが出て、4号機末期には「パチスロは抽選方式が違うので電波系は大丈夫」という認識をあっさりと破られ、大当たりさえも狙われた。さらにクレ満やメダル返しなどのセレクタ系や同期を取られてのソレノイドゴトは、手口の変化スピードが早く、ホールもメーカーも対応が遅れた。この頃、本誌では「イタチごっこ」にもなっていないとレポートせざるを得ないほどの横行ぶりであった。

これら手口の変遷をひとつひとつ聞いていたのでは、朝までかかると思い、ポイントだけをたずねてみると、「感心したというと語弊があるけど、驚いた手口といえば筐体に穴を開けるものほか、二層ロムやフィルム基板を最初に見つけた時かな。いやいや、私が『パッカン』と名付けた赤外線センサーを無効にするために内側にアルミホイルを貼り付けたクリア素材のお椀を被せる手口とか、思い起こすと本当にたくさんある。それを説明するだけでも時間がかかるよ。それと、この仕事をしていて印象に残るのは、利きもしないフェライトコアなんかを高い値段で売りつける業者がいて、それを買うホールがあることかな」と苦笑いする。

パチンコ営業が存在する限り、ゴトはなくならないのだろうか。

■昭和のゴト■

●磁石対策はメーカーも怠らなかったのだが、ゴト師側が常に上回った。写真左は盤面に穴を空け、磁石を近づけるとそこから針金が出てきて入賞を妨げる「マグノン」。右は磁石使いを捕まえたホールの店長が、ゴト師の行為を本誌記者に再現してくれているカット。

●攻略法かゴトかの境目が曖昧な手口が時折登場する。写真は枠とガラスの間に板状のモノを挟みこみ、天入賞を容易にする「ゴキ」。昭和32年。

「プロ師さまざま」

ごき師
―マッチ棒がガラス台の間にはさみ、ガラスをクギ頭に押しつけが欠クギをねらう。

せる師
―透明セルロイドを使いソデ、オトシ、ヘソをねらう。

からみ師
―金ワクの下部にたばこのあき箱や小石をはさんで天オトシをねらう

つり師
―打ちダマに糸をつけて盤面の適所にとめ、その糸を利用する。

しゃく師
―磁石使い。

ごと師
―合いカギで強引に前トビラをあける。

ひっぱり師
―ピアノ線で命クギをコジあける。

ひも師
―自分の女を店に就職させグルになる。

たたき師
―タマがはいらないのに"出ないぞ"と叫び立てる。

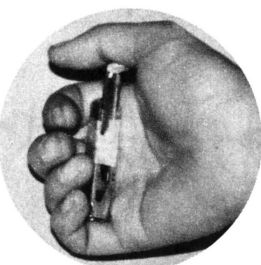
タマ師
―手製のタマでかせぐ。

元祖三葉！

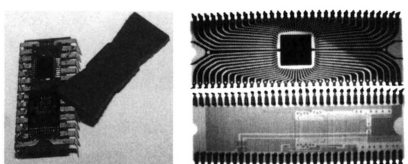
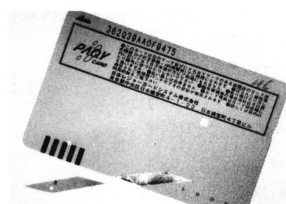
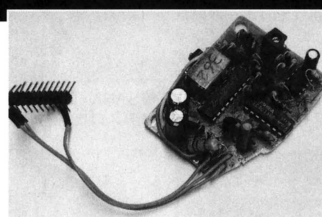
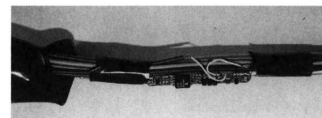
●昭和40年の本誌に掲載された「プロ師」の分類。今でいうところのローテクゴトだが、これら全ての手口が平成になっても通用しているのだからもどかしい。なお、今では総称で「ゴト師」というが、当時は合い鍵使いを「ごと師」といった。ゴトの語源はよく「仕事」から転化したものと言われるが、昭和初期の「香具師奥義書」などによると、香具師仲間で使う「悪事」の隠語が「ワルゴト」または「ゴト」とある。

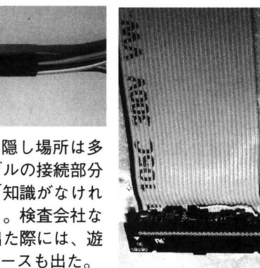
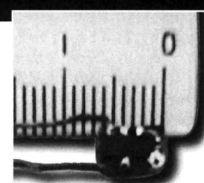
●昭和62年、小玉（小径球）を除外する装置を都内のホール有志で構成した中野遊技業研究会が開発。東京中野の国際センターで取り付けた初日、なんと3000個もの小玉が出てきたという。右は昭和20年代の不良玉選別機。レール幅より小さい玉は下に落ちるという単純なものだが、ヤミ玉、ガス玉は当時のホールの大きな悩みだった。

●中京遊技のドリームキー。枠開閉作業をひとつのキーで行うという簡便性がウリだったが、防犯性にも優れていた。昭和61年、新潟のホリカワチェーンに導入された際の写真。

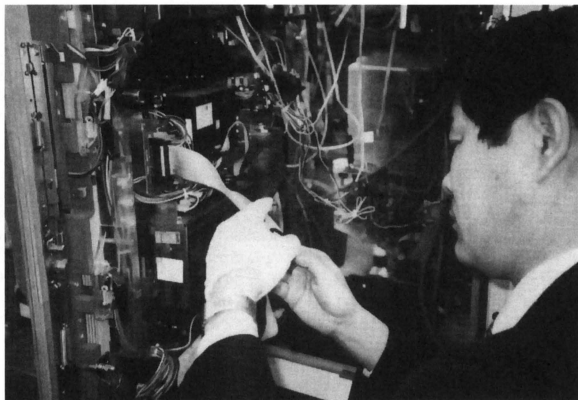
■平成のゴト■

●昭和の終わり頃から流行った電子ライター系のスタートゴト。トランシーバーの発信で偶然、ハネ物が開放した話から始まり、各種アイテムで遊技機の誤動作を狙う手口が流行。面白おかしく書く一部マスコミのせいで模倣犯が増え、遊技機の基板が飛んでしまうなどの被害を受けた。

●昭和60年代に入り、海外との人の出入りが多くなるにつれて各種自販機に海外硬貨が混ざるようになった。写真は昭和61年、パチンコ店の台間に投入された台湾硬貨。その後、海外硬貨に留まらず、偽造紙幣や偽造500円硬貨なども登場し、ホールを悩ませた。

●平成に入って一般紙も大きく取り上げた侵入系ゴト。トイレの天井裏などに身を潜ませて、夜間に基板交換などをした。侵入系手口は営業時間中に赤外線センサーを無効にするカップを取り付けたり、外壁破りなどどんどん大胆になっていく。

●ロム交換ゴトの対策としてセキュリティチップの採用が進んだが、日電協赤ロムでもワンチップでも偽造ロムが登場。出来映えも精巧になる一方であったことから、レントゲンを使ってチェックした。

●不正する側に豊富な資金を与えることになったといわれる変造カード。この被害がなければ、ゴトの進化スピードはもう少し遅かったかも知れない。

●写真左が初期のぶら下がり。これが、わずか数年で右のような小型化を果たす。PICという、超小型マイコンの登場は通常のジャンルの技術者には夢の製品であったが、業界にとっては厄介な存在となった。

●PICの登場によって異物系ゴトの隠し場所は多様化プラス巧妙化。フラットケーブルの接続部分や配線途中であったりと、ゴトは「知識がなければ分からない」手口に進化していく。検査会社などは未知の手口と思われる被害が出た際には、遊技機を細部までばらして検査するケースも出た。

●電波系ゴトは種類も手口も多様化の一途。異物のチェックを済ませてもなお、異常データが出るとよく「電波で一発大当たり」の噂がホールに流れた。正規な状態でも被害が発生する遊技機が登場すると、基本的には電波感知器に頼るほかなく、ゴト師が使う周波数帯域に関する情報が重要になった。

●パチスロ機が被害に遭い続けているコインセレクター系のゴト。当初はその巧妙な手口に舌を巻いていた多くのホール関係者も、やがて「なぜなくならないのだ」と苛立ちが増していった背景には、並行して「手クレ」という単純な道具による単純な手口も存在するからだろう。

●権利物「ギンギラパラダイス」のキャラクターを使ったCRセブン機という位置付けで登場した初代「海物語」。写真はシリーズのなかでも最も早く市場導入された5回リミッタータイプの「S5」。

●先行カード会社に先駆けてパチスロ専門店に導入されたウィザードのICカード「ウィックシステム」。当日発行、当日清算のハウスカードで、券売機に挿入された1000円から1万円までの金額をそのままカードにチャージして発券するため釣り銭機能はなかった。

●全日遊連が日工組に協力要請して行われた遠隔操作などに対する合同立入調査。写真はぶら下げが横行したモンスターハウスのハーネスを丹念にチェックする様子。ただ、大工の源さんなどのフルスペックCR機は既に検定切れで、故障時の保証ができないので目視検査に留まった。

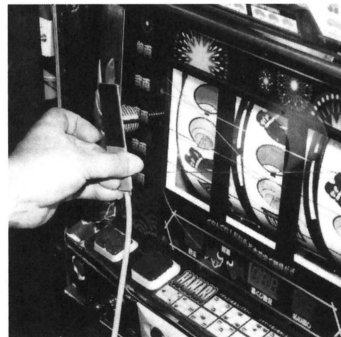
●日工組が1月に内規を変更。5回リミッターが解除されたほか、賞球5&15も復活した。写真はノンリミッター機として先陣を切って3月にホール導入が始まったSANKYOの「CRフィーバーゼウスSX」。当時の機種は厳密にいえば、200回程度のリミッターが付いていた。

●SANKYOが「メイクエ」を発表。パチスロ市場への参入を果たした。

●写真は稼動の良さで知られていたグリンピース新宿本店。新宿は前年末にマルハンが進出したほか、パチスロ専門店の出店ラッシュも重なり、エリアの台数が増えたことはもちろん、パチスロ台数がパチンコ台数を上回る特異な市場を形成。イベント前日に徹夜で並ぶ客も珍しくなく、当時の新宿は文字通り「パチスロの街」だった。

●4つの基板を独立分離してメイン基板の負担を軽減したほか、液晶演出の進化にも繋がったスーパーインテリジェント化。写真は第1弾として登場した藤商事の「CRチューミーハウスXL」

●ホール、メーカーなど120社が名を連ねた余暇環境整備推進協議会が7月に発足した。写真は設立総会の様子

●ダイナムのローコスト出店が話題になったが、熊本の「パオー大津櫻山店」はその究極。島組は基礎のみで納品、写真は社員のみで島飾りを仕上げる様子。借入金ゼロでの新規出店に成功した。

●パチスロ市場拡大と共にゴト被害が急増した。これまではホッパーやコイン投入口などハード面を狙った手口が多かったが、電波ゴトなどのハイテクゴトが横行。パチスロはパチンコのぶら下がりがないことなどから、ハイテクゴトに強いという意識もあり、対策は後手後手に回った。写真は強い電波を当てることで、出荷時の初期設定6になるという電波ゴトの道具。

■バラエティーに富んだゲーム性がファンの心を掴み、パチスロ設置台数が100万台を超えた平成11年。専門店の出店が相次いだほか、R島が多用されるなど、従来の省スペース型にこだわらず、スケールメリットや差別化要素を追求する動きも見られた。メーカー側でもSANKYOがパチスロに参入したほか、平和がオリンピアとの提携による第1弾機を発表するなど拡大する市場でのシェア獲得に向け積極的に動いた。また、CTの「アステカ」や大量獲得の「大花火」といった、それぞれのジャンルを代表する名機が登場したのもこの年だった。一方のパチンコ市場は設置台数を10万台以上減らしたうえ、5回リミッターの影響で依然として「CRモンスターハウス」などの一部機種に頼る状況が続いており停滞感が強まった。年初の内規改正によってリミッターが解除されたものの、市場縮小から脱却するだけの力は発揮できず。全国屈指の激戦区、新宿エリアでパチスロ台数がパチンコ台数を上回った現象が象徴するように、両者の対照的な動きによってホールの収益構造はパチスロ依存型に変化していった。そのパチスロ市場の盛り上がりに水を差したのがゴト被害の増大。次々と新しい手口が出現するなかで情報も錯綜し、イタチごっこにもならない状況に陥った。遊技機市場と共に動きが目立ったのがプリペイドカード関連。前年のクリエイション、ナスカに続きマースがCRユニット「K−1」を発表し日本LECから数えて6社目となる市場参入を果たしたほか、アルゼの子会社セタも年末に市場参入する意向を示した。

●写真はモンスターハウスの盤面ではなく、ダイコク電機がセガ・サターン用ゲームソフトとして発表した「ネッパチ」の画像。盤面だけでなく、玉の動きもリアルに再現した。最大の特徴は通信回線を利用することで景品がもらえる「在宅パチンコ」ともいえるシステム。最高景品がラスベガス旅行という豪華さも話題になった。

●2月に千葉県の幕張メッセで開催された「パチンコ・パチスロ産業フェア2000」。志村けんや中村玉緒ら芸能人も登場したフェアには5万3000人が詰めかけた。

●パチスロが全国的に普及した後も、パチンコのみの営業を続けていた三重県。平成10年に「パチスロ導入検討委員会」を発足させてから約2年間、第二組合の設立などの紆余曲折を経て、7月にパチスロが初導入された。写真は県内導入1号店となった志摩郡の「KBシティ／ダイウ」の様子。目押しが必要な機種も導入されていたことから、来店客がパンフレット片手に奮闘する姿や、写真のようにAT機の遊技方法を丁寧に説明する姿が見られた。

●現金対応型のユニットが続々と登場したほか、磁気カードからICカードへの移行も同時に起こった。座ったままで現金投資できる環境が売上増に直結するだけに、その後は劇的にホールに浸透していった。写真は日本レジャーカードが9月に市場導入した入金機能付きICカードユニット。

MORE SURPRISE!!
!! KYORAKU

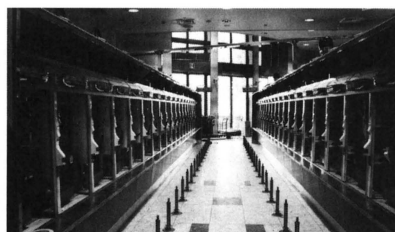
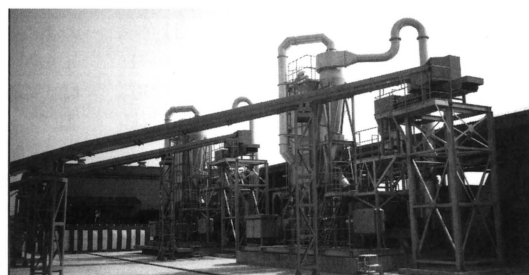
●この年から採用された京楽産業のビックリマークのCIロゴ。翌年には「CR必殺仕事人」をヒットさせるなど、その後急成長した同社の象徴となった。

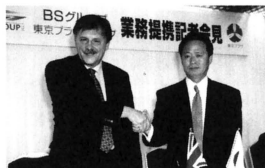
●シドニーオリンピックのテコンドー女子67キロ級で銅メダルを獲得した岡本依子選手（写真左）。メダル獲得のインタビューにおいて、涙で「高山社長ありがとう」と支援者への感謝を述べて一躍時の人となった。その高山社長とはホール経営企業、高山物産の高山貴一社長（写真右）のことで、岡本選手は高山物産が運営する複合施設「ルネスかなざわ」の所属だった。写真は同社主催のゴルフ大会「TAKAYAMA CUP」の表彰式にて。

●5月に渋谷店をオープンしたガイア。廃業店の設備を利用する「居抜き」を積極的に活用することで、年間10店舗ペースに及ぶスピードで店舗数を拡大させていった。

■パチスロが前年からの好調を持続し年末時点で設置台数は130万台を突破。パチンコは「海物語」という柱を得てスペックの画一化という問題を孕みながらも回復基調が明確になったことでファン人口が2000万人に回復した平成12年。2月に開催された産業フェアには前回の1.5倍となる5万3000人が来場し大きな盛り上がりを見せた。この年に最も目立ったのはホールの動き。ダイナムやマルハンといった大手はもちろん、ガイヤに象徴される新興企業も出店攻勢を図るなど、積極的な投資に打って出る企業も多かった。その一方で中小店の淘汰も進み、ホール企業の二極化が明確になり、「勝ち組・負け組」をキーワードに生き残り競争が激化していった。また、改正リサイクル法の可決を受けて、全商傘下の7組合が厚生省の広域産廃処理者の指定を受けたほか、ユーコートレーディングがリサイクルプラントを完成させるなど廃棄台関連の動きも目立った。ところが、そんななかで年末に東京都が新台設置1台当り1万円をホールに課税する新税構想を発表。遊技機の短命化が進んでいるうえ、パチンコ機の基板分散化に伴う新枠への移行やタイアップ機の増加による遊技機価格高騰が見込まれていたこともあり、大きな反対運動が展開された。

●大阪の千日前に設置台数1000台でオープンした「マルハンツインパークなんば」。東京渋谷の「マルハンパチンコタワー渋谷」が東の旗艦店ならば、同店は西の旗艦店。千日前という激戦区への進出となっただけに大きな注目を集めた。

●東京都が示したパチンコ税に業界側は猛反発した。写真は急遽新税反対を訴えるパネルディスカッションを開催した都遊協青年部主催のフォーラム110の様子。

●9月に東海地方を襲った集中豪雨。被害の大きかった愛知県では冠水などの被害を受けたホールが127店舗にのぼり、うち2店舗は廃業を余儀なくされた。写真は冠水被害で使いモノにならなくなった設備を取り外すと、島組しか残らなかったという愛知県内のホール。

●ユーコートレーディングが北九州市に新設した廃棄遊技機リサイクルプラント。液晶パネル、鉄、木屑、プラスティックなどに完全分類することで、燃料として再活用するリサイクルではなく、再製品を生み出すリサイクルを実現した。

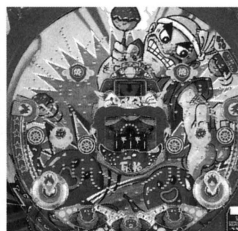
●日拓グループのドミナント戦略を象徴する巨艦店「エスパス日拓新宿・歌舞伎町店」が8月、総台数1104台でオープンした。都心の繁華街で1000台を越える大型店の出店は、平成7年の「マルハン渋谷店」（当時1090台）以来6年ぶり。この年の10月には、23区最大となる「ガイア渋谷駅前店」が1128台でリニューアルするなど、都心部でも本格的なパワーゲームの時代が到来した。

●東京プラザグループと、英国内でドッグレース場3箇所、インターネットカジノなどを運営するBSグループが7月に業務提携。イギリス、ヨーロッパでのパチンコ店経営、アジアその他の国でのゲーミングビジネス展開を目指した。

●1月に登場したサミーのパチスロ「獣王」。同機の目玉機能であるAT「サバンナチャンス」が持つゲーム性は多くのファンを魅了した。近代パチスロに新たな可能性を切り開いたエポックメイキング機の一つである。後に攻略法が発覚するが、それをきっかけにこの種の問題に対する体制を整備する機運が高まった。

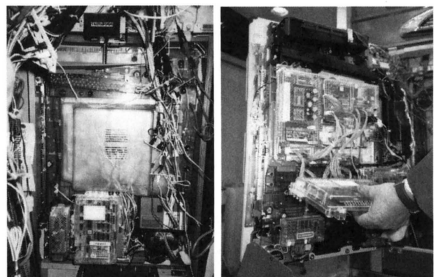
●3月、オムロンのICチップ内蔵コインを採用した新カード会社ジョイコシステムズが設立。会見には、社長に就任した元日本レジャーカード副社長の日比野弘和氏のほか、遊技機メーカー6社の幹部らが勢揃いした。

●全日遊連の遊技機共同購買事業第一弾となったマルホン工業の「CRばくばくBANK」。団体交渉で定価20万3000円が16万9800円になり、さらに組合負担の補助金4万円が加わり12万9800円と、10年前の価格となったが、販売ノルマの達成に苦慮し各地のホールから不満が噴出。また補助金制度を設けたために、売れるほどに各組合の財政負担が増していくという奇妙な共同購買事業となった。

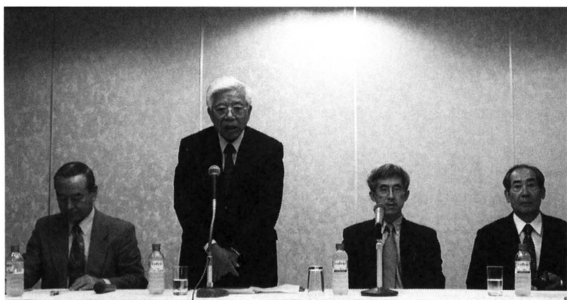
●投資額や遊技時間などをマイル換算し、それに応じた景品提供が話題になった佐賀のホール。大型冷蔵庫や大型フラットテレビなど最高額10万円相当の豪華賞品が用意された景品コーナー（写真）のインパクトは高かった。

●前年11月に都の税調が「環境負荷の高い資源浪費型産業」として打ち出したいわゆる「東京パチンコ新税」。この年は都遊協を中心に新税の導入阻止に向けた会合が相次いだ。1月に都内で開催された対策集会では組合員らが拳を突き上げ、意気を高めた。

●遊技機の均一性が強く求められた平成6年の諸元表改正以来、販売タイトルが一気に減少し、ついには、発売メーカーがゼロになったハネ物が、ダイドーの「たこ焼き八ちゃん」として約5年ぶりに登場。CR1種に偏重していた当時のパチンコ市場に一石を投じた。

●この年にスタートした京楽産業のイメージガールとして、初代「ミスサプライズ」に選ばれた小池栄子が9月、同社の新機種「CR熱闘パワプロクン」をPR。「これから、パチンコもたくさんやってみたい」と意気込みを語った。

●好調なパチスロをしり目に、液晶演出だけが変わる「金太郎飴」と揶揄され、厳しい状況が続いていたパチンコ。そんな中、「海物語」以外で数少ないヒット機種となったのが大一商会の「CR天才バカボン」だった。

●メイン基板と機能別のサブ基板を分散化し、命令信号を一方通行のワンコマンドとした「SI化」だったが、それをさらに発展させた「フルインテリジェント枠」採用の新機種が出始めた。これは電源や発射制御を行うサブ基板を枠側に取り付けたうえ、バックアップ機能やノイズ対策も施したというもの。左はそれ以前のCR機で、右がフルインテリジェント枠となったCR機。サブ基板がブロック化され、電源などの基板は枠側に付いている。

■パチスロメーカー役員の逮捕劇というニュースで明けた平成13年は、業界景気の低迷は変わらず、希望的観測含みの規則改正時期に関する噂話に振り回された1年だった。目立った動きは、多店舗展開と大型化をキーワードに、ホール間で進行していた二極化が一層広がった点だ。ダイナムが岡山を皮切りに西日本進出を果たしていったほか、マルハン、ガイアといった大手ホール企業の出店ペースが加速。他方、日拓が新宿で展開したように、エリアでの圧倒的スケールを見せつけ、他企業の出店をけん制する戦略も進んだ。それを可能とした一つの要因が当時の遊技機環境で、パチンコなら「画一化」といったマイナス要素を「海物語」の大量導入によって他店との差別化ツールにした。パチスロでは、少台数ではポテンシャルを発揮させづらい「獣王」のようなAT機を、こちらも大量導入するスタイルが主流となった。本格的なパワーゲーム時代の到来である。これに加え、自由競争を掲げる一部ホールの勢いに押される形で各県組合の自主規制がさらに崩壊していったことも、多店舗、大型化を推進する企業にとってプラスに作用した。また、これらの大手、強豪ホールの台頭により、これまで圧倒的多数だった中間層がどんどんと薄くなり、各種業界データの平均値の意味合いが薄れてきたのもこの時期で、業況判断をより難しくした。

●都内あきるの市の「OKホール」。すでに当時としては貴重な単一メーカーの専門店で、昭和38年の開業以来西陣一筋だという。取材時は約2年ぶりの新台入替初日で、西陣の現金機「遊遊悟空」「おばけらんど」を10台づつ導入。ただ、外には入替えを告知するポスターはおろか、店の看板すらなく、違った意味でも稀少な店舗である。

●1日で5万枚以上（右）の出玉を記録するなど、青天井の一途を辿っていたパチスロの射幸性に行政のメスが入り、市場は混迷、業界には困惑と怒りと打算とガセネタが駆けめぐった。それを受けた日電協は自主規制を策定し、1万枚を一つの指標にした機種リストも公表。そこには中古移動の制限やメーカー判断による当該機回収が含まれており、ホールからは批判が噴出した。

●W杯開催に伴う入替自粛とサッカーグッズ問題を巡り全日遊連が迷走した。入替自粛は不満が噴出し、一時「自粛を自粛する」ところすら出た。サッカーグッズ問題では、当初1割程度の申し込みしかなく、大幅値引きして消化を促進。約6億5千万円もの損失が生じた。さらには、遊技機共同購買事業第2弾となったパチスロ「ムーンライト」（右）の散々たる結果が失政ぶりに追い打ちをかけた。

●パチスロの射幸性問題と広告宣伝規制は、6月に品川で行われたロデオ製パチスロ「灼熱牙王」の展示会当日の販売自粛決定という異例の事態で一気に表面化した。写真は、販売自粛の発表直後、突如電源が落とされた同機。新高輪プリンスホテルに設けられた展示会場は、その広さもあって閑散とした状況が強調されていた。

●6月、約3年半ぶりに日工組がCR第1種の内規を変更。スタートの最小賞球数変更、確率の下限緩和、大当り後の時短機能などの新要素が加わった。台売上や玉単価の上昇に伴う客の負担増に対する懸念の声も挙がったが、11月に発表された三洋物産の「新海物語」の大ヒットで、新内規スペックが一気に浸透していくことになる。

●オリンピアと平和は4月にパチスロとしては初となる脱着分離型を実現した新機種「スペースバニー」と「フジコ」を発表した。この脱着分離型スロットは、主基板、メインリール、サブ基板などで構成される脱着式の「メインユニット」と、電源ボックス、ホッパー、集中端子板などの「筐体ユニット」が簡単に分離できるというもので、コスト削減と入替作業の軽減を売りにした。

■新機種の発表を重ねる度に上昇していったパチスロの射幸性に加え、出玉を強調した広告宣伝に歯止めをかけたい行政と、AT機能の全面的な規制だけは回避したいメーカーサイドの折衝が繰り広げられた平成14年。いわゆる爆裂機の「終わりの始まり」がスタートすると共に、順調に市場を拡大してきたパチスロのターニングポイントになった年だった。この問題、一旦は日電協が打ち出した「自主規制」の策定で落としどころを探ったが、当時最高レベルの射幸性を有していたミズホの「ミリオンゴッド」は日電協非加盟メーカーだったため縛りを受けなかった。また、自主回収や、保証書の発行期限を射幸性レベルで分類したという自主規制リストの機種選定における不信感も拭いきれなかった。ホール側も爆裂機の高い射幸性に懸念を示してはいたものの、日電協の自主規制に盛り込まれた当該機回収に対するホール側の反発はすさまじく、「ホールをバカにしている」「財産権の侵害だ」との声が噴出し、事態は混迷を極めた。

●川越市の「いこい」に、注目を集めたジョイコの入金機能付きユニット「JOYCO-1000」が初導入。当時、寡占化から自由化へと変遷を辿っていたプリペイド市場だが、各社が競った技術競争はIC化と入金機能の二つに絞り込まれ、特に入金機能付きユニットは主要全メーカーが市場投入。ダブルサンド普及とは別に「離席させない」という共通の利便性により、ユニットの現金化スタイルが進んだ。

●消費者視点での業界改革を目的に掲げたパチンコチェーンストア振興会が会員数22社で3月に設立され、初代代表幹事にニラクの谷口晶貴氏が就任した。

●待ち合わせ場所として有名な新宿アルタ前を会場としたサミーの新機種イベントに、本物のらくだが登場。巨体を揺らし、口から白い唾液をダラダラ流す様子に、居合わせた人は皆驚きの表情を見せた。奥にはアルタのネオンサインも見える。

●7万人以上が来場するなど、盛況だった産業フェア。賛否両論あったが、来場者・出展社ともに共通して、8月という開催時期に不満が多かった。理由はごく単純に、暑いからである。

●前年の12月に自民党議員が設立した「公営カジノを考える会」に加え、10月には都庁で模擬カジノ（写真）が開催。カジノ合法化を目指す動きが盛んになっていった。

●女性スタッフのユニフォームを全てナース服にした静岡のホール。もちろん、歴としたスタッフである。横を歩く男性も見慣れているのか、あまり関心を示していない。

●10月に完成した平和東京本部ビル屋上の巨大看板で空手着姿の石橋保彦副社長（当時）が、SANKYOマスコットのドラム君に戦いを挑んでいるように見えるため「看板戦争」として、業界内外で話題に。こういった業界らしいユニークな話題がめっきり減っていた当時としては貴重なトピック。

業界の開拓者たち

株式会社　オオキ建築事務所　取締役会長　大木康三氏

最近のホールデザインには、目を見張るものがある。フィーバーブームがもたらしたホール建築への資金投下の増大、過当競争下のホールの差別化などが、その背景として考えられるが、それにしても、一朝一夕にここまでたどり着いたわけでは、当然ない。オオキ建築事務所・大木康三会長。この人こそ、戦後のバラック時代から一貫してホールデザインの流れを築きあげてきた人物だ。(年数および関係者の役職は1991年当時のものです)

最初に手掛けたホールは西小山で20台のよしず張り

本誌　ホール経営において重要なウエイトを占めるホールデザインを、大木会長は業界の草創期から一貫してリードしてこられたわけですが、そもそもホールデザインに着手したキッカケは何だったんですか？

大木　大学を出て、昭和23年に伊勢丹デパート（東京・新宿）の宣伝分室に勤めましてね。伊勢丹といっても、その頃は進駐軍が入っていて、その一部が返還されながら復活しているような状態でしたよ。そこで、店舗の内装を手掛けていたんです。そんな時、東急・目蒲線の西小山の駅前に児童遊園地を作る話が持ち上がりまして、そこの石井さんという町会長が私の知り合いだったもので、遊園地のアーチとかを造ってくれと頼まれたのです。その工事が終わったら、今度はこの町の有力者に小川太助さんという方がおりまして…この人は東京の業界の最古参で知らない人はいないんですが…西小山の駅前マーケットに20台くらいのパチンコ屋を始めるからやってくれと。これが、私の初めてつくったホールです。当時は東京にホールがないわけですから、名古屋まで連れて行かれてね。そこで初めてパチンコ台を見たわけです。

本誌　当時の名古屋のホールは、どんなつくりだったんですか？

大木　ただ、パチンコ台が置いてあるだけ。それでね、私はペンキを塗ったり、幕板なんていうのもなかったが、格子の幕板を付けたり、造花を飾ったり、機械の番号札を小判型にくりぬいてラッカーで色を付けたり、自分なりに体裁を整えたんです。名古屋でみた番号札はボール紙に無造作に数字が書いてあるだけだったですから。そういう頃です、私が初めてホールを手掛けたのは。装飾なんてほど遠い時代でした。

本誌　それから、次々とホールを手掛けられるわけですか？

大木　その後、小川さんの紹介で、自由が丘のオリオンさんや三ツ星さんなんかをつくりましたね。やはり30台前後でした。9尺間口で、お客がガラガラッとガラス戸を開けると右に16台、左に16台パチンコ台が並んでいて、真ん中に窓があり、映画館のキップ売り場みたいになっていて、そこで玉を貸すんです。お客が入って台に着くと、玉詰めの女の子がその台に玉を詰めるわけです。なんか、こうやって思い出すと、とても懐かしいですね。

本誌　その後、駅前には軒並みホールが出現し始めるわけですね。

大木　そうですね。あ、そうそう、小川さんの友人に成毛菊五郎さんという人がいて、日劇（現・有楽町マリオン）の地下で雷魚をカバ焼きみたいにして食べさせる店をやってたんです。あの頃は、食べ物もなかったですから。それを取り壊して、やはり20台くらいのホールをつくりましてね。その後、三原橋の橋の下で、橋を利用して2店舗目をつくったんですが、このホールは100台くらいの大きな店でしたね。

本誌　その頃には、多少は装飾が施されるようになったのですか？

大木　そうですねえ。当時としてはね。その頃になると、私が最初に手掛けた西小山のホールも、周囲を買い上げて120台くらいの店になったんですが、その店内に私がステージをつくりましてね。そこで、いろいろな催し物をやりました。吹き矢抽選なんていって、吹き矢が的に当たるとパチンコ玉や食料品なんかをプレゼントして。ホールの中に、お客を集める別の遊びをつくったわけです。すると、自由が丘のホールも本格的なステージをつくり、バンドを入れた。今度は三原橋の成毛さんも改装して、中央にステージを設けて、同じようにバンドを入れた。でね、この時には、当時はパチンコ台の裏を女の子が玉の補充で歩く通路があったんですが、その床を上げたんです。そうしたら、お客から女の子が見えるわけですよ。その上、女の子たちに水着を着せちゃったんです。(笑)

本誌　それも会長のアイデアですか？

大木　そうそう、女の子の通路を上げたのはね。ところが、それが行き過ぎということで、当局から待ったがかかったんです。で、バンドを入れたり、吹き矢抽選をしたりするのは、一斉にダメになってしまった。まだ私も若くてね、業界をリードしようという気持ちが行き過ぎちゃったわけです。何かやろう、何かやろうって、常に考えていましたから。一時は小坂一也のウエスタンなんかもステージでやったんですよ。そんなことしなくても十分流行っていたんですがね。

本誌　この頃は、もう伊勢丹は辞められて、ホールの設計一本に？

大木　はい。まあ、美容院なんかも手掛けてはいましたが。建築の友人たちは、やはりパチンコということで私を随分と卑下しましたが、私にはひとつの読みがあったんですね。というのも、ホールはどこも駅前の一等地にある。今お得意さんを大事にしておけば、将来必ずビルを建てるであろうと。このつながりは設計士の私にとってすごい財産になると。それを見込んで、この時期に私の一生が決まったわけです。

清水氏（西陣創業者）と出会い年間100～200軒を手掛ける

大木　もうひとつ、私がこの業界に根を下ろした理由は、西陣の清水さん（西陣の創業者・清水一二氏）と知り合ったことですね。私が何軒かホールをつくっていた頃、西陣が関東メーカーとして、桐生から出てきたんです。それで東京にも営業所が必要ということで、上野の池の端に建てたんです。それを私が手掛けた。こんなエピソードがありますよ。清水さんの東京の自宅を、麹町の一番町に建てている時、清水さんが

ちょっと現場に寄ったんですね。まあ疲れていたんでしょう。カンナくずの上にベニア板を敷いて、アッという間に高イビキで眠っちゃったんです。これを見て『ああ、この人は大物になる。よし、この人と組んで行こう』、そう思いましたね。

本誌　まさにホールデザインの先駆者であったわけですが、もうこの頃になると競争相手も増えてきていたのではないですか？

大木　東京と大阪では、専門にやっているのは私のところだけでしたね。地方ではいくつかあったようですが。西陣さんと組むようになって、その頃にはもう私の会社も60人くらい社員がいましたから、ほぼ独占というような状況でした。というのも、西陣さんが1尺島を開発したんですが、その構造の計算とか島造りの図面は私のところで書いたんです。補給の宇宙パイプや、その後の月光ラインも部品は西陣さんが作って、施工は私の会社でした。ですから、その頃は西陣さんの黄金時代で、その関係で軒並み私のところが設計・施工を担当したんです。東京のほか、大阪と仙台に支社があって、新潟に出張所がありましたから、全国の地区協の会長のお店なども大体やっていましたね。

本誌　当時は、年間どのくらいの軒数をつくられていたのですか？

大木　そうですね、さだかではありませんが、100軒から200軒はやってましたね。ですから、開店に呼ばれて初めてホールを見て、『ああ、これか』という感じでした。1軒1軒に私の目が行き届かないんです。もう時効ですから言いますと、『ここは、こうすればいいのに』なんていうのもありましたよ（笑）。現在は年間14、15軒ぐらいですから、すべてに目が行き届きますけど。ですから、今の状況の方が仕事は楽しいですね。

新素材をいち早くキャッチ 常に"新しさ"にチャレンジ

本誌　まったくのゼロから様々な試行錯誤を繰り返し、ホールの基本的なつくりを形にしてきたわけですが、具体的な大木会長のアイデアをいくつかお願いします。

大木　結局、時代と共に何段階かに分けて出来上がってきているんですよね。今はもう息子（社長・啓幹氏）の方が、新しいデザイン的な冒険を試みていますけどね。私も何回かは、そういう冒険を経験しています。例えば、本当に古いところでは、幕板や島、島飾りなどですね。この言葉も私が付けたんですから。それから、景品交換所の位置。最初は入口にみんなあったんですが、これを一番奥に持っていったのは私です。それと天井にテックスを最初に使ったのも。それまではペンキで塗ったベニア板でしたね。テックスという素材は繊維でできていて、穴があいている。音をよく吸収するんです。ホール内の騒音を押さえようという時期だったもんですから、この素材が最適だったわけです。音を押さえるため、天井も2.7メートルだったものを3メートルにあげました。その次は、タバコの煙による汚れがひどいということになって、それでは通路の上の天井はテックスで、パチンコ台の上はカラーガラスにしようと。これはだいぶ後になってからですが…。それからしばらくして、天井も壁もカラーガラス全盛の時代が来ました。見た目がいい上に非常に掃除が楽だったですからね。天井の素材の流れは、大体こうでしたね。床は、立ち島の時は、お客の足に負担がかからぬように、木タイルを使った。これも私です。それで、座り島になってから足が疲れないということで、石が使えるようになったんですね。それでも石は高いですからなかなか使えないんですが、その内に人工のいい素材がどんどん開発されてきまして、使われはじめましたね。いかにいい素材、新しい素材をいち早くキャッチするか、これが建築屋の命なんです。

本誌　いろいろデザイン的な冒険をされてきた中で、失敗談というものは？

大木　銀座のモナコさんが木造のお店をつくり替えてポルシェビルを建てたんですが、1階がポルシェのショールームで、上に高級クラブが入って、地下がホールなんです。有名な建築家の設計で、それは豪華なビルなんですが、やはりホールのことは私に依頼がきたんですね。それで、エスカレーターを2本引いて、絨毯を敷き詰めて、この豪華なつくりには蛍光灯じゃ似合わないということで、水銀灯で見事な照明にしたんです。これが失敗でした。蛍光灯のまんべんなく当たる明るさと違って、水銀灯のスポット的な光ではパチンコの盤面がキラキラ光ったり、釘の影ができたりしちゃうんですよ。これでは、お客は疲れちゃってしょうがない。慌てて、蛍光灯に入れ替えました。にがい思い出ですね。照明というのは、本当に難しい。今でも、通路上の照明は蛍光灯が縦に並んでいますが、これはよほど新しい照明でも開発されない限りは、いじれませんね。私たちの最大の宿題です。

若い社員にも惜しみなく自らの肉声で指導する

大木康三氏（一級建築士）
東京・神田生まれ。昭和20年3月、日本大学工学部建築学科卒業。昭和23年4月、伊勢丹宣伝分室に入り、デパートの内装などを手掛ける。その後、パチンコホールの設計を数多くこなし、昭和28年、オオキデザイン研究所を興す。昭和37年、株式会社とする。昭和57年、新たに株式会社オオキ建築事務所を設立。趣味はゴルフ、小唄。（編集部注、2011年逝去）

デザインの流れを変えた 宇和島『センチュリー21』

本誌　40年間のホールデザイン人生の中で、数えきれないほどのホールを手掛けていらしたわけですが、その中でいちばん印象に残っている設計を挙げていただけますか？

大木　うーん、いろいろあるんですが、やはり宇和島のセンチュリー21でしょうね。あれからホールデザインが変わりましたものね。

本誌　いったいデザインのアイデアとは、どのようにして考えるものなのですか？

大木　それはもう、現場です。敷地や、まわりの景観とかすべて違いますからね。実は今日も北海道から戻ったところなんですが、今度やらせてもらう場所がすばらしいんですよ。十勝の山並みと、ラベンダー畑に囲まれていまして、もう無性に意欲が涌いて来ましたね。よーし、この周囲の景観にマッチしたすばらしいホールをつくろう、と。今ワクワクしているところなんです。

（1991年7月号　通刊1142号より）

■いわゆる爆裂3機種の検定取消に加え、長年棚上げされていた規則改正案が掲示されるなど、業界の歯車が大きく動きだした平成15年。9月25日に警察庁が発した通達を受けた各県公安委員会は、10月1日の鳥取公安委員会を皮切りに次々と爆裂機3機種の検定取消を決定、法的強制力のもと全国から爆裂機が一掃されていった。この問題が表面化してから取消処分が決定するまでの1年以上もの間、行政側からの強い指導を受けるかたちで、業界側が進めた自助努力は、結果的に十分な実効を上げることができなかった。各県組合の自主撤去決議の中には、一旦撤去を決議したものの、社会的不適合機撤去時の、残したホールが得をするという経験則が働き、決議を撤回したところもあった。ホール側からすれば、設置できる遊技機の担保は公安委員会の検定にあり、それをパスした遊技機をそのまま使用しているにも関わらず、それが問題だというのならば、保通協制度とは一体何か、公安委員会の検定制度とは何を担保するものなのかといった根本的な問題意識を生じさせた。一方、10月に掲示された規則改正案は、射幸性問題と不正遊技機問題を大きな柱とし、技術上の規格関連では、混乱が続いたパチスロに厳しい展開が待ち受ける内容となった。また三洋物産の「新海物語」が絶大なシェアを有していたパチンコ市場では、多様な遊技機を製造できる環境作りを目的に、約1年2カ月ぶりにCR第1種の内規を変更。規則改正後の新要件機までの橋渡し役としての期待を集め、保留玉連チャン型スペックなどが登場したが、画一化の是正にまでは至らなかった。そしてホール営業においては、遊技機関連以外にも考えるべき要素が多かった。メーカーの不信感が露わになった中古機流通の先行きや、オーテミ問題による貯玉システムの歪み、体感器ゴトの多発など重要な課題が次々と浮上している。

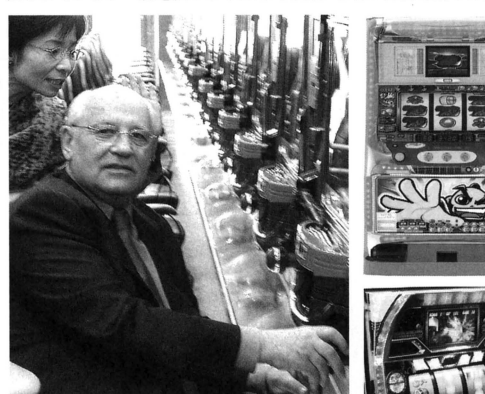
●オリンピアのイベントで披露された全長5メートルもの巨大パチスロモックアップ（左）。下はオーイズミが3月に発売したテーブル型スロット「ベガスロ」専用フロアを設けた「あたりや神田店」。

●7月、現在4代目までが誕生している三洋イメージガール「ミスマリンちゃん」の初代グランプリに、兵庫県出身で当時18歳だった大久保麻梨子さん（中央）が輝いた。

●7月にはミズホ製パチスロ機「ゴールドX」の変則打ちによる攻略法が発覚し、ホールでは島封鎖や店内監視の強化に追われた。その後のアルゼの対応に不満を抱いたホールは全日遊連を中心に反発。両者の溝は深まり、一部で集団訴訟といった事態にまで発展していった。

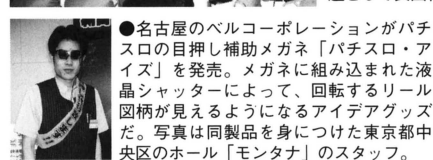
●パチンコの画一化打破を狙った全日遊連は9月、メーカー15社の協賛を得て「第二種等ぱちんこ遊技機展示会」を品川で開催。参考出品なども含め20機種、112台が展示され、久しく新作が発表されていない一般電役やじゃん球（写真）などが注目を浴びた。

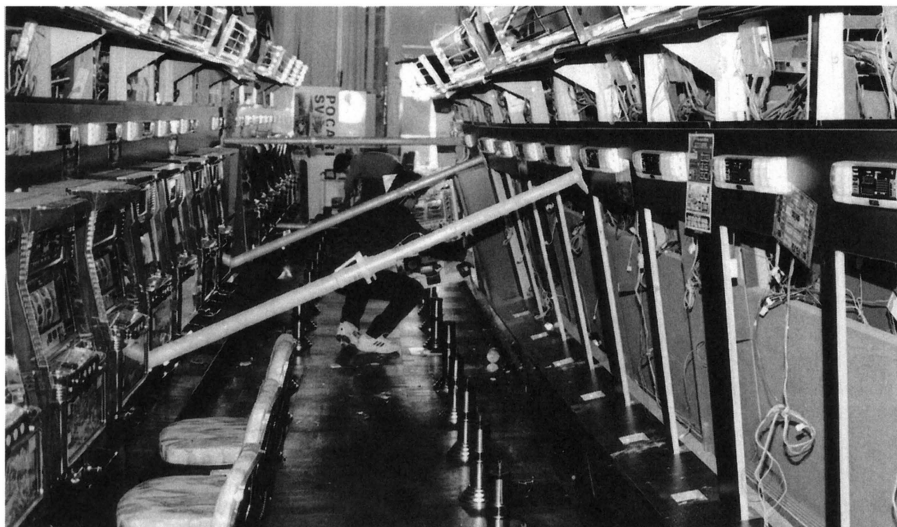
●前年に同友会が構想を発表し、注目を集めていた景品IT化構想の実証実験が4月に愛知県豊橋市で開始。景品業務全般を第三者に委託することで、店内で特殊景品の存在を消し、その環流を無くすという考えは、画期的なものだった。

●前年末から一部パチスロ機を狙ったゴト手口として登場した体感器併用のソレノイドゴトの被害が頻発、新聞でも大きく取り上げられた。同一手口のゴト被害としては過去に例をみないほどの多発ぶりで、抜本的な対応策の確立が望まれていた状況のなか、兵庫県遊協青年部会は10月、「ゴト対策機器展示会」を開催。各地のゴト対策機器取扱い企業17社が出展した。

●愛知県東郷町の「玉越東郷店」に3月、旧ソビエト連邦の元書記長ミハエル・ゴルバチョフ氏が表敬訪問した。初体験となるパチンコに挑戦し、「負けました」と苦笑い。

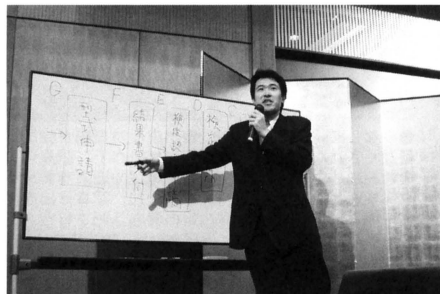
●北斗の拳とともに、4号機後半のパチスロ市場を支えたのが大都技研の吉宗だ。シャッター液晶を搭載した大量獲得タイプのST機として人気を博し、ヒット機種の宿命ともいえるゴト被害にも悩まされたが、同社はこれ以降も「押忍！番長」「秘宝伝」と、ヒット機種を連発し、パチスロメーカーとしての地位を確固たるものにしていった。

●年の始めに行なわれた東遊商総会の席上、日工組幹部が放った「新台よりも性能のいい中古機」発言は、販社間に波紋を呼んだ。中古機流通が活況を呈すなか、現状を面白く思わなかったメーカー側とのすれ違いが、充実する市場の裏側でのセキュリティー問題として表面化していった。

●この年の10月には、サミーがパチスロ「北斗の拳」を発表。いうまでもなく同機は後に、パチスロ史上最高の販売台数60万台以上という爆発的なヒット機種となるわけだが、発表時は各営業所ショールームでの実機披露と、大々的な展示発表会が増加しつつあった当時としては、至ってシンプルなものだった。

●名古屋のベルコーポレーションがパチスロの目押し補助メガネ「パチスロ・アイズ」を発売。メガネに組み込まれた液晶シャッターによって、回転するリール図柄が見えるようになるアイデアグッズだ。写真は同製品を身につけた東京都中央区のホール「モンタナ」のスタッフ。

●保守と革新という対立軸を印象づけていた大阪で、同友会大阪支部が、第三者機関「大阪福祉防犯協会」を3月に設立することを発表。約2年に渡って繰り広げられていた大阪問題は、大阪方式一本化の道が遠のき、一つのターニングポイントを迎えた。

●10月23日に発生した新潟県中越地震は各方面に甚大な被害をもたらし、震源に近い小千谷市では市内の7店舗全店が一時営業休止状態となった。写真は小千谷市の「キング小千谷店」。今にも倒れそうなパチスロ島が被害の大きさを物語っている。同店では地震発生時20名程の客がいたが、従業員も含め全員が駐車場に避難。スタッフによれば、「最初の揺れで玉が島の中で暴れるモノ凄い音がして、島の外にその玉が流れ出てきた。しばらくして2回目の揺れがきて、その時は全員が外へ飛び出し、3回目の揺れでガラスの割れる音がした。店内は真っ暗で危険な状態だったので、しばらく駐車場で待機し、家が倒壊する恐れがある近隣住民と、スタッフ10名ほどが車で過ごした」と地震発生時の様子を語ってくれている。

●二転三転した「新海物語」の認定申請作業が、5月からスタート。一連の作業は各組合の事務負担が重い大がかりなものになった。認定には、事前通告なしで島閉鎖を伴う作業も加わったため、写真のようなポスターを掲示し、ファンへの告知や、その扱い等の問題を含め、想定されるトラブルへの対応は、事実上、現場に丸投げされた。

●新規則の経過措置に伴い浮上した「みなし機」問題では、射幸性の低いみなし機に対する行政や業界の在り方が問われた。写真の様にオール10のような古い普通機で遊ぶお年寄りは多く、地域の憩いの場のようなホールもあったが、結果的に全て切り捨てられた。

●回胴遊商の会合で新規則の経過措置を解説する警察庁の若田英課長補佐。この年は若田課長補佐が、様々な団体の会合で講話を行った。不正機問題に関しては、「取締りが不可欠な業界なら社会的に必要ない」などの厳しい発言もあったが、「近年これほど業界のことを考えてくれた行政担当官はいなかった」という声も少なくなかった。

■7月の新規則施行に伴う経過措置を中心に、業界全体が何かと慌ただしかった平成16年。みなし機撤去、新海認定、中古機流通要綱の改正、不正機問題、新札対応と、とにかく様々な出来事があった。遊技機関連では、年の後半から続々と市場投入されたパチンコ新要件機が好調なスタートを切り、パチスロは一時代を築いたAT機が急速に姿を消す一方で、ST機が隆盛を極めた。また、納品時にメーカーが釘調整を行わなくなる問題が生じたのもこの年。ただ、この問題に対する業界団体の歯切れは悪く、「グレーゾーンだから」と議論自体を避けた。営業の根幹をなす長年に渡る業界の懸案事柄を適正化させる一つの機会でもあったが、その機運は感じられず、後顧に憂いを残した。後の影響という点では、6月にカジノ議連が加速させたカジノ構想に対する業界の反応も鈍かった。前年、同議連から景品交換所の法律上の位置づけを問われた警察庁は、「(略) 現在行われている換金行為のうち、営業者と関係ない第三者が客から賞品を買い取ることは、直ちに違法となるものではないと考えている」などと回答した。しかし、これがすなわち換金にお墨付きを与えたことでないことは、年々厳格化していく行政スタンスを見ても明らかで、以後も、パチンコ産業の法的な曖昧さを無くす作業を淡々と進めていくことになる。

●1000台を大きく上回る超巨艦店が各地で出現した。なかでも、注目を集めたのが4月に総設置台数2008台でリニューアルオープンした福岡県筑紫野市の「P-ZONE筑紫野店」。日本最大設置台数の称号を富山のノースランドから奪った。左は、ガイアの北海道初進出店となる「ガイア狸小路店」。ちょうど100店目となった同店は「北の旗艦店」と位置付けられた。また同店の設置台数1723台のうち、パチスロ分の895台はパチスロ台数として日本最大規模。

●7月にはプリペイドシステム企業8社によって、プリペイドシステム協会（略称PSA)が発足した。都内で行われた記者会見には8社の代表者がそれぞれ出席し、ユニットと遊技機を接続するインターフェース統一化を掲げた。

●2001年12月に結成された自民党カジノ議連は6月、観光振興を柱にした「ゲーミング（カジノ）法基本構想案」を公表。カジノ合法化に向けた議論が加速し、業界の法的な曖昧さが議論の俎上に載せられつつあった。

●前年末、新潟市に本社を置くアイビー企画幹部が不正改造容疑で逮捕。新潟最大手の摘発に業界は震撼した。左は偽造ロム約100個を取り付けたとして、最初に摘発された「NO.1赤道店」。

●11月、新札の流通がスタート。券売機や両替機が未対応のホールでは、スタッフが直接両替作業を行った。

●ホテルなどで行われる展示会が増加する中、高尾は西日暮里の居酒屋で発表会を開催。テーブルに新台が設置され自ずと飲み会に発展。当然、来場者に好評だった。

●1月に業界初の売上高1兆円企業となったマルハンは6月、記念式典を幕張メッセで開催。経営ホール全店舗を休業し、全社員、来賓・関係者など約8000人が参列した。写真は、式典で歓声に応えながら入場する韓昌祐会長。右は式典後に行われた懇親会の様子。この年はダイナムも売上高で1兆円を突破するなど、大手の躍進が目立った。

●全日遊連の山田茂則理事長は、5月27日に経営する店舗が行政立入を受け、無届けのゴト対策が発覚したことを陳謝。現職の全日遊連理事長の店舗が行政立入を受けたという事態は、業界各方面に大きな波紋を呼んだ。全日遊連ではその後、後任人事問題を加速させ、一旦は山田体制継続を決議したものの一転、10月には東京の原田實氏を新理事長に選出した。なお、行政立入があった5月27日は、全日遊連の総会当日だった。

●この時期から急速に成長していったのが、ホールに女性コンパニオンを派遣する「イベントコンパニオン」派遣ビジネス。「ブーム」ともいえる盛り上がりをみせ、多くの業者が様々なサービスを展開した。

●民主党の娯楽産業健全育成研究会は6月、永田町の議員会館でパチンコ業法案を発表。意見収集のために招致されたホール系5団体の出席者からは慎重論から積極支持まで様々だった。

●5月、施行新規則で可能となった玉で遊ぶ回胴式遊技機「パロット」初号機がSANKYOの「CRP花月伝説R」として登場。パチンコ島に設置出来るように設計された。

●みなし機問題で閉店を余儀なくされた新潟県見附市のホール「白鳥」の旧台をファンと共に千葉の保管倉庫に運んだパチンコ博物館の牧野哲也館長（中央）。

●出店反対運動が住居地域だけでなく、駅周辺の商業地域や近隣商業地域でも増加。写真は出店反対の署名活動を行う八王子市の地元商店街の住民。

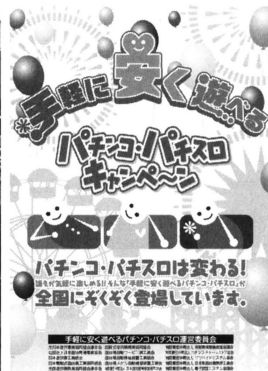
■総会当日に全日遊連の現職理事長が経営する店舗が摘発され、メーカーが作った覚えがないというパチスロ「アリババX」が導入される。さらには、売上げの最大化を追求してきたホールが貸玉料金を下げ、同質競争の限界を営業方法で打破しようとする試みが拡がるなど、従来では考えられなかった事柄が相次いだ。10月には罰則規定厳格化と欠格事由の拡大を盛り込んだ改正風適法が国会で可決。今後も決して緩むことのない行政側の厳しい姿勢が改めて示された。一方、この年は高い射幸性を有した「MAXタイプ」のパチンコと、「北斗の拳」「吉宗」に代表される4号機が堅調だったこともあり、経済産業省の調査から弾きだした平均台売は、2度も史上最高値を更新。5月期には過去最高となる2万7661円を記録するなど、年間を通じて高い水準で推移した。そのため比較的余裕があったのか、それとも高射幸性傾向に危機感を感じたのか、自ら低射幸性の遊技機を率先して導入するホールも多かった。が、すでに時遅く、高粗利を追求する営業形態の浸透はファンを痛めつけ、以降、年々下落していく平均台売でそのしっぺ返しをくらうことになる。

●地域の福祉施設入通所者を招いて兵庫県遊協青年部会が毎年開催しているパチンコ競技大会で、大当りを獲得し満面の笑みを見せた女性。「玉が出る瞬間が楽しかった」と興奮気味に話し、パチンコという遊びを純粋に楽しんだ。

●京楽産業.直営店としてグループ5店舗目となる「サンシャインKYORAKU栄店」が2月、同時開業した複合商業施設「サンシャイン栄」内にオープン。地上52メートルの観覧車がシンボルとなっている同施設は、名古屋の新たなランドマークとして高い注目を集めた。

●大手ディスカウントストア「ドン・キホーテ」と提携し、一般景品だけの賞品と、メダル貸出一枚10円というパチスロ専門店「お宝ハウス・フルスロットル」が2月、広島市に誕生した。写真は店内の景品コーナーの様子。

●12月、低射幸性遊技機を中心に、一般ファンや普段パチンコをしない人に体感してもらうイベント「遊べるパチンコ・パチスロオープンフォーラム2005」が都内で開催された。

●業界15団体が後援した「手軽に安く遊べるパチンコ・パチスロ展示会」が10月、池袋で開催された。「手軽に安く遊べるパチンコ・パチスロキャンペーン」の一環として行われた展示会は、射幸性を抑えた業態への転換を図り、大衆娯楽へ再生していくことを広く一般にアピールするのが狙いで、一般来場者6274人を含む計7653人が来場した。また当日は、同キャンペーンの愛称を「遊パチ」に、シンボルマークには、桜の花に「遊パチ」の文字をあしらった作品（右）を決定した。

●11月、千葉県木更津市で開催された余暇進の全国研修秋季セミナーで、会場に設置された一般景品の取りそろえ見本を視察する警察庁生活環境課の鶴代隆造課長補佐。この年は、警察庁が2度に渡ってパチンコ店の賞品の取り揃えの充実を求めるなど、強い姿勢で臨んだ。

●前年に増加していった半価貸しをさらに発展させた1円貸し営業が浸透。ピーアークは6月に三田店の地下フロアで、貸玉1円のトライアルを開始。8月には、同社の本拠地である足立区竹の塚の「ファンパチンコ ピーアーク」（写真）でも玉貸1円営業をスタートさせた。

●宮城のマルタマが経営する「パチンコまるたま駅前店」は、1階部分（240台）を全て1/100程度の低射幸性パチンコ機で揃えた。

●全日遊連が4月に開催した臨時理事会で、次期理事長候補者の選挙を実施。現職の原田實氏（右）と山田茂則前理事長による一騎打ちの結果、27対24で山田氏の返り咲きが内定。5月の総会で理事長に就任した。

●遊技機のリサイクル処理や、再利用システムの受託管理などを行うユーコーリプロが埼玉に年間処理台数140万台の新リサイクル工場を竣工。北九州にある同社の西日本リサイクル工場と合わせ、年間処理可能台数は340万台に達し、全国を網羅するリサイクルネットワークが整った。

■5月1日の改正風適法施行を機に、各地の県警・所轄が法の厳格な運用を始め、混乱が相次いだ。行政処分の量定基準も見直され、遊技機、構造・設備の無承認変更に許可取消で臨むことや、年少者の立ち入らせ禁止違反などの処分が引き上げられた。さらに以前からの問題であった、釘調整、広告宣伝、イベント、ゴト対策に及ぶまで、法律自体の矛盾や、現実との著しい乖離に対する苦悩は年々増していった。また、広告宣伝規制も各地で厳格化した。これについては、平成14年の規制をホール側が文言規制と受け取り、パチスロの設定情報の表現方法などで抜け道を探し続けたことが、逆に全体的な規制強化につながったという意見もあった。しかし、いずれ厳しいラインで統一される可能性が当時から指摘されており、この問題はその後も続く懸案事項となる。前年の新規則施行から続く、遊技機に関する動きは、相変わらず目まぐるしかった。年初から検定・認定切れ遊技機撤去の一つのヤマと見られていた「スーパービンゴ」の撤去が各地で進み、6月にはみなし機の撤去が始まった。パチンコ機に関しては、射幸性の低下を大前提にした営業形態の検証を強く要請する行政の動きと併せて、業界団体を中心に、負の螺旋を描き続ける業況を改善させるための取り組みを活発化させた。その一方で、パチンコファン人口の減少は止まらず、ホールは機械代を償却することもままならないという構図が続き、中小ホールはもちろんのこと、ダイナムが27店舗を閉鎖するなど、大手ホールですら疲弊を見せた。

●12月、遊技産業健全化推進機構の設立大会が品川プリンスホテルで開催された。大会には、業界関係12団体の関係者550人超が出席。業界組織としては、異例とも言える、極めて盛大な立ち上げとなった。

●千葉の大原興商は4月、木更津に616台のパチンコ専門店「PLAZA Do」をオープン。同敷地のパチスロ専門店と合わせた総台数は956台で房総地区最大。オオキ建築事務所が全面プロデュースした。

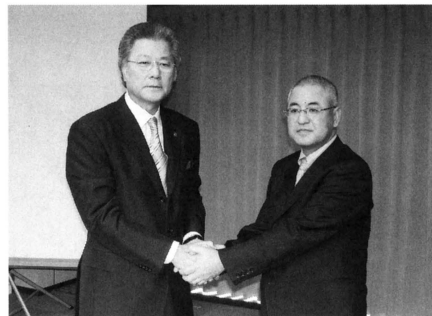
●広島の伯和グループの硬式野球チーム「伯和ビクトリーズ」が、ホール企業の野球チームとしては初めて、社会人野球の最高峰である都市対抗本大会に出場した。

●北電子は11月、同社初の5号機となる「アイムジャグラーEX」をリリース。同社の看板タイトルであるジャグラーシリーズ最新作となった同機は、以後、苦況に陥るパチスロ市場を長期に渡ってけん引する大ヒット機種となった。

●名古屋の「サンシャインKYORAKU栄店」が2月、京楽産業.の「CR冬のソナタ」を先行導入。展示機の前には、リーチ映像などを写真や携帯ムービーに収めようとする女性の姿が多く見られた。同機は販売台数20万台を突破し、海シリーズの牙城に迫った。

●栃木の「VINTAGE」などが筋肉とコスプレを融合させたイベントを開催。上半身裸で北斗の拳を打っているのは、ラオウに扮した男性（手前）で、奥がケンシロウ。

●静岡県藤枝市にオープンした大型アミューズメント施設「ジョイスクエア藤枝"ジパング"」。パチンコが壁際にズラリと並ぶレイアウトは壮観。当時からアミューズメント業界では、売上が安定しているパチンコ、パチスロゲームの回収効率の良さが注目され始めていた。

■一昨年来からの甘デジの普及、大手ホールにまで波及してきた低貸玉営業の流行、10月に完全5号機へ移行したパチスロなど、業界全体がより低射幸性営業への傾斜を強めた平成19年。そのような状況のなか、業界に衝撃を与えた大手ホールのダイエー倒産をはじめ、メーカーや周辺機器業者の業績悪化が進行した。また、エリアによっては局地戦が展開されるまでになった「1円パチンコ」が決して確実な打開策ではないことが示されるなど、低射幸性営業の確立が、厳しい業況をどれだけ救ってくれるかの目途は立たなかった。このことは、利益の源泉である売上の減少を伴うだけに、ホール関係者の不安は大きく膨らんだ。その一方で、「CR花の慶次」に代表されるMAXタイプが人気を集め、その利益性能の高さから、盆商戦以降、徐々に利益率が上がりだす。それに伴って客数を落とす店が少なくなかったにも関わらず、多くのホールは、5号機の償却や相次ぐビッグタイトルの購入に必要な資金を確保するために利益率を高めた。当然、このことは客数の減少に繋がる負の連鎖であることを分かっているのだが歯止めがかけられなくなっていく。客単価の上昇による利益確保も限界を見せ始め、低射幸性機浸透をはじめとした業態転換の試みを結果に繋げる必要性を感じながらも、それを日々の営業に落とし込むことができない流れが続いた。

●供給側もシビアな時代への備えを整えつつあった中、4月に平和が株式交換を通じて平和を完全親会社、オリンピアを完全子会社化する経営統合に両社が合意。遊技機メーカーの完全統合では、過去例をみない規模のスキームで業界関係者に衝撃が走った。写真は、発表会見で握手を交わす平和の石橋保彦社長（左）とオリンピアの嶺井勝也社長。

●マルハンも北海道の厚別店（左）で6月に1円営業をスタート。上は、愛知のフシミコーポレーションが経営する「ジョイファンダーズ島田店」。スタッフがTシャツで1円貸しをピーアールしている。

●10月に迎えた5号機への完全移行に伴い、ベニアやラックなどで島を間引くホールが続出。パチスロメーカー関係者は、「売上を1円も上げない『ベニヤ板』にパチスロが負ける時代がくるとは思わなかった」と嘆いた。

●岩手県遊協が4月に開催した経営者等研修会の席上で、岩手県警の担当官が口にした指導事項に盛り込まれた一物一価問題。その後、岐阜や石川など他県でも同様の動きは拡がり、全国的な問題になったのは承知の通りだ。

●6月、国会の内閣委員会で民主党の山田正彦衆議院議員がパチンコ行政に関して質問。パチンコホールに倒産が相次いでいる要因は、規則改正による機械の総入替えが経営を圧迫したためだと指摘した。

●1月末に登場した「CRエヴァンゲリオン～奇跡の価値は～」導入時の秋葉原での装飾合戦が話題に。写真はカウンター上にエヴァンゲリオン初号機の巨大フュギュアが取り付けられた「ビッグアップル秋葉原店」。

●玉屋は、福岡市の「玉屋空港店」のパチンココーナーを全面改装し「甘デジ専門店」として6月にオープン。営業時間を平日夕方5時、土日も12時からという実験的な試みも実施。

●川崎の「アクセスⅠ、Ⅱ」の景品カウンターでトークショーを行う落語家の桂歌若師匠（真打ち）と三遊亭遊喜（二つ目）。当日は、自腹3千円のパチンコバトルに臨んだ遊喜氏の模様を歌若師匠が毒舌を交えて実況中継するなど、店内は笑いに包まれた。

●6月には時を同じくして、後にヒット機種となるパチンコとパチスロがリリース。左はニューギン「CR花の慶次」で、右が5号機のARTに新たな可能性を示したJPSの「2027」。

●世間の禁煙志向に沿う形で、禁煙・分煙ホールが増えていった。写真は8月に遊技フロアの完全分煙に踏み切った都内高田馬場の「TOYO104」。

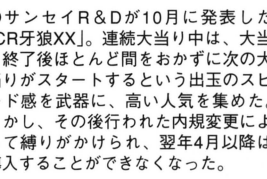
●低射幸性のパチスロ3機種。左から大森の「シンフォニー大森店」が導入したオルカの1枚掛け専用パチスロ「せみ」、ミカドグループの「パロット万場店」が導入した同友会、オルカの共同開発機「CANスロ」、そしてオーイズミの2リールパチスロ「ハネスロ」。

●1円営業の局地戦が各地で繰り広げられるなか、北海道旭川市の「アルファ旭町店」では、専属の案内係を配置。初心者層を取り込むことで差別化を図った。

●前年業務提携したサミーとタイヨーエレックが2月に都内で会見。提携後の開発、販売体制やシナジー効果などを説明した。

●愛知の「ファンダーズ島田店」では、ファンをパチンコの舞台裏に招待するユニーク企画「パチンコツアー」を開催。ホール見学では監視モニターがひしめくバックヤードも公開した。ホールコンピュータをはじめとする関連機器が並ぶ事務所内を初めて見たおばあさんが、説明する従業員に一言。「ここで休憩しても、全然、休んだ気がしないねえ」。

●8月には、足立区竹の塚のピーアーク「JOYTIME」地下フロアが貸玉0.5円を採用した。

●サンセイR&Dが10月に発表した「CR牙狼XX」。連続大当り中は、大当り終了後ほとんど間をおかずに次の大当りがスタートするという出玉のスピード感を武器に、高い人気を集めた。しかし、その後行われた内規変更によって縛りがかけられ、翌年4月以降は導入することができなくなった。

●4月に公表されたパチンコ店を含める神奈川県禁煙条例案を巡り、県内のホールは困惑した。その後1年以上に渡って組合を中心に適用除外を目指す活動を推進。後に適用除外が決まった。写真は条例案に対する感想を地元テレビ局に求められた平川正寿理事長。

●偽造ロムを使ったパチスロ機「ザゴルフ-30」を製造・販売したとして、茨城、愛知など5県警の合同捜査本部は7月、商標法違反容疑でファーストの本社などを家宅捜索。多くの報道陣が詰めかける中、関係書類を押収した捜査員を乗せた車両が捜査本部に戻っていった（写真）。後に同社幹部らは全員不起訴処分となったが、風評悪化は避けられず、12月には東京地裁に民事再生法の適用を申請。負債額は約10億円だった。

●善都は、12月にリニューアルオープンした安城市の「ZENT住吉店」の立体駐車場を含む駐輪場警備に、話題の立ち乗り電動二輪車「セグウェイ」を導入した。

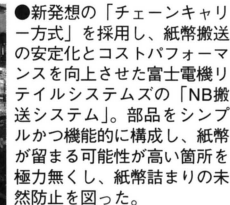
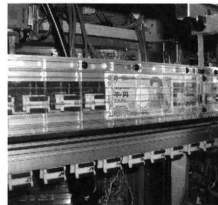
●車の入出庫状況から顧客の動向を把握するという、新たな視点による顧客管理を提案したのがシステム エイ・ブイの「車両ナンバー認識システム」。

●全席禁煙ホールも増加していった。写真は長野のアメニティーズが経営する「100万ドル国分店」。

●前年の11月に賞品交換時に客から手数料1%をもらい受ける「手数料制」を開始した和歌山（写真）に続き、この年は、名古屋や埼玉の一部買取所で手数料制がスタートした。

■7月上旬、石川県警が県遊協に対し、「一物二価」の是正指導を行った。県警では県内ホール十数カ所の立入検査を実施し、違法状態が見受けられたとして、違反種別ごとにこの改善を県遊協に求めた。昨年、岩手県警が同様の問題について、県内ホールに是正を求めた際には、少なからずの業界関係者が波及を怖れたが、この石川だけでなく、他のエリアでも低価貸し営業の拡大に伴い一物一価の指導をされたというホールが増え、換金問題の適正化を図る行政サイドの動きが加速した。が、この年の業界団体の主な取り組みは、メーカーに対するCMの自粛要請、洞爺湖サミット開催に伴う入替自粛など枝葉の部分にフォーカスしていた印象が強く、この数年様々な規制強化に振り回されながらも少しずつ進展させてきた、釘調整問題や射幸性に対する考察、換金問題といった根幹に関わる議論は棚上げされた。その一方、企業単位では、厳しい業況を見据えた動きが目まぐるしかった。ホールでは競争状態に突入してきた低価貸し営業の多様化を模索する動きが活発になった。それに伴う売上げ減少に見舞われながらも、遊技機費用や販売管理費といった集客コストを抑制することで、増益を確保する企業が増加するなど、個社単位では、様々な対策が進んでいった。

●MAXタイプの人気が加速。一方の低価貸しと合わせ、射幸性は二極化した。

●新発想の「チェーンキャリー方式」を採用し、紙幣搬送の安定化とコストパフォーマンスを向上させた富士電機リテイルシステムズの「NB搬送システム」。部品をシンプルかつ機能的に構成し、紙幣が留まる可能性が高い箇所を極力無くし、紙幣詰まりの未然防止を図った。

●全長1692ミリの低島と腰板部分の空洞化構造などを実現したエース電研の補給システム「UNITY LAND」を12月に全国初導入した、神奈川県平塚の「グランドホール金目」。すっきりとした足下からは、向こう側の通路に積まれた玉箱が見えている。

●各地で低貸玉営業の価格競争が進んだ。広島の「スロットハウスメダルズーン」（左）は10月にメダル1円貸し営業を導入。都内の「ピーアーク銀座」（中央）は11月から500円でコーヒー1杯と玉340個の「ピーくんセット」を店内の一部で提供した。さらに茨城の「金馬車つくば店」（右）は9月から月一の店休日に無料開放デーを実施。無料なので純粋な営業ではないが、ファン獲得や客の負担を軽減させる意味で低貸玉営業に通じる試みと位置付けた。なお「1スロ」は神奈川の「平楽大庭店」が4月に先鞭を付けている。

●神戸市で5月、新型インフルエンザの国内感染者が確認され、マスコミの報道は連日過熱。全国的に警戒感が強まっていった。写真は同月末に開催された回胴遊商の総会の模様。組合員らに対しマスクが配られた。

●岐阜県警が1月に発出したイベントやチラシの宣伝文句、店内POP、賞品買い取りなどについて厳格な指導は、その内容と県警の強い姿勢が、多くのホール関係者を困惑させた。上の写真は同県警の指導後、店内からPOPなどの装飾物が取り除かれ、スッキリとした岐阜県内のホール。

●創立10周年を迎えた余暇進は11月、記念事業として秋季セミナー＆合同展示会を福岡で開催。低貸玉営業の普及とともに注目を集めていた各台計数システムを中心に、様々な設備機器や遊技機が出展され、1日だけの開催だったにも関わらず2249人が会場に足を運んだ。

●1月、業界14団体が一堂に会した新年賀詞交換会で、全日遊連、日遊協、日工組、日電協の4団体が「遊技機の販売方法に関する4団体合意書」を発表。遊技機の販売に関する業界特有の商慣習の問題是正に向けて努力していくことを宣言した。

■8月の衆院選で、政権交代が起こった平成21年。4年前に換金の合法化に結びつくパチンコ単独法の試案を提示するなど、業界に積極的な提言を行ってきた民主党が政権与党となったことで、業界関係者からはパチンコやカジノを巡る議論に進展があるのではという期待から懸念まで、様々な観測が乱れ飛んだ。そんな中業界では、マルハンが売上高2兆円を突破するなど、大手ホール企業の寡占化傾向にますます拍車がかかった。ナショナルチェーンを始めとする企業グループの戦略は、単店のスケールではなく、企業体としての拡大戦略や経営効率を争う段階に移行していた。そこでは、体力勝負の我慢比べではなく、資金調達力や遊技機購買力、中古機オペレーションなど、企業としての総合力が問われた。この年、ホールの営業を支えたのが、MAXタイプに代表される高射幸性機を活用した高粗利戦略と、低貸玉営業を隠れ蓑にして進んだ高粗利営業だ。このどちらに転んでも高粗利という営業が浸透するなかで、体感的なファン人口はジリジリとその数を減らしていく。一方、遊技機環境は、パチスロ専業店が姿を消し、パチスロコーナーがパチンコに浸食されるという、この数年見られた「脱パチスロ」の風景が、サミーのパチスロ「交響詩篇エウレカセブン」などの登場で、年の後半から徐々に巻き返しが図られていった。

●パチスロメーカー82社による新組織「回胴式遊技機製造業者連絡会」が3月に設立。かねてより行政から、メーカーが乱立している現状で、とりまとめを求められていた。

●版画家・杉山一夫氏のパチンコをテーマにした作品を集めた個展が、都内銀座の新井画廊で2月に開催された。貴重な戦前の台を展示し、手打ち式の島も再現するなど、銀座の画廊がレトロホールに生まれ変わった。

●7月、41歳の男の放火による火災で、遊技客ら5人が死亡したほか多数の負傷者が出た大阪市此花区のホール「cross-ニコニコ」。上階までススで真っ黒になったビルの壁面が、惨事の大きさを物語っている。

●同友会は6月に沖縄を視察。沖縄県内のホールは、「5号機不況」とは無縁だった。

●8月に発表されたサミーのパチスロ「交響詩篇エウレカセブン」。5号機切替による影響が小さかった沖縄を除き、5号機不況のまったた中にあったパチスロ市場だったが、同機の登場などで、人気が徐々に回復していった。

●「巨乳軍団」を率いるサンズの野田義治社長がホールからアイドルをデビューさせる「アイドル発掘カフェ」というユニークな試みを実施。5月にオープンした都内飯田橋の「プレサス」で、コーヒーレディとして働くスタッフを来店客が審査した。

●いまやトップアイドルとなっているAKB48の姉妹グループSKE48が2月、サンシャイン栄で新公演をスタート。

●上の放火事件を受けて、消防訓練を急きょ実施するホールも。写真は、愛知県豊田市の「ZENT梅坪店」が7月に実施した消防訓練の様子。従業員、消防署員ら25名が参加した。

●パチスロ復活にむけて、こんなことも。日電協と回胴遊商が8月4日を「パチスロの日」として記念日協会に申請した。制定の発表会見ではタレントの山本モナさんがゲストに。この頃、「恋い多き女性」として話題性のあった山本さんを目当てに多くのマスコミが詰めかけるなど、「まずマスコミに取り上げてもらう」という目論見は当たり、会見は多くのスポーツ新聞の紙面を飾った。

●パチスロの低迷打開策をファンとともに討論する。こんな企画があったのもこの年。2月28日、日電協と回胴遊商が秋葉原で行った「なんとかしようよ!!パチスロ文化」では、業界8団体の役員、雑誌ライター、ファンら150人以上が、秋葉原のベルサールに集結。会場からは「わけのわからないタイアップが増え、ライトユーザーを相手にして、結果的に衰退していったゲーム業界と似ている」「5号機はハイリスク・ローリターン」等の厳しい意見も続出。

●建設中のスカイツリーにほど近い場所にホールがオープンした。「スカイツリー目当てに連日多くの観光客が訪れる」と店長。この後、周辺の再開発が急ピッチで進んでいく。

●4月14日、カジノ合法化を目指す超党派の議員が集まって行われた「国際観光産業振興議員連盟」の設立総会。民主党の娯楽研と自民党のカジノ小委が母体となり、そこに公明、国民新党等が加わり総勢74名に。会長は、娯楽研の会長だった古賀一成氏。設立会見では、パチンコ業法については距離を置く発言をしていた古賀氏だったが、この後、カジノ法案とパチンコ業法案の作成に深く関与することになる。

●旧制度では、中古機として移動する際、事前点検確認後の申請期間中も営業に使うことができた。「前Q」と呼ばれるやり方だが、中古機流通協議会で行政から「型式の保全措置」「流通上の責任の明確化」を求められ見直しへ。新制度でパチンコは、事前点検確認後から納品まで触れることができないようビニール袋に入れられることになった。6月の制度切り替え直前には各遊商が研修会を開催し、実際の手順などを説明。しかし、新制度施行後も多くの変更が加えられ、現場には戸惑いも拡がった。

●日工組が設立50周年で記念式典。直前に行われた総会で執行部が刷新し、市原高明新理事長を中心とする新体制がスタートする門出の日ともなった。式典の会場では、日工組発足当時からの遊技機の歴史を振り返る展示も。最も古い機種としては、昭和40年頃にヒットした大一商会の「センターダルマ」が飾られた。式典で市原新理事長は「業況が厳しいからこそ将来を見据えることが重要」と挨拶。

●パチスロ稼動支援策として導入され始めた、携帯サイトと連携したサービス。QRコードを携帯電話で読みとり、キャラクターの壁紙などを入手。新たな遊び方を提案した。

●心臓に難病を抱えた少女を救おうと、少女の母親の友人であったパチンコ業界関係者らが募金活動。募金は計1億円超となった。少女は翌年カナダで手術を受け、無事成功。幼い命が救われた。

●覆面調査などにより、パチンコ店舗の総合的なサービス力を競い合う「ぱちんこ情熱リーグ」が開始。137のエントリーがあった第一回大会、石川県金沢市の「駅前ペリカン」が優勝に輝いた。

●ホールのサクラ役と説明し多額のお金を騙しとるパチンコ攻略法詐欺が増加。また、過去6年間の被害申告額が100億円にものぼると、国民生活センターから発表された。危機感を抱いた業界団体は、パチンコファン雑誌を発行している7社と協力し、誌面にキャンペーンマークの入った広告を半年間掲載することを宣言。撲滅運動に乗り出した。

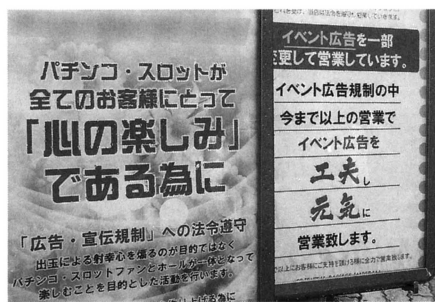
■数年続いた業界景気の低迷に底入れ気配が漂い始めた平成22年は、民主党パチンコ業法案、APECに伴う遊技機入れ替え自粛、中古機流通スキーム変更、2度に渡る日工組内規変更など、業界団体が幾つもの重大な判断を迫られ、ホール等の現場がその変化に振り回されるという年だった。その後の業界動向に大きな影響を与える出来事が多いのも特徴で、例えばパチンコ業法案は、表面的にその行方だけをみると業界側の反発を受けて年内中に尻すぼみの状況に追い込まれているわけだが、実は、その反動として風適法精査の動きが派生し、その後のホール5団体の風適法検討会議の立ち上げや、23年の広告宣伝規制の見直しへとつながっている。また、各県で一物一価の指導がさらに強まったのもこの時期。これも年をまたいで続いていく問題である。業界景気に底打ち感が出始めたのはパチスロに復調の兆しが見えてきたからであり、他方、その流れに確信が持てなかったのはパチンコの（特に4円貸しの）急激な失速ぶりに歯止めが掛からなかったからだ。しかし、高粗利営業が客離れを誘発、さらに中古売却益まで当て込んだ「即入れ、即抜き、即ハズし」の三即営業は中古制度変更で無理になり、その上APEC規制も重なるなど、周辺環境、業界構造的問題が絡み合い、回復気配も年の後半に腰折れした。一方、周辺も喧しく、カジノ法案やら禁煙条例施行やら、やがて業界にネガティブな影響をもたらしそうなトピックが続出。「正村ゲージ」の正村商会が事業停止。1941年から続いた歴史に幕を下ろしたのもこの年だった。

●2002年以来、開催されていなかった展示会が、都内・国際フォーラムで開催。「パチンコイノベーションフォーラム2010」は、メーカー関係の出展はなかったものの、周辺機器や関連企業47社が出展した。

●東北一帯にかけて未曾有の被害をもたらした東日本大震災は、パチンコ業界にも大きなダメージを与えた。地震とその後の津波被害を受けた多くのホールでは、営業再開に日数を要した。写真上は、津波で流されてきたトラックに激突され、壁面を破壊された宮城県多賀城市のパチンコ店。

■3月11日午後2時46分。宮城県沖を震源とする我が国観測史上最大のマグニチュード9.0の巨大地震が発生した。震源域は岩手県沖から茨城県沖までの南北500キロに渡り、津波被害も含めて死者・行方不明者は2万人超。この未曾有の大震災で業界が蒙った被害も甚大で、全日遊連発表によると8県726店舗が何らかの被害を受け、うち52店舗は全壊被害に遭った。遊技機をはじめとした機器供給側も部材調達ができない状況に陥り、震災被害に遭っていないエリアでも新台の納品を見送るなど影響は全国各地に波及。直接的被害を免れた関東地区のホールでも震災直後の計画停電の対応に追われ、営業時間短縮に踏み切るなどしたが、この非常時に一部のホールが煌々と営業していることに対する批判がインターネットを中心に過熱。これに石原慎太郎東京都知事による「ムダな電力がパチンコに使われている」といった発言が飛び出し、業界団体は膨れ上がるパチンコバッシングをかわすための対応に四苦八苦した。が、バッシングはインターネットの世界を飛び越え、パチンコ店に節電を求める街頭署名活動や抗議デモが主要都市で展開されたほか、保守系の議員・有識者らがパチンコの存在そのものを否定する「パチンコ違法化・大幅課税を求める議員と国民の会」の設立シンポジウムを開くなど逆風が続いた。そうした状況下でホール系5団体では、夏季の電力不足への対応として、各種節電施策とともに東北電力管内、東京電力管内のホールにおける輪番休業を決議。これを守らないホールも一部で出たものの、遵守率は高かった。また、一方では震災援助金として総額44億円もの金額を拠出するなど、業界の一連の震災対応は、その緊急性から考えると評価に値すべきであると同時に、今後の遊技業界の方向性を問う契機にもなった。また、6月には広告宣伝と構造設備に関する通知が警察庁より発出され、隠語規制、イベント規制の対応にホールもメーカーも追われたほか、大阪ではいわゆる業界等価交換の規制が入るなど、営業上のテクニックの枠組みを根本から見直さなければならない展開に拍車をかけている。「遊技通信でみるパチンコ業界の60年」のなかでも、この年ほど様々な混乱が生じた年はない。

●GWの前後期間、パチンコバッシングの一つとして展開されたのが都内各所でのパチンコの節電を求める署名活動。パチンコの存在を否定する言動にも発展。

●原発事故による電力不足への対応とパチンコバッシングの回避のため、震災直後には全国のホールが店外ネオンを消灯。その後、東北電力、東京電力管内は夏季の輪番休業を展開し、バッシング回避を図った。

●平成14年の広告宣伝規制の再徹底が図られた。横行する「隠語」について行政側は特に問題視したが、一部のホールではそれでもなお、規制逃れの言葉探しを行った。また、この時の行政通知では、総付景品の配付に関するガイドラインを業界団体で策定するように要請するなどした。

●市場価値のある二部賞品の提供方法の指導に加えて、いわゆる「業界等価」に対する指導に踏み切った大阪府警。賞品の下限価格が引き上げられ、大遊協加盟店舗が採用する大阪障害者母子寮婦福祉事業協会出張所では、二部賞品の取引量の大幅減が懸念されてもいる。

●未曾有の大震災への業界各所の支援活動は、44億円におよぶ支援金拠出に留まらず、現地での瓦礫撤去や炊き出しの手伝いなどのボランティア活動も団体・企業の垣根を超えて積極的に展開された。写真は参加人数622人におよぶ広範囲で大規模なボランティア活動を展開した、宮崎県に本社を置くホール経営企業の西の丸。

パチンコのツール探しの決定版 杉山一夫著「パチンコ誕生」

◇本誌29ページの「パチンコのルーツ探し①」は、実は弊誌の50周年記念特集でまとめた話を加筆修正したもので、この原稿を書いてからちょうど10年が経過する。パチンコのルーツ探しは時が経てば経つほど難しくなるのは当然で、テレビ番組「謎学の旅」で示された内容以上のものは、そうそう出てこないだろうと思われた。ところが、この10年の間にそれこそエポック的な新発見があったのだから面白い。平成20年8月、横須賀在住の版画家、杉山一夫氏が約15年にも渡ってパチンコのルーツを探り、その内容を「パチンコ誕生　シネマの世紀の大衆娯楽」として上梓したのである。

◇中学生の頃、路上で売られていた中古のパチンコ台を購入し、そのルーツに興味を抱いていたという同氏。各種出版物ではコリント説と欧州ゲーム機説とが両論並記されており、専門家でも起源が分からないというのは、一体、どういうことだろうという疑問を持ち続けていた。そんな折、都内で古いパチンコ機を売っていた古物商との出会い、二人三脚でパチンコのルーツ探しを始めることにしたのだが、なんとその2週間後には見た目でもかなり古いパチンコ機を発掘。しかもこれは、存在しないとされていた昭和初期の一銭パチンコであった。

◇勢いづいた同氏がその後、蒐集した遊技機は現存最古のパチンコ台、我が国初のウォールマシンを含めて150台にも及ぶ。当のメーカーでも残っていない遊技機も数多く所有している。

コリント前にあるパチンコ特許「いつからがパチンコなのか」

◇杉山氏がパチンコのルーツ探しで展開した検証スタイルは、かなり徹底したものだった。現物入手を軸に、明治大正期からの特許データ、各地の図書館に残る資料、当時の地図と電話帳を駆使して現地に足を運ぶといったもので、言葉でいえば簡単だが、例えば特許関係では海外特許も漁った。一連の検証の中で、日本最古の遊技機メーカーといわれた「OM」は、実は「ON」であることなどを突き止めてもいる。さらに、古い映画や小説に登場する、当時の室内娯楽の様子のチェックも行った。映画「巴里祭」にはウォールマシンが登場し、映画「OK牧場の決闘」には縦型ルーレットが登場する。黒澤映画にワンカットだけ登場するパチンコ台を観ては、戦後のパチンコ機のゲージの変化を探っていった。

◇杉山氏はいう。「パチンコの元になったのは明らかにウォールマシンですが、さらにその元になったのはバガテールで、それをコリントと呼ぶのであれば、これがパチンコの祖となったという表現は間違いではない」。結論から言えば、戦前の我が国で大流行したコリント商会（小林脳行）のコリントゲームは、英国のピン・バガテールである「コリンシアン・バガテール」を完全に模倣したものだ。英国で「コリンシアン・バガテール」が登場したのは昭和4年から5年。日本での模倣はその直後の昭和7、8年だが、一方の日本におけるパチンコに関する最初の特許が昭和4年にあることも調べ上げた。つまり「パチンコの元となったコリントゲーム」よりも先に、日本にはパチンコが存在したのである。

◇しかも、パチンコの元となったウォールマシンよりも先に、日本にはバガテールも伝来している。これは日本で玉ころがしになるのだが、杉山氏は一連の遊戯機の源流となるバガテールから、日本の玉ころがしやスマートボール、アメリカのピンボール、イギリスのコリンシアン・バガテールやウォールマシンといった、世界に広まった「玉で遊ぶ遊戯機」の分岐と分断の様子を、遠くフィンランドにまで足を運んで検証した。

◇杉山氏の一連のまとめは、本誌が考えるに、今のところのパチンコのルーツ探しの決定版であり、これだけの考証を越すものはそう出てこないだろう。が、パチンコのルーツ探しは、突き詰めていけば「いつからパチンコと呼べるものになるのか」の話でもある。マシン単体の形態だけの話ではない。「私はウォールマシンの裏を取り除き、人が裏で操作する仕様にしたことがパチンコの第一歩だと思います。『無人から有人に』というのはメカ的にも後退していますが、これによって島構造という日本独特の営業方法が生まれたんですから」という杉山氏。こうした考証も含め、杉山氏の見方にはうなづくところが多い。

●昭和初期の遊技機を入手し、パチンコ誕生の真相に迫った杉山一夫氏。写真左の遊技機が遠藤美章商会の和製ウォールマシンで、杉山氏の右上にあるのが現存最古のパチンコ台「岡式電氣自動球遊機」。

●小林脳行の子会社だったコリント商会製のコリントゲームと英国製のコリンシアン・バガテールを並べると、プレートを見ない限り区別がつかない。日本のコリントブームは完全に海外製の模倣から生じたことが窺われる。

●パチンコが子どもの遊びから発展したのだという従来の説に疑問を呈する杉山氏。平成16年に入手した現存最古の「ウォールマシン」（遠藤美章商会製）がパチンコの元になったが、さらにその元になったのが右のドロップマシン。杉山氏は現物入手と綿密な時代考証とでバガテールがパチンコに至る進化の過程を一本の線でつなげた。

●反対の嵐にもめげず一年有余の奔走の末、営業許可へそして沖縄の礎築く

沖縄県娯楽産業組合連合会・会長　吉浜照訓氏

九州遊連主催による「沖縄県祖国復帰10周年記念式典」（編集部注・昭和57年10月20日開催。式典では吉浜会長に全遊連と九遊連から感謝状が贈呈された）を終え、喜びに包まれている沖縄県娯楽産業組合連合会。その会長である吉浜照訓氏を、くつろいでいることろにおじゃまし、県遊技業界・草創当時の苦労話しをお聞きしてみた。

――沖縄の遊技業界の礎を築かれるために、吉浜会長はずいぶんと尽力を注がれたとお聞きしているのですが、その辺の話から…

吉浜会長　昭和二十七年六月ごろにパチンコ営業許可期成会というものを結成しました、パチンコ店営業ができるように運動に乗り出したわけです。しかし当時、玉砕の街に惰眠を貪るマシンなど何事かーと色んな市民団体が反対するわけです。今考えるとおかしな話ですが、連合会や婦人会などを説得するために公聴会を開き「法律で許可されているのになぜ営業ができないのか、我々の要求を正当なものだ」ーと論じるわけです。市民の反対を押さえたものの、今度は米軍の反対で一蹴。結局、議員などを通じねばり強い陳情を重ねた結果、一年三ヶ月ほどでようやく営業許可となったわけです。

本土復帰前、昭和30年の沖縄におけるパチンコ店の開店風景。沖縄の業態は回胴式から始まったように言われるが、この頃の島民の娯楽を支えたのは映画館などと並びパチンコであった。（昭和30年3月5日号より）

――本格的にパチンコの組合が結成されたのは…

吉浜　え丶、やはり許可になってからすぐです。実のところは二十八年の五月に結成されたわけなんですが、私が六月生まれだもんですから、六月一日に結成したことにしようとなったわけです。当時は琉球パチンコ組合連合会と言っていたんですが、昭和四十七年に沖縄県娯楽産業組合連合会と改称し現在に至っています。スロットの業者も盛んに組合に入れてくれという話しがあったんですが、スロット＝オリンピアマシンとは一線を画す意味で、これまでパチンコ業者だけで組合を形成して来ました。

――二十八年当時と本土復帰後、そして復帰10周年を迎えて、“時代”を感じる点は…

吉浜　二十八年当時、私は30台ほどで営業していました。私の場合は皆んなより三ヶ月程度おくれての開業でしたが、皆んなその程度の台数でした。三十年たってまわりを見ると、草創当時から残っている人は三名くらいでしょうか。二十名近くのひとたちがこの業をやめていますね。これはやはり残念なことであり淋しいことです。ここ数年の傾向としてオリンピアマシンの台頭がありますね。しかし、私どもはどこまでも健全営業としてのパチンコを盛えさせるべく、努力をしていこうと思います。

――ところで会長のご趣味…

吉浜　ゴルフ、囲碁、それから空手もやります。ゴルフのハンディは16です。

御年七十五才。まだまだ若さみなぎる会長である。

（昭和57年11月号より再録）

●昭和20年代から業界の歴史と共に歩む…上野村事始め

東上野には通称“上野村”と関係者が呼ぶ、パチンコ業者の密集地域がある。

昭和通りと浅草通り、清洲橋通り、春日通りの四つの大通りに囲まれた区域がそれにあたる。広さにして大体五百メートル四方。そこに、パチンコメーカー、中古機業者、部備品業者、パチスロメーカー、ホールデザイン会社、その他ホール経営者を養成する学校など、業界に関連する企業が密集。その数は100社以上とも言われる。

では一体いつ頃から、どういう理由で、この地に業者が集まりだしたのか？　昭和27年の3月に創業し31年頃東上野に移転してきた大成商会の高木章社長（67才）は次の様に話す。「この地で一番古いのは中央商会っていう機械屋じゃなかったかな。昭和28年ぐらい。もうかなり昔に廃業したけれど。それからしばらくたってからだね、この辺りにぽつぽつ業者が集まってきたのは。主にパーツのメーカーが最初だったと思う」

理由についてはこう語る。「例えば金物屋街とか古本屋街とかいった専門店街は特に東京に多く見られる特徴でね。大阪の方にも元町があるけど上野村ほど歴史は古くないし、またその他の業種の専門店街でも東京ほど多くはないんですよね」。こういった専門店街が生まれやすい土壌や歴史が東京には元々あると云う訳だ。

昭和40年代の初めに中古業者として創業した松下商会の松下富茂社長は、「上野村にやってくる人の殆んどが東北方面から。上野駅が東の玄関口ですからね」という。

そうしてこの上野村は、古くは連発式、ジンミット、コミックゲート、チューリップなどが登場した時代とともに歩んできた訳だが、なかでもこの上野村に大きな変貌を促したのだが、昭和56年に始まったフィーバーブームである。これにより業界全体の売上は急増し、その影響は上野村にも及んだ。58年後頃からの大手遊技機メーカーの上野への出店ラッシュがあり、ショールームがこの地に多く目だってきたのである

また近年では、61年の回胴式ブームにより、上野村へのその関連会社の進出が軒並み増加し、カード式システムが登場するやいなやその関連会社もすぐに進出してきた。

こうしてみると上野村の容貌はその時代時代のパチンコ業界の姿を浮きぼりにしている。まさに業界全体の縮図だと言っても差支えないかも知れない。

（昭和62年4月号より再録。一部修正）

パチンコ店の息子さん。　小泉粲朗

「お父さんお正月のお年玉を下さい。……いゝえ。この玉じあないのです。煙草を買うお金を」

「煙草ならこの玉でとりなさい！」

ついパチンコ癖（くせ）が……「オーイ三番出ねえぞ」

パチンコ業界に創業二十五年の輝く歴史

東京営業所 台東区浅草雷門2－8 名古屋鈴富 中区大須門前町
電話浅草(84)1846
宣伝部 池袋西口駅・新宿駅東口ムサシノスポーツランド
新宿西口口・新宿東口第一鈴富

ラッキー式
優秀パチンコ
オール10・15・20に並物
等各種図柄42種
開業出張指導
渡邊産業株式會社
營業所 東京都大田区北千束町508
電話 荏原(08)071・8番
(五反田・蒲田より荏原下車)

遊技者の押すスヰツチにスリルを盛つたアメリカ式
赤玉式
ロケットゲーム
特許番号第251773号
実用新案登録第372754号 第382620号
株式會社 山田製作所
工場 東京都墨田区東駒形4－22

OS式パチンコ玉磨機

パチンコ遊技場の繁営秘訣は
優秀遊技器の製作と
完全玉磨きにある

0型自働回転式4分ノ1モーター付
高さ・横・縦約二尺 ¥一八、〇〇〇

現在宣傳特賣中！

發賣元 有限会社 長田商店
東京都千代田區神田須田町二ノ四
電話 神田(25)六五〇四番

最古の信用
最新の技術を誇る
大山式
パチンコ機
株式會社 大山商店
本社 名古屋市瑞穂区瀬戸町二ノ八 電話瑞穂(8)〇一五二番
東京営業所 文京区湯島三組町九八
大阪営業所 南区難波新地二番町二九

名古屋業界の新星

愛知パチンコ製作所
名古屋市瑞穂区雁道町一ノ一一
開業には責任指導
入替には特に御相談

日本中が西陣だらけ

總ガラス張り大工場完成
土足嚴禁 禁煙禁酒
代理店・東京・台東会館

循還式重機関銃專門メーカー
株式会社 西陣商会
工場・京都・桐生
東日本発売元 群馬県桐生市三吉町一九〇
電話 桐生 二〇八八・四六〇二

ロータリー時代来る！
☆「廻転式」
☆パチンコの快適さとルーレットの魅力を
綜合完成したアメリカン・システム、「ロータリー」パチンコ機
今や業界競争の機、業者の待望に應えるは「ロータリー」
A、釘使用
B、レール使用
C、釘レール併用
廻転式オール10、15、20 各種
製作 ローターリー製作所
★カタログ呈
★県單位代理店設置
特許申請中
模造品御購入の向は後日撤去等の御迷惑がかゝる場合がありますから御注意下さい
発売元
株式会社 日本光画社
東京都中央区日本橋久松町九
電話 茅場町(66)3462

自働玉入器
パチンコ機取付用
在來のどの機械にも据付けの儘簡単に取付けられます
玉を一個宛孔に入れる不便がなく又衛生的にも大好評
東福商事株式会社

上野のよろづや
大成商会
上野駅前・上車坂四・TEL(84)4940番
環循皿の決定版現る！！
斬新なデザイン・豊かなボリューム
はきつと貴社の満足を得られます
特殊社名入
特殊カーブ
チャツカー
（従来の玉ツマリの難点解消・大量生産開始）

豪華、東洋一のパチンコ・ホール
冷房完備
階上一座席パチンコ
「話の種」にぜひ一度御越し下さいませ。
京都 四條店
金の玉マルタマ
大阪 道頓堀店

全国遊技機斡旋所
パチンコ中古斡旋
◎一流メーカー中古在庫多数
◎新中古売買・修理
◎鋼球製造直売
◎中古球売買斡旋
株式会社 全国遊技機斡旋所

景品は一流商品を…
薬用歯磨は一般には扱えません！
ライオン歯磨はどこのお店でも安心して販売できます。
ライオン歯磨株式会社
クロロフィル
ライオン煉歯磨
LION CHLOROPHYLL
緑のライオン煉歯磨 100円・70円・50円・30円

天下一品！
豊国号が贈る
元祖 昇降式 発売
客がタンクの玉を自由に増減出来る
注文殺到！予約募集
発売元 株式会社 豊国遊機製作所

第一銀
登録商標
このマーク！この機械のあるところに常に不況なし！！
お取引は本社並に各地代理店を御利用下さい
（ニセモノに御注意）
本社連絡所 名古屋市中村区島崎町五九 電話・西(53)三二七九番
最高級パチンコ機
株式会社 第一銀座商會

SHISEIDO
OLIVE
TOILET SOAP
・・・・肌を荒さない
過脂肪石鹸！
資生堂
オリーブ石鹸
正価販売 30円

パチンコ機の王座アルファ
展示会の人気を一挙に掻攫った老舗の底力！！
オール50とは
一目でビツクリすごく喜ばれた
中玉が三倍に見える
特殊ポケツト特許出願中
特許取出口付玉受皿使用
ゲージとハンドルが自慢のメーカー
高級循環機 電動式循環機
循環式単発機
アルファ遊機株式会社
本社 東京都杉並区阿佐ケ谷1-823
TEL 荻窪(39)1188番

最高無比 モナミ式
パチンコ
モナミ製作所

コワイヒゲ
ウスイヒゲ
ウブゲ
ヒゲも色々あるが名指す剃刀は唯一つ
景品に最適品
人形印
ナルビー剃刀

いよいよ大好評の
磁石のきかない…
マンボール
発売元
尚球社
大阪市南区難波新地三番町五〇

循環機発明者（特許許可公告決定 7月2日）
コメット型
名誉にかけて
御待たせしました
2オール0
新発売
合資會社 竹屋商會
業界の王座を目指して躍進する竹屋に御声援を乞う。

全国的な人気の的となる！！
循環式
モナコパチンコ
モナコ商会
本社 名古屋市中村区千成通り1/30 電話 笹島(54)2976

あゝ!!
何と全く売るのが惜しい様な機械だ!!
西陣最新型 二式
快速国民号
予言致します。手遅れは禁物です。
今後これ以上のものは絶対出来ない
日本国民の最終的娯楽機械でありま
す。各地でまことに絶賛中!!

(82) 5506・4818

伝統のある老舗!!
優秀なる遊技機の誕生は良心的代理店と共にある
どんな機械でも── 遠慮なくお申出下さい
どんな相談でも── ホールの気持になってお世話申上ます
岩下有限会社 社長 岩下文三
本社 宮崎市西橘通り──TEL 7070・4903
支社 福岡市上紙園町 TEL ② 4247

スリルに富んだ 6穴8穴ゲージ

どの地方でも御安心願える
最高の機械
健全な経営確立に断然好評

株式会社 マルト商会

本社 名古屋市中村区泥江町1の7
(セントラルビル内)
電話(54)0233・0234

お客様が満足して頂ける景品!

それがホールの繁栄に直結している —

メーカー品の販売に実力ある業界の老舗

株式会社フルヤ商会

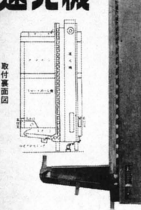
最古の歴史と新鮮な景品

営業所・東京都千代田区神田五軒町41
TEL(831)1670・0535

謹賀新年 '71 元旦
太陽
常に研究
常に前進
京楽産業株式会社
本社 名古屋市中川区八幡町6－75 横浜・京都・大阪・広島・福岡・熊本・四国

あけましておめでとうございます…
本年もよろしくお願い申し上げます
SANYO
売上げ倍増を
約束する！
new SANYO
株式会社 三洋物産
本社 名古屋市千種区元古井町6－8 TEL052－732－5481－7

無人機は完全に軌道に乗っています
★当社は再製部品の使用は一切いたしておりません。
スタンダード…￥8,500以上
無人機…￥12,000以上
いづれも本体のみ
奥村遊機K.K
電話代表（881）8131番

シルバー号
電子還元機
シルバー SILVER シルバー
電磁メーター
ダイワ
TEL 東京 03－308－2341－2

スマートボール用
還元機
スマートボール用還元機
玉福産業株式会社
京都市伏見区

各種玉売機を
有利に下取交換!!
谷角商店
タイガー

省力化の先端を行く
確実なメカニズム
還元機のいらない
無限
2型&3型
全店自動集配球研磨指令装置
株式会社マックス
☎052(935)5411代

あいさん
25周年記念
賀正
景品付
大売出し
100,000,000円
ハズレ券無しで
ドバーッと当る！
愛産産業株式会社

ホールは遊技料を頂いているのです
オオキ・デザイン研究所
オオキ建築設計事務所

完全無人化を実現する
ホール専用コンピューター補給装置
KITACK M2
キタック エム M2
KITACK M2の
他社製品よりすぐれている点
株式会社 北電子
第2営業部

麻雀遊技機の
御警告
決定版.!!
株式会社 大信

自動玉貸機
電子計数器
スーパー
傘立
ベレーガ
株式会社 大成商会

椅子ならなんでも揃います
発売元
合資会社 高山商店

■ホール業者のために
優秀機づくりに全力投球する
無人機
￥12,000. 以上
税及特許料含む
（出しメーター無し）
有人機
￥8,500.
（税込み）
マルホン
名古屋マルホン工業株式会社

その後も差をつけた機能と実績!!
ニュースター
Vランプ
EP-1型
EP-2型
貸玉
8型
ジェットカウンター
CB-330
世界最高の新星ボール
新星商事株式会社

たのしさが豊富にあります…
中良商事

超高速薄型ハーレー自動玉貸機新発売
●巾3cm・硬質アルミ製・薄くて軽いタンク(500個)・トランジスター5石直流24V
好評発売中
日の丸自動機

千円札両替機
Daito
自動玉貸機
電動還元機
好評発売中
超薄型3cm巾
千円札両替
自動玉貸機
玉貸機
玉貸機
モデルチェンジで
更に性能アップ
株式会社 大都製作所

●オールカセットタイプ
ジェットカウンター
CB 220
実用型発売!
製造元
三栄実業株式会社
発売元 新星商事株式会社/株式会社宝商事

製品に命をかける佐藤です
大一式中古機(ニューバンガード) TOYOの自動百円玉貸機
オートメーション装置 完全なるアフターサービス
ホール用電動還元機各種 その他ホール用品一切販売
佐藤商会
整備技術日本一
営業所 (0582) 62-7951 岐阜市高野町2-2
工場及夜間 (0582) 72-7427 岐阜市茜部新所3319

完全整備
中古機専門
東日本遊技機商業協同組合加盟店
丸幸商会
東京都練馬区田柄3-16-25
990-8222・8245

完全防犯
コンパクト
万能号 新型無人機
これほど人手不足を解消する理想の無人機はない。表裏が分離式で簡単に取替えられる経済的な機械、コンパクトの設計性能!人気ともに抜群!
成田製作所

最高の在庫に最高の引き取り
●入替えの節は是非1度ご来店下さい
パチンコ機デパート 中央商会
東京都台東区東上野1-13-7 (831) 2292・5187

かたいのから
やわらかいのまで
在庫豊富
☎291-4582.9182
株式会社 大和書店
東京都千代田区小川町2-6

ハイ・リズム100
現代百発機の
最高峰
豊国速射
誘導機
豊国販売株式会社

マルヨシのアルミ型材で
輝く幕板
新発売
お店のイメージアップを!
天板DA型
天板DB型
新型
幕板
幕板
(トミー)
マルヨシ商会
東京都台東区東上野3丁目15番3号
〒110 ☎03(834) 4666番(代表)

ビジネスにもレジャーにも
トリオの優秀雑貨をどうぞ!
株式会社 トリオ製作所
東京都目黒区洗足2-27-16
☎03-786-7131(代表)

neW DESIGN
新発売
コンチェルト
音の芸術を表現
何人にも愛されるハーモニーを機械にぶっけてみました。
機能は勿論、表、裏を問わず豪華でぜいたくなデザイン、個々のデザインが全体の雰囲気をデラックスにする、こんな機械すべてを一新、機能と面白味を温存したコンチェルト。
信頼のマーク
マルト
豊丸産業株式会社

レコード専門の
景品商社は当社だけです
株式会社 ワールド・オンキョー
東京都世田谷区上用賀3-12-8
☎03-700-6856

●中古機高価買取
在庫豊富
パチンコの萬屋
日進商会
群馬県桐生市広沢町1-2611-1
☎0277-44-8333(代)
再生新台・自動補給装置
還元機・店舗設計・施工
遊技場部備品一切取扱い
●パチンコに関することなら何でもご相談下さい
パチンコ

あの伝統ある……銀座号
一世を風靡した伝統ある名機、と云えば《ギンザ》をおいてありません。あの銀座号が今日も皆様のお手元にあります。伝統と技術を高く評価される銀座号のご用命は下記へどうぞ……。
有限会社 銀座
東京営業所 東京都台東区東上野1-13-7 〒110 ☎03-831-2751
本社 名古屋市東区大幸町2-5 〒461 ☎052-721-2341

●遊技場・サウナの新築改装は
センスと技術の天辻へ!
(有)天辻商事
東京都台東区東上野3-16-10
☎03-832-6244-6

●メダルゲーム
●スロットマシン
●アレンジボール
●各種コインメダル製造
coin & medal

20
豊かな心を創造するメダルから記念品まで
技術と信頼を誇るメダルメーカー
株式会社
トーケン
TOKEN

●ジャンボパチンコ
フジヤマ号
●島飾り用に最適、DLXフジヤマ号が好評
●一石三鳥●装飾●宣伝●娯楽●
《各メーカー中古機》
在庫豊富
東京商事
東京都台東区東上野3−21−2
TEL (831) 8691〜2

伝統と技術のドッキング！
培われた技術が島還元補給装置を決定的なものにした。
竹屋式島還元
オールマイティー120
株式会社
竹屋

スロットル2号
スロットル5号
ラッキーナンバー
マジックネオン2号
エレクトロニクスロボット
スーパーアレンジ出現。
コンピューター・メダル機専門メーカー
太陽電子株式会社
☎(052)502−9222

《信頼》の重さを景品にしてお届けします……………！
〈一流品の景品問屋〉
食品・雑貨総合卸問屋
フチ商事 株式会社

National
人手不足解消や不正防止に――〈テルック〉
電源工事がいらない！
ナショナルテレビカメラシステム テルック
スミまで目が届く。129,000円

京楽の太陽に添える言葉はいりません。最高の機械です。
京楽産業
本社★名古屋
☎831−8596代

世界で最大・最古の空気清浄機メーカーから衝撃デビュー！
新発売
天井埋込型 スカイフレッシュFJ220A
待っていてよかった!!
天井吊り下げ型大型 スカイフレッシュF75A
天井吊り下げ型小型 スカイフレッシュFJ250A
特約店募集
新発売
スカイフレッシュシリーズ
あらゆるニーズにも100%お応えできます。
設置条件に合わせて、自由にお選びください。
J.G.コーポレーション
山武ハネウエル

3 ボーナスで
モンスターパートIII
Circus
スリリングに!!エキサイティングにモデルチェンジ!!
株式会社 西陣
株式会社 北電子

新しい顔に対応して
グローリー高額紙幣玉貸機
新券タイプで新登場!!
EP-20
GFA-11
EP-8A
ER-30
ER-402
全国を信頼で結ぶGマークグループ
G.A.M北海道
G.A.M株式会社
GYS株式会社
G.P.M株式会社

この迫力で人気急上昇!!
発売以来6ヶ月で全国設置台数
5,000台突破
風俗営業認定機種
ボブキャット
BOBCAT
★低価格で高収益
★従来のパチンコ島をそのまま利用
★3ボーナスでゲーム性バツグン
★"ワンタッチ"メンテナンス方式
オスカー物産株式会社

期待のエースです。
エース電研グループ

入魂
株式会社 三共
三共技研株式会社

超高速玉貸のパイオニア
シルダック2000
二つの新製品が揃いました!!
メタル時代にクリーンなメタルを
シルクリーン
メタル研磨機
■シルクリーンの特徴
総発売元
シルバー電研株式会社

●ホールにとってコンピューターとは、ダイコクは常に考え続けます。
DAIKOKU
取引メーカー
京楽産業
豊丸産業
竹屋
平和工業
データ分類機
ホームチェッカー
オミクロン
LP-5500
経営管理機
OMRON 立石電機株式会社・特約店
ダイコク電機株式会社
DAIKOKU DENKI CO.,LTD.

Oh!! Bran New
オリジナル電ヤク
アメリカ
西陣
NISHIJIN CO.,LTD.

OIZUMI
性能とデザインのトータルパワー
玉貸機
株式会社大泉製作所

SEGA新製品SPV-100
景品払出省力化・管理機
■タマ計算と景品はらい出し・バッチリ!!
■システムアップ・人手いらずでホールの能率120%UP!
京葉電子

分かりやすく使いやすいコンピュータだから
経営管理もスムーズ。
SUNTAC1600シリーズは信頼できるビジネスパートナーです。
全データをデスク管理できる データ通信機能
電電公社
SUNTAC1600SERIES
サン電子株式会社

まとめて見たり、おおきく見たり。
これで安心!! ホールの見張り
4つの眼をもつガードマン
ミスタールック401
池上通信機株式会社
カントー

近未来、ハネモノタイプ
興奮の嵐、
ヨコ、ナナメ
入賞条件選択で、
日本縦断。
興奮度3倍アップ!!
スペースゼロ
フラッグホールII
エンパイア
新時代は、いつも"サミー"から。
Satomi

《超特電機》時代をリードする!!
●新型カウンター NE-2800FP
●プリンターと本体が一体となった本格派…
株式会社ナダ電子研究所
三葉のスーパーゲーム
新型
スマイル号
ヒカリ号
三葉産業株式会社

■トリオはご家庭で喜ばれる景品がモットーです。
トリオ製作所

《限界の壁に挑戦》
株式会社 高尾

遊技場件数の推移

【遊技場軒数の推移】

昭和24年 4,818	昭和35年 9,224	昭和46年 9,398	昭和57年 11,049	平成 5 年 18,036	平成16年 15,617
昭和25年 8,450	昭和36年 9,307	昭和47年 9,304	昭和58年 12,725	平成 6 年 18,113	平成17年 15,165
昭和26年 12,038	昭和37年 9,684	昭和48年 9,501	昭和59年 13,399	平成 7 年 18,244	平成18年 14,674
昭和27年 42,168	昭和38年	昭和49年 10,098	昭和60年 13,524	平成 8 年 18,164	平成19年 13,585
昭和28年 43,452	昭和39年 9,903	昭和50年 10,636	昭和61年 13,969	平成 9 年 17,773	平成20年 12,937
昭和29年 29,416	昭和40年 10,124	昭和51年 10,734	昭和62年 14,478	平成10年 17,426	平成21年 12,652
昭和30年 12,391	昭和41年 10,070	昭和52年 10,559	昭和63年 14,529	平成11年 17,173	平成22年 12,479
昭和31年 9,365	昭和42年 10,030	昭和53年 10,302	平成元年 16,068	平成12年 16,988	（軒数）
昭和32年 8,946	昭和43年 9,854	昭和54年 9,961	平成 2 年 16,704	平成13年 16,801	
昭和33年 8,792	昭和44年 9,601	昭和55年 9,783	平成 3 年 17,415	平成14年 16,504	
昭和34年 9,490	昭和45年 9,494	昭和56年 9,807	平成 4 年 17,827	平成15年 16,076	

出典／警察庁資料等より作成

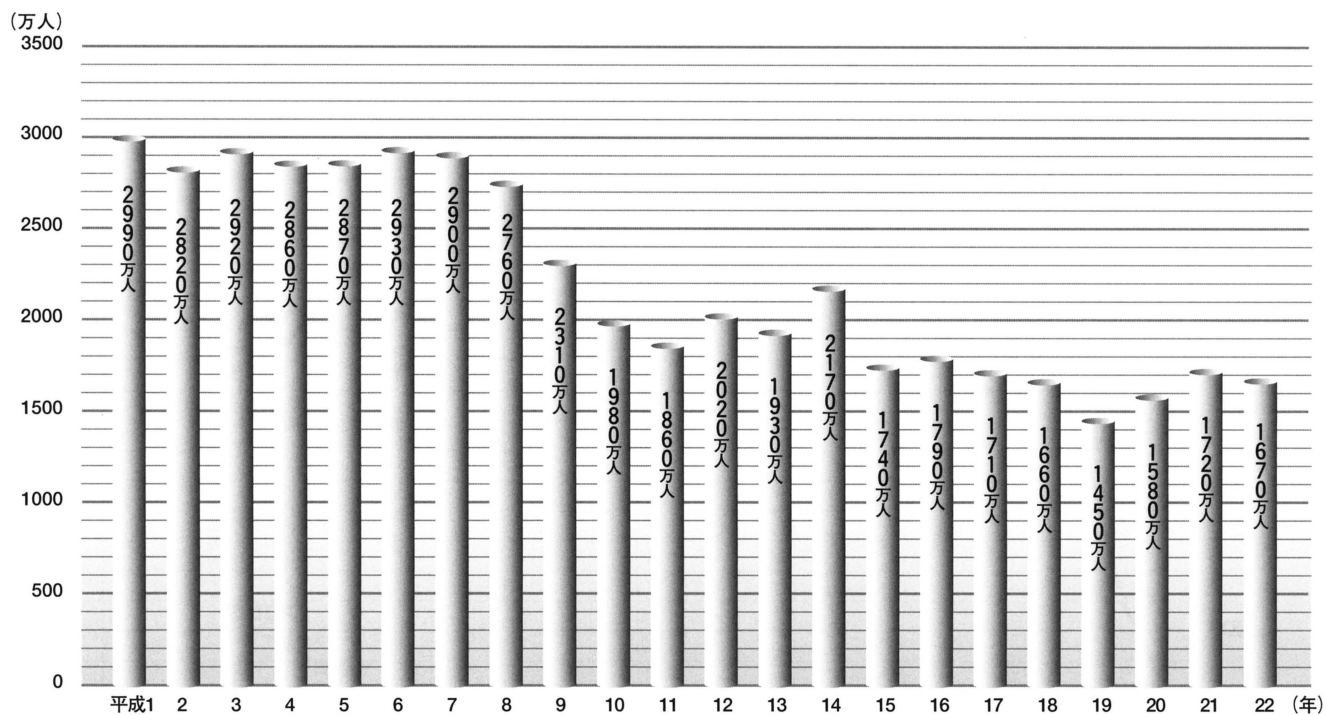
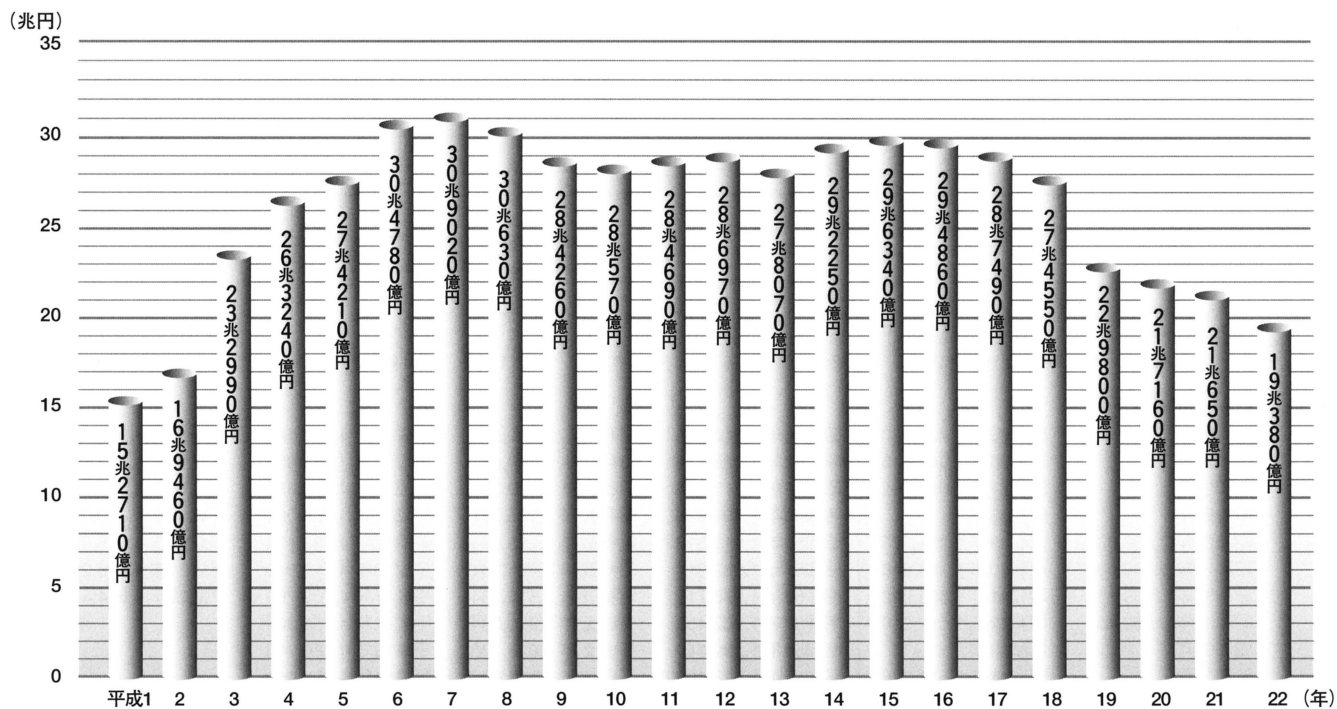
遊技機設置台数の推移

【総遊技機台数】

年	台数	年	台数	年	台数	年	台数	年	台数	年	台数
昭和24年		昭和35年	778,960	昭和46年	1,614,775	昭和57年	2,230,672	平成 5 年	4,547,140	平成16年	4,969,156
昭和25年		昭和36年	961,946	昭和47年	1,629,336	昭和58年	2,699,016	平成 6 年	4,631,982	平成17年	4,898,198
昭和26年		昭和37年	1,094,862	昭和48年	1,713,186	昭和59年	3,029,205	平成 7 年	4,753,358	平成18年	4,937,381
昭和27年		昭和38年		昭和49年	1,791,928	昭和60年	3,135,301	平成 8 年	4,868,050	平成19年	4,590,577
昭和28年	3,000,000	昭和39年	1,255,473	昭和50年	1,917,312	昭和61年	3,223,834	平成 9 年	4,783,433	平成20年	4,525,515
昭和29年	1,100,000	昭和40年	1,394,848	昭和51年	1,989,914	昭和62年	3,426,381	平成10年	4,710,646	平成21年	4,506,250
昭和30年	769,412	昭和41年	1,394,822	昭和52年	1,978,712	昭和63年	3,618,134	平成11年	4,709,796	平成22年	4,554,430
昭和31年	553,458	昭和42年	1,512,219	昭和53年	1,962,452	平成元年	3,830,334	平成12年	4,755,302		（台）
昭和32年		昭和43年		昭和54年	1,882,544	平成 2 年	4,025,229	平成13年	4,786,255		
昭和33年		昭和44年	1,571,226	昭和55年	1,828,605	平成 3 年	4,233,005	平成14年	4,864,062		
昭和34年		昭和45年	1,592,698	昭和56年	2,062,021	平成 4 年	4,425,233	平成15年	4,891,944		

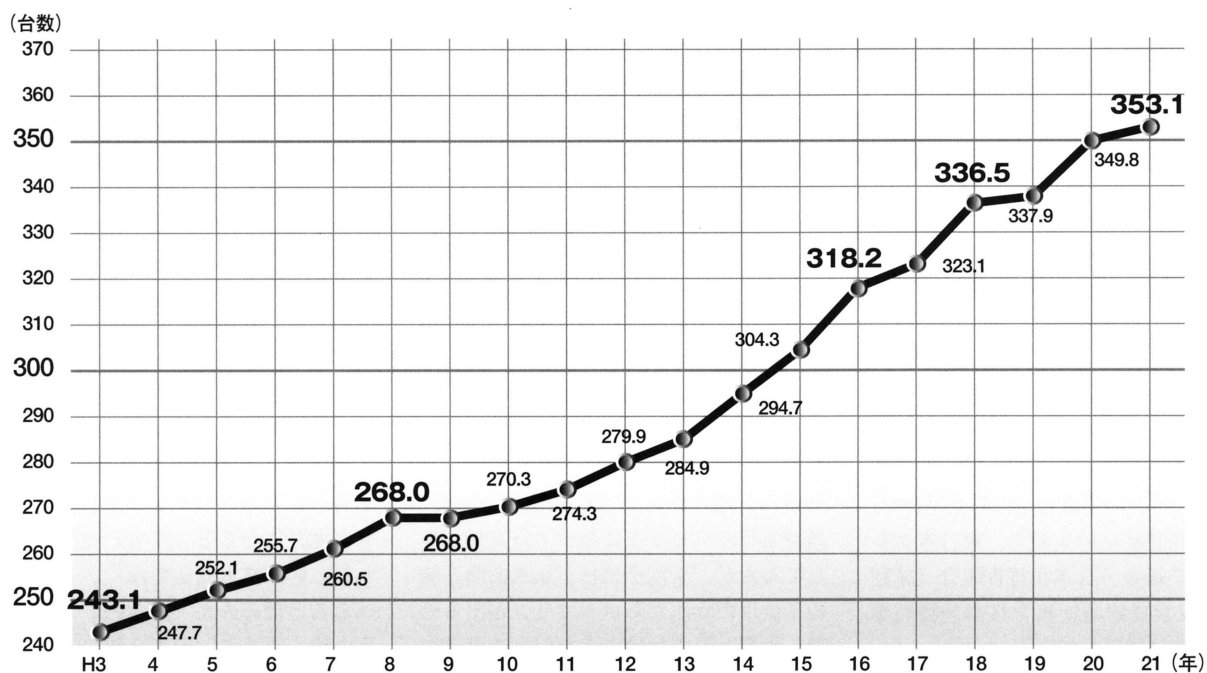
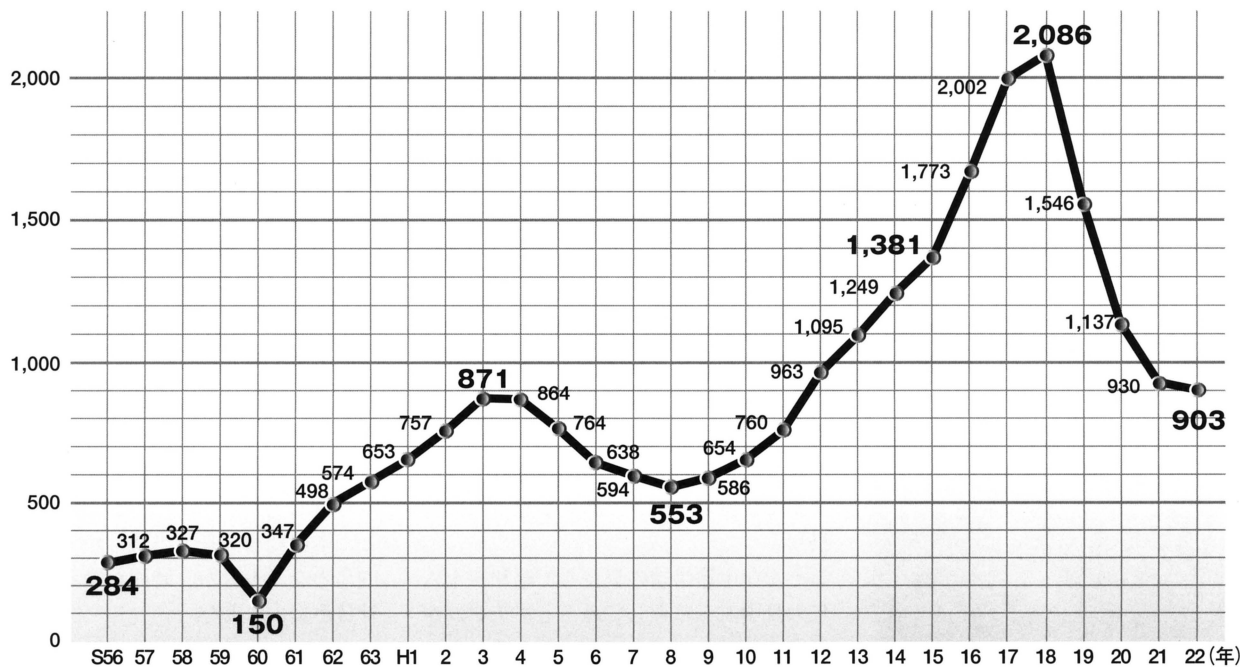
出典／警察庁資料等より作成

参加人口と市場規模の推移

・参加人口

・市場規模

出典／公益財団法人日本生産性本部「レジャー白書」より

遊技機の平均設置台数と回胴式専業店の推移

・平均設置台数

・回胴式専業店数

1・「回胴式専業店」は一部、アレンジボール、じゃん球、スマートボールの専業店やそれら遊技機による併設店舗等が含まれています。
2・昭和の頃の専業店数は警察庁資料のほか、日電協記念誌、全遊協弘報を参照にしました。
3・平成18年末の専業店の数は、京都府における対前年比95店舗増という集計ミスと思われる数値が含まれています。実質的には18年末で専業店の数は減少傾向に転じていたと思われます。

出典／警察庁資料等より作成

記事再録　遊技通信のこと

最後に、弊誌の創業者の伊藤重男と二代目社長の伊藤壽志夫が節目に記した遊技通信のことについて転載したい。最初の「遊技通信の誕生」と続く「創刊15周年を迎えて」はどちらも伊藤重男が書き残したものだが、一部、話の整合性が取れない内容になっている。今となってはその真偽が編集部では分からず、あえてそのまま載せた。なお、文中に昭和41年時点で通刊600号になるとの号数表記が出てくるが、これは発行サイクルが度々変更し、週刊、旬刊（月3回発行）、月2回発行の時期があったためである。

故・伊藤重男
明治38年生—昭和51年没

故・伊藤壽志夫
昭和16年生—平成14年没

【遊技通信の誕生】

伊藤 重男

遊技通信を始めるまでの職業の大半が、組合勤めであった。組合と云っても現在のやうな労働組合など、云ふ進歩的なものでなく、同業組合法に基く組合で、東京小間物化粧品同業組合、東日本クレンザー工業組合、日本和雑貨組合（統制組合）、東京袋物同業組合日本袋物商業協同組合等に関係して来た。

最後の職業は関東袋物施設組合と云ふ組合の専務理事をやってゐたが、戦後に商売をしたさに独立するために七年間勤めてゐた袋物組合を辞めて、銀座二丁目越後屋ビル四階で関東産業と云ふ、進駐軍向きのスーベニールの卸商を始めたがまんまと失敗した。当時やゝ生活も安定し、戦災に逢ったまんま杉並から市川に移り住み、市川新田で女中三人を使ふ生活をしてゐたが、この関東産業で失敗し、社員に横領事件まで起こされて、又もや貧乏神と一緒に住むことになって終わった。

組合と云っても化粧品商報の編集の方が主体であった関係上、又もや新聞で独立しようと「東京荒物雑貨商報」を始めたが、生活も楽でないため一人でやってゐるために手が廻らない。その後に「東京石鹸雑貨商報」と名称を変へて、石鹸の展示会を日本橋油脂会館でやったり、小間物会館でプラスチックの食器展示会をやったりして、漸くこの新聞も地に足を踏みしめたかと思ふ位順調になった。当時流行のラビットに乗って得意廻りをしてゐたが、丁度その折、尿素樹脂系統の子供用の食器からホルマリンが出るので、食器としては適当でないとの試験の結果が長野市から出て、毎日新聞が書き立てた為に、この影響で殆んど売れなくなって終ひ「東京石鹸雑貨商報」の根抵がゆるぎ始めた。

石鹸業界と云っても一流品のニッサン、ミツワ、花王クラスは化粧品商報時代に顔馴染はあるが、この方面へ廻ることは、旧主人側の得意を荒すことになるので、殆んど廻ってゐないし、広告関係もなかったので、このプラスチック関係が落目になると、広告に早速困ることになる。丁度その折、友人の紹介で「薬局商業新報」を始めたいと云ふ人があり、その方に移る事が生活が安定するので、なんの未練もなく荒物雑貨を辞めて終わったが、薬関係には既製の良い新聞があるので、新しい新聞は相当に骨が折れる。こんなことなら少しでも顔が売れてゐる業界で我慢するべきであると思った後の祭り。

そんな中途半端の気持ちで昭和二十六年六月頃ぶらぶらしてゐるとパチンコが都内で擡頭して来た。やってみるとなかなか面白い。業者はどんどん殖えてゆくばかり、これは商売になるわいと調査始めると、業界紙は一つもないと云ふことが判ったが、こちらの方には資本がない。と云って妙なところへ相談してネタだけとられて終わったので詰らん……と思ってゐると、夏枯れと云ふか、八月は余りパッとせんし、開店も止まった終ったので、やっぱり線香花火位の寿命しかないんだ、と思ってあきらめて終った。

麻雀ばくちを打つ程の金もないので、あちらこちらへパチンコをしにゆくと涼しい九月になると、又少し業態が持ち直し新しい開業も増えてゆく。さうだ！考へることはゐらん「断」の一字だ。やろうと腹を決めて、台東会館の武井さんのところへ相談に行った。新宿の小林平三さんのところへも行った。双方とも「見込がある。やんなさい」と云ふ返事。その日であったか、その翌日であったか、良く覚えてゐないが、湯島三組町の大山商店を訪ねてみると、専務の玉木良雄さんと云ふ人が、名古屋からみえて居られ、「メーカーは名古屋が本場であるから、名古屋へ一度来なさい。近く組合の結成があるから……」と云はれた。

その時分こちらは名刺を刷る金もない位、困ってゐたが名古屋へ来いと云はれて、サテと小首を傾けたが、どうにかなるだろう……と、九月四日の夜行に乗って名古屋へ向った。

午後十一時三十分の普通列車に乗って名古屋駅で相当の時間をつぶして、地図を便りに大山商店の本社を訪ねると、玉木専務は今朝帰って来たばかりであると、本田総務部長（当時）が一人しか社内にゐなかったが、時間が来ると続々と社員が集って来た。

ハヽア、パチンコの機械屋さんもなかなか、内部が整ってゐるものだと感心させられた。この玉木専務が現在の丸大製作所の社長であり、大山社長の義兄に当る人であることは周知の通りである。玉

昭和30年、連発禁止後の遊技機動向に関するメーカー座談会で司会進行する伊藤重男

木氏に湯島三組町の東京事務所でお逢ひ出来なかったら、遊技通信も茲まで伸びなかったであらう。

(昭和32年12月発行　別冊「業界雑記帳」より再録)

【創刊15周年を迎えて】

伊藤 重男

遊技業界に関係してからもう十七年になる。最初は二十五年に新聞を発刊すべく準備を進めていたが、いろいろな経済的な理由もあって発刊は昭和二十六年十月五日号であった。暑い時分に準備にかかり、その年の九月五日の愛知工組の発足の記事を主体に創刊号を出した。

その頃の業態というと誠にお粗末なものであり、その後連発禁止などがあり、業界はいつまで…という不安がないでもなかった。あれからもう十七年（厳密にいえば十六年だが）良くぞ茲まで歩んで来たとわれながら思う。最初の年はタッタ一人で始めたものが、連発機の最盛期には二十六人の社員がいて、週刊発行であった。現在は小生と子供の登志夫、それに編集部四人と合計六人の小人数であるが、金はもうからなくなった。週刊発行時代はメーカーの数も多く広告収入も多かったが、連発禁止とともにいきなり地獄へ放り込まれたようであった。

今から考えてみると良く乗り越えてきたと思う。我々はまだ良い方でメーカー・ホールはもっと苦しかったのであろう。メーカーからいただける広告料も、そのままになって終った額も大きい。

その後、単発機で小康を示したが、発刊と共に全遊連関係の仕事もしていたので、やめるまでには経済的に大変辛かった。もちろん、全遊連の方は無給であり立て替えなどがあっても、会費がないので時の会長が払って呉れれば別だが、大体がそのままになって終った。

富永会長が大阪松坂屋の展示会で六カ月の期限付きで再選した時、小生が長い間の希望であった辞任が認められ、漸く肩の荷が降りたようだった。小生が新聞を出すときには他に業界紙はなく、その後生まれた幾つかの業界紙からは、小生の全遊連主事に対して批判的であり、小生としては重荷でこそあれプラスにはなっていない。当時の全遊連としては給料の要らない全国を廻っている頃、連絡良い小生を利用する方が良いから、そのまま主事としておいたのであろう。小生としては遊技通信のみが精神的にも、経済的にも楽であるから辞めさせて頂いたのである。

その後、富永会長から相川会長となり、坂口会長となり青山会長となり…考えてみると私の頭の中には走馬燈のように当時の全遊連や各地区協議会のことが浮かんでくる。私としては全遊連という全国的な団体の中で、一本の釘になって、たとえ幾ばくかの働きが出来たことを幸せと思っている。

また、遊技業界という巨大な機構の中で、遊技通信を六百号近く送りえたということを、大きな喜びとしている。今後とも、私は過去十七年の経験を生かして遊技通信と共に、業界に骨を埋めるつもりである。

(昭和41年11月5日号　創刊15周年特集より再録)

【創刊36年目を迎えて】

伊藤 壽志夫

昭和二十六年十月五日に『遊技通信』が創刊されて以来、既に三十五年を経過した。筆者が本稿を執筆しているのが十月一日だが、多分、三十五年前のこの日、亡父は創刊号の原稿を鉛筆を舐めながら執筆していたことだろう。創刊号は活版印刷の僅か四ページのもので今も当社に保存してあるが、当然のことながら色褪せた紙質は歴史を感じさせている。

この創刊号を簡単に紹介すると、トップ記事は、愛知県遊技機製造工業組合の創立総会の模様が報道されている。この四ページの新聞に掲載されている広告は大小併せて十五社あるがこのうち現在も継続しているのは一社のみである。それは当時は有限会社長田商会と称していた現在のオーエスがそれである。正に時代の変遷を痛切に感じる次第だ。

亡父は創刊当時は四十五才だったが、その後を継ぐことを渋っていた筆者もいつのまにか事業を継続し、本稿を執筆している今日では亡父と同じ四十五才という年齢に達していた。光陰矢の如しという古諺のままで、感無量のものがある。

創業以来、三十五年となり、その間の発行新聞のすべては保存してあるが、これらは貴重な資料として高い評価をうけている。つい先般もある日刊紙の社会部記者が訪れソビエトへのパチンコ機械輸出の話があったそうだが、果して事実かどうか、を確認したいと申し入れてきた。そこでだいたいの年度を調べ、その前後の本紙を調査したところ、間違いなくそうした事実はあった。その記者は喜んでそのページのコピーを持ち帰ったが、こうしたケースは非常に多い。

昭和62年、台湾パチンコを取材する伊藤壽志夫

昭和二十六年というとまだまだ日本は戦後の混乱期であり、朝鮮戦争の特需ブームに一喜一憂していた時期でもあった。そうした同年の十二月六日に熱海温泉の青木館において初の全国大会の結成式が挙行され、全国遊技場組合連合会の創立を見て、初代会長に愛知県の西本熊蔵氏が選任された。正に業界の組織化の嚆矢でもあった。

今年は全国遊技業組合連合会の創立三十五周年と、全国遊技業協同組合連合会の創立二十周年でもある。今日の業界はフィーバーブーム、風俗営業法改訂、保通協検定、パチンコとパチスロの基板交換問題等いろいろとめまぐるしい展開を示している。新規店舗の異常なまでの増加もまた、業界にとっては頭の痛い問題である。

こうしたときにこそ、組織の重要性が痛感させられるとともに報道の責任の重みを感じる。ただ単に事実の報道を行うだけでなく、情報を整理した上での客観的な意見を主張することもまた大事なことである。勿論、報道には責任もある。

取材という形を借りて特定の立場の主張があってはペンの暴力になりかねない。本紙は今後も公正な報道を基本理念としながら業界の一層の発展のためにいささかでも貢献できればと考えていきたい。全国読者の力強い応援を賜りたい

(昭和61年10月20日号「主張」欄より再録)

広告索引

遊技通信創刊60周年記念特別号
【遊技通信でみるパチンコ業界の60年】

発行所　株式会社遊技通信社
発行人　伊藤實啓
発行日　平成23年11月10日
住所　〒110-0015
東京都台東区東上野2-13-12
M&Mビル6階
電話番号　03-3832-0022（営業部）
03-3832-0375（編集部）
FAX番号　03-3832-0365（共通）
郵便振替　東京00160-1-57194
印刷　ルナテック キャロット
発送　ディーエムソリューションズ
ヤマト運輸株式会社
取引銀行　東日本銀行上野支店
・当座 1032959
三井住友銀行上野支店
・当座 0008217
三菱東京UFJ銀行上野支店
・当座 0319925

発行人　伊藤實啓
統括部長　佐々木龍幸
編集長　小迫勉
編集　須田直行
坂内英樹
敷地卓也
松井基博
須藤隆
営業　松木佳子
渡久山裕一
中谷明子

編集後記

編集後記欄にまで古い写真を掲載するのには、理由がある。「子供とパチンコの関係」について、ページをとって書こうとしていたのだが、どうにもまとまらなくて、この欄を使うことにした。

左の写真は昭和30年代の都内のホールで撮影された1枚。半纏姿の子供が、お父さんに見守られながらハンドルを弾いている。その反対の島ではなんとなく中学生っぽい少年が、弾いた玉の軌跡を見ている（大人かも知れない）。真ん中の写真は京都のお祭りでの光景で、これは昭和40年代。子供がパチンコをしているからといって、これらに罪を感じる人はいないだろう。こういう写真を見ると自らの「パチンコとの出会い」を思い起こす人も多いと思う。

一番右の写真は、昭和63年に愛知県遊協がパビリオンを出展した「世界デザイン博覧会」の際の1コマ。子供にも人気のパビリオンだったが、教育関係者は「生活指導の延長で入場は好ましくない」として入場禁止措置にした。が、こんなジャンボスロットを見て、ワクワクしない子供がいるだろうか。

いずれにしても、この頃から社会風潮の変化も相まって、子供とパチンコの関係は徐々に遠いものになっていった。平成に入り、あの社会的不適合機撤去に追い込まれた背景に、ホール駐車場などでの幼児の事故があることは周知の通りだ。何を言いたいのかといえば、本書に掲載した古い写真や記事を、今の社会常識や道徳観に基づく見方をしないで欲しいということである。どこかのページでその断りを入れないと、と考えていたのだが、結局、本欄を使ったという次第である。

この特別号を編集するにあたっては、古い業界を知る多くの関係者に話を聞いた。お忙しい中、取材を引き受けていただいたことに感謝いたします。また、長くお付き合いしていただいている業界各社、団体の皆様が、快く広告掲載に応じていただいたことに感謝いたします。さらに、遊技通信60年のうち、ちょうど中間の20年間、弊社に在籍し、現在は「YUGI-NET」を運営する深池末徳氏が、当時の資料や写真をきれいに整理、保存していたことで、編集作業が助かったことも記しておきたい。遊技機メーカーですら資料はおろか、台も残っていないことや、弊社でもその20年間以外の資料の散逸が多いことを考えると、本当に感謝の一言である。

本書を編集するにあたり、面白い話やいい写真の多くを紙幅の関係で割愛せざるを得なかった。その割に文字も写真も小さくて申し訳ないが、割愛した分は、いずれまた、ご紹介できればと思う。本音を言えば、通常号と並行してのバタバタ作業だったので、スタッフ一同、今は考えるのも億劫だが。（々）

Sammy
北斗、神拳勝負!!
ぱちんこ
CR
蒼天の拳®
PACHISLOT
北斗の拳®
世紀末救世主伝説
©原哲夫·武論尊/NSP 2001, 版権許諾証YDG-102 ©Sammy
©武論尊·原哲夫/NSP 1983, ©NSP 2007 版権許諾証YRI-125 ©Sammy
サミーカスタマーサポートセンター 故障のお問い合わせ、部品のご発注はこちらまで
TEL：03-5296-5331 FAX：03-5296-5332
●平日 9:00〜23:30 ※弊社指定休日を除きます
●土·日·祝日 9:00〜12:00 / 13:00〜18:00
悪質な攻略法販売·詐欺行為に思い当たったら………最寄りの警察署又は消費生活センターへご相談下さい。
安心して遊べるパチンコ·パチスロへ。サミーは遊技産業健全化推進機構の取り組みに賛同しています。
サミー株式会社

OMICRONからCIIへ

OMICRON
LP-5500
打ち込み設定
1979年発売

ロス玉を無くし、お客様に
還元する画期的な機能を搭載

OMICRON
LP-7500X
ベース管理
1986年発売

ベース管理時代幕開けのルーツ

sis
情報収集・発信基地
1989年当時

コンピューターを利用した
情報収集の発信基地

はじまり、そして未来へ…

DK ダイコク電機株式会社

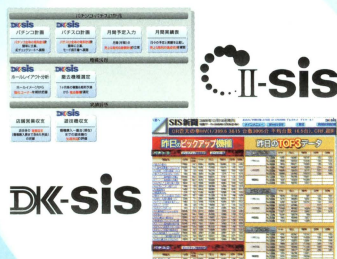
現在データ通信台数
107万台!

情報公開
データーステーション
DataStation
データー公開型分析機
1991年発売

業界の常識を打ち破った
データー公開型分析機

fan First!

PVIII

BiGMO

成通グループ・ハリウッドチェーンは
地域貢献とコンプライアンスを基に
「快適創造企業」を目指しています。

▲Photo：2011.10.01 スーパーハリウッド伊勢佐木町グランドオープン

ゴルフ大会で優勝した㈱アスカ商事の江見昭彦代表取締役（右）に賞品を手渡す㈱セイブシステムリンク萩原会長

スペシャルオリンピックス日本の細川佳代子名誉会長（細川護熙元首相夫人・右）に寄付金を贈呈する㈱セイブシステムリンクの萩原会長

左から㈱マルハンの韓俊取締役副社長、ジャズトランペッターの日野皓正さん、女子プロゴルファーの久保樹乃選手、㈱セイブシステムリンクの萩原明代表取締役会長

チャリティーオークションパーティで、日野皓正さんが制作した伊万里焼を落札した㈱エスエープランニングの金淳次代表取締役（右）

歌手の布施明さんはチャリティーパーティーで新相馬節を熱唱した

おかげさまでチャリティーイベントも今年で8周年を迎えました。

皆様との「絆」大切にします

「忠実・確実・誠実」をモットーに

セイブグループは遊技機の販売及び営業サポートだけではなく、常に新しいサービスを積極的に展開し、健全化の一翼を担い業界の発展に貢献していくことをお約束するとともに、スペシャルオリンピックス日本を支援するチャリティーゴルフコンペをはじめ東日本大震災義援金応援等、幅広い分野で社会貢献に尽くしてまいります。

パチンコ業界や芸能、スポーツ関係者の方々のご協力による浄財は「スペシャルオリンピックス日本」の活動に活用されています。

人気高級焼肉店 叙々苑 タイアップ商品

お持ち帰り景品や店内軽食、他店との差別化に最適な商品です!!

焼肉ライスバーガー（状態:冷凍※保存時冷凍庫必須）

【参考上代】1個入り個包装　¥368(税込)〜

甘口ベースで大人からお子様までお楽しみ頂ける「特製」と旨辛さがやみつきになる「辛口」の2種類の味を取り揃えました。

叙々苑の焼肉味ふりかけ（内容量50g）

【参考上代】1袋　¥370〜

叙々苑の焼肉の味と香りを再現した満足感たっぷりのウェットタイプのふりかけ。こだわりの味を気軽に堪能できます。

少数端玉にも価値を見出す時代です!
「本当に欲しい景品」で端玉革命を!!

川越達也プロデュース

プレミアム端玉景品

PRAY FOR JAPAN

イタリアンシェフ
川越達也プロデュース!
エスプレッソ味クッキー

espresso cookie
濃厚でリッチな香りが広がる、エスプレッソ風味クッキー。

新発売

エスプレッソ風味クッキー

【参考上代】120円（30玉・6枚）

ウエハースと併せて店頭に並べれば
さらに注目度もアップ!!

40個入りディスプレイボックス（W252×D230×H86）

大好評発売中!!

第一弾 ウエハース

【参考上代】100円（25玉・5枚）

chocolate wafer
軽い食感の中に風味が広がる、チョコレートウエハース。

セイブシステムGroup
株式会社 OHフード
http://www.oh-food.jp/
〒104-0061 東京都中央区銀座2-12-9 セイブビル TEL.03-6226-2940 FAX.03-6226-2941

必殺
仕事人
ぱちんこ
必殺仕事人
IV
http://hs4.jp
©松竹・ABC
KYORAKU